松　任　市

竹松遺跡群

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区竹松工区関係
埋蔵文化財調査報告書

1992

石川県立埋蔵文化財センター

松　任　市

竹松遺跡群

石川県立埋蔵文化財センター

序

北陸自動車道の建設計画が熟し、路線センターラインを中心に幅100mの範囲で埋蔵文化財の分布調査（国補事業）を実施したのは、昭和42年度（1967）のことである。日本道路公団では、まず金沢・小松間の完成を目指したから、埋文に関する分布調査も早い段階で始められたのである。調査団は秋田喜一団長以下、関係市町に在住する石川考古学研究会員を中心に36名で組織され、路線周辺の踏査を繰り広げたのであり、福井・富山県境間に38遺跡をマークしている。実際に記録保存のための発掘調査が、ピークをむかえているのは、昭和44年から47年にかけてのことであった。

手取川扇状地の海岸に近い扇端部を通過する松任市内では、宮永遺跡（弥生・古墳・古代）・竹松遺跡（弥生）・小川遺跡（弥生・古墳）・小川小白山神社遺跡（中・近世）・徳光C遺跡（弥生・古墳）・徳光B遺跡（弥生・古墳）・相川新遺跡（古墳）の7遺跡の存在が確認され、扇状地上では集落立地に適さないとの従来の見方に、再検討の必要を迫るものとなっている。筆者自身もこの地域の遺跡としては、かって、金山顕光氏らによって採集・公開された特殊な装飾品台と、その出土地である竹松遺跡を知っている程度でしかなかった。昭和43年（1968）秋に開設している県立郷土資料館の考古展示室に、巧みに復元された装飾器台が目玉展示品として出品され、多くの見学者の関心を引いたものであった。

ここ10年来、松任市域においては、県営ほ場整備事業が盛んに行われており、それを原因とする埋蔵文化財調査も増加の一途を辿ってきた。また、市教育委員会による旭工業団地造成や住宅団地造成に関わる遺跡調査も、著しいほどの活況を呈してきた。それだけに、新規に発見された周知化された遺跡数も急激に増加し、とくに相川・竹松・一塚・宮永・横江町にかけての低地帯では、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落分布をかなり鮮明に把握することが可能となっている。中でも四隅突出形墳丘墓を含む墳墓群や玉生産集落などを検出した旭遺跡群は、多くの市民や研究者の関心を集めるものとなった。

本報告書は、昭和60年以降に実施した竹松町およびその周辺に所在する遺跡の調査結果を収録したものである。それぞれの発掘面積は、水路部分に限定されるなど小規模なものであったが、第9章第2節でも触れられているように、竹松遺跡群を介して、縄文時代後晩期から始まり、弥生後期後半代に成立、さらに際立った盛期を迎えるに至るこの地域の集落群の変遷と消長に、一つの解明への道を開くものとなっている。なお、発掘調査から本書の刊行までには、多くの関係者の皆さんから、ご理解とご支援を頂いております。心から感謝の意を表する次第です。

所　長　　**橋本　澄夫**

例　　言

1　本書は石川県松任市竹松町に所在する竹松遺跡群の発掘調査報告書である。

2　本遺跡群の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施工の県営ほ場整備事業御手洗・出城地区の竹松工区施工に関係し、同課の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが、昭和60年度から平成2年度までの6年次にわたり、調査を計画し、実施したものである。

3　本遺跡群の発堀調査は、ほ場整備に伴う排水路設置箇所をその主対象とし、田面下の遺跡については、事前の分布調査にもとづき盛土工法への変更等の保護処置をとって現状保存をはかっている。

4　本遺跡群の現地調査、遺物整理および報告書刊行に係わる費用は、県耕地整備課が負担したほか一部文化庁の補助金を得た。

5　本遺跡群の発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、下記の機関、個人の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県松任土地改良事務所、松任市教育委員会、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、大藤雅男、大藪智子、折戸靖幸、木田　清、楠　正勝、中村繁和、西谷昌司、広岡吉紀、藤重　啓、前田清彦、増山　仁、横山貴広（個人名五十音順、敬称略）

6　出土遺物の整理作業は、平成3年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託し、尾崎昌美、尾田裕子、小林直子、小屋玲子、新谷由子、馬場正子、正木直子が行った。遺物写真は安　英樹・三浦純夫・北野博司・大藤雅男が撮影した。図版作成は執筆担当者各自が行った。

7　本書の原稿執筆の分担は以下の通りであり、編集は各担当者と協議のもとで安が行った。

第1章・第6章第3節・同第4節・第9章	安　英樹
第2章	三浦ゆかり
第3章	久田正弘
第4章	三浦純夫
第5章	湯尻修平
第6章第1節・同第2節	福島正実
第7章	北野博司
第8章	垣内光次郎

8　本書では遺構・地図等の方位はすべて真北を表示し、水平基準は海抜高で表示する。また、写真図版中の出土遺物に付された番号は挿図の出土遺物実測図中の番号に対応する。

9　執筆者間で記述や表記の統一は特に行っていない。縮尺や凡例等は各章で明記されている。

10　本遺跡群の発掘調査で得た記録資料・出土遺物は、石川県立埋蔵文化財センターにおいて一括保管している。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と調査の概要……1
第２章　竹松遺跡群の環境……5
　第１節　位置と地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5
第３章　昭和60年度の調査（竹松遺跡）……9
　第１節　調査の概要……9
　第２節　遺構と遺物……9
　第３節　まとめ……11
第４章　昭和61年度の調査（東相川Ｂ遺跡）……13
　第１節　調査の概要……13
　第２節　遺構と遺物……13
　第３節　まとめ……27
第５章　昭和62年度の調査（竹松Ｃ・Ｅ遺跡）……29
　第１節　調査の概要と遺構……29
　第２節　遺物……36
　第３節　まとめ……38
第６章　昭和63年度の調査（竹松Ｃ・Ｄ遺跡）……39
　第１節　調査の概要……39
　第２節　遺構……41
　第３節　遺物……52
　第４節　まとめ……96
第７章　平成元年度の調査（浜竹松Ｂ・Ｃ遺跡）……99
　第１節　調査の経緯と経過……99
　第２節　遺跡の地形と層序……99
　第３節　遺構と遺物……101
　第４節　まとめ……108
第８章　平成２年度の調査（浜竹松遺跡）……109
　第１節　調査の概要……109
　第２節　遺跡の位置と層序……109
　第３節　Ｓ調査区の遺構と遺物……113
　第４節　Ｎ調査区の遺構と遺物……117
　第５節　まとめ……124
第９章　総括……125
　第１節　北陸の弥生後期後半の土器について……125
　第２節　竹松遺跡群の変遷について……142

図　版　目　次

（昭和60年度の調査）
図版１　上　調査区全景（北から）　下　第１・２号溝（北から）
図版２　上　落ちこみ（北から）　下　出土遺物
（昭和61年度の調査）
図版３　上　調査区遠景（南東から）　下　調査区北側全景（北から）
図版４　上　第14区から北側　下．第25区から北側
図版５　上　第28区（南から）　下　第37区から北側
図版６　上　第43区から南側　下　第47区～52区（北から）
図版７　上　第３号溝土器出土状況　下　第７・８号溝（北から）
図版８　出土遺物
（昭和62年度の調査）
図版９　左上　Ａトレンチ全景（北から）　右上　Ｃトレンチ全景（西から）
　　左下　Ｄトレンチ全景（南から）　右下　Ｆトレンチ作業風景（南から）
図版10　上　Ｆトレンチ全景（南から）　中　Ｆトレンチ作業風景（南西から）
　　下　Ｆトレンチ遺構（西から）
図版11　上　Ｉトレンチ表土除去風景（南から）　中　Ｉトレンチ全景（北から）
　　下　Ｇ・Ｈトレンチ作業風景（南東から）
図版12　上　Ｈトレンチ全景（東から）　下　Ｈトレンチ掘立柱建物（南東から）
図版13　上　Ｈトレンチ竪穴住居跡（北東から）　下　Ｈトレンチ竪穴住居跡　竈（西から）
図版14　上　Ｈトレンチ竪穴住居跡　竈（南から）　下　出土遺物
（昭和63年度の調査）
図版15　上　Ａ調査区全景（北から）　下　Ａ調査区北半部（Ａ-300以北、南から）
図版16　上　Ａ調査区中央部（Ａ-117以南、北から）
　　下　Ａ調査区南半部（Ａ-330以南、北西から）
図版17　上　ＳＩ－Ａ１・８、Ａ調査区北端部（Ａ-110以北、南から）
　　下　ＳＩ－Ａ１・８（南から）
図版18　上　ＳＩ－Ａ２、ＳＫ－Ａ２（南から）　下　ＳＩ－Ａ２、ＳＫ－Ａ２（南東から）
図版19　上　ＳＩ－Ａ３ａ・３ｂ（北から）　下　ＳＩ－Ａ３ａ・３ｂ（南から）
図版20　上　ＳＩ－Ａ４、ＳＤ－Ａ２（南から）
　　下　ＳＩ－Ａ５、ＳＫ－Ａ７・８・９（北東から）
図版21　上　ＳＩ－Ａ６（南から）　下　ＳＩ－Ａ７（北から）
図版22　上　ＳＩ－Ａ９（北から）　下　ＳＫ－Ａ１、ＳＤ－Ａ１（北から）
図版23　上　ＳＫ－Ａ３（南から）　下　ＳＫ－Ａ４（東から）
図版24　上　ＳＫ－Ａ５・６（東から）　下　ＳＫ－Ａ15・16（東から）

図版25　上　ＳＫ－Ａ19ａ・19ｂ・19ｃ（北東から）
　　下　ＳＫ－Ａ17・18・19ａ・19ｂ・19ｃ（北東から）
図版26　上　ＳＫ－Ａ20ａ・20ｂ、近代木製暗渠（東から）　下　ＳＫ－Ａ22・22ｃ（西から）
図版27　上　ＳＸ－Ａ６、ＳＫ－Ａ26（南東から）　下　ＳＸ－Ａ１（南から）
図版28　上　ＳＸ－Ａ３（南東から）　下　ＳＸ－Ａ４（南から）
図版29　上　ＳＸ－Ａ５（南から）　下　ＳＤ－Ａ４（南から）
図版30　上　Ｂ調査区全景（Ｂ-０以北、南から）　下　Ｂ調査区全景（Ｂ-192以南、北から）
図版31　上　Ｂ調査区北半部（Ｂ-120以北、南から）　下　ＳＫ－Ｂ１（東から）
図版32　上　ＳＫ－Ｂ２（西から）　下　ＳＸ－Ｂ３（西から）
図版33　上　ＳＤ－Ｂ１（南から）　下　ＳＤ－Ｂ２・３、PitＢ11・12（南から）
図版34　上　ＳＤ－Ｂ２・３（南から）　下　ＳＤ－Ｂ４、Ｂ調査区中央部（南から）
図版35　上　ＳＤ－Ｂ５、Pit 群（南東から）　下　Ｂ調査区南端部（北から）
図版36　上　ＳＩ－Ａ１・２・４・５出土遺物　下　ＳＩ－Ａ７・ＳＫ－Ａ７出土遺物
図版37　上　ＳＩ－Ａ３出土遺物(1)　下　ＳＩ－Ａ３出土遺物(2)
図版38　上　ＳＫ－Ａ２・３・５・６出土遺物
　　下　ＳＫ－Ａ９・16・19・20・25出土遺物
図版39　上　ＳＸ－Ａ３出土遺物(1)　下　ＳＸ－Ａ３出土遺物(2)
図版40　上　ＳＸ－Ａ３出土遺物(3)　漆補修高坏　下　ＳＸ－Ａ２・４・５・６出土遺物
図版41　上　ＳＤ－Ａ１・２・４出土遺物　下　遺構検出面出土遺物
図版42　上　Ａ調査区包含層出土遺物(1)　下　Ａ調査区包含層出土遺物(2)
図版43　上　Ａ調査区包含層出土遺物(3)　下　Ａ調査区包含層出土遺物(4)
図版44　上　Ａ調査区包含層出土遺物(5)　下　Ａ調査区包含層出土遺物(6)
図版45　上　Ａ調査区包含層出土遺物(7)　下　Ａ調査区包含層出土遺物(8)
図版46　上　ＳＫ－Ｂ１・２出土遺物　下　Ｂ調査区包含層出土遺物
図版47　上　Ａ・Ｂ調査区出土石器・石製品他(1)　下　Ａ・Ｂ調査区出土石器・石製品他(2)
図版48　Ａ・Ｂ調査区出土土器完形品他(1)
図版49　Ａ・Ｂ調査区出土土器完形品他(2)
図版50　Ａ調査区出土施文土器
（平成元年度の調査）
図版51　上　航空写真（南から）　下　航空写真（北から）
図版52　上　調査区全景（北から）　下　60m 付近全景（北から）
図版53　上　155m 付近全景（北から）　下　170～180m 付近全景（北から）
図版54　上　190m 付近全景（南から）　下　100m 付近作業風景（北から）
図版55　上　360m 付近全景（北から）　下　385m 溝状遺構（東から）
図版56　出土遺物

（平成２年度の調査）
図版57　上　調査区遠景（北から）　下　Ｓ調査区１～７区全景（北から）
図版58　上　Ｓ調査区９～10区全景（北から）　下　第１号ピット・ピット群（北から）
図版59　上　第１・２号溝（北から）　下　第５・６号溝（北から）
図版60　上　第１号土坑・ピット群（東から）　下　窪地（北から）
図版61　上　Ｓ調査区作業風景（南から）　下　Ｓ調査区出土遺物（上―第69図・下―第70図）
図版62　上　Ｎ調査区全景（北から）　下　第１号竪穴住居跡（東から）
図版63　上　第３号溝（東から）　下　第１号掘立柱建物（南から）
図版64　Ｎ調査区出土遺物（上―第72図・中―第74図・下―第75図）

挿　図　目　次

第１図　松任市位置図……5
第２図　竹松遺跡群と周辺の遺跡……6
第３図　昭和60年度調査区全体図……10
第４図　第１・２号溝実測図……11
第５図　落ち込み実測図……12
第６図　出土遺物実測図……12
第７図　昭和61年度調査区位置図……14
第８図　調査区区割図……15
第９図　遺構配置図(1)……17
第10図　遺構配置図(2)……18
第11図　遺構配置図(3)……19
第12図　遺構配置図(4)……20
第13図　遺構実測図・土層図……21
第14図　遺構（第３号溝）出土遺物実測図(1)……23
第15図　遺構（第３号溝）出土遺物実測図(2)……24
第16図　遺構・包含層出土遺物実測図……25
第17図　包含層出土遺物実測図……26
第18図　補修された高坏……27
第19図　昭和62年度調査区位置図……30
第20図　遺構実測図(1)……31
第21図　遺構実測図(2)……32
第22図　遺構実測図(3)……33
第23図　遺構実測図(4)……35
第24図　出土遺物実測図……37

第25図　昭和63年度調査区位置図……40
第26図　昭和63年度調査区全体図……42
第27図　A調査区遺構実測図(1)……46
第28図　A調査区遺構実測図(2)……47
第29図　A調査区遺構実測図(3)……48
第30図　B調査区遺構実測図(1)……51
第31図　B調査区遺構実測図(2)……52
第32図　出土遺物実測図(1)……53
第33図　出土遺物実測図(2)……55
第34図　出土遺物実測図(3)……56
第35図　出土遺物実測図(4)……58
第36図　出土遺物実測図(5)……60
第37図　出土遺物実測図(6)……62
第38図　出土遺物実測図(7)……64
第39図　出土遺物実測図(8)……66
第40図　出土遺物実測図(9)……67
第41図　出土遺物実測図(10)……68
第42図　出土遺物実測図(11)……71
第43図　出土遺物実測図(12)……73
第44図　出土遺物実測図(13)……75
第45図　出土遺物実測図(14)……77
第46図　出土遺物実測図(15)……78
第47図　出土遺物実測図(16)……79
第48図　出土遺物実測図(17)……80
第49図　出土遺物実測図(18)……82
第50図　出土遺物実測図(19)……84
第51図　出土遺物実測図(20)……86
第52図　出土遺物実測図(21)……88
第53図　出土遺物実測図(22)……90
第54図　出土遺物実測図(23)……91
第55図　出土遺物実測図(24)……92
第56図　出土遺物実測図(25)……93
第57図　平成元年度調査区地形略図……99
第58図　平成元年度調査区位置図 ……100
第59図　微地形と遺跡分布 ……101
第60図　調査区土層柱状図 ……102

第61図　遺構実測図（0～240m）……103
第62図　遺構実測図（240～440m）……105
第63図　出土遺物実測図……107
第64図　平成2年度調査区位置図……110
第65図　平成2年度調査区全体図……111
第66図　調査区土層柱状図……112
第67図　S調査区遺構実測図(1)……114
第68図　S調査区遺構実測図(2)……115
第69図　S調査区遺構出土遺物実測図……116
第70図　S調査区包含層出土遺物実測図……116
第71図　N調査区遺構実測図……118
第72図　N調査区第1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)……120
第73図　N調査区第1号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)……121
第74図　N調査区溝出土遺物実測図……122
第75図　N調査区包含層出土遺物実測図……123
第76図　出土土器分類概念図……126
第77図　松任の状況……129
第78図　金沢の状況……132
第79図　金沢市塚崎遺跡出土土器群……133
第80図　能登の状況……136
第81図　北加賀・能登の祭式土器……138
第82図　既往の調査および詳細遺跡分布……143

表　目　次

第1表　関連分布調査一覧表……2
第2表　関連発掘調査一覧表……3
第3表　遺跡地名表……7
第4表　昭和63年度A調査区遺構一覧表……45
第5表　昭和63年度B調査区遺構一覧表……50
第6表　昭和63年度調査区遺物出土位置一覧表(1)……94
第7表　昭和63年度調査区遺物出土位置一覧表(2)……95
第8表　昭和63年度A調査区出土土器組成表……130
第9表　昭和63年度A調査区出土スタンプ施文土器一覧表……140
第10表　竹松遺跡群各遺跡の消長……144

第１章　調査に至る経緯と調査の概要

石川県農林水産部耕地整備課は松任市の北西部に広がる御手洗・出城地区の水田約378haについて県営ほ場整備事業の実施を策定した。同地区の水田は、手取川扇状地の扇端部に形成された砂丘の後背湿地に位置するが、現況の水田は明治末期から昭和初期にかけて区画整理が行われたものであり、１区画平均８ａの小水田に過ぎない。事業の目的は、水田の区画を一筆30aに大型化し用排水路と農道の整備を行うことにより、大型機械の導入及び灌漑不良田の一掃を可能にし、農業経営の近代化と農村環境の改善をはかることにある。同地区は竹松、相川新・村井新、相川、平木、徳光の各工区に分割されるが、その最東部にあたる竹松工区の施工は、昭和60年度から平成２年度にかけて予定され、水田約83haがその対象となった。

当地には周知の竹松遺跡群が存在する。石川県立埋蔵文化財センターではこれ以前からも県営ほ場整備事業については県耕地整備課の依頼を受けて、事前の分布調査を行い、埋蔵文化財が破壊されることがないよう指導し、保存不可能なものについては発掘調査も行ってきた。

今回も竹松工区全域に事前に分布調査を行い、遺跡の範囲を確定している。分布調査は昭和59年度、61年度、62年度、63年度、平成元年度の計５年次におよび、それぞれ翌年の施工対象区画に合わせて行い、その都度県耕地整備課に回答している。その回答を元にして松任土地改良事務所と協議した結果、水田面の工事にかかる部分については盛土施工として包含層以下を掘削しないよう施工業者に指導すること、掘削が不可避な排水路部分については石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行うことを決定している。これは６年次にわたる分布調査・発掘調査に共通する一貫した経緯である。分布調査について、詳しくは第１表に一覧したので参照してほしい。

竹松遺跡群の発掘調査は、年度当初の県耕地整備課の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが６年次にわたり、それぞれ調査を計画し、実施したものである。調査は昭和60年度、昭和61年度、昭和62年度、昭和63年度、平成元年度、平成２年度の計６年次にわたるものであり、詳しくは第２表に一覧したので参照してほしい。最終的に、県営ほ場整備事業御手洗・出城地区竹松工区に係る埋蔵文化財の発掘調査総面積は約5,000m²前後にのぼるものとなっている。

なお、「竹松遺跡群」は複数の遺跡のまとまりを包括して呼称するもので、今回報告されるものは竹松遺跡・竹松Ｃ遺跡・竹松Ｄ遺跡・竹松Ｅ遺跡・浜竹松遺跡・浜竹松Ｂ遺跡・浜竹松Ｃ遺跡・東相川Ｂ遺跡である[註]。このように分布調査・発掘調査のデータからは複数の遺跡の存在が確認されているが、その範囲や性格等については調査地域の偏りからもまだまだ不明確な点が多いといえよう。各遺跡の位置・調査の経過・概要については第２章および第３章から第８章までの各年度の報告にできるかぎり詳しくふれ、当地域の遺跡の推移について明らかにしていきたい。

第１章　註

遺跡名は『石川県遺跡地図』（平成３年度改訂版）の記述による。

昭和59年度	調査地　松任市竹松町地内	原因　県営ほ場整備事業
関係機関　耕地整備課	調査対象面積　13ha	調査方法　試掘
調査期間　昭和59年	遺跡の有無　有	事業に係る遺跡の面積　10,000m²

主な確認事項	予想される時期と性格	依頼者への回答要旨
調査対象区域の北西端を除くほぼ全域で遺物包含層を確認。	弥生時代後期の集落跡。	工事の設計については協議されたい。

昭和61年度	調査地　松任市竹松町地内	原因　県営ほ場整備事業
関係機関　耕地整備課	調査対象面積　16ha	調査方法　試掘
調査期間　昭和61年10月７日	遺跡の有無　有	事業に係る遺跡の面積　約10,000m²

主な確認事項	予想される時期と性格	依頼者への回答要旨
竹松遺跡群の東端部を確認。	弥生時代後期の散布地。	排水路予定部分については事前の発掘調査が必要。

昭和62年度	調査地　松任市竹松町	原因　県営ほ場整備事業
関係機関　耕地整備課	調査対象面積　17ha	調査方法　試掘
調査期間　昭和62年９月29日～30日	遺跡の有無　有	事業に係る遺跡の面積　約100,000m²

主な確認事項	予想される時期と性格	依頼者への回答要旨
区域内で埋蔵文化財が確認された。	弥生・古墳時代の集落跡。	埋蔵文化財が在存するため工事の設計にあたっては当センターと協議されたい。

昭和63年度	調査地　松任市竹松町地内	原因　県営ほ場整備
関係機関　耕地整備課	調査対象面積　約31ha	調査方法　踏査、試掘
調査期間　昭和63年10月17日、平成元年１月11日	遺跡の有無　有	事業に係る遺跡の面積　約150,000m²

主な確認事項	予想される時期と性格	依頼者への回答要旨
埋蔵文化財が分布する。		工事区域内の掘削、すき取りに際しては、遺物包含層の上に最低10cmの保護層を確保すること。 埋蔵文化財所在地では農道路面下に畦畔ブロック等の廃棄物を埋設しないよう配慮すること。 埋蔵文化財の保護について協議を継続する。

平成元年度	調査地　松任市竹松町地内	原因　県営ほ場整備
関係機関　耕地整備課	調査対象面積　約６ha	調査方法　試掘
調査期間　平成元年10月３日	遺跡の有無　有	事業に係る遺跡の面積　約10,000m²

主な確認事項	予想される時期と性格	依頼者への回答要旨
埋蔵文化財が確認された。	弥生時代の集落遺跡。	事業予定区域内に埋蔵文化財が所在しているので、遺跡の保護等について協議されたい。

第１表　関連分布調査一覧表

昭和60年度	遺跡名　竹松遺跡	所在地　松任市竹松町地内
原因　県営ほ場整備事業	関係機関　耕地整備課	面積　240m²
調査期間　昭和60年８月20日～９月４日	担当者　三浦純夫・久田正弘	時期　弥生
主要遺構 土坑、溝状遺構	主要遺物 弥生土器	遺跡の性格 弥生時代の集落跡である。

昭和61年度	遺跡名　東相川Ｂ遺跡	所在地　松任市竹松町地内
原因　県営ほ場整備事業	関係機関　耕地整備課	面積　1,900m²
調査期間　昭和61年５月６日～７月31日	担当者　三浦純夫	時期　弥生・中世
主要遺構 溝状遺構	主要遺物 弥生土器	遺跡の性格 弥生時代後期の集落跡と考えられる。

昭和62年度	遺跡名　竹松Ｃ・Ｅ遺跡	所在地　松任市竹松町地内
原因　県営ほ場整備事業	関係機関　耕地整備課	面積　400m²
調査期間　昭和62年８月10日～９月２日	担当者　湯尻修平	時期　弥生・奈良・中世
主要遺構 弥生後期の溝、奈良時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物	主要遺物 弥生土器、土師器、須恵器	遺跡の性格 弥生、奈良、中世の各時代の集落遺跡。

昭和63年度	遺跡名　竹松Ｃ・Ｄ遺跡	所在地　松任市竹松町地内
原因　県営ほ場整備事業	関係機関　耕地整備課	面積　1,346m²
調査期間　昭和63年５月13日～７月18日	担当者　福島正実	時期　弥生、古墳時代
主要遺構 弥生時代後期の土坑、竪穴住居跡、古墳時代前期頃の土坑、溝。	主要遺物 弥生土器(後期)、土師器、須恵器。	遺跡の性格 時期の異なる２つの集落跡が別地点に存在する。一つは弥生後期のかなり大きいもの、一つは古墳時代の小規模なものである。

平成元年度	遺跡名　浜竹松Ｂ・Ｃ遺跡	所在地　松任市竹松町地内
原因　県営ほ場整備事業	関係機関　耕地整備課	面積　860m²
調査期間　平成元年５月８日～６月５日	担当者　北野博司	時期　弥生時代末・古墳中期
主要遺構 方形周溝状遺構。	主要遺物 弥生土器、土師器。	遺跡の性格 弥生後期、古墳中期の集落跡の縁辺部。

平成２年度	遺跡名　浜竹松遺跡	所在地　松任市竹松町地内
原因　県営ほ場整備事業	関係機関　耕地整備課	面積　300m²
調査期間　平成２年５月11日～６月７日	担当者　垣内光次郎	時期　古墳時代
主要遺構 竪穴住居跡、掘立柱建物、溝、土坑。	主要遺物 弥生土器、須恵器、中世陶磁器。	遺跡の性格 海岸砂丘の陸地側に立地した小集落遺跡と推定される。営続期は弥生時代後期終末と平安時代前期と考えられる。

第２表　関連発掘調査一覧表

発掘調査参加者

昭和60年度から平成２年度までの６年次にわたる竹松遺跡群の発掘調査には、調査補助員・作業員として下記の方々に参加していただいた。記して改めて感謝したい。

昭和60年度の調査（竹松遺跡）

作　業　員　木村外代森、清水済子、竹内登美子、松本初枝、松下俊子、吉水久子（竹松町）

昭和61年度の調査（東相川Ｂ遺跡）

調査補助員　横山貴広

作　業　員　上田俊雄、木下成子、木村外代森、北川清美、小西義雄、清水済子、高田栄子、竹内登美子、松田敬子、末代孝久（竹松町）

昭和62年度の調査（竹松Ｃ・Ｅ遺跡）

調査補助員　大藤雅男、広岡吉紀

作　業　員　上田美智子、木下成子、福田久子、松田一正、松田敬子、松本初枝（竹松町）、宮本直哉（東一番町）

昭和63年度の調査（竹松Ｃ・Ｄ遺跡）

調査補助員　大藤雅男、西谷昌司、広岡吉紀

作　業　員　上田美智子、小田たか子、木下成子、北川貞子、福田久子、松田一正、松田敬子、松本初枝（竹松町）、北　菊枝、東　隆裕、東　陽一、東　陽子、東　みどり、山　静子、山　信子（相川町）、北村加代子（成町）、二口　稔（金沢市田上町）、番匠信夫（金沢市窪）

平成元年度の調査（浜竹松Ｂ・Ｃ遺跡）

調査補助員　中村繁和

作　業　員　上田美智子、松本初枝（竹松町）、東　陽子、東　みどり、山　静子、山　信子（相川町）、藤本春枝、藤本芳枝（村井新町）、藤田美和子（野々市町二日市）

平成２年度の調査（浜竹松遺跡）

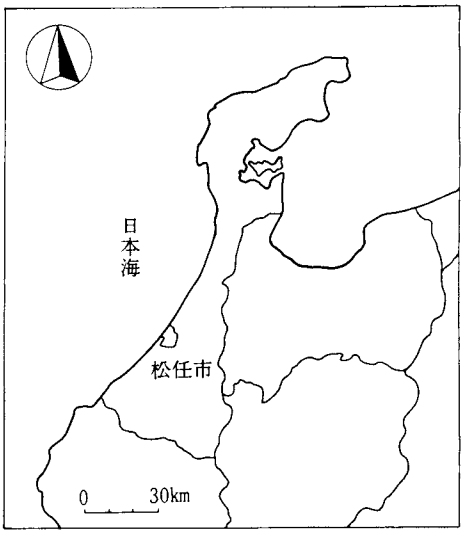
調査補助員　藤重　啓

作　業　員　打木　喜美江、東　陽子、山　静子、山　信子（相川町）、藤本春枝（村井新町）、藤田美和子（野々市町二日市）

第２章　竹松遺跡群の環境

第１節　位置と地理的環境

竹松遺跡群は、石川県松任市竹松町地内に所在する。白山に源を発する手取川によって形成された、手取川扇状地の扇端部に位置し、標高７m 前後を測り、海岸寄りの浜竹松では標高５m 以下を測る。手取川扇状地は、鶴来町を扇頂とする典型的な扇状地形を呈し、等高線は扇頂を中心として同心円状に描かれている。扇状地の東は富樫山地、南は能美山地に接し、扇端部では小規模ながらも安原海岸砂丘が発達している。しかし扇央部末端にあたる徳光付近では、扇状地の高まりが大きいため、海岸砂丘の被覆は認められていない。このことは、かつて手取川が鶴来町から扇央稜線（鶴来駅と松任市徳光町を結ぶ線）付近を流れ、徳光町付近で日本海に注いでいたことを物語る。手取川は富樫山地の隆起により南へ移動したと考えられており[1]、その流路跡が現在の七ケ用水であると伝えられている。縄文時代から古墳時代の遺跡が、扇央稜線の北側に多く分布するのは、手取川の南遷による影響を避けたものと考えられる。



第１図　松任市位置図　（１／3,000,000）

さて、本地域周辺の地勢であるが、明治初年に編さんされた『皇国地誌』から、当時の竹松村の様相をうかがってみたい。

地勢　全土平坦四方田圃　渠水概ネ北流ス　本村人家南方ニ位シ　枝村五軒町西北隅ニアリ

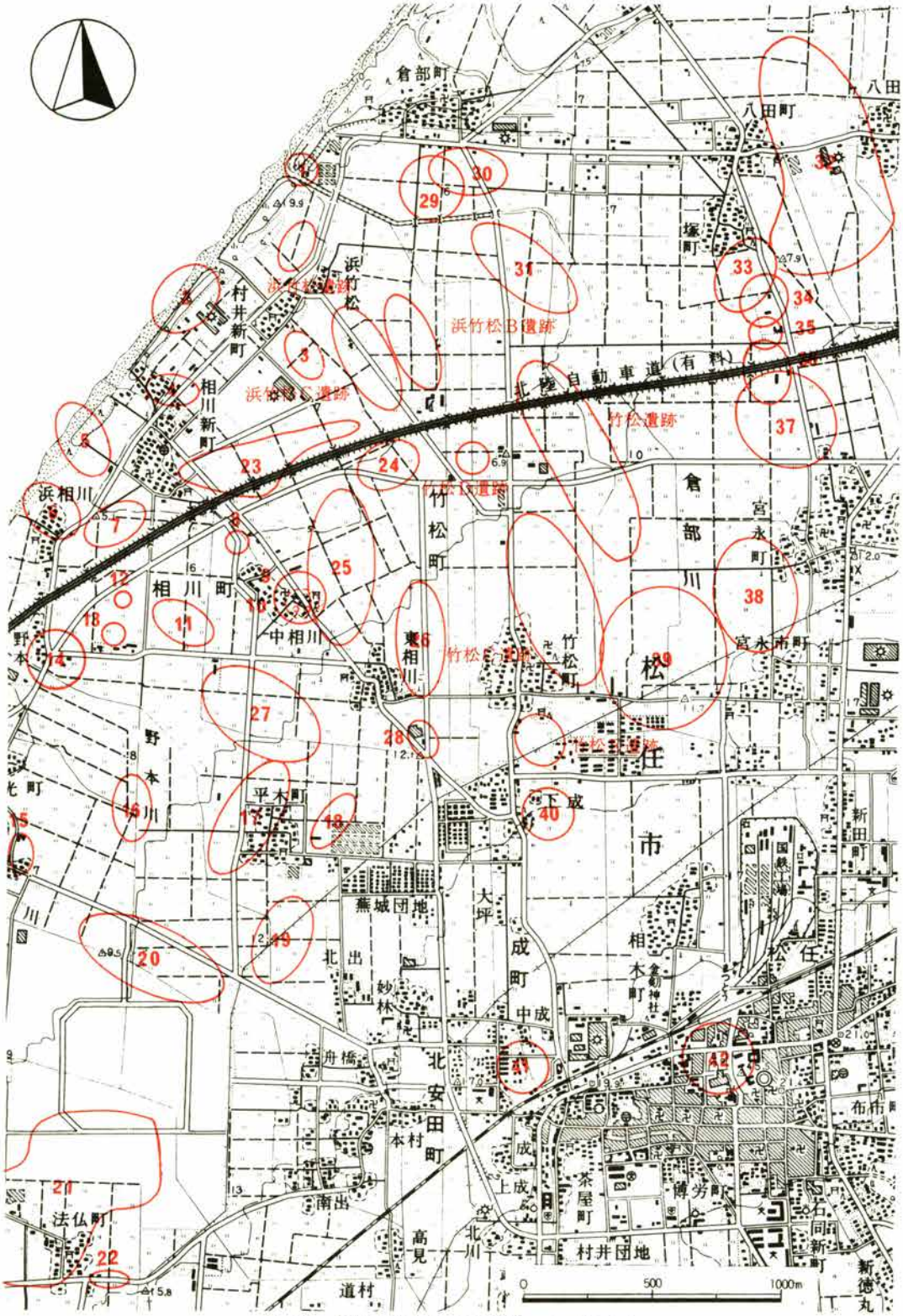
地味　土色黒ク其質概ネ湿地ニ属ス　稍々穀類ニ適シ　桑茶ニ適セス　水利往々涸旱ノ憂アリ

この記述から、本地域周辺の地形は平坦で、黒色土壌からなる湿地帯が広がっていたようである。現在本遺跡周辺では、黒色～茶褐色、あるいは灰褐色の粘質土壌がみられるが、浜竹松では地下水が自噴し、腐植土を多量に含む黒色泥炭質土壌が広がる。

第２節　歴史的環境

本遺跡群周辺で遺跡が顕在化するのは、縄文時代後・晩期になってからである。一塚遺跡[2]では、縄文時代の河道跡が検出されており、河道跡の両岸には、縄文時代後期の集落跡が存在していたことが明らかになっている。また八田中遺跡[3]では、縄文時代後期後半と晩期中葉の土器が、少量であるが出土している。これらの遺跡は、いずれも標高５～10m の地下水自噴地域に分布しており、湧水に恵まれた低地への移住が進んだことを示している。

弥生時代に入ると、八田中、徳光ジョウガチの各遺跡で前期の土器が出土しているが、継起性



第２図　竹松遺跡群と周辺の遺跡　１／25,000

番号	遺跡名	所在地	現況	種別	時代	備考
1	倉部川遺跡	松任市倉部町	平地・水田	包含地	中世	
2	相川新・雁田川遺跡	〃 竹松町浜竹松	平地・砂丘	〃	弥生・古墳	昭和40年防潮堤工事により一部消滅
3	相川新C遺跡	〃 相川新町	平地・水田	〃	不詳	
4	村井新遺跡	〃 村井新町	平地・砂丘	〃	弥生・平安	
5	浜相川・相川新遺跡	〃 相川新町	〃	〃	弥生・古墳	昭和40年防潮堤工事により一部消滅
6	浜相川遺跡	〃 相川町	〃	〃	〃	
7	浜相川B遺跡	〃 〃	平地・園地	〃	弥生	
8	御手洗川遺跡	〃 〃	平地・水田	〃	〃	
9	相川館跡	〃 〃	〃	館跡	室町	五輪塔出土
10	中相川1・2号墳	〃 〃	台地・社地	古墳	古墳	加茂神社本殿移建のため消滅
11	御手洗川B遺跡	〃 〃	平地・水田	包含地	弥生後期	
12	浜相川C遺跡	〃 〃	〃	〃	〃	
13	浜相川D遺跡	〃 〃	〃	〃	〃	
14	野本遺跡	〃 〃	〃	〃	弥生中・後期	
15	徳光ジョウガチ遺跡	〃 徳光町	〃	〃	弥生前期	
16	平木D遺跡	〃 平木町	〃	〃	弥生後期	
17	平木遺跡	〃 〃	〃	〃	〃	
18	平木C遺跡	〃 〃	〃	〃	不詳	
19	平木B遺跡	〃 〃	〃	〃	弥生・平安	
20	北安田北遺跡	〃 北安田町	平地・宅地	〃	縄文～中世	竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出
21	法仏遺跡	〃 法仏町	〃	〃	平安	〃
22	法仏南遺跡	〃 〃	〃	〃	弥生	
23	相川新遺跡	〃 相川新町・相川町	平地・水田	〃	弥生・古墳	竪穴住居跡を検出
24	東相川C遺跡	〃 相川町	〃	〃	不詳	
25	東相川遺跡	〃 〃	〃	〃	古墳・中世	掘立柱建物跡を検出
26	東相川B遺跡	〃 〃	〃	〃	弥生～平安	竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出
27	中相川遺跡	〃 〃	〃	〃	弥生後期	
28	東相川D遺跡	〃 〃	〃	〃		
29	倉部館跡	〃 倉部町	〃	館跡	室町	
30	倉部出戸遺跡	〃 〃	〃	包含地	弥生・古墳	竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出
31	倉部B遺跡	〃 〃	〃	〃	〃	
32	八田中遺跡	〃 八田中町	〃	〃	縄文・弥生 平安～近世	
33	一塚遺跡	〃 一塚町	〃	包含地 古墳	縄文～古墳	四隅突出型墳墓や方形周溝墓などを検出
34	一塚オオミナクチ遺跡	〃 〃	〃	包含地	弥生後期	
35	旭小学校遺跡	〃 宮永町	平地・校地	〃	弥生・古墳	玉造りに関連した竪穴住居跡を検出
36	宮永遺跡	〃 〃	平地・道路	〃	弥生～奈良	竪穴住居跡、配石遺構を検出
37	宮永B遺跡	〃 〃	平地・水田	〃	縄文～古墳・中世	
38	宮永坊の森遺跡	〃 〃	〃	包含地 寺院跡	弥生・古墳・中世	金属製仏具出土
39	宮永市遺跡	〃 宮永市町	〃	包含地	弥生・平安・中世	
40	源波遺跡	〃 相木町	平地・宅地	〃	奈良・平安	
41	出城城跡	〃 成町	平地・水田	城跡	室町	室篦印塔出土
42	松任城跡	〃 古城町	平地・公園	〃	室町・安土桃山	

第3表　遺跡地名表

をもたず、中期の遺跡も少ない。野本遺跡[4]は中期後半の遺跡であり、多量の土器や木製品、植物遺体とともに櫛が出土している。

後期になると、本遺跡周辺の遺跡は急激に増加し、海岸沿いの泥炭層地帯に集中してみられるようになる。泥炭層遺跡と呼ばれる、相川新・雁田川、浜相川・相川新、浜相川、浜相川Bなどの各遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が検出されている。また、砂丘の内側に広がる低湿地帯にも、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、飛躍的に遺跡が増加する。一塚遺跡[5]は、縄文時代～古墳時代にかけての複合遺跡で、弥生時代終末期前後には墓域となっていたことが発掘調査により明らかになった。なかでも四隅突出型墳墓の検出は北陸で2例目であり、山陰との関連を示すものとして注目されている。また一塚遺跡周辺には、弥生時代後期～古墳時代にかけての遺跡が集中しており、一つの遺跡群を形成している。その他、本地域をはじめ倉部町、相川町、平木町地内にも弥生時代後期の遺跡が群在する。このように、弥生時代後期に本遺跡周辺の遺跡が増加するのは、扇端部や砂丘内側の低湿地帯が、生産基盤に適していたからであろう。

古墳時代に入ると、安原海岸砂丘の形成により泥炭層遺跡は消滅するが[6]、低湿地帯では継続して遺跡がみられる。しかし古墳の検出例は少なく、中相川古墳と一塚古墳があったことが知られるが、いずれも現存していない。中相川古墳は、中相川の加茂神社境内に径10～15mの円墳が2基あったことが伝えられており、出土遺物から古墳時代中・後期のものであることが確認されている[7]。

奈良時代になると、本遺跡周辺の遺跡は激減し、扇央部への立地が進むようになる。このことは、生産活動が、自然湧水を利用する段階から、人工灌漑を前提としたより高度な段階へと移行したことを示す。源波遺跡、北安田北遺跡[8]、法仏遺跡はいずれも扇端部の扇央寄りに位置する、奈良時代～平安時代にかけての遺跡である。北安田北遺跡からは、竪穴住居跡や掘立柱建物跡がそれぞれ100棟近く検出されており、南方に位置する法仏遺跡とともに、古代の大集落が形成されていたことが明らかになった。

中世に入ると、倉部、徳光、相川、宮永で館跡や寺院跡があったと伝えられているが、考古学的調査は行われておらず、詳細は不明である。また文献によって周囲の村落の成立状況をみると、『源平盛衰記』に双河、浜倉部の名がみえるほか、室町期には北安田保、得光保、宮永郷などの名がみえる。

第2章　註

1　藤　則雄「地質上からみた手取川の変遷」『川北村史』　川北村史編さん委員会　1970年
2　湯尻修平・安　英樹編『松任市一塚イチノツカ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1990年
3　久田正弘『八田中遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1988年
4　石川県立埋蔵文化財センターが県営ほ場整備事業に伴い昭和62年度に発掘調査を行っている。
5　前田清彦『旭遺跡群発掘調査概報』　松任市教育委員会　1990年
6　藤　則雄「砂丘・埋没林」『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ　1975年
7　石川考古学研究会編『加賀三浦遺跡の研究』　石川県教育委員会・松任町教育委員会　1967年
8　西野秀和『北安田北遺跡III』　石川県立埋蔵文化財センター　1990年

第2章　参考文献

若山喜三郎・高澤裕一監修『石川県の地名』　平凡社　1991年
御手洗村史編さん委員会編『御手洗の歴史』　御手洗公民館　1955年

第３章　昭和60年度の調査（竹松遺跡）

第１節　調査の概要

昭和60年度は竹松遺跡の発掘調査を行なった。調査区は南北に長いクランク状であったが、南側はライスセンターの敷地内にあたり、立ち合い調査を行なうこととなった。しかし、東横にある水田に２箇所の試掘穴を入れたが、遺構・遺物は検出されなかった。調査区（第３図　1/300）は便宜的に南北トレンチ（長い部分・縦方向）、東西トレンチ（短い部分・横方向）と呼称する。南北トレンチには２本平行する溝とピット２個を検出した。また、起点から24m 付近から地山が落ち込んでおり、遺構・遺物の出土もなく、２層（黒色粘質土）もピート質であった。よって、24m 以北は湿地帯であったと思われる。東西トレンチでは落ち込みを検出した。遺跡の中心はライスセンターの東側にあり、遺跡名は仮に竹松Ｂ遺跡と命名されていた。（1984年３月以前）

第２節　遺構と遺物

第１号溝（第４図）

南北トレンチの起点から８～11m付近に位置する。北西方向に流れる溝であり、やや蛇行する。幅1.2m、深さ0.14m を測る。覆土は灰色砂質土（粘土ブロック入り、３層）、黄灰色砂質土（４層）である。遺物は出土しなかった。

第２号溝（第４図）

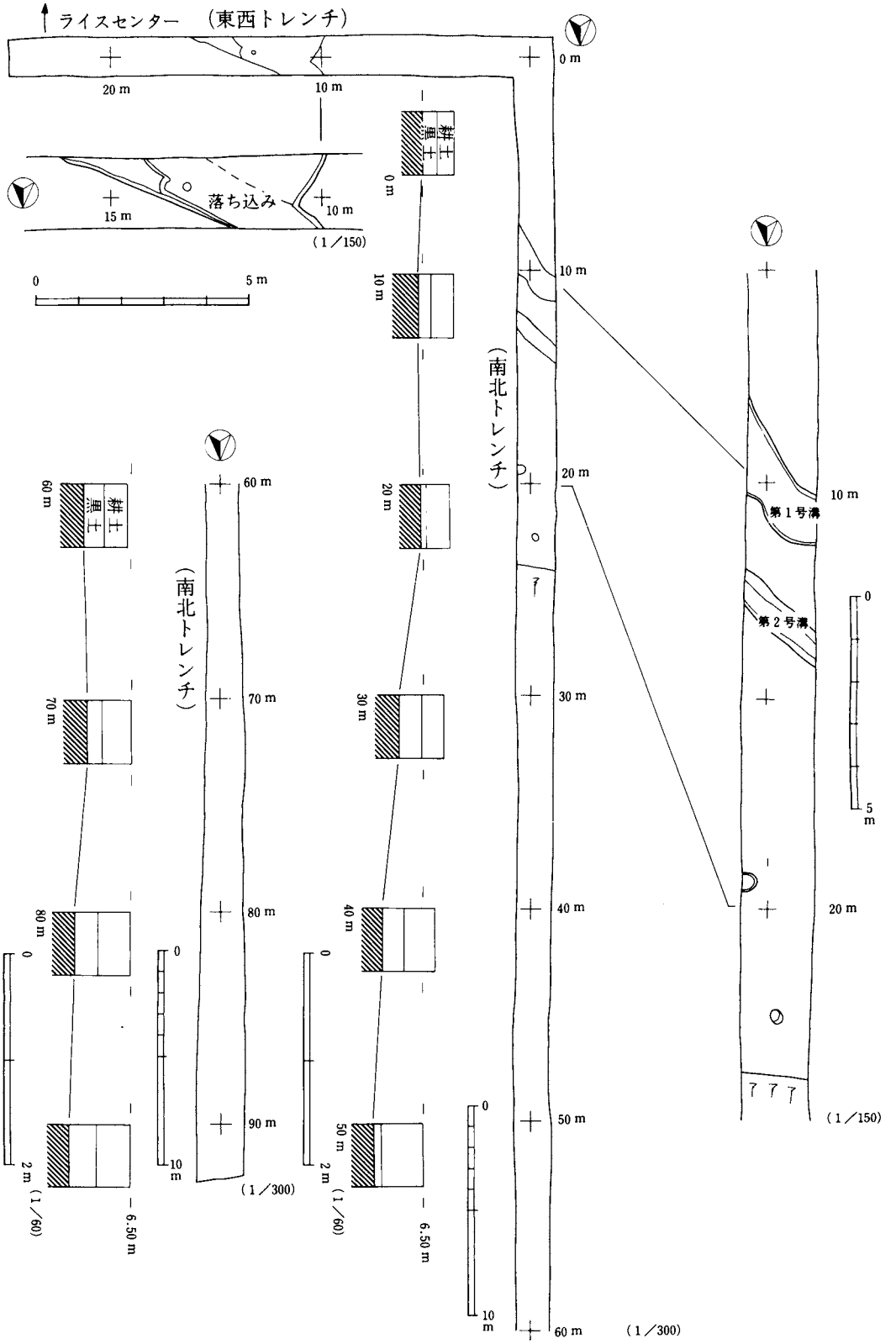
南北トレンチの起点から12～14m 付近に位置する。北西方向に流れる溝である。幅0.7～0.8m、深さ0.26m を測る。覆土は黒色粘質土であり、遺物は出土しなかった。

落ち込み（第５図）

東西トレンチの10～16m 付近に位置する。最初第１号溝の延長と思われる灰色溝を掘り下げていると弥生土器が出土し始めたので掘り下げていった。北側は約２m、南側は約6.3m を測る。深さは東側は0.2、中央部～西側は0.36m を測る。12m付近には炭の集中が認められた。遺構の性格は不明である。

遺物（第６図１～９）

全て落ち込み出土である。１は有段口縁を持つ壺であり、口縁部には６本の擬凹線を持つ。口径16.8cm、頸部径14cm を測る。内外面とも丁寧なミガキ調整であり、外面と頸部まで赤彩されている。外面にはススが付着する。胎土は石英、長石を含まず、チャートやその他（流紋岩？）が主体である。２は口唇部に幅広い面を持つ甕である。口径約16cm、頸部径約12.6cm を測ると思われる。口唇部には３条の擬凹線を持つ。調整はハケのち丁寧なナデ調整がなされる。外面にはススが付着する。胎土は石英、長石を含まず、チャートやその他（流紋岩？）が主体である。３は有段口縁を持つ甕であり、口縁部には６本程度の工具を使って３回引いている。口径20cm、頸部径16.2cm を測る。外面にはススが付着する。胎土には石英、長石、チャートを含む。４は有段口

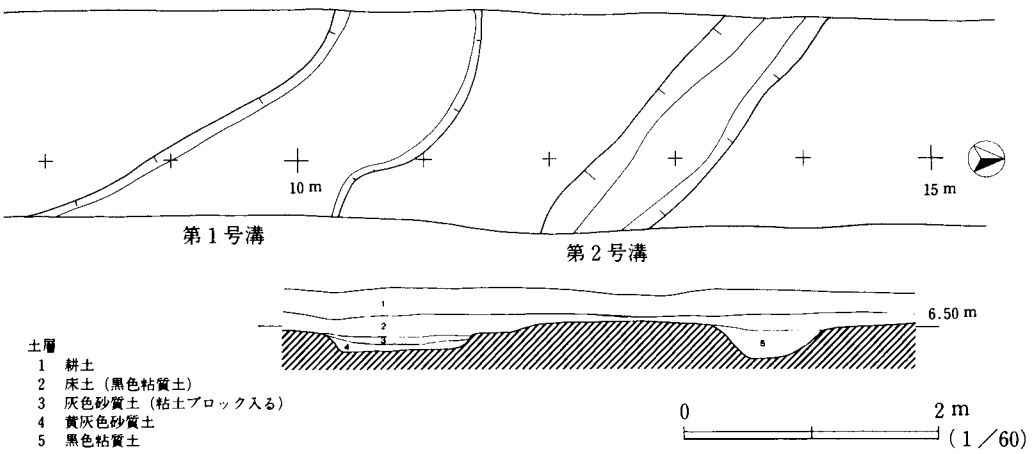


第3図　昭和60年度調査区全体図

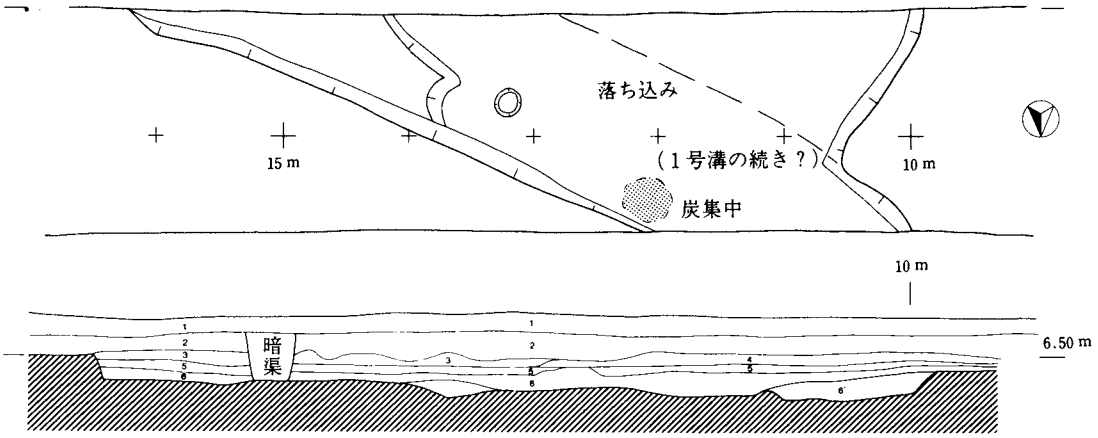
縁を持つ甕であり、有段部には稜を持つ。口径16cm、頸部径14.2cm を測る。胎土は石英、長石を含まず、チャートやその他（流紋岩？）が主体である。5は甕の底部である。底径3.6cm を測る。内面の体部には焦げ痕、外面にはススが付着する。胎土は石英、長石を微量含むが、チャートやその他(流紋岩？)が主体である。6は有段口縁を持つ甕である。口径13cm、頸部径10.6cm、胴部径16cmを測る。内面の胴部上半には明瞭な輪積み痕を残し、外面にはススが多量に付着する。胎土には2～4mm大のチャートやその他(流紋岩？)を含む。7は口唇部を丸くおさめた甕である。口径13cm、頸部径10.4cm を測る。口唇部にはハケによるナデ調整が入る。外面にはススが多量に付着する。胎土は石英、長石を含まず、チャートやその他(流紋岩？)が主体である。8は器台の受部である。口径12cm を測り、胎土は石英、長石を含まず、チャートやその他(流紋岩？)が主体である。9は高坏の坏部である。口径26cm、坏底部径20cm を測る。調整はハケのち一部ミガキ調整であるが、ハケ痕を明瞭に残す。図化しなかったが、広口壺の口縁部1点、長頸壺の口縁部1点(擬凹線2本)、高坏・器台破片3点、底部破片7点が存在する。

第3節　ま　と　め

当調査区では、東西トレンチの落ち込みにのみ、遺物がみられた。時期は弥生時代後期後半の法仏式である。遺跡の中心は東側にあり、発見された際に竹松B遺跡という名称が付いた。しかし、ほ場整備事業に係る分布調査の結果では、南側にも広がることが判明した。よって、竹松B遺跡という名称は使用せず、竹松遺跡の1地点であると見ておきたい。



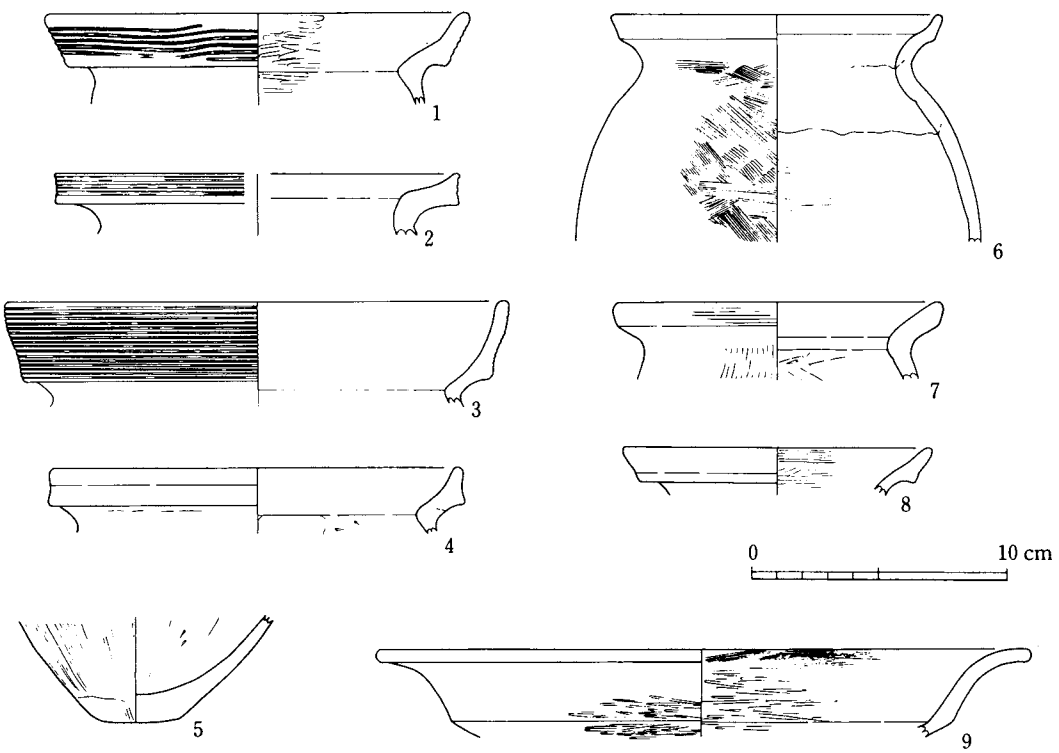
第4図　第1・2号溝実測図（S＝1/160）



土層
1　耕作土
2　床土（黒色粘質土）
3　暗灰色粘質土
4　黄灰色砂質土
5　暗灰色砂質土（やや粘性強い）
6　黒灰色砂質土（包含層炭化物入る）
6′　黒灰色砂質土（やや明るい包含層炭化物やや少ない）
地山　暗黄灰色砂質土

（1／60）
0　2 m

第5図　落ち込み実測図（S＝1/60）



第6図　出土遺物実測図（S＝1/3）

第４章　昭和61年度の調査（東相川Ｂ遺跡）

第１節　調査の概要

昭和61年度の調査は、前年度の分布調査の結果をうけて、排水路建設にかかる延長950m について実施した。調査は２m 幅のトレンチによって行ったので、その面積は1,900m² となった。

本遺跡は、当初竹松Ｃ遺跡と捉えていたが、周辺地域の調査によって東相川Ｂ遺跡に包括される見通しが得られた。したがって本書では、標題の通り報告することとする。

調査区は、現況（整備前）水田の畦畔によって区切ることとし、北から第１区、第２区と命名した。なお、水田の幅が異なるため、調査区の長さも不同となった。調査区は第１区から第52区に分けている。

遺構の分布状況をみると、調査区の北部は希薄で、中央部から南部にかけては密である。

土層は、遺構の存在しない第１区～第11区では表土下に黒色粘質土層があり、その下は礫層となっている。遺構のある中央部から南部では、現地表から遺構面まで45～60cm を測り、包含層は黒色粘質土層である。これは北部でみられる黒色土とは異なる。

現地調査は昭和61年５月６日から同年７月31日まで実施した。整理作業は、遺物の洗浄から浄書までを社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。

第２節　遺構と遺物

１．遺　構（第９～13図、図版３～７）

土坑３基、溝10条、遺物を含むピット35個を検出した。なお、土坑としたものは、一定の規模をもつ穴に限っている。

土　坑

第１号土坑は第27区で検出した。不整方形を呈すると思われるもので、現存長240cm、同幅90cm、深さ20cm を測る。覆土は灰色砂質土層で、弥生土器と炭化物を少量含む。

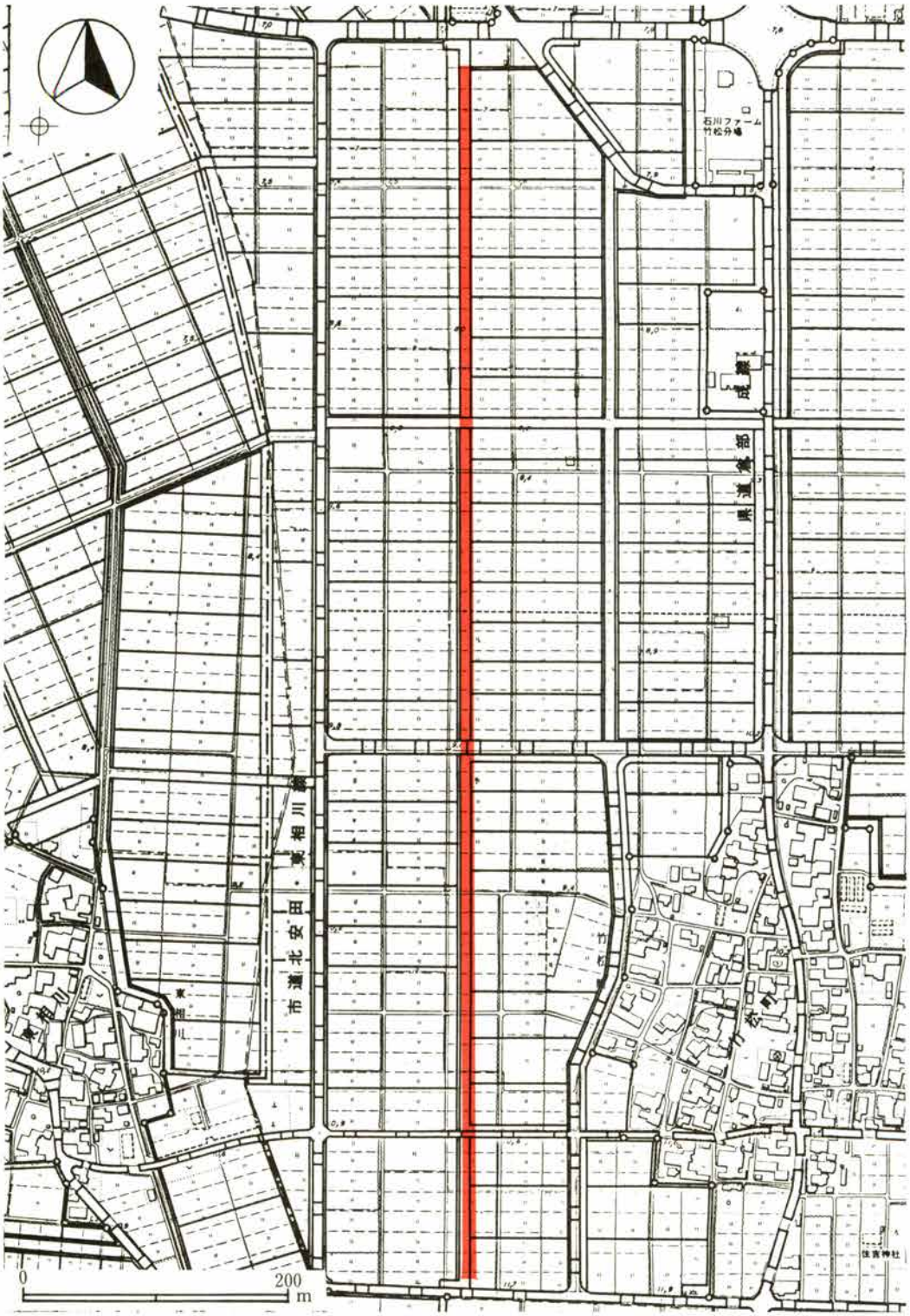
第２号土坑は第52区で検出した。楕円形を呈すると思われ、現存長115cm、同幅110cm、深さ16cmを測る。覆土は第１層が淡灰褐色粘質土層で、炭化物を包含する。第２層は濁黄褐色粘質土層である。出土遺物はない。

第３号土坑は第52区の南端で検出した。円形を呈すると思われる。現存長125cm、深さ95cm を測る。覆土は２層よりなり、第１層が暗灰茶褐色粘質土層、第２層が濁黄褐色粘質土層である。出土遺物はない。

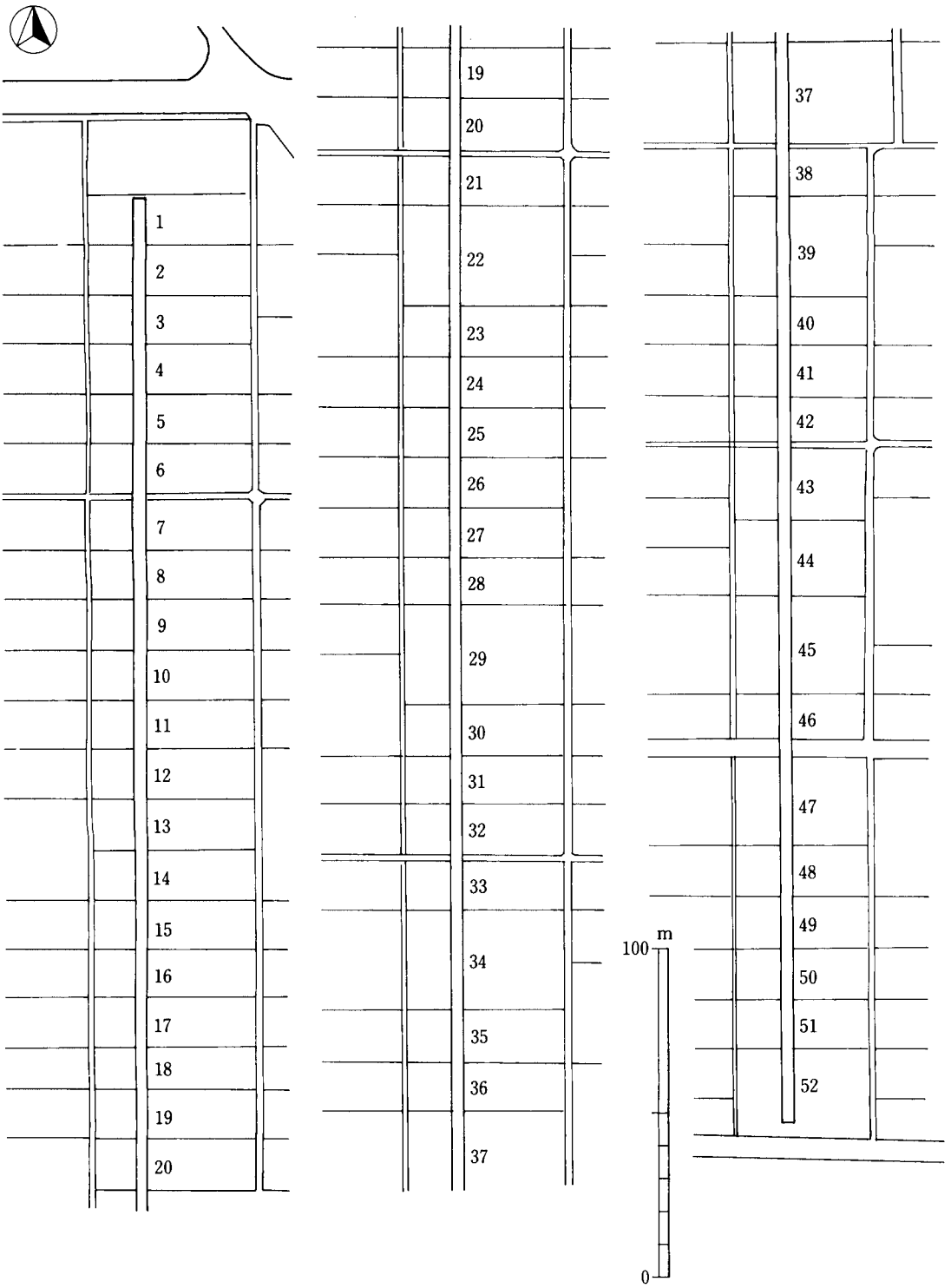
溝

第１号溝、第２号溝は第28区で並走する。第１号溝は、最大幅85cm、深さ18cm、第２号溝は最大幅50cm、深さ10cm を測る。覆土はともに黒色粘質土層である。

第３号溝は南東から北西方向に走る。南側は一段深く掘られており、北側の肩部は二段掘りと



第7図　昭和61年度調査区位置図（S＝1／5000）



第8図　調査区区割図（S＝1／2000）

なっている。幅180cm、深さは南で40cm、北で20cmを測る。覆土は暗灰色砂質土層で、炭化物、弥生土器を含んでいる。また、溝底からも土器群の出土が見られる。なお、本溝の東側の肩部に、径20cm、高さ2cmの範囲で白色粘土塊が存在するが、本遺構との関連は明らかではない。

第4号溝は幅40cm、深さ12cmを測る。第5号溝は南東から北西に走行し、幅95cm、深さ15cmを測る。第6号溝も第5号溝と同じ走行を示し、幅20cm、深さ6cmを測る。第7号溝、第8号溝はともに南北方向に走る。第7号溝は長さ550cm、幅30cm、深さ5cm、第8号溝は長さ640cm、幅40cm、深さ13cmである。第9号溝は東西方向に走り、幅45cm、深さ8cmを測る。第10号溝も同じ走行を示し、幅45cm、深さ30cmを測る。

写真1　第3号溝（南から）

ピット

ピットは第14・15区、第24～31区、第34～37区、第42区、第49区～52区で多く検出した。径20cm前後のものが多く、機能を特定できるものはない。遺物を出土したものは35個あるが、図化に耐えるものは少量である。

2．遺　物（第14～17図、図版8）

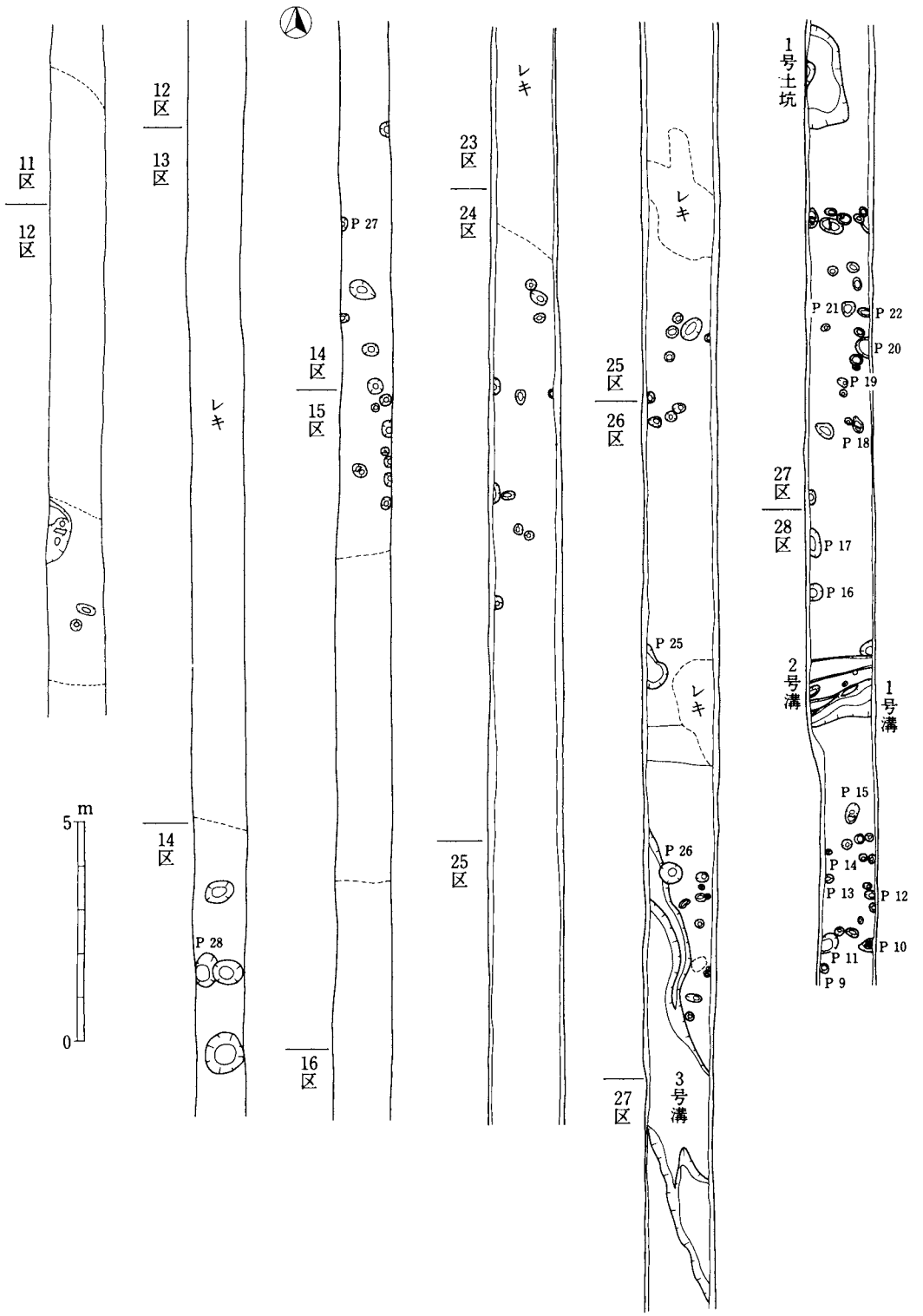
土坑出土遺物（第16図30）

第1号土坑から弥生土器が出土している。端部をつまみ上げるくの字口縁の甕である。弥生時代後期後半の所産であろう。

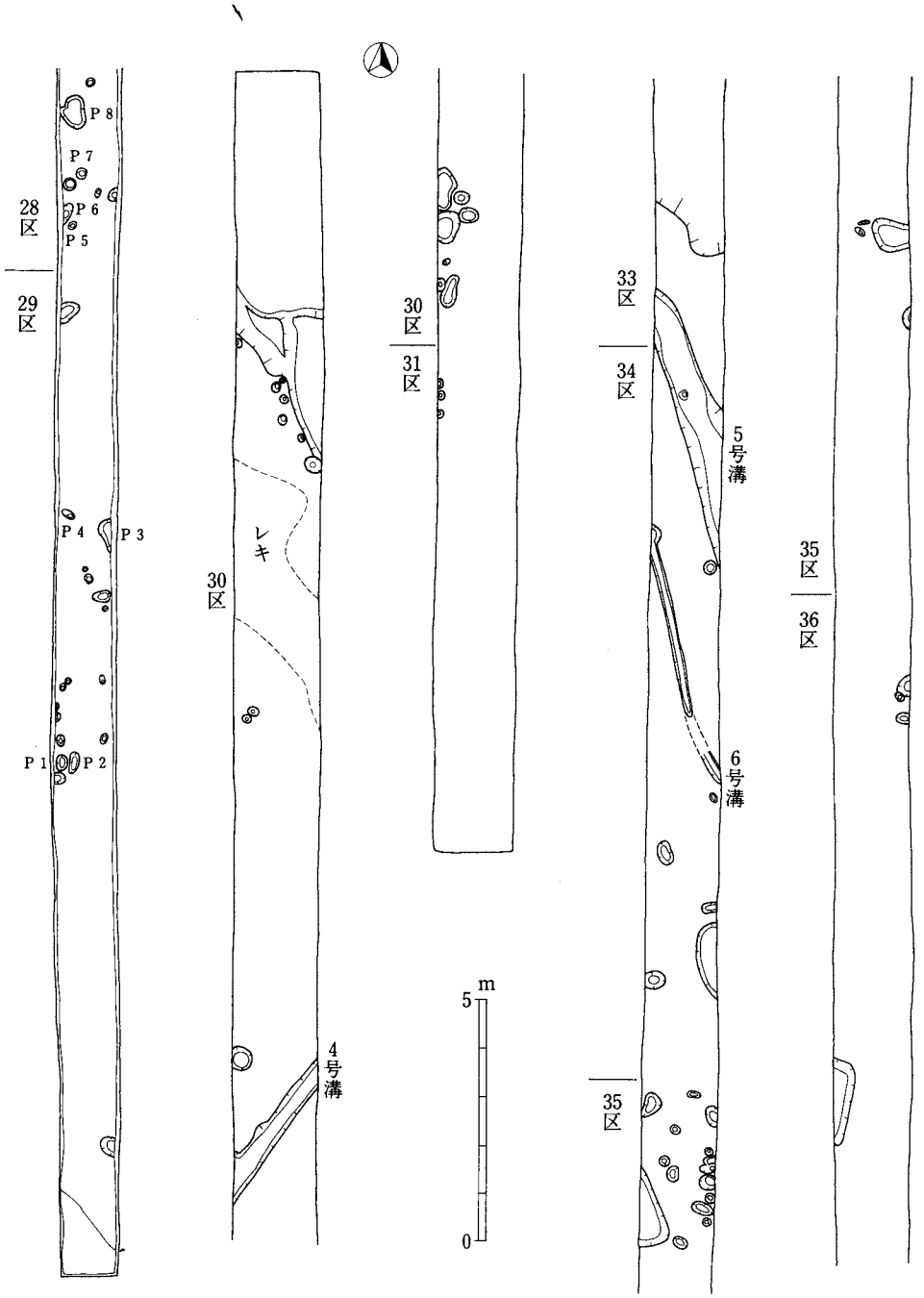
溝出土遺物（第14・15図、第16図34、図版8）

第3号溝から1～28の弥生土器が出土している。1～5は壺である。4の肩部に連続刺突文がみられる。6～21は甕である。6～8はくの字口縁、9～21は有段口縁である。12は大型で、口径26.3cm、体部上位にある最大径は31.2cmを測る。13は口径15.8cm、器高20.5cmで、4.6cmの平底をもつ。12～14は貝殻腹縁状の工具による連続刺突文が肩部に施されている。12～21は口縁部に擬凹線を施すものである。20の頸部内面には波状文が描かれる。22は鉢としておくが、器台の可能性もある。23～28は高坏である。25は脚部に沈線を施し、三角形の透孔が穿たれる。外面は赤彩されている。23・24の外面も赤彩されていた可能性が大きい。

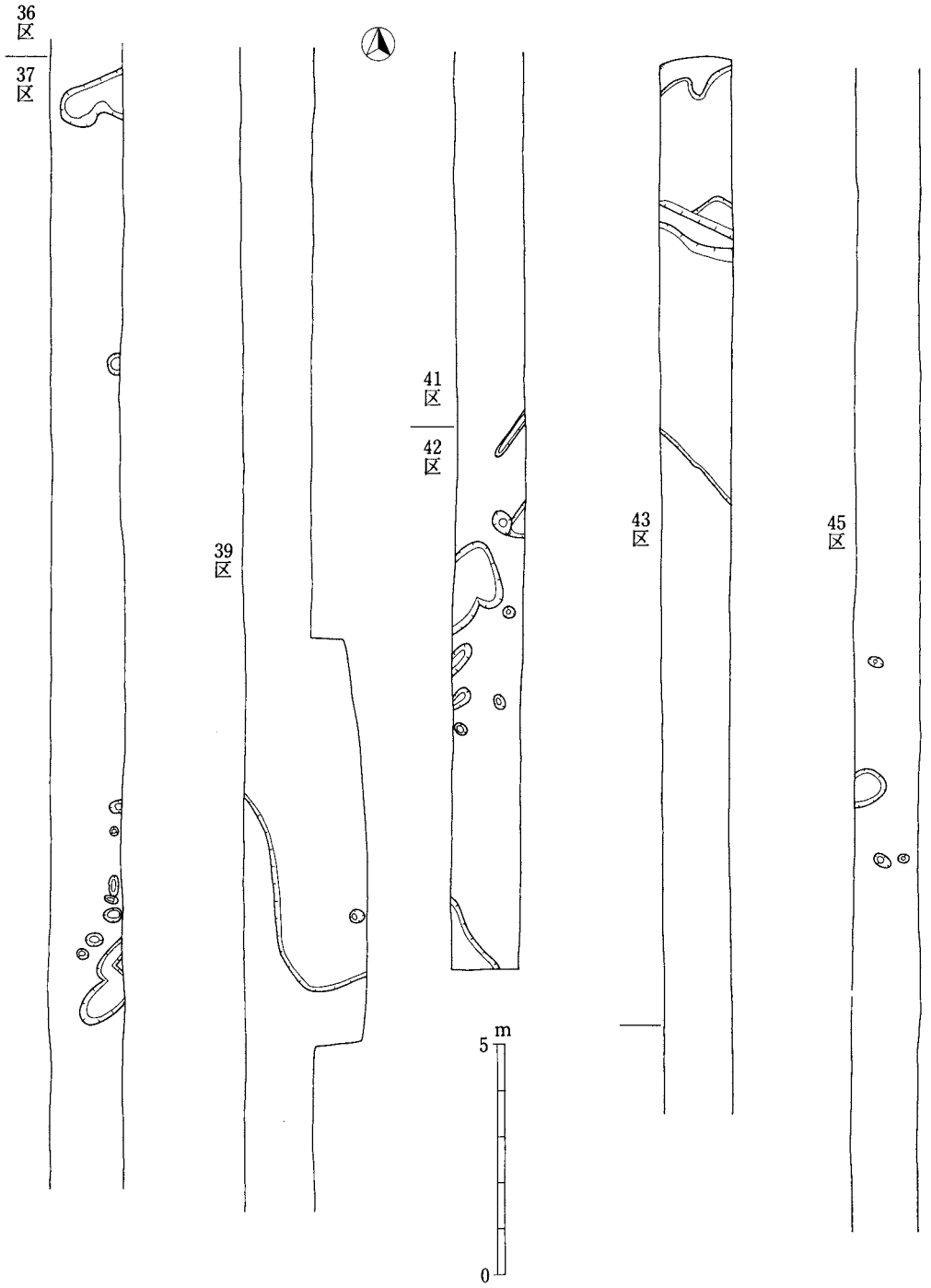
第3号溝の遺物は、いわゆる法仏式[1]のなかで捉えられるが、これより古く位置づけられている桜田・示野中遺跡出土資料に近い様相[2]も窺える。25の高坏のように古相を示すものも混じっており、いく分広い時期幅を想定すべきかもしれない。



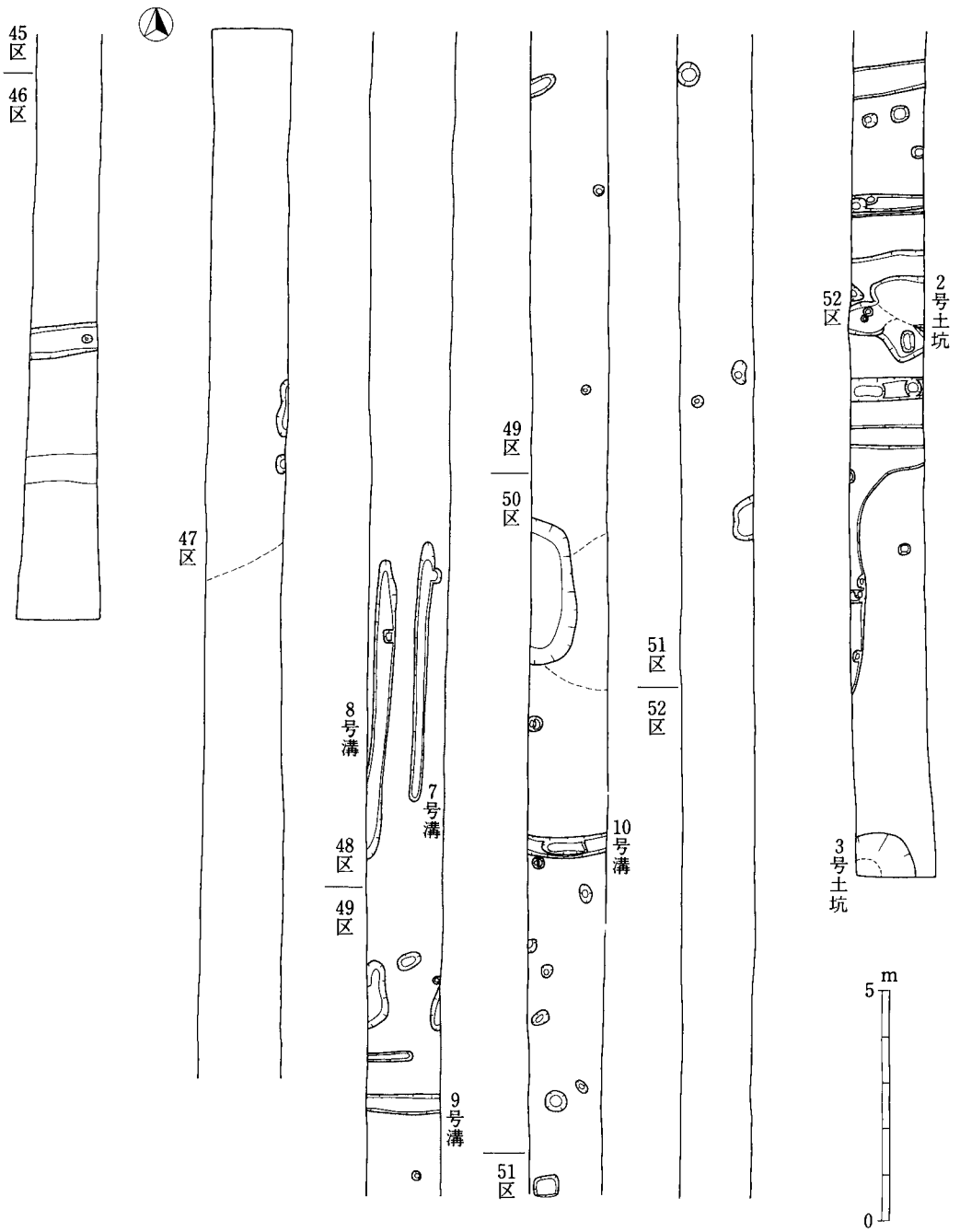
第9図　遺構配置図(1)（S＝1/150）



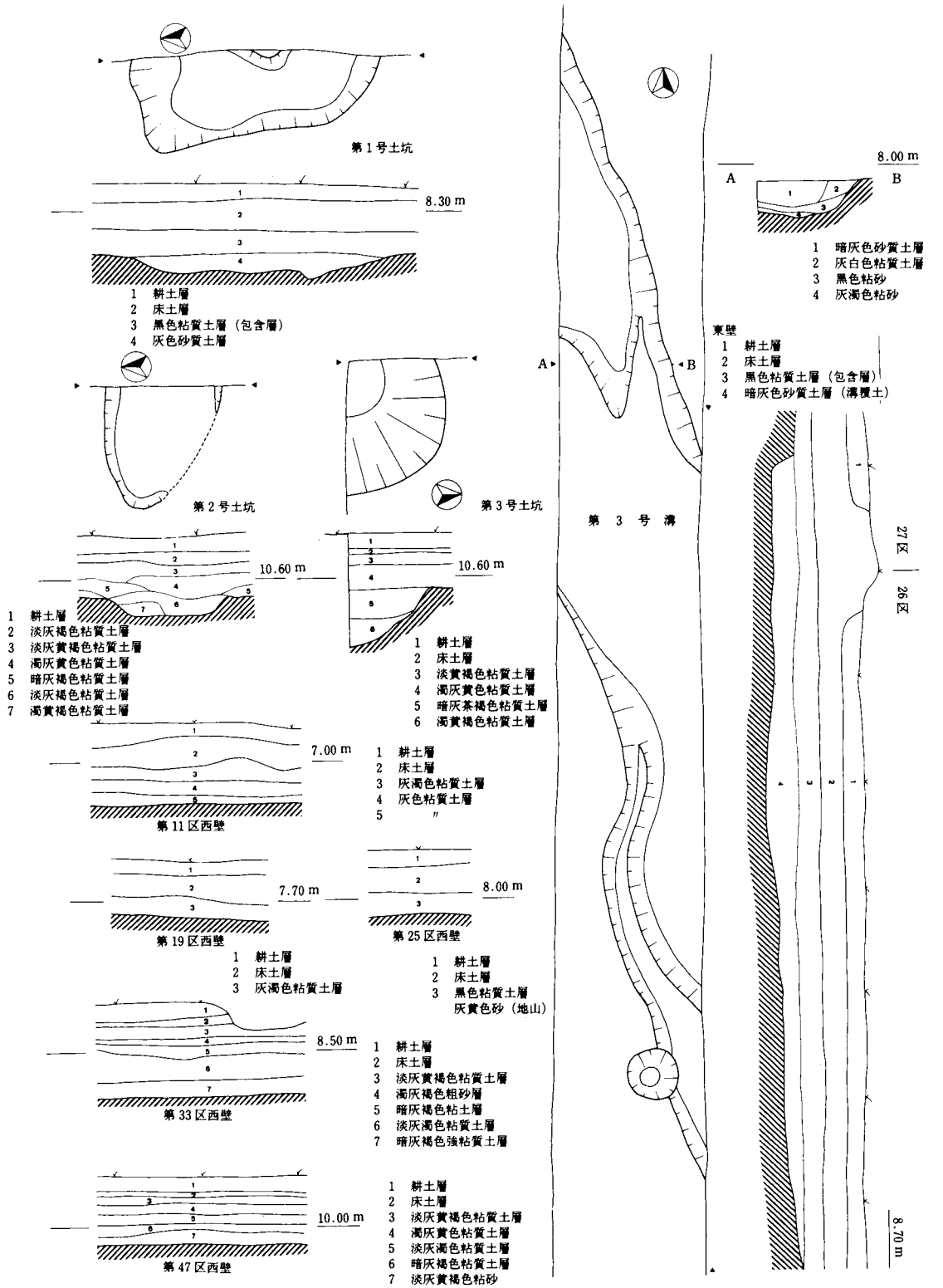
第 10 図　遺構配置図(2)（S＝1/150）



第 11 図　遺構配置図(3)（S = 1 /150）



第 12 図　遺構配置図(4)（S＝1/150）



第13図　遺構実測図・土層図（S＝1/60）

第10号溝から34の須恵器坏身が出土している。口径14.5cm、器高3.0cm、底径10.0cmを測る。8世紀中頃の所産とみられる。

ピット出土遺物（第16図31～33・35）

31はP18、32はP21、33はP25の出土である。いずれも有段口縁の甕である。弥生時代後期後半とみられ、第3号溝出土土器と同時期である。35はP28出土の須恵器蓋坏の蓋で、口径13.6cmを測る。7世紀後半とみられる。

包含層出土遺物（第16図36～49、第17図、図版8）

50～67は弥生土器である。出土地区は、55が第9区の地山直上より出土したほかは、第25～27区、第29区に形成された黒色粘質土層中である。ここには弥生土器を出した第1号土坑、第3号溝も存在する。第25区から65、第26区から50・51・53・57・58、61～64、66が、第27区から52・56・60・67が、第29から54・59が出土している。50～62は甕である。50はくの字口縁、他は有段口縁である。63は鉢で、内外面ともミガキが施されて、赤彩される。64～66は高坏である。64は、脚部と坏部が二次的に接合されている。接合部には黒褐色の物質が厚く塗られて、坏部内面に一部はみ出している。接合剤は漆もしくは膠状の物質と思われるが明確にしえない。67は器台である。これらの土器については、第3号溝出土資料と並存するものとみなしたい。

36・37は須恵器である。36は蓋坏の蓋で、第39区より出土している。口径20.0cmを測り、7世紀末葉の所産とみられる。37は甕の頸部で第3区から出土している。

38・39は第11区より出土した回転糸切りの底部をもつ小皿である。ともに底径4.0cmを測る。11世紀後半から12世紀前半にかかる時期[3]とみられる。

40は珠洲焼・41は第24区から出土した加賀焼である。加賀焼には花文の押印がみられ、二次的に火をうけている。湯上ユノカミダニ窯出土資料に類品があり、14世紀代の所産[4]と考えられる。

42は土師質土器の皿である。手づくねによる成形で、口縁端部外面はナデにより面をなしている。割れ口には褐色の膠漆状接合物質がみられ、内底面にも茶褐色の物質が付着している。14世紀代[5]の所産と考えられる。

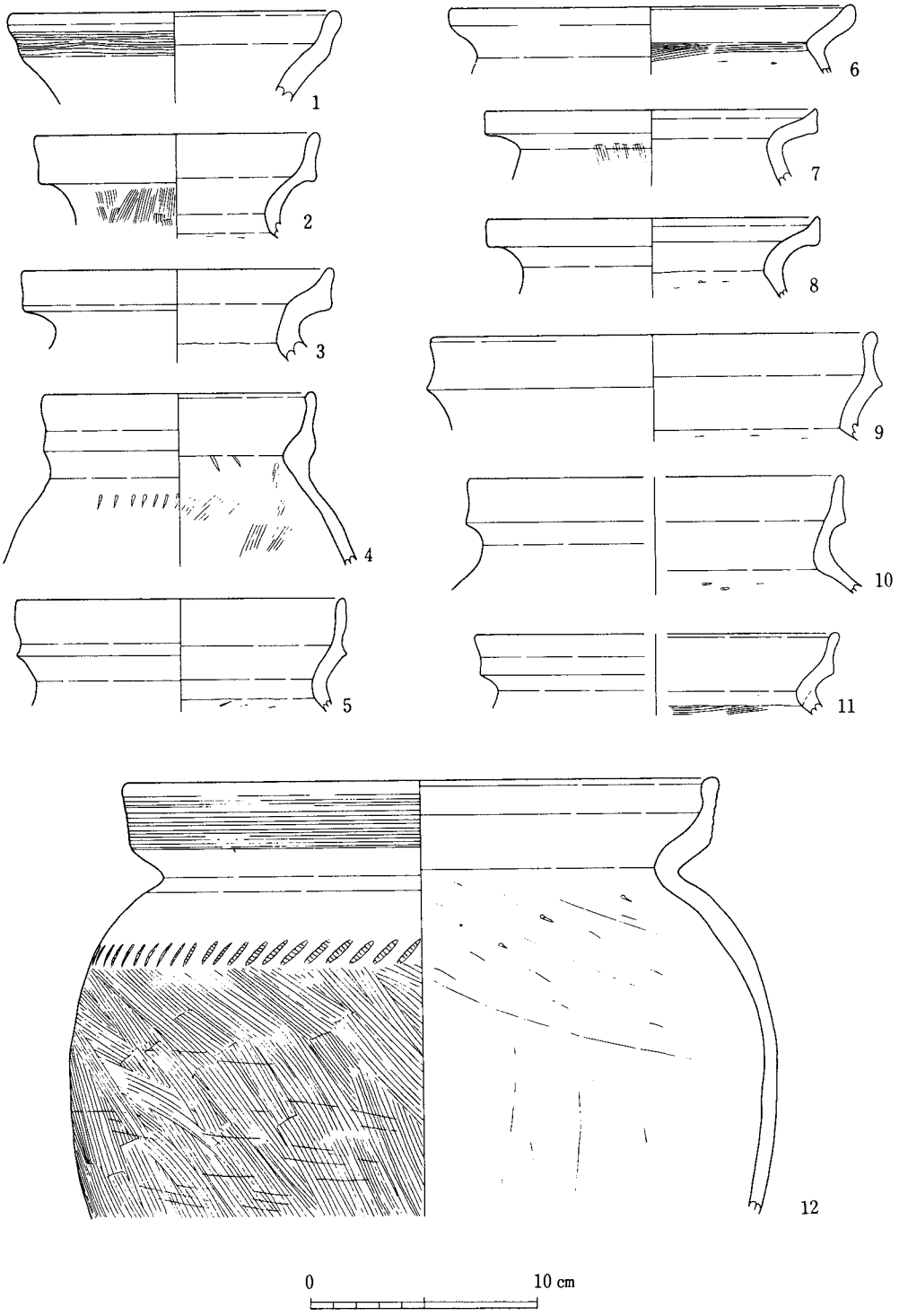
43は第4区から出土した瀬戸・美濃の天目椀である。16世紀代の所産とみられる。

44～46は土錘である。44・45が第39区より、46が第40区より出土している。44は長さ4.4cm、胴径3.3cm、孔径1.6cmを測る。

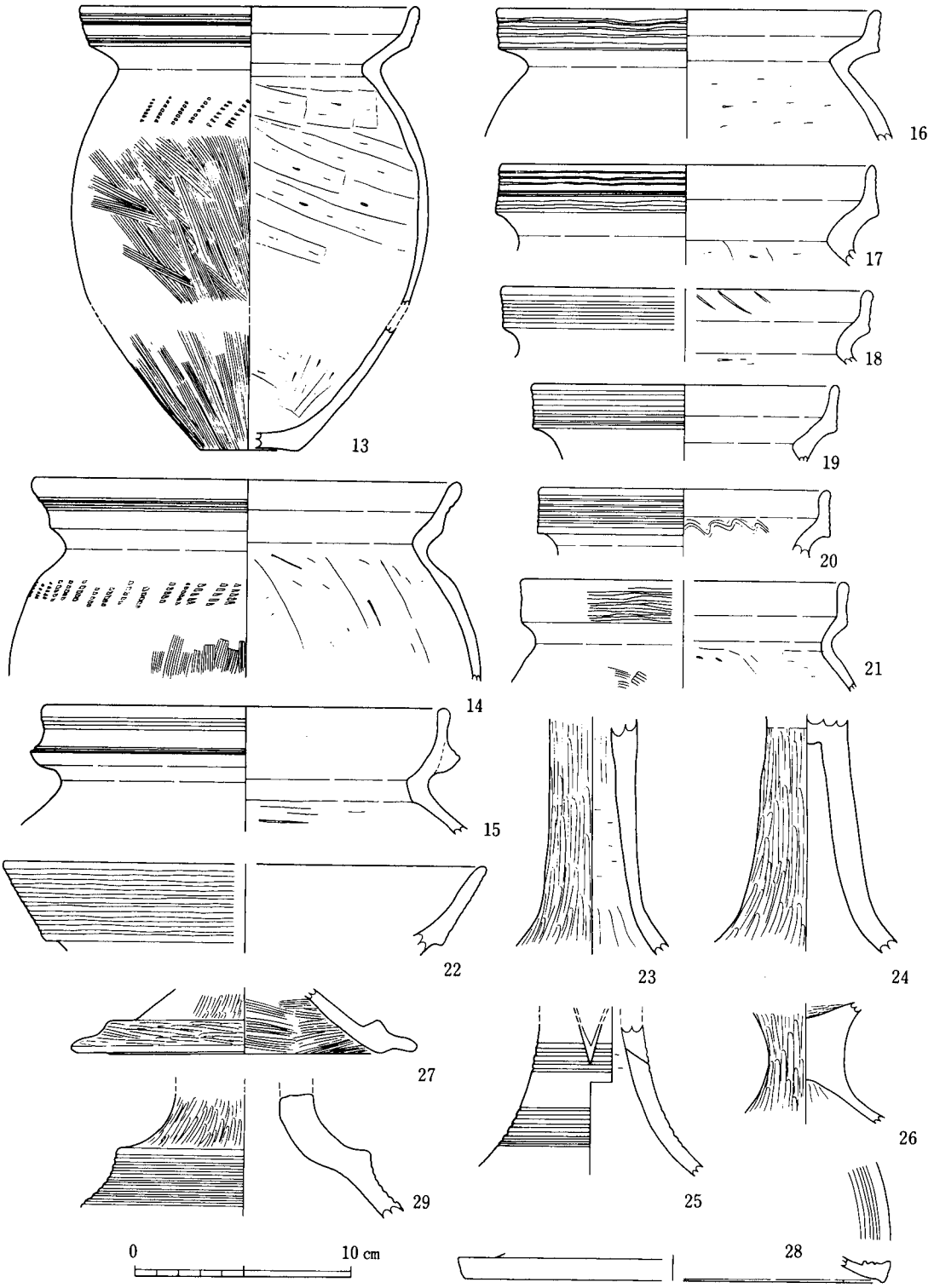
47は粘板岩を素材として、一辺に刃部状の面取りを施した石器である。両面は平滑で、側面は鋸で切断したようにみえる。現存幅4.0cm、厚さ0.45cmを測る。

48は第11区より出土した有茎石鏃である。

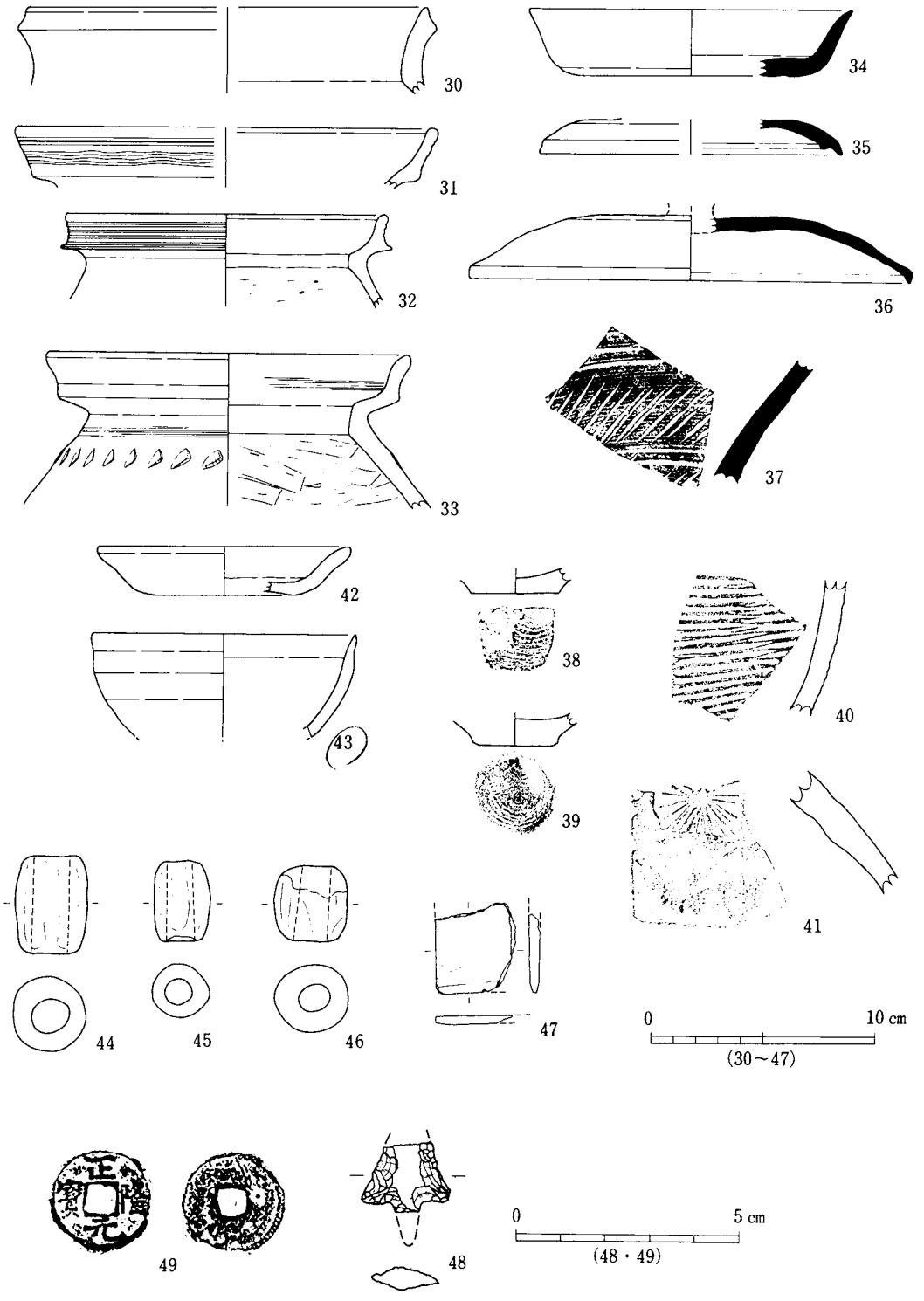
49は第39区より出土した。北宋銭の正隆元寶で、1158年の初鋳である。この他に、銭貨名を判読できないものが第4区から1点出土している。



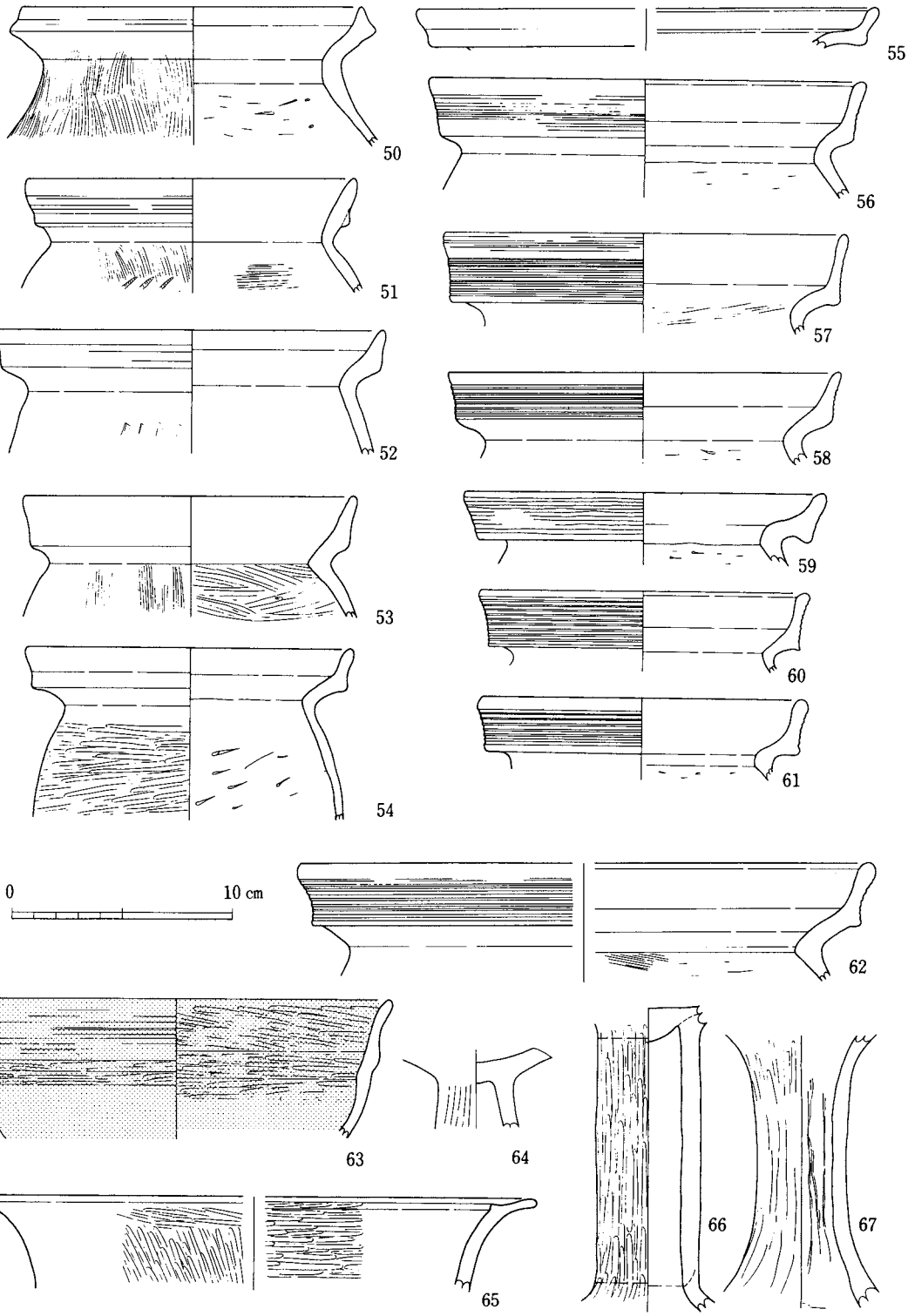
第 14 図　遺構（第 3 号溝）出土遺物実測図(1)（S = 1 / 3）



第15図　遺構（第3号溝）出土遺物実測図(2)（S＝1／3）



第16図　遺構・包含層出土遺物実測図（S＝1/3・2/3）



第17図　包含層出土遺物実測図（S＝1／3）

第3節　ま　と　め

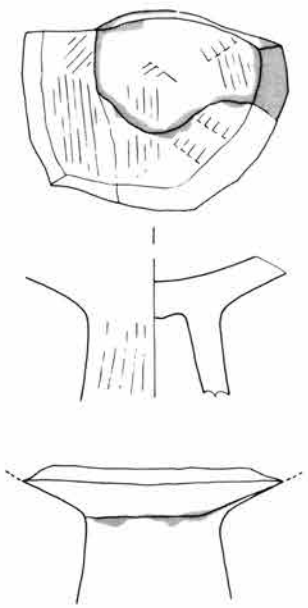
本遺跡の出土遺物は弥生時代から近世まであるが、その大部分は弥生土器である。遺構をみると第3号溝などは幅約2mの大型の溝で、この南北に遺構が密集することより、第26区から第29区にかけて弥生時代後期の集落が存在する可能性が高い。古墳時代以降については、調査区内でみる限り、一定規模の遺跡が存在した状況は認められない。

遺物のうち類例の少ないものとして、弥生土器の高坏の接合資料（第17図64、第18図、写真2）がある。時期は異なるが、土師質土器の皿も接合痕をのこしている。

割れた土器を接合剤によって補修する行為として、縄文時代のアスファルトによるものが知られる。これはそのこう着性と耐水性を利用したもので、新潟県以北の東北日本に多く分布する(6)。出土地はアスファルトの産地と重なるか、それに近い地域であって、石川県では例を知らない。本遺跡における前述の2例は、分析を行なっていないので、材質は不明であるが、アスファルト以外の植物性こう着剤の可能性が高い。

アスファルト以外のこう着剤として広く知られるものに漆がある。漆による接合は、陶磁器に多く見られるが、その上限は鎌倉時代であるという(7)。分析の必要があるが、国産陶器の片口鉢にも接合例があり(8)、土器の補修がどのような基準によってなされたのか興味深い。

本遺跡の弥生土器高坏と土師質土器皿をみると、前者は時代的に、後者は器種的に希少な例であろう。前者は、もと赤彩の高坏とみられ、精神的行為における使用も、一つの可能性として想定しておきたい。



第18図　補修された高坏（S＝1/2）

写真2　高坏の接合部

第4章　註

1　谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会　1983年　金沢

2　田島明人氏の教示および金沢市教育委員会『桜田・示野中遺跡』　1991年による

3　田島明人「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター　1986年　金沢

4　藤田邦雄氏の教示による

5　藤田邦雄氏の教示による。

6　安孫子昭二「アスファルト」『縄文文化の研究』8　雄山閣　1982年　東京

7　鈴木重治「出土陶磁器にみる修復技法」『考古学と生活文化』　同志社大学考古学シリーズ刊行会　1992年　京都

8　石川県内では普正寺遺跡や宮保光明寺遺跡の越前焼片口鉢に例をみる。

第５章　昭和62年度の調査（竹松Ｃ・Ｅ遺跡）

第１節　調査の概要と遺構

竹松遺跡群の昭和62年度調査は昭和62年８月10日から９月２日まで約１ヵ月であったが実際の作業は延べ13日間であった。事前の分布調査結果をもとに主要地方道金沢小松加賀線（広域農道）から竹松町の集落に至る県道倉部成線に沿った区域と竹松町の東側に設けられる排水路予定地について、発掘調査の対象とした。調査は幅２m、調査の対象としたのは全体で400m² である。調査区は北から順にＡ～Ｇトレンチとした。

１．Ａトレンチ（第20図）

喫茶ケープタウンのすぐ南に設定した。約５mから南（竹松集落より）では耕土直下で礫層となっている。Ａトレンチではピット数個を確認したが、いずれも耕土下灰色粘土からの掘り込みであり、古いものではない。

２．Ｂトレンチ（第20図）

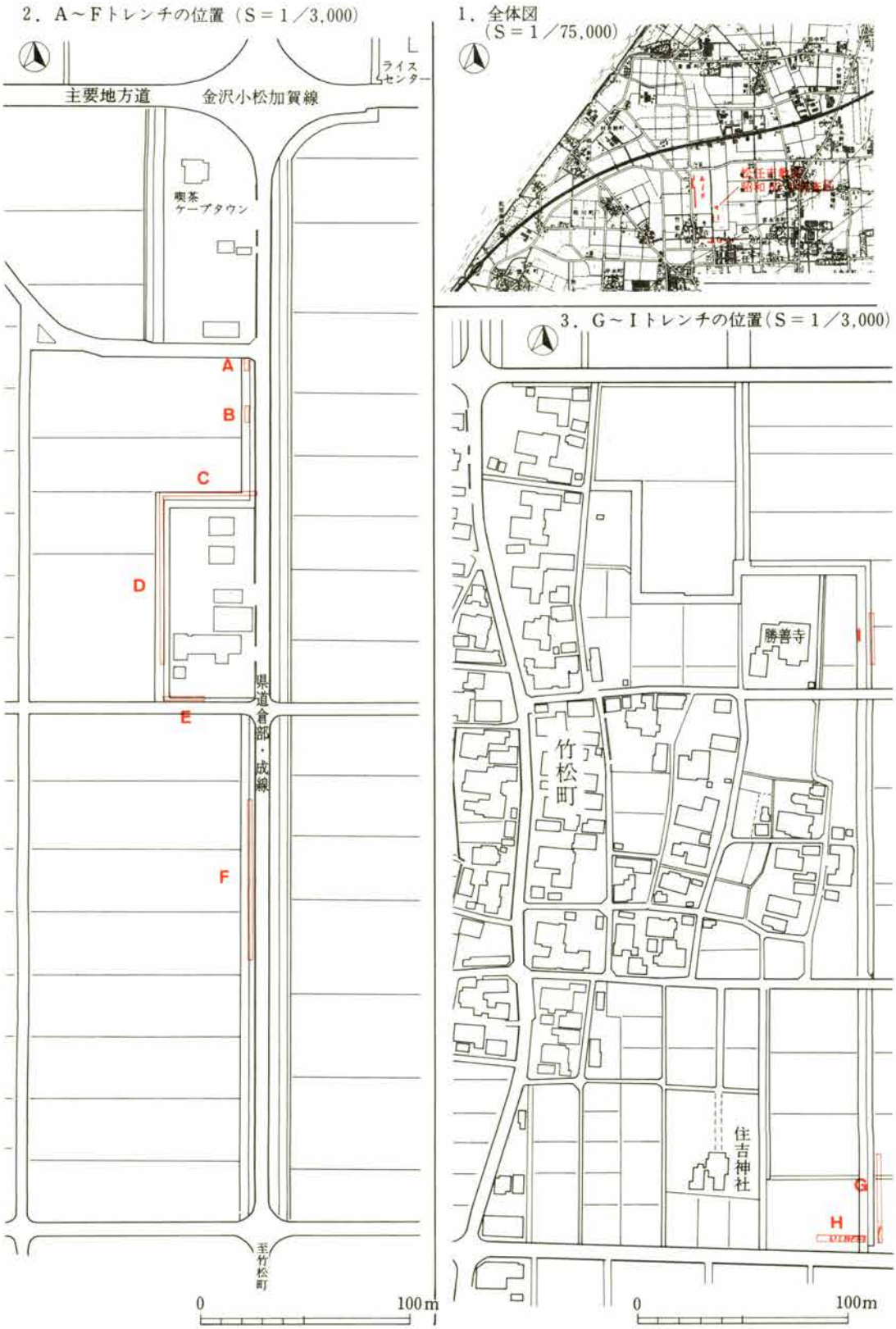
礫層に覆われて、遺跡は確認できない。

３．Ｃ～Ｅトレンチ（第20図・第21図）

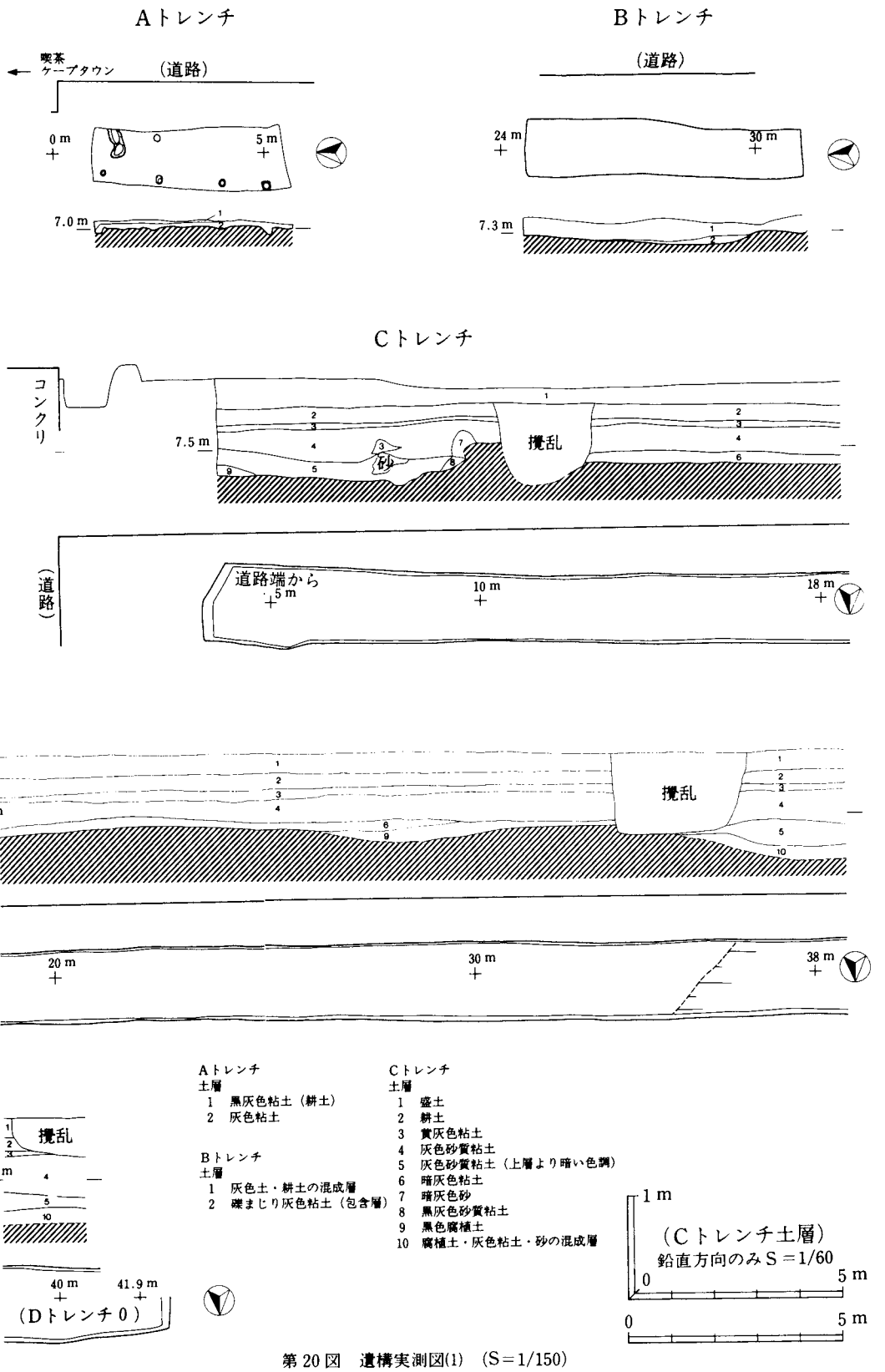
工場の西側をクランクして取り巻くトレンチ。Ｃトレンチでは20cmの盛土、その下の耕土を取り除くと20～25cmの灰色砂質粘土があって下層にいくほど次第に暗い色となっていた。旧耕作面から約60cmで地山（基盤層）である黄色砂質粘土となっている。地山上に堆積する灰色砂質粘土の下部では小量ながら摩滅した土師質土器の細片や越前焼の陶片などが断片的に含まれており、中世の堆積層であったことがわかった。Ｃトレンチ中程から南側は黒い腐植層が次第に厚みを増して堆積し、その下は礫層となっていて中世段階以降の河道跡であったといえる。工場西側のＤトレンチからは腐植層にますます礫混じりの頻度が高くなり、Ｅトレンチまでは明らかに河の中の状態であった。

４．Ｆ～Ｇトレンチ（第22図）

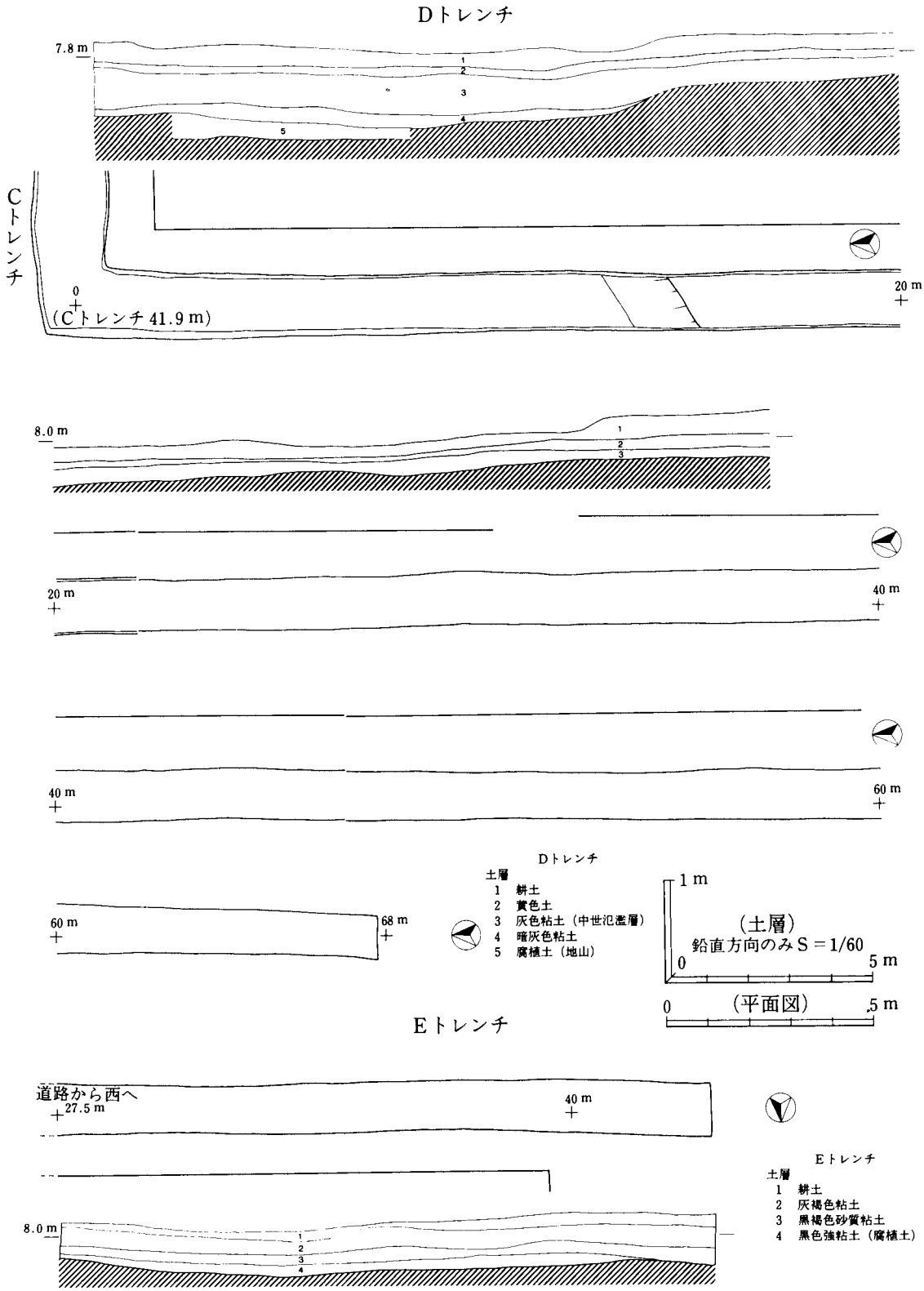
20cmばかりの耕作土、10～20cmの灰色砂質粘土（中世以降堆積層）を取り除くと黒褐色土が15～20cm堆積して基盤の青灰色シルト層となっていた。Ｆトレンチは県道倉部成線に沿ったＥトレンチ東端から竹松集落入口まで延長240mのうち、礫が確認されなかった約65mを調査の対象とした。約70m付近から南側で基盤の上に黒灰色粘土層が確認され、弥生時代後期の遺物の包含が認められた。第24図１・２に図示した土器がその一部である。しかし、この遺跡も約30m南方までの間に確認されただけで人頭大あるいはそれ以上の大きな礫を含む大きな河川敷跡となって消えていた。Ｆトレンチでは第22図にあるようなピット群や溝を検出し、弥生時代後期の土器がまとまって出土した（ポリ袋に４つ分）が、いずれの遺構も数cmの深さしかなく、10cmを超える遺構も極くわずかであった。調査区域内で全体を知り得る遺構は無く、周辺に弥生時代の集落が存在していることを把握するに止まった。Ｆトレンチの東約100mの昭和63年度調査区では



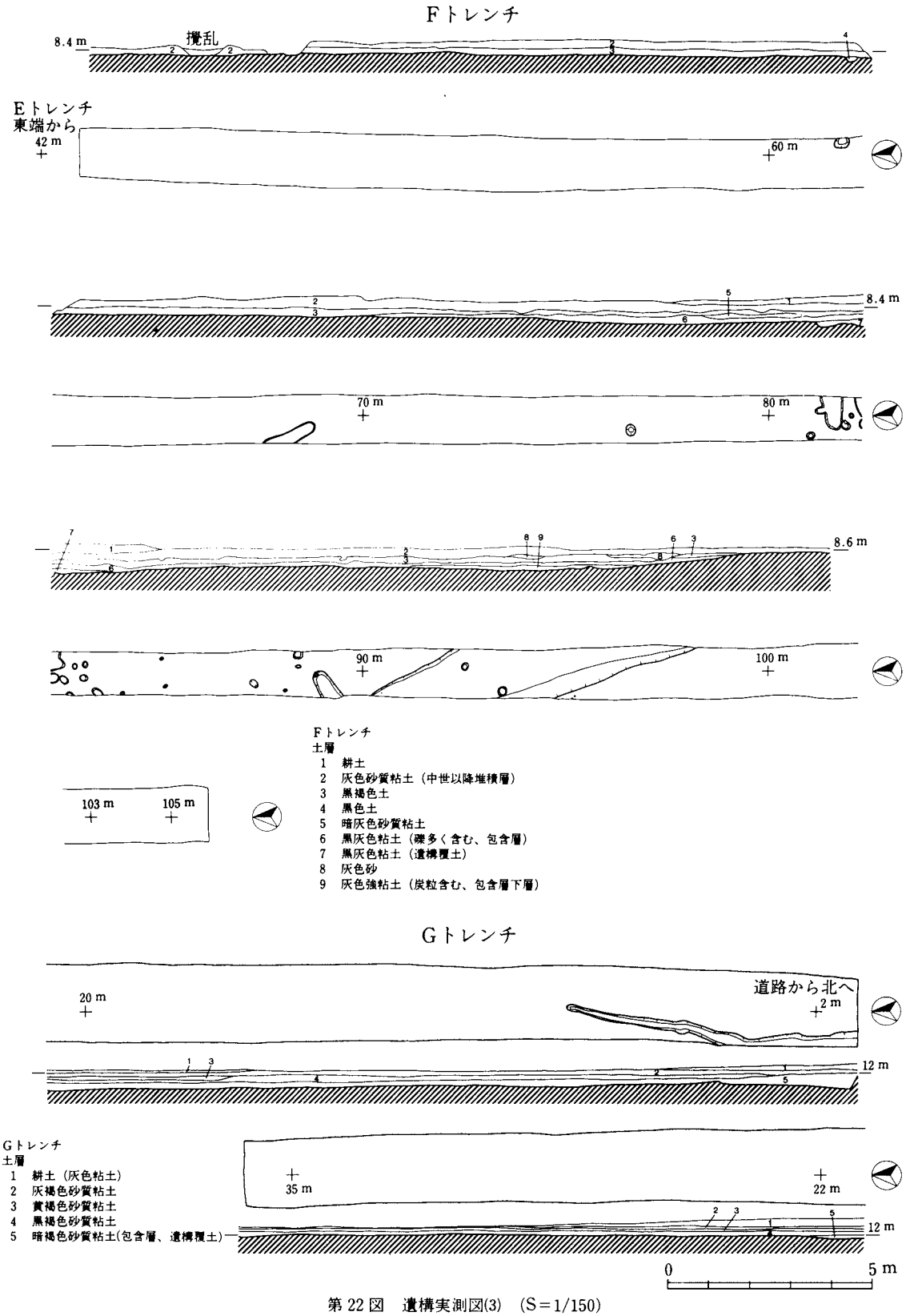
第19図　昭和62年度調査区位置図



第 20 図　遺構実測図(1)　(S=1/150)



第21図　遺構実測図(2)　(S＝1/150)



第 22 図　遺構実測図(3)　(S＝1/150)

弥生時代後期の住居跡多数が、東南約300mの松任市教育委員会の調査区では、弥生時代後期の竪穴住居跡3棟が確認されており、それと一連の遺跡、竹松C遺跡であると推定される。

5．Iトレンチ（第23図）

竹松集落の東側を取り巻くように巡る延長約500mについては、重機を用いて試掘を行いながら北から南へ移動した。Fトレンチでみた礫層は竹松集落入り口を東西に延びる市道から約60m南まで広がっていた。礫の分布が切れた勝善寺の東側にIトレンチを設定して調査したが、灰色粘土の下は礫層が続いており、相当大規模な河川の跡であることが窺えた。礫層はさらに南に広がって竹松集落の南東に位置する住吉神社の東側に設定したGトレンチ北半部まで続いていた。

6．Gトレンチ（第22図）

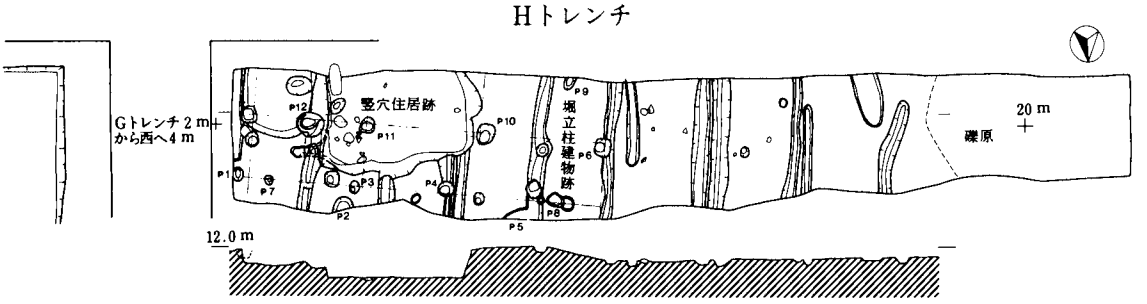
竹松集落の南を東西に走る道路から北に約36mの長さで設定した。調査区南端から北約8mまでは石が少ないもののそれから北側は礫層であった。トレンチのほぼ中央の石の間に詰まった暗褐色砂質粘土層からは弥生土器が少しずつ出土し、近くに遺跡の存在を予測させた。トレンチの南端では地表面から約25cmで遺物包含層である厚さ10cm前後の暗褐色砂質粘土層の上面に達し、基盤の黄褐色砂質粘土層に掘られた南北方向の浅い溝を確認した。溝からは弥生時代後期の土器に混じって奈良・平安時代の土器も出土した。

7．Hトレンチ（第23図）

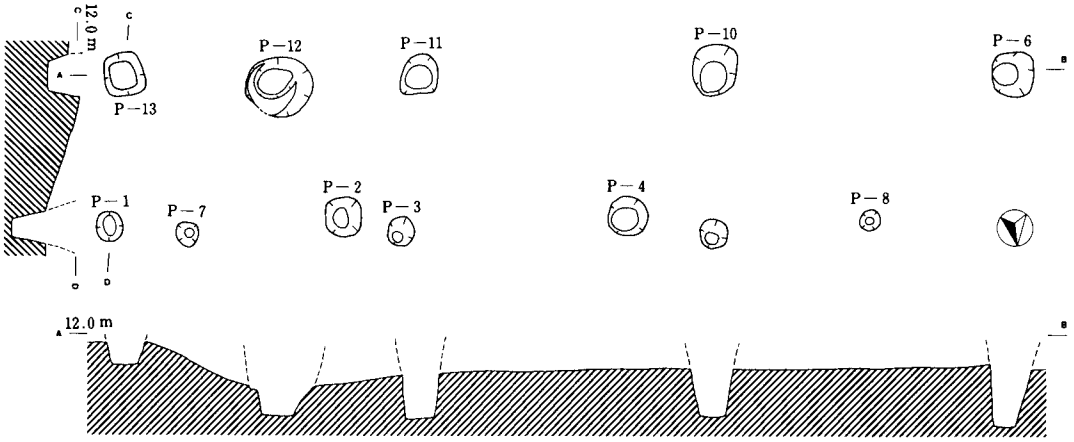
Gトレンチの調査に着手したのは8月21日であり、調査の所見から弥生時代と奈良・平安時代の集落遺跡の存在が確実になってきていたが、もうGトレンチの調査を終了させれば予定した調査のすべてが完了する予定であった。ところがセンターでの仕事のため作業を休止した8月22日土曜日の午後、工事用のブルトーザーが道路から田面に降りる際にGトレンチ西側の土を掘削し、遺跡の一部に損壊を与えるという事態が発生した。8月24日に現場で確認した調査担当者はこの事実を県松任土地改良事務所に報告するとともに現地で事務所担当者、施工業者と原因と取り扱いについて協議した。施工業者は遺跡の存在について土地改良事務所から指示を受けていたが、重機の運転手は遺跡に与える影響が軽微なものであると勝手に解釈して掘削を行なったものであるとの釈明があった。取り合えず改めて工事工程及び盛土施工について確認するとともに、緊急の発掘調査を実施することになった。以上の経緯から設定したのがHトレンチであったが、遺構密度、遺物量ともに最も多かったのは皮肉としか言いようがない。遺跡の広がりはG・Hトレンチの状況から南西側（住吉神社）方向にあると推定される。

Hトレンチは遺跡が工事の影響を受けた幅約2.5m、長さ約18mの部分を対象に設定した調査区である。地元では付近の通称をゴシャと呼んでいるそうで、住吉神社と関係があるのかも知れない。第23図に示したように暗褐色の遺物包含層を掘り下げるために耕作土直下の面を清掃したところ、灰色の覆土のつまった柱穴群が検出された。この柱穴群は東西方向に二列並んでいて、南側のP6、P10、P11などは径30cm前後、深さ約35cmを測る。これに対置する北側のP1、P3などは径が、20cm足らずと小さく建物庇の柱と推定された。調査区が狭いため全体を窺い知ることはできないが東西3間、南北に庇を持つ建物が想定される。柱間は東西2.3m等間、南北1.3mを測る。建物は覆土の状態から中世の所産であると推定したい。

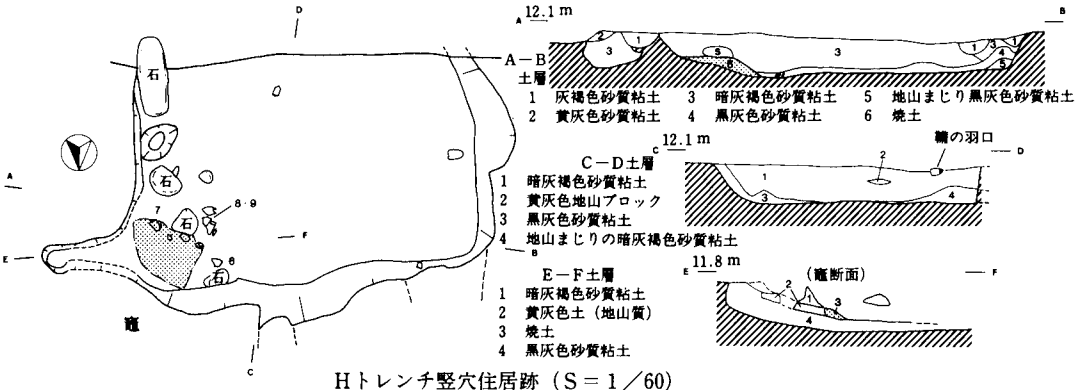
Hトレンチ



Hトレンチ実測図（S＝1／150）　0　5m

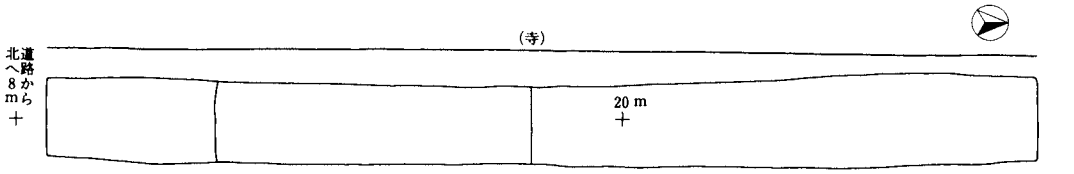


Hトレンチ堀立柱建物跡（S＝1／60）　0　1　2m



Hトレンチ竪穴住居跡（S＝1／60）　0　1　2m

Iトレンチ



Iトレンチ実測図（S＝1／150）　0　5m

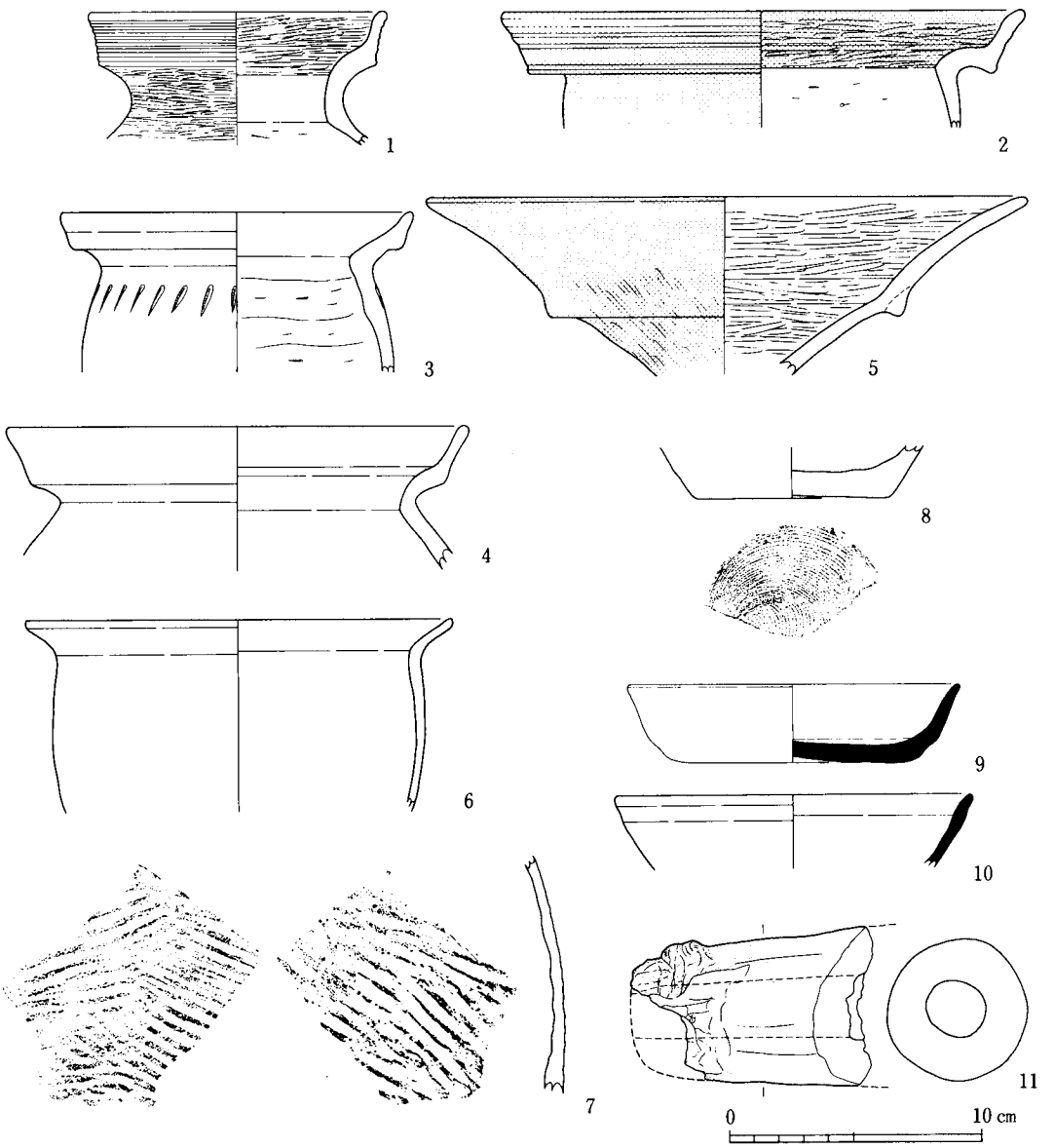
第23図　遺構実測図(4)

Gトレンチに1条だけ検出していた南北方向の溝は、Hトレンチに続いて広がり、13条の幅20～30cmの平行する溝を確認した。2条が1単位で重複するところもあることから、近接する二つの時期に作られた畝溝の痕跡と推定される。溝は160～180cmの間隔で並列しており、深さ10cm以下と浅い。このような畝溝の跡は県内の奈良・平安時代の集落遺跡での調査例が増えてきているが、Hトレンチの調査から古代において周辺で集落とそれに伴う畑作が行なわれていたことを示している。Hトレンチの西端で暗褐色土の色調が次第に黒くなり、出土する遺物の量が増える場所があった。調査の結果、東西2.84mを測る小型の竪穴住居跡であることが判明した。南北方向は2m以上となって調査区域外に延びている。検出面から床までの深さは約33cmで、柱穴は認められず床は東から西へ若干傾斜していた。北東側のコーナー近くの床面に焼土が多く認められ、竈(かまど)が作られていた。竈はコーナーの地山を掘りぬいてトンネル状の煙道を持つ。径約25cm、長さ約80cmの煙道を通って屋外に煙を排出されたようであるが、本例のように煙道の遺存状態の良好な例は少ない。西壁に沿って全長68cmの楕円形をした大きな石が据え置かれたような状態で出土した。石の上で何かを叩いたような痕跡（不明瞭な傷）が上面に認められ、石を作業台として使用したものと思われる。

第2節　遺　　物

第24図1・2はFトレンチの包含層からまとまって出土した土器の一部である。1は有段口縁の壺。口径11.8cmを測り、口縁帯に7条の浅い擬凹線がある。口縁内側、頸部外面をみがいて調整する。2は有段口縁の鉢。有段部内外面に鮮やかな赤彩を施す。口径20.8cmを測り、口縁帯に3～4条の不定形な擬凹線がめぐる。有段部内面はよく磨かれ、頸部以下の内面はヘラで削っている。胎土は白っぽい褐色を呈し、焼成は良い。1・2の他、Fトレンチ包含層からは甕、高杯等の破片が出土しているが図示できない。Fトレンチからの出土土器は、弥生時代後期後半に比定されている法仏式に含まれる資料といえよう。第24図3～5はHトレンチの包含層掘り下げ時点で出土した土器の一部である。この土器も弥生時代後期後半の範疇に含まれる土器であるから、G、Hトレンチ周辺に奈良・平安時代とは別の弥生時代後期の遺跡が存在したことを示している。3は口径14.2cmの甕、有段の口縁は肥厚しており、口縁帯を接合した痕跡をとどめている。頸部外面に斜方向の櫛状具による押圧文がある。明るい橙褐色を呈するが胎土中に角閃石と石英を多く含んでいる。4は有段口縁の甕で口径18.6cmを測る。口縁部外面に煤が付着している。胎土は明るい橙褐色である。5は有段の器受部が大きく開いた器台で口径23.8cmを測る。内外面をよく磨いて調整し、外面全面に赤色顔料を塗っていたようである。口縁部の橙褐色の器面の一部に黒斑がある。

第24図の6～11は竪穴住居跡および包含層から出土した奈良時代後半頃の須恵器と土師器である。6は口縁がくの字に開く小型の甕。口径17.3cmを測る。竪穴内の覆土から出土したが、使用により熱を受けたため、器表の剝落が激しい。口縁部内面に炭化物が付着している。胎土にきめの細かい粘土を用いて作ったためか、余計熱に対して剝がれ易くなったと思われる。7は土師器長胴甕の体部破片。外面に交互の斜方向の平行タタキ、内面も斜めの平行タタキで調整している。



第 24 図　出土遺物実測図　(S＝1/3)

内面のタタキは幅4mmと太い。8も甕の底部。小型の甕の底であり、回転糸切り痕がある。7・8の甕破片は竪穴住居跡の竈焚き口部分の床面から出土した。9は須恵器の杯で口径13.2cm、器高3.2cmを測る。口径の割に器高が低く器壁が厚みを持っていることもあって、ずんぐりとした器形となっている。灰褐色を呈するが堅い焼きである。この杯も竈の焚き口部床面からの出土である。10の須恵器杯は、Hトレンチ包含層からの出土である。口径は14.2cmと9より一回り大きく、口縁部を外に開くように押さえて整形している。灰色を示し、焼成は堅い。11は鞴(ふいご)の羽口で、竪穴住居跡覆土からの出土であり、若干ながら鉱滓も出土したことから、竪穴が鍛冶工房として使われたと推定される。鞴の羽口は穴の直径2.5cm、残存長約9.5cmを測る。先端部3.5cmに鉱滓がこびり付き加熱により変色している。

第3節　ま　と　め

竹松遺跡群の昭和62年度調査の結果、従来から知られていた弥生時代後期の竹松C遺跡の他に通称ゴシャに設定した、G・Hトレンチで奈良時代後半頃と中世の集落遺跡の一端を確認した。竹松町周辺は手取川扇状地の扇央部末端地域とはいえ、以前の微地形はかなり凹凸のある複雑な地形をなしていたと推定される。そして、すでに指摘されているように手取川の河道によって島状に取り囲まれた紡錘形の微高地上に各時代の集落が営まれたものと推定される。

発掘調査の所見では県道倉部成線に沿って設定したA～Fトレンチの大半及び、竹松集落の東側は手取川の旧河道や氾濫原となっていたことが、明らかとなった。そして、大きな礫群がびっしりと堆積した河道のあとや洪水等による堆積層の存在は、中世の段階に至っても竹松町周辺の地形的な安定が十分ではなかったことを裏付けている。Fトレンチの約100m東に設定した昭和63年度調査区では、約10棟の竪穴住居跡群(第6章参照)が、松任市教育委員会が実施した調査地点では3棟以上の竪穴住居跡が確認されており、弥生時代後期の竪穴群から成る集落跡が存在することは相違ない。

Hトレンチの調査は、当初計画になかった調査であったが、奈良時代後半の竪穴住居跡1棟を発掘するなどの成果をあげ、新遺跡とみて竹松E遺跡と命名した。特に煙道を持つ竈の検出と、住居跡内から鞴の羽口と鉱滓が出土したことにより、この住居で鍛冶が行なわれていたことを把握することができた。これは、現時点では県内でも貴重な調査例であるといえる。また、中世のおそらく庇を持っていたとみられる掘立柱建物の性格についても、今後の検討に委ねるところが多いことを記してまとめとしたい。

第６章　昭和63年度の調査（竹松Ｃ・Ｄ遺跡）

第１節　調査の概要

１．Ａ調査区（竹松Ｃ遺跡）の概要

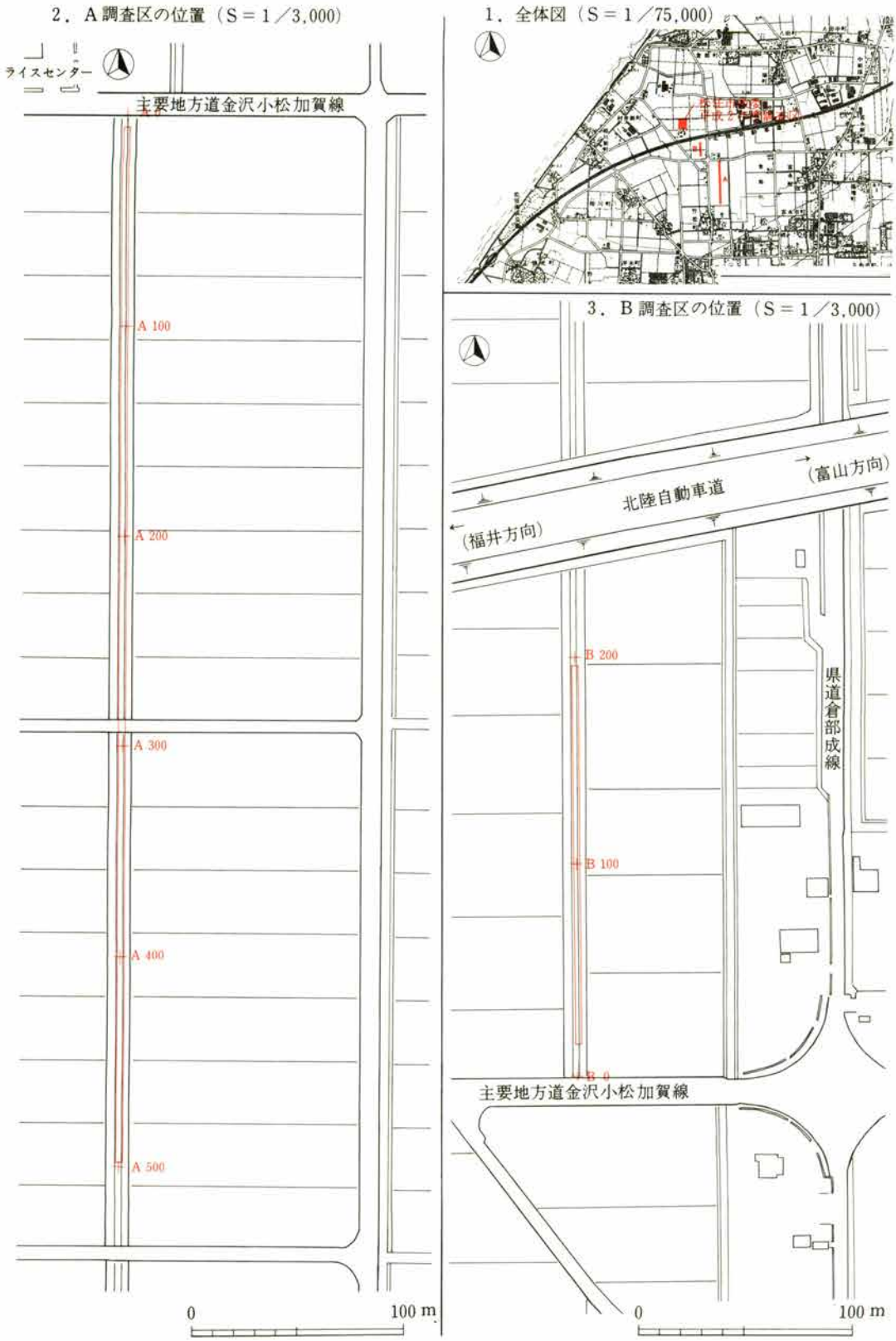
石川中央広域農道南側路肩擁壁を起点（Ａ－０）とし、真南に向かって延長496ｍ、幅２ｍの発掘調査を行った結果、弥生時代後期の集落を構成する各遺構がＡ－91～243にかけて約230ｍにわたって分布していることを確認した。また、この区間から出土した遺物量は、遺物箱30箱以上に達しており、比較的短期間の集落跡と考えられるものの、該期の遺跡としては規模、遺構分布密度とも松任地域では有数の遺跡と推定される。調査幅が僅か２ｍのため、竪穴については遺構を全掘できず土坑等を誤認している恐れはあるが、積極的に推定した結果、検出遺構は竪穴10基、土坑約30基、溝４条に達した。また、Ａ－115付近からＡ－140付近にかけて広がる、周囲より最高50ｃｍ程度低い鞍部の遺物包含層からは集中的に該期の土器が出土した。東西方向の集落の広がりについては、本調査区の西約140ｍで南北方向に平行して発掘調査した昭和62年度調査区では確認されなかったが、東部の状況等については不明な部分が多い。

Ａ－341以南では調査区の各所に基盤としての礫層が存在する。また、一部では礫で埋め立てられた河道も確認された。この礫層は水田床土直下の浅い位置にある区域もある一方、やや低位で黒色粘土層がその上に数十ｃｍ堆積した区域もみられる。同様にＡ－74以北でも耕土直下に礫層が存在し、ともに弥生時代の遺構は全く確認されず、出土遺物も摩滅した土器細片数点にすぎなかった。これらの礫層のすべてが本遺跡形成前のものとは確定できなかったが、調査区域の土層観察では明らかに後世の氾濫とわかる箇所は確認されなかった。本集落の遺構は礫層の上に数十ｃｍ堆積した黄褐色のやや粘質の細砂層上面を掘り込み、一部の深い遺構は礫面を貫いている。また、明治時代以降の耕地整理により生じた水田床土と遺構面の間には、一見自然堆積層と推測される黒色粘砂層ないし黒褐色粘砂層が存在するが、遺構の多くが本層によって撹乱ないし削平されており、近世以前においても整地作業がかなり活発におこなわれたことを示している。

現在、本遺跡付近は南から北へ若干傾斜した水田地帯と化したが、かつては礫原、旧河道に伴う低湿地、集落の立地する微高地が網状に交錯する扇状地末端の複雑な地形であったことがうかがわれる。近年、松任市域で集中的に行われたほ場整備事業に係る分布調査、発掘調査資料の集積によってかなり広域的な古地形と遺跡分布の復原が可能となっている。

２．Ｂ調査区（竹松Ｄ遺跡）の概要

石川中央広域農道北側路肩擁壁を起点（Ｂ－０）としＢ－14から真北に向かい延長183ｍ、幅２ｍにわたって発掘調査を行った結果、古墳時代前期の集落を形成する各遺構がＢ－30～110にかけて約80ｍにわたって分布していることが確認された。集落跡はＡ調査区とほぼ同様に黄褐色のやや粘質の細砂層を基盤として立地している。調査区南端付近では礫原が確認されたが、北部は緩やかに傾斜し、礫層上面に腐食物を多く含む黒褐色粘砂層が堆積している。



第25図　昭和63年度調査区位置図

柱穴群、土坑、溝等の遺構を検出したが、竪穴と確認されたものはなかった。また、A調査区とは明らかに時期を異にしており、遺跡としては独立していると考えられる。

第2節　遺　　構

1．A調査区（竹松C遺跡）の遺構

ＳＩ－Ａ１（第27図、図版17）

A－102～107に位置し、平面形が方形を呈する竪穴と考えられる。東隅付近の一部を検出したが、規模の推定は困難である。検出面から床面までは５～15 cmと浅く、壁の遺存度は不良である。幅50 cm前後、深さ10 cm前後の浅い壁溝が巡り、その中には径20～30 cm、深さ10 cm程度の小穴が穿たれている。床面の遺物はなく、遺構内にほぼ均一に堆積した暗褐色粘砂層中から少量の土器片が出土した。

ＳＩ－Ａ２（第29図、図版18）

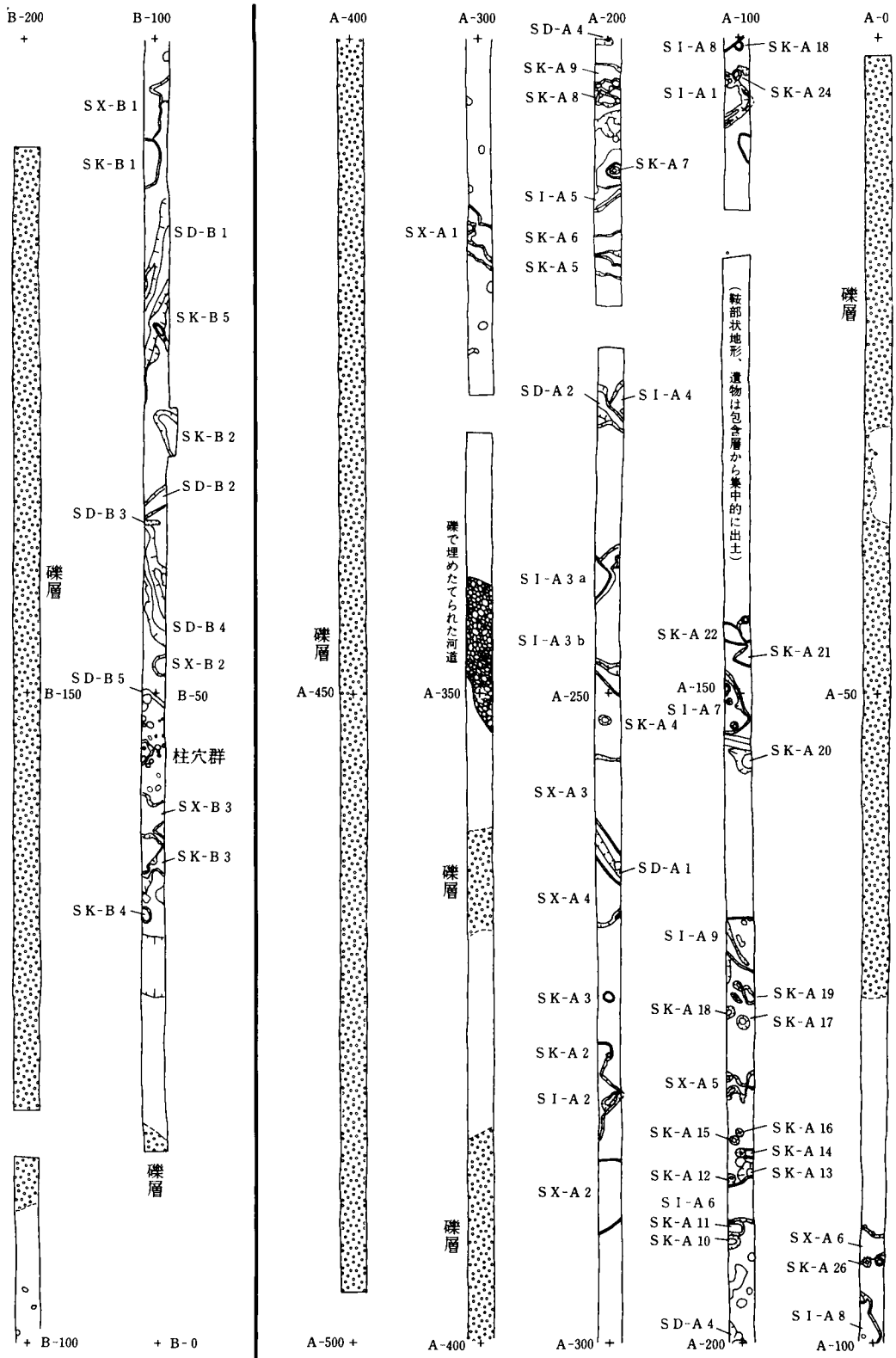
A－279～282に位置し、ＳＫ－Ａ２等と複合している。平面形が方形を呈する竪穴と考えられる。東隅付近の一部を検出したのみであり、規模の推定は困難である。検出面から床面までは10～15 cmと浅く、壁溝および柱穴は確認されなかった。床面のまとまった遺物はなく、遺構内にほぼ均一に堆積した灰褐色粘土層中から少量の土器片や円礫が出土した。ＳＫ－Ａ２等との新古関係については覆土が酷似していたために確認できなかった。

ＳＩ－Ａ３ａ・３ｂ（第28図、図版19）

A－238～249に位置し、２基以上の竪穴が複合していると考えられる。調査幅が２ｍと狭いために竪穴と推定したものは２基であるが詳細は不明である。遺構の切り合いではＳＩ－Ａ３ａが新しいが、双方の時期差はほとんど無いものと考えられる。

ＳＩ－Ａ３ａはA－239.5～243に位置し、東隅の一部を検出した。平面形は方形と考えられるが、発掘部分が少ないために確定できない。壁は床面から15～20 cm程度遺存し、壁溝、柱穴は調査区域内では検出されなかった。床面の遺物はなく、汚れた暗褐色粘砂からなる覆土から土器片等が出土した。また、覆土には径10～20 cm程度の円礫がかなり混入している。

ＳＩ－Ａ３ｂは遺構検出段階ではA－238.6～240付近で検出した幅20 cm前後、深さ10 cm弱の浅い溝と、A－247.8～249.1付近で検出した壁を対応させて床面の検出作業を行った。その結果、標高7.75～7.80 m付近で壁溝と床面の一部を確認したが、竪穴中央部の大部分では明瞭な床面は確認できなかった。そのためさらに発掘を進めたところ、さらに約20 cm下部でひとまわり小さな床面を検出した。断面等の観察の結果、これは当初の床面であり、上部のものは拡張後の床の可能性が高いと判断し、当初の床面の精査を行ったが壁溝、柱穴等は検出されなかった。遺構番号を付すにあたり、本報告ではＳＩ－Ａ３ｂは当初の床面に対応する竪穴を示すこととした。これは拡張後と考えられる上位の床面が不明瞭であり、かつ調査区域が狭小であったことや、遺物整理段階での各個体の接合状況は上部については拡張に伴う整地によって下部の遺物と接合する傾向が少なくなかったことによる。遺物は当初の床面では検出されなかったが、その覆土から土器



(B 調 査 区)　　(A 調 査 区)

第 26 図　昭和 63 年度調査区全体図 (S = 1／500)

片が出土し、これらについてはＳＩ－Ａ３ｂ下部とした。また、比較的多量の土器片が出土した拡張後の床面とその覆土とした部分についてはＳＩ－Ａ３ｂ上部とし、必要なものについては取り上げ番号を付した。

ＳＩ－Ａ３ｂの規模は確定できないものの、平面形を方形と想定した場合、図上では一辺７ｍ程度、ＳＩ－Ａ３ａと主軸方位はほぼ同一と推定される。

ＳＩ－Ａ４（第28図、図版20）

Ａ－226～230付近に位置する。ＳＤ－Ａ２と重複しているために不明な部分もあって、厳密には土坑とすべきではあるが、限定された発掘調査区域のなかで遺構の性格を積極的に評価するために、本報告では一応竪穴と記載した。南東隅付近の一部と考えられるが、規模の推定は不可能である。検出面から床面までは５～15 cmと浅く、検出面から床面までの深さは約10 cmであり、壁溝および柱穴と確定できるものは検出されなかった。覆土上部から土器片が出土している。なお、ＳＤ－Ａ２との新古関係は断面観察によっても確定できなかったものの、本遺構が古い印象を得た。

ＳＩ－Ａ５（第28図、図版20）

Ａ－205.5～213.4に位置する。Ａ－211.4～213.3で比較的明瞭な形で検出した南東壁と壁溝、およびＡ－205.5～206.4で検出した北西壁と推定されるやや緩やかな落ち込みの間を竪穴と判断した。南東壁は床面から約20 cmの高さまで遺存し、幅25 cm前後、深さ10 cm弱のＵ字状の壁溝を伴う。竪穴内部で検出したＳＫ－Ａ７は柱穴の可能性もある。覆土は炭粒を含んだ淡褐色粘砂であり、調査区西壁寄りの床面の一部には貼り床とみられる灰白色粘土の混入した淡灰色粘砂層が検出された。床面の遺物はほとんどみられなかった。

ＳＩ－Ａ６（第28図、図版21）

Ａ－187～190.8に位置する竪穴で、調査区東半分に高さ約10 cmの西壁と床面からの深さ30～40 cmの柱穴を２個検出した。南東隅は他の遺構と重複し検出できなかったが、平面形はやや隅丸の方形で南北軸で４ｍ前後の小規模な竪穴と推定され、覆土から少量の土器片が出土した。

ＳＩ－Ａ７（第27図、図版21）

Ａ－148.4～153.3に位置する竪穴で、東壁付近の一部を検出した。壁は床面から20 cm強まで遺存し、東壁部分では幅20～50 cm、深さ５ cm程度の緩やかな溝を伴うが壁溝かは未確定である。また、床面で小土坑が検出された。

ＳＩ－Ａ８（第27図、図版17）

Ａ－95.9～101.2に位置する竪穴で、東隅付近の一部を検出したが壁溝、柱穴とも確認されなかった。壁は15～20 cmの高さまで遺存している。覆土から少量の土器片が出土した。

ＳＩ－Ａ９（第28図、図版22）

Ａ－167～171.5に位置する。竪穴の北部は近世の河道で切られている。壁は床面から15 cm前後まで遺存するが壁溝は確認されなかった。内部には幅20～40 cm、深さ10 cm弱のＵ字状の溝がみられるが性格は不明である。床面から約５ cm程度上部から検出面にかけては部分的に炭化物が出土し、覆土も他の竪穴と異なり焼土・炭化物を多く含んだ黄褐色粘砂であって、さらに調査区

西壁断面図に示したように竪穴中央部の覆土上面がいびつに盛り上がっていることからみて焼失住居とみてほぼ間違いないものといえる。

ＳＫ－Ａ２（第29図、図版18）

Ａ－275.6～280にかけて位置する不定形な土坑である。底面はほぼ平坦で深さ20 cm弱を測る。ＳＩ－Ａ２と重複するが新古関係は確認できなかった。覆土から少量の土器片が出土した。

ＳＫ－Ａ３（第29図、図版23）

Ａ－272.7～273.6に位置する。ほぼ円形の土坑で検出面からの深さは５ cm強と浅いものの、出土土器は上部が削られた状態を示している。本来の掘り込み面はかなり上位で後世の整地等により削平されており、Ａ調査区のかなりの遺構についても同様である。

ＳＫ－Ａ４（第29図、図版23）

Ａ－251.6～252.5に位置する。歪んだ円形の土坑である。検出面から最深部までの深さは約20 cm、覆土から若干の土器片が出土した。

ＳＫ－Ａ５・６（第28図、図版24）

Ａ－214.7～218.5に並んで位置する。溝の可能性もある。底面の中央部でＳＫ－Ａ５は20 cm強、ＳＫ－Ａ６では20 cm弱の深さを測る。双方の覆土はほぼ同一であり、上部は炭粒を含んだ淡褐色粘砂で下部には炭粒は含まれない。円礫と土器片が混在した状態で出土している。

ＳＫ－Ａ７（第28図、図版20）

Ａ－209.5～210.8に位置し、ＳＩ－Ａ５の床面で検出され、平面形は歪んだ円形を呈する。２段に掘り込まれ、中央部で深さ20 cm強を測る。ＳＩ－Ａ５の柱穴の可能性もある。

ＳＫ－Ａ９（第28図、図版20）

Ａ－201.9～204.3に位置する。溝の可能性もある。幅1.7～2.3 m、深さ20 cm弱で底面は比較的平坦である。覆土中位から少量の土器片が出土した。

ＳＫ－Ａ15・16（第28図、図版24）

Ａ－183.3～184.6に位置する小土坑である。ＳＫ－Ａ15は深さ約30 cm、径75～85 cmの歪んだ円形、ＳＫ－Ａ16は深さ20 cm強、径約60 cmの円形を呈し、共に覆土上部から土器片が出土した。

ＳＫ－Ａ18（第28図、図版25）

Ａ－174～175に位置する小土坑であり、西部は未掘である。検出面からの深さは25 cmを測る。

ＳＫ－Ａ19ａ・19ｂ・19ｃ（第28図、図版25）

Ａ－172～173.9に位置する不定形な小土坑である。後世の削平を受けているが、深さはそれぞれ約10 cm、15 cm、10 cm強と浅い。いずれも覆土上面から削平によって上部を欠失した土器がまとまって出土した。

ＳＫ－Ａ20ａ・20ｂ（第27図、図版26）

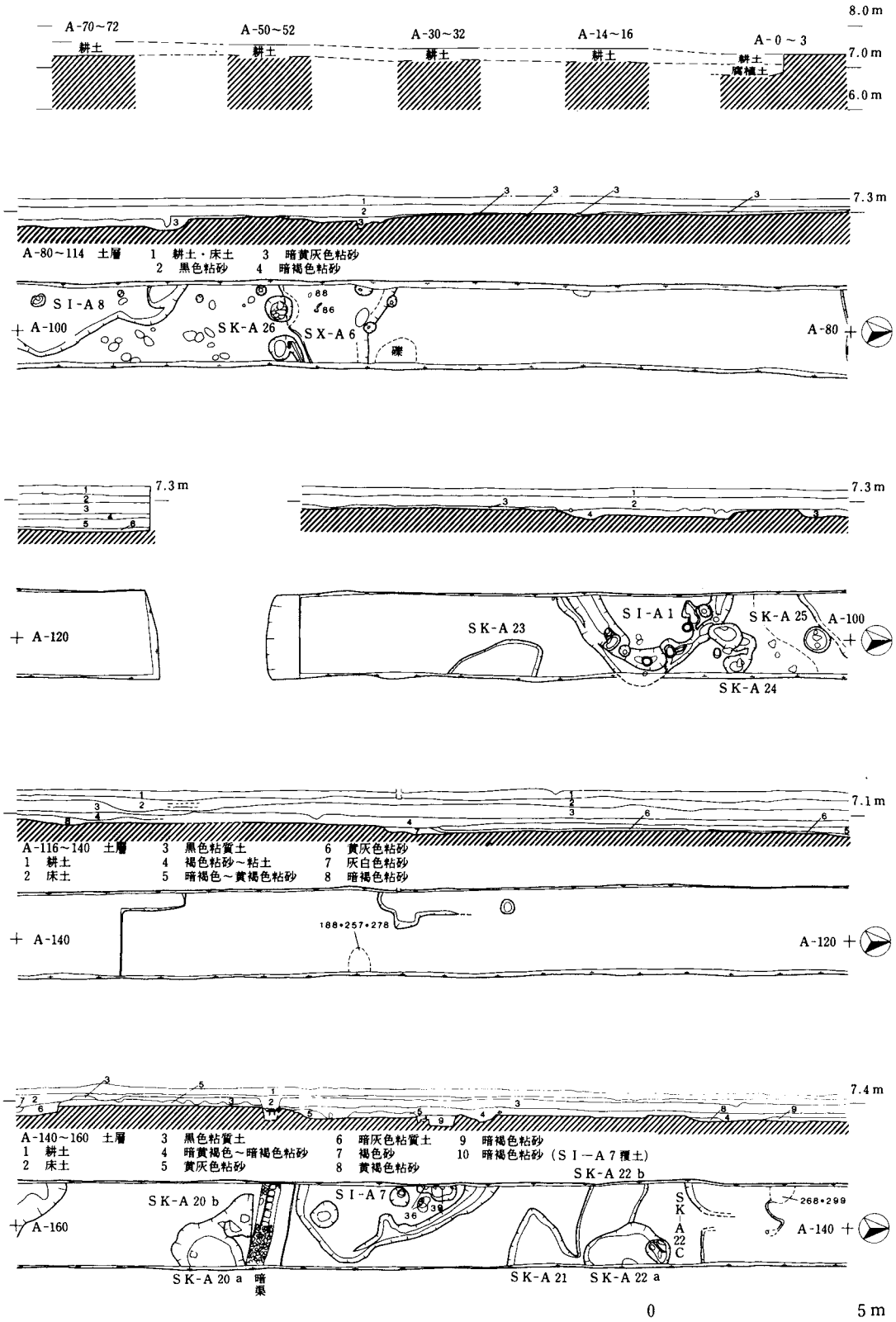
Ａ－154～156.3に位置する。ＳＫ－Ａ20ａは径1.4～２ mと推定される楕円形を呈し、底面は比較的平坦である。比較的大形の土器片が出土した。

ＳＫ－Ａ25（第27図、図版17）

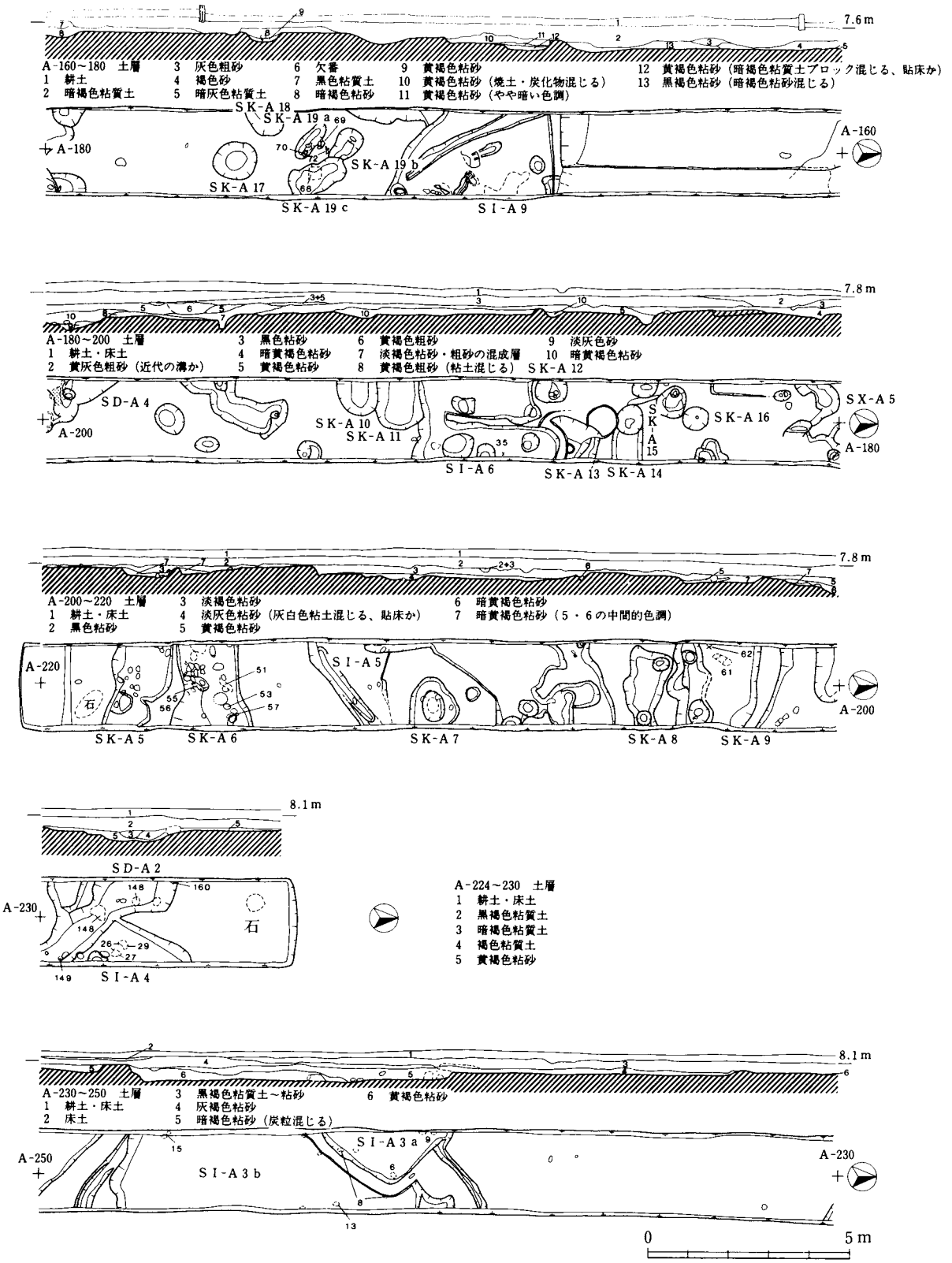
Ａ－100.4～101に位置する小土坑であり、平面形は径60 cm強のほぼ円形、深さ約５cm と浅い。

遺構番号	遺構名	位置	発掘範囲	備考	掲載土器番号
ＳＩ－Ａ１	Ａ－１号竪穴	A-102～107	部分掘		1
ＳＩ－Ａ２	Ａ－２号竪穴	A-279～282	部分掘		2～ 5
ＳＩ－Ａ３ａ	Ａ－３ａ号竪穴	A-239～243	部分掘		6～ 9
ＳＩ－Ａ３ｂ	Ａ－３ｂ号竪穴	A-238～249	部分掘		10～ 25
ＳＩ－Ａ４	Ａ－４号竪穴	A-226～230	部分掘		26～ 29
ＳＩ－Ａ５	Ａ－５号竪穴	A-205～213	部分掘		30～ 34
ＳＩ－Ａ６	Ａ－６号竪穴	A-187～190	部分掘		35
ＳＩ－Ａ７	Ａ－７号竪穴	A-148～153	部分掘		36～ 42
ＳＩ－Ａ８	Ａ－８号竪穴	A- 95～101	部分掘		
ＳＩ－Ａ９	Ａ－９号竪穴	A-167～171	部分掘		
ＳＫ－Ａ１	Ａ－１号土坑	A-262～263	部分掘	ＳＤ－Ａ１より新	
ＳＫ－Ａ２	Ａ－２号土坑	A-275～280	部分掘		43～ 45
ＳＫ－Ａ３	Ａ－３号土坑	A-272～273	全掘		46～ 48
ＳＫ－Ａ４	Ａ－４号土坑	A-251～252	全掘		49
ＳＫ－Ａ５	Ａ－５号土坑	A-216～218	部分掘		50
ＳＫ－Ａ６	Ａ－６号土坑	A-215～216	部分掘		51～ 59
ＳＫ－Ａ７	Ａ－７号土坑	A-209～211	部分掘		60
ＳＫ－Ａ８	Ａ－８号土坑	A-204～205	部分掘	長さ1.8m以上、幅0.5～1.1m、深さ15cm	
ＳＫ－Ａ９	Ａ－９号土坑	A-201～204	部分掘		61～ 63
ＳＫ－Ａ10	Ａ－10号土坑	A-191～193	部分掘	幅１m以上、深さ20cm 弱	
ＳＫ－Ａ11	Ａ－11号土坑	A-190～191	部分掘	幅1.1m以上、深さ15cm 強	
ＳＫ－Ａ12	Ａ－12号土坑	A-186～187	部分掘	径0.8m程度、深さ15cm	
ＳＫ－Ａ13	Ａ－13号土坑	A-186～187	部分掘	ＳＩ－Ａ６より古	
ＳＫ－Ａ14	Ａ－14号土坑	A-184～185	部分掘	深さ15～10cm	
ＳＫ－Ａ15	Ａ－15号土坑	A-183～184	全掘		64
ＳＫ－Ａ16	Ａ－16号土坑	A-183	全掘		65、 66
ＳＫ－Ａ17	Ａ－17号土坑	A-174～175	全掘	径1.1m、深さ20cm	
ＳＫ－Ａ18	Ａ－18号土坑	A-174～175	部分掘		67
ＳＫ－Ａ19ａ	Ａ－19ａ号土坑	A-172～173	全掘		69、 70
ＳＫ－Ａ19ｂ	Ａ－19ｂ号土坑	A-172	全掘		72
ＳＫ－Ａ19ｃ	Ａ－19ｃ号土坑	A-172～173	全掘		68、 71
ＳＫ－Ａ20ａ	Ａ－20ａ号土坑	A-154～155	部分掘		73～ 75
ＳＫ－Ａ20ｂ	Ａ－20ｂ号土坑	A-154～156	部分掘		
ＳＫ－Ａ21	Ａ－21号土坑	A-146～148	部分掘	深さ10cm 弱	
ＳＫ－Ａ22ａ	Ａ－22ａ号土坑	A-144～146	部分掘	深さ10cm 前後、ＳＫ－Ａ22ｂより新	
ＳＫ－Ａ22ｂ	Ａ－22ｂ号土坑	A-144～146	部分掘	深さ10cm 弱	
ＳＫ－Ａ22ｃ	Ａ－22ｃ号土坑	A-144	部分掘	深さ20cm 弱、小穴	
ＳＫ－Ａ23	Ａ－23号土坑	A-107～109	部分掘	深さ５cm 強	
ＳＫ－Ａ24	Ａ－24号土坑	A-102	部分掘	小穴、深さ15cm 強	
ＳＫ－Ａ25	Ａ－25号土坑	A-100	全掘		76
ＳＫ－Ａ26	Ａ－26号土坑	A- 93～ 94	全掘	径0.6m強、深さ10cm 弱、覆土に礫多	
ＳＸ－Ａ１		A-312～317	部分掘		
ＳＸ－Ａ２		A-285～291	部分掘		77
ＳＸ－Ａ３		A-257～262	部分掘		90～129
ＳＸ－Ａ４		A-262～268	部分掘		78～ 84
ＳＸ－Ａ５		A-179～182	部分掘		130～136
ＳＸ－Ａ６		A- 90～ 93	部分掘		85～ 89
ＳＤ－Ａ１	Ａ－１号溝	A-260～264	部分掘		137
ＳＤ－Ａ２	Ａ－２号溝	A-227～230	部分掘	ＳＩ-Ａ４より新	146～150
ＳＤ－Ａ３	Ａ－３号溝	A-254～255	部分掘	幅0.2～0.4m、深さ15cm	
ＳＤ－Ａ４	Ａ－４号溝	A-198～201	部分掘		138～145
	木製暗渠	A-154	部分掘		
	近世河道	A-159～167	部分掘		

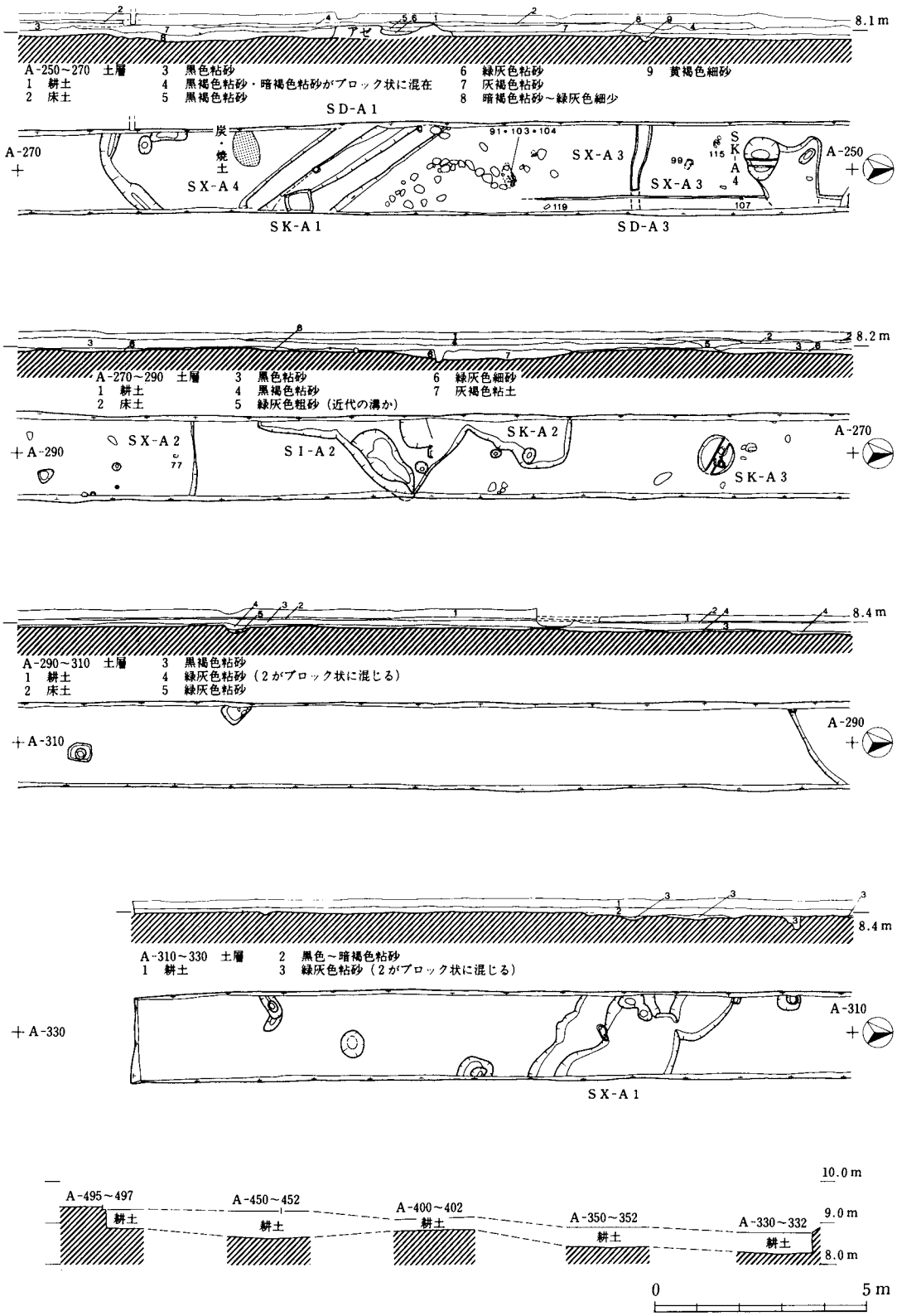
第４表　昭和63年度Ａ調査区遺構一覧表



第 27 図　A調査区遺溝実測図(1)　(S＝1/150)



第 28 図　A 調査区遺構実測図(2)　(S＝1/150)



第29図　A調査区遺構実測図(3)　(S＝1/150)

覆土には円礫が混入している。

ＳＸ－Ａ１（第29図、図版27）

Ａ－312.8～317.7に位置する。浅い土坑と溝が数基複合しているが、後世の削平が著しいために各遺構を区分しえない。検出面から底面までは５～10 cm程度であり、土器片が少量出土した。

ＳＸ－Ａ２（第29図）

Ａ－285.7～291.5に位置する。深さ５ cm前後で底面は平坦である。大形の遺構であるが、後世の削平が著しくその性格は不明である。土器片が少量出土している。

ＳＸ－Ａ３・Ａ４（第29図、図版28）

A'－257～268に位置する。ＳＸ－Ａ３・Ａ４についてはＡ－257.5付近で60～90 cmの楕円形の炭と焼土面を検出し竪穴とも考えられたが、Ｓ－268.2付近の壁の立ち上がりが極めて緩やかで確定できなかったことと調査区北側で壁の立ち上がりがまったく存在しなかったため遺構の性格を確認できなかった。このためＳＤ－Ａ１以南をＳＸ－Ａ４、以北をＳＸ－Ａ３と便宜的に区分して遺物の取り上げを行った。なお、ＳＸ－Ａ３では径20 cm以上の円礫が多数出土し、それらと混在して土器片が比較的多く出土した。

ＳＸ－Ａ５（第28図、図版29）

Ａ－179～182付近の不定形な小土坑群である。かなりの数があると思われるが、複雑に重複し覆土も同一なために識別できなかった。土器等を意図的に埋納した遺構は認められなかった。

ＳＸ－Ａ６（第27図、図版27）

Ａ－90.8～93.7付近の浅いくぼみである。中央部に向かって緩やかに落ち込んでおり、最深部で検出面から10 cm強を測る。中央部付近から少量の土器片が出土した。

ＳＤ－Ａ１（第29図、図版22）

Ａ－260～264付近を北西方向に延びる小規模な溝であり、幅40～60 cm、深さ約20 cmを測る。かなり上部から掘り込まれており、明らかにＳＸ－Ａ３・Ａ４よりも後出である。弥生時代の遺構ではない。

ＳＤ－Ａ２（第28図、図版20）

Ａ－227～231付近を北西方向に延び、幅70～120 cm、深さ約30 cmを測る小規模な溝である。ＳＩ－Ａ４を切って掘り込まれている。底面から覆土上部まで土器片が一定量出土した。

ＳＤ－Ａ４（第28図、図版29）

Ａ－198～201付近で一部を検出した。蛇行して北流する溝の一部と推定される。調査区域の最深部で約40 cmを測る。

その他の遺構（第27図、図版26）

Ａ－154付近では床土層から掘削したと見られる木製暗渠が出土した。また、Ａ－159～Ａ－167付近では東西に延びる近世の河道を検出した。

２．Ｂ調査区（竹松Ｄ遺跡）の遺構

ＳＫ－Ｂ１（第30図、図版31）

B－88.6～92.4付近に位置する土坑であり、西半分は未掘ではあるが長さ４ｍ、幅２ｍを越える大形の整った土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さ20 cm前後を測るが、本来は30 cm程度あったものと推定される。覆土は付近の遺物包含層と同質の黒褐色粘砂で、一部の底面に汚れた黄褐色細砂が堆積している。遺物はほぼ全域から相当量の土師器片と若干の木製品が出土した。

ＳＫ－Ｂ２（第30図、図版32）

Ｂ－68～71.6付近に位置する土坑であり、長さは４ｍを越え、ＳＫ－Ｂ１と並ぶ大形の整った土坑である。底面は丸みを帯び、検出面からの深さは最深部で40 cm弱に達する。遺物量はＳＫ－Ｂ１よりは少ないが、覆土中位から土師器片と長径約30 cmの粘土塊が出土した。

ＳＤ－Ｂ１（第30図、図版33）

Ｂ－74～88付近を北北東に延びる溝である。幅２～2.3ｍ、横断面は緩やかなＶ字状を呈し、最深部で30 cm弱を測る。底面付近は汚れた黄褐色細砂ないし粘砂が堆積し、上部は遺物包含層と同質土である。遺物は土器片が少量である。

ＳＤ－Ｂ２（第30図、図版33）

Ｂ－63～66付近を北東に延びる溝である。幅0.6～0.8ｍ、横断面はＵ字状を呈し、最深部で20 cm強を測る。底面付近は汚れた黄褐色砂が堆積し、上部の覆土は遺物包含層と同質である。土器細片と円礫が混在して出土した。

ＳＤ－Ｂ４（第30図、図版34）

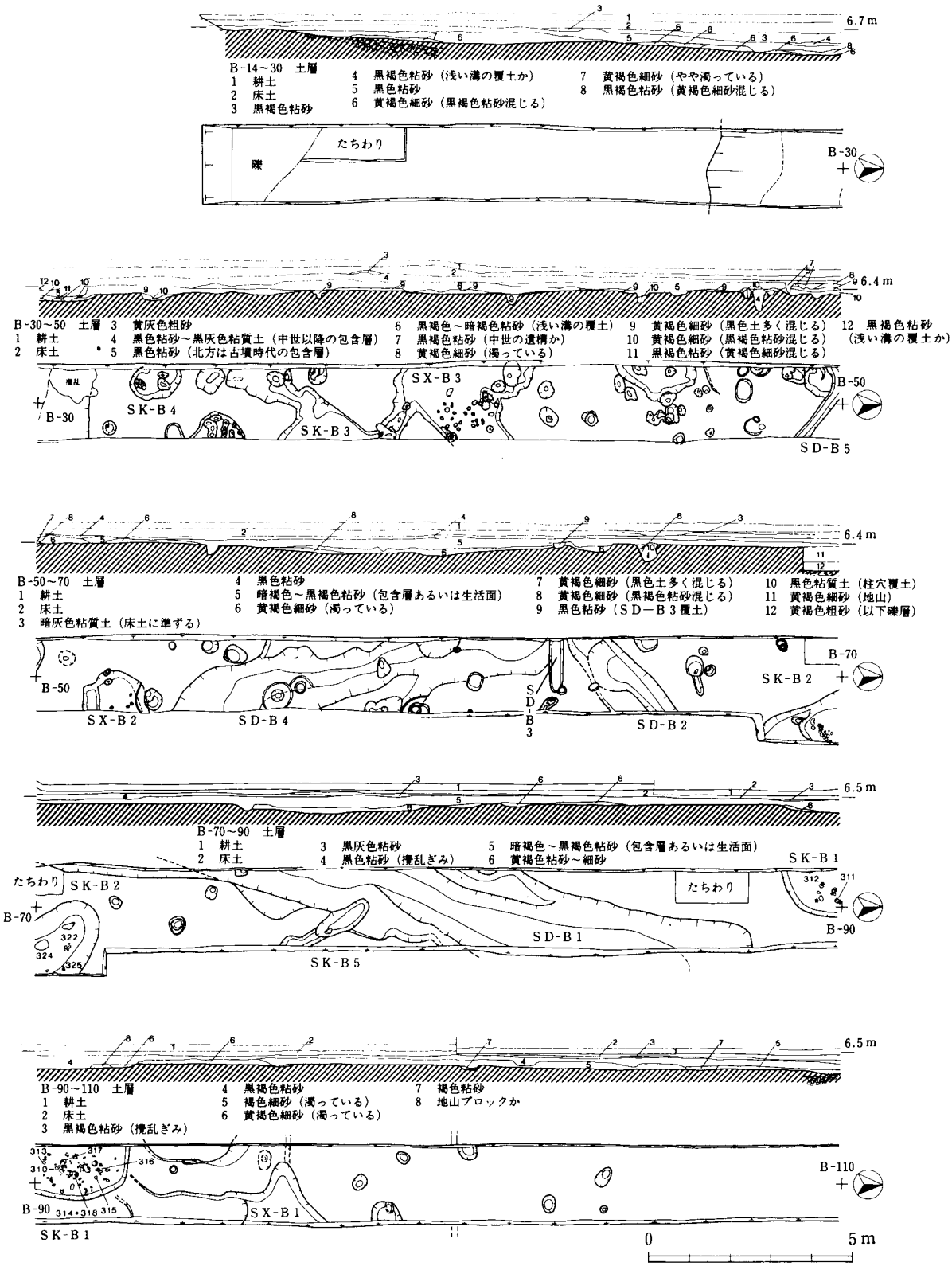
Ｂ－52～63付近を北北西に延びる溝である。幅２ｍ以上、横断面はＳＤ－Ｂ１に類似し、最深部で20 cm強を測る。底面付近は汚れた黄褐色砂が堆積し、上部の覆土は遺物包含層と同質である。本溝は約10ｍ北側に所在するＳＤ－Ｂ１に続く可能性もある。

ＳＤ－Ｂ５（第30図、図版35）

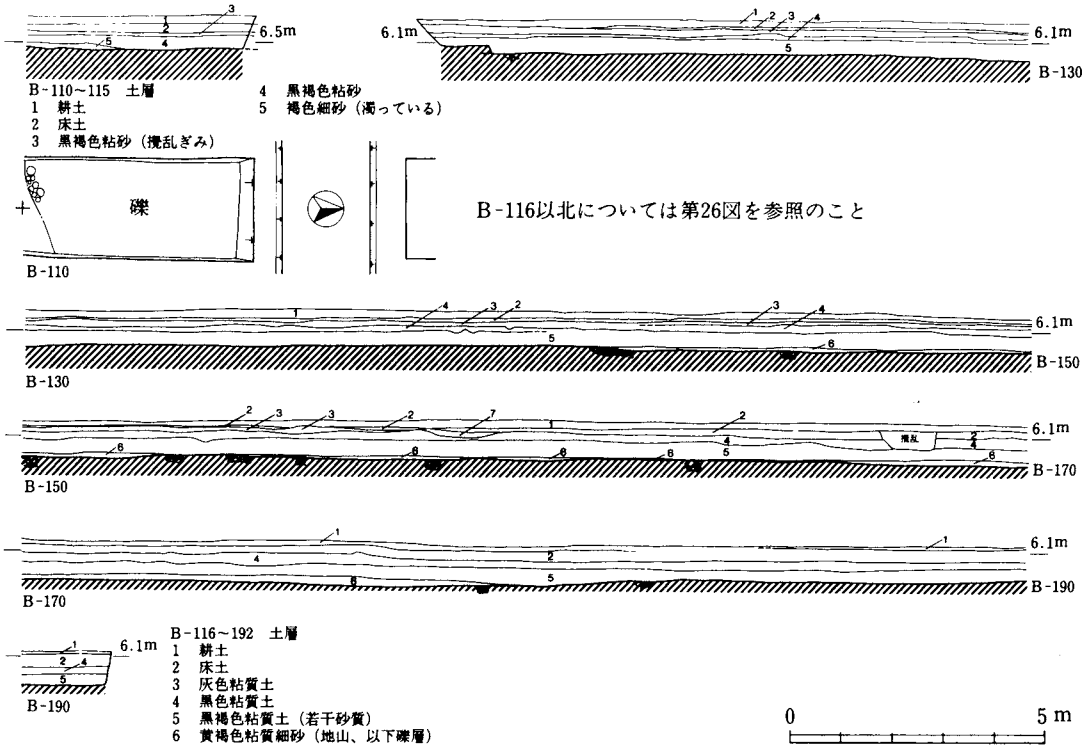
Ｂ－48～50付近に位置する小規模な溝である。幅25～40 cm、深さ15 cm前後を測る。本溝の南

遺構番号	遺構名	位置	発掘範囲	備考	掲載土器番号
ＳＫ－Ｂ１	Ｂ－１号土坑	B-88～92	部分掘		309～318
ＳＫ－Ｂ２	Ｂ－２号土坑	B-68～71	部分掘		322～327
ＳＫ－Ｂ３	Ｂ－３号土坑	B-36～38	部分掘	深さ15cm 前後	
ＳＫ－Ｂ４	Ｂ－４号土坑	B-32～33	部分掘	長さ1.3m以上、幅約１m、深さ0.2m	
ＳＫ－Ｂ５	Ｂ－５号土坑	B-77～78	部分掘	長さ1.5m、幅0.7m、深さ20cm 強	
ＳＸ－Ｂ２		B-51～52	部分掘	深さ５cm 前後	
ＳＸ－Ｂ３		B-38～42	部分掘	深さ５～10cm、底面に小穴多数	
ＳＤ－Ｂ１	Ｂ－１号溝	B-74～88	部分掘		319、320
ＳＤ－Ｂ２	Ｂ－２号溝	B-63～66	部分掘		
ＳＤ－Ｂ３	Ｂ－３号溝	B-62～63	部分掘	幅0.3m、深さ15cm、ＳＤ－Ｂ２、４より新	
ＳＤ－Ｂ４	Ｂ－４号溝	B-52～63	部分掘		
ＳＤ－Ｂ５	Ｂ－５号溝	B-48～50	部分掘		321

第５表　昭和63年度Ｂ調査区遺構一覧表



第 30 図　B 調査区遺構実測図(1)　(S＝1/150)



第31図　B調査区遺構実測図(2)　(S＝1/150)

側には柱根が残る柱穴群を検出しており、竪穴あるいは掘建柱建物に付属する溝と考えられる。

第3節　遺　　物

1．A調査区（竹松C遺跡）の遺物

S I－A 1（第32図 1）

1はやや大型の甕形土器である。無文の有段口縁を呈するが、その発達は弱く、くの字口縁に粘土を貼り付けるだけでも形成が可能な程度である。口縁内面は粗いヘラミガキを行う。

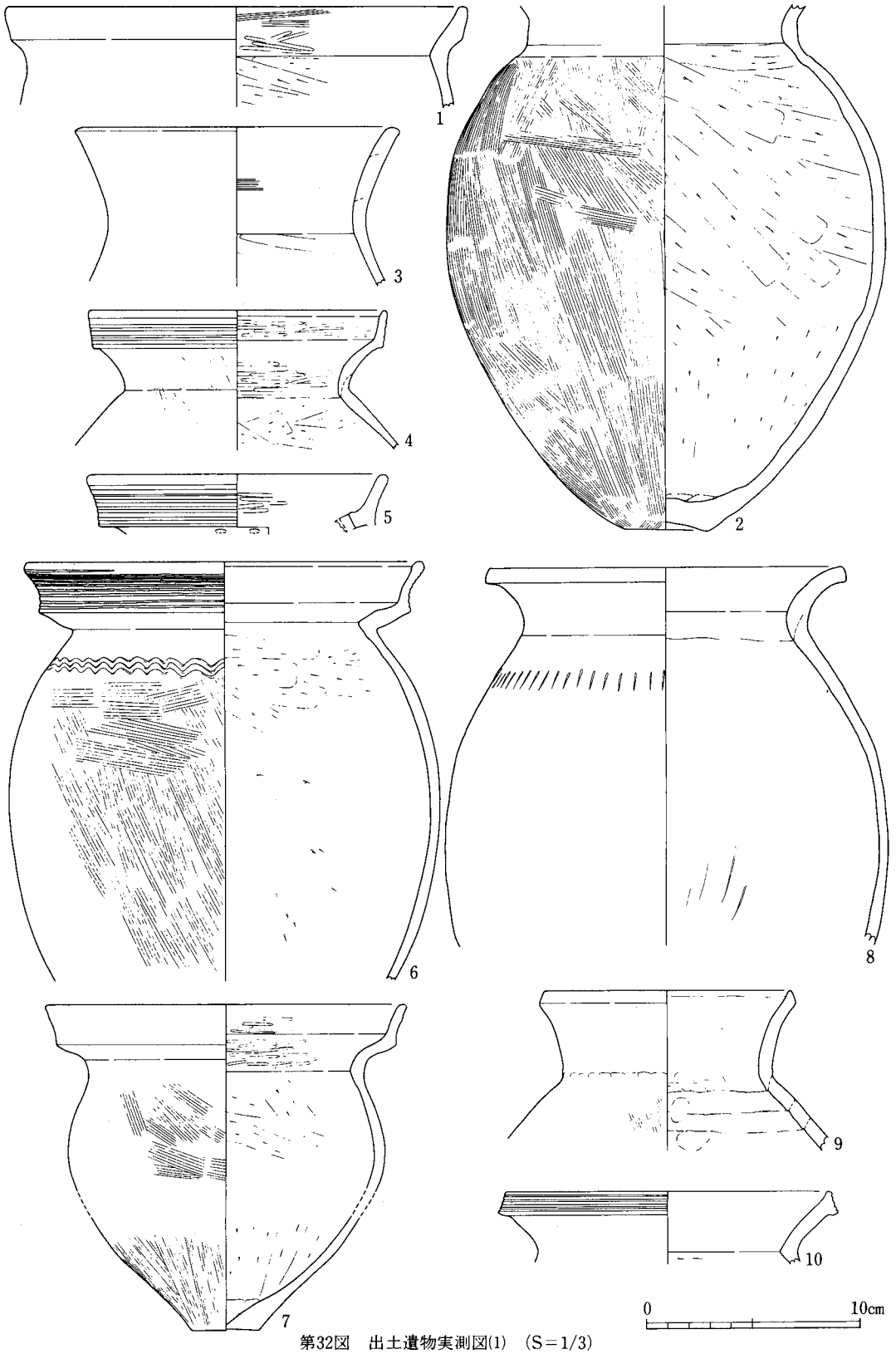
S I－A 2（第32図 2～5）

2は口縁部を欠損するが、甕形土器であろう。あまり胴が張らない卵形の器型で、内面にヘラケズリ調整を行うが器壁は厚い。3～5は壺形土器である。3はくの字に弱く屈曲する口縁の広口壺であり、内面頸部以下にはヘラケズリ調整を行うようである。4は有段口縁の広口壺であり、ほぼ直立する口縁帯に擬凹線を持つ。頸部以下は内面のヘラケズリ調整を行い、薄手である。5も擬凹線を持つ有段口縁を呈するが、4と比して厚手で、外傾してひらくタイプである。頸部に、2個1対の紐穴と推定できる2穴を有し、焼成前に内面から穿ったと確認できた。

S I－A 3（第32図 6～10、第33図、第34図21～25）

S I－A 3 a（第32図 6～9）

6～8は甕形土器で、うち6・7は有段口縁、8はくの字口縁を呈するものである。6は、擬



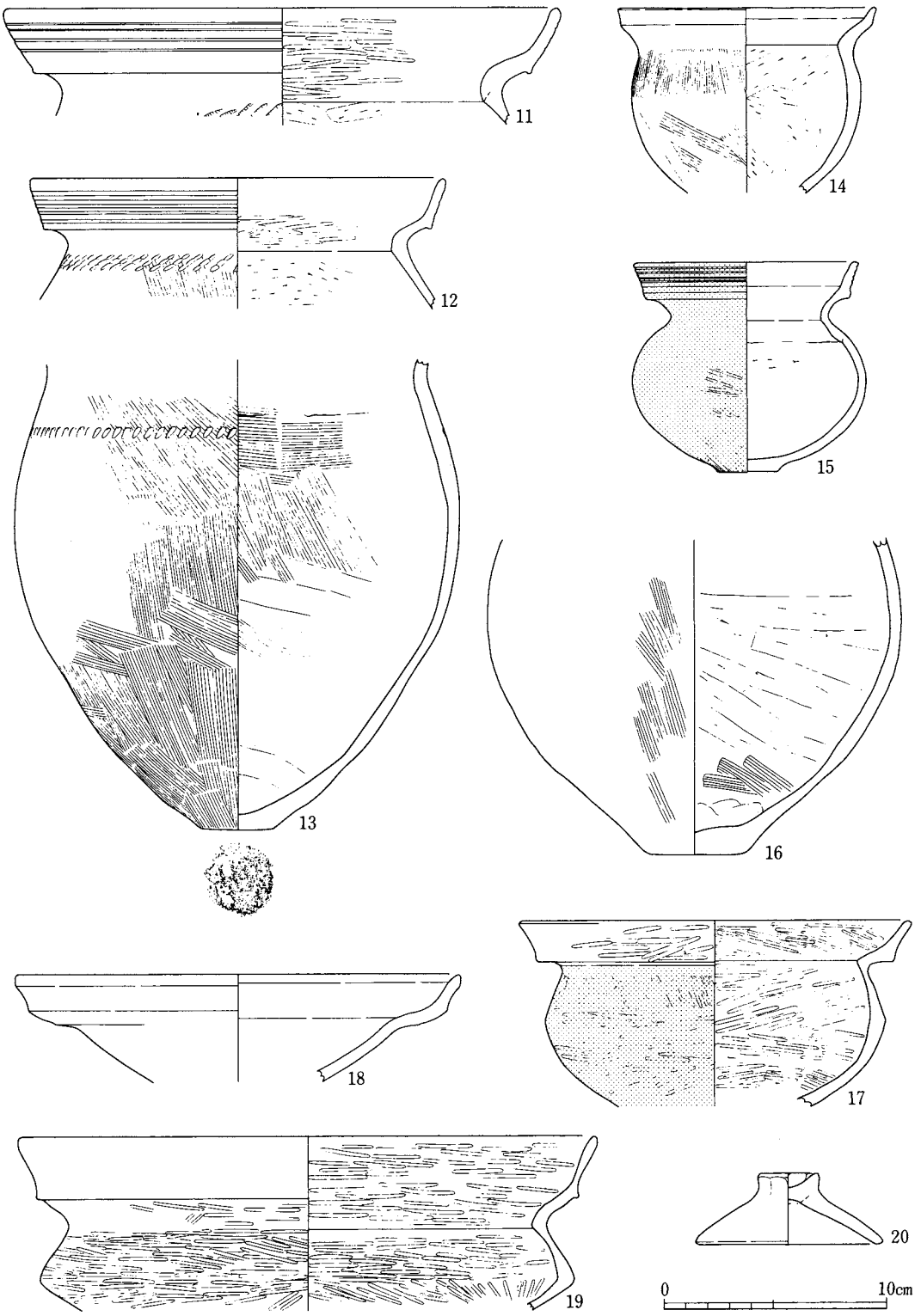
第32図　出土遺物実測図(1)　(S＝1/3)

凹線を持ち外反して端を厚く丸く仕上げた口縁帯が、屈曲が強くて明確な頸部に付く。胴部があまり張り出さないわりに器高が大きい器型で、内面のヘラケズリ調整で器壁を薄く仕上げる。肩部外面には櫛状具による3条の波状文を施しており、そこから上はヨコナデ、下がハケと調整が分かれる。7は口径のわりに器高が小さく、容量も小さい。直線的にひらく口縁帯は、内面にミガキ調整を行うなど、つくりが丁寧である。ＳＩ－Ａ３ｂ出土土器と接合する。8の口縁部は短いが外反し、端部に外面下がりの斜めの面をとる。全体に摩滅していて器面調整は不明瞭だが、胴部内面はケズリが確認できた。肩部には細く鋭いヘラ状具による連続刻みを行う。9は口径11.6cmを測るくの字口縁の広口壺であり、口縁端部は斜めに面をとる。各所で1次調整のハケが見えるほどの粗いミガキ、内面の頸部以下に残る継ぎ目や指頭痕など、雑なつくりである。

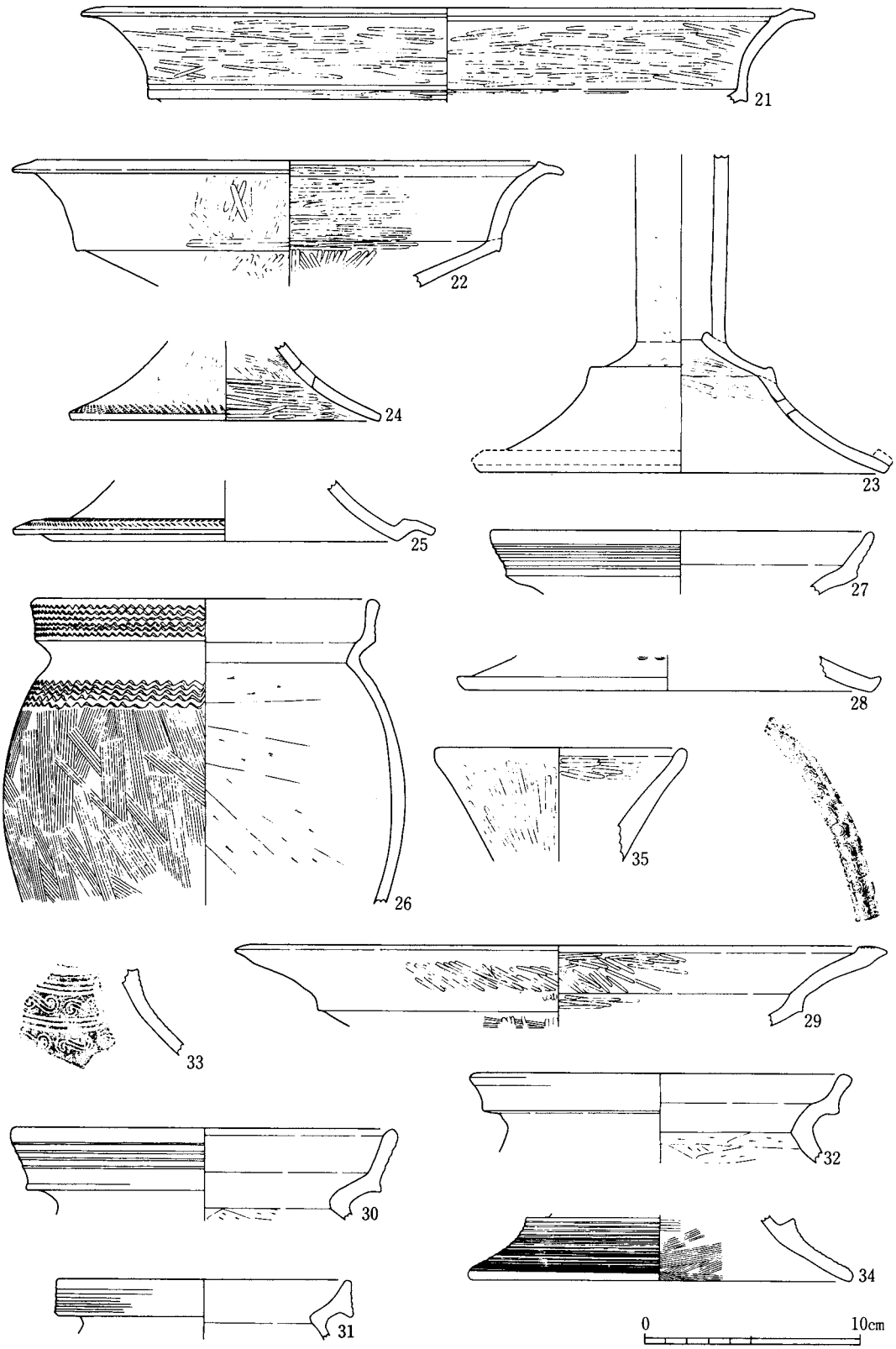
ＳＩ－Ａ３ｂ（第32図10、第33図、第34図21～25、第56図19）

第32図10・第33図12・14・17・19・23は上部出土、13・18・20・22・24・25は下部出土、15は両者が接合したもの、他は部位不明である。

第32図10・第33図11～14は甕形土器である。10は端部をわずかに上下に拡張した、擬凹線を持つ口縁部である。11・12は外傾する直線的な有段口縁、その内面にヨコナデと併用される雑なミガキ調整、頸部直下にハケ状具による連続斜行刻みを行う点で共通する。11は大型の口縁部で、重厚なつくりである。12は全体に薄手のつくりであり、頸部以下はヘラケズリが徹底して行われるようである。頸部直下の刻みは撚糸を押しつけたかのような痕跡である。13は口縁部を欠損しており、あまり張り出さない胴部と安定感のある平底からなる。厚手のつくりで、内外面ともハケ調整を行っており、肩部には太い棒状具による連続斜行刻みを持つ。底面には長さ6 mm、幅3 mmほどの窪みがあり、籾圧痕の可能性があろう。14は口径と器高がほぼ同じくらいになり、胴径がそれを下回る小型甕であろう。口縁は端部近くで短く立ち上がる。胴部は内面調整にヘラケズリを行っているが、厚手である。15・16は壺形土器である。15は擬凹線を持つ直線的な有段口縁、ほぼ球形の胴部、安定感のある平底を持つ小型壺であり、外面はミガキののち赤彩、内面はケズリを行っている。図上復元であり、確実な数値は底径の2.8 cmのみである。16は肩部から上を欠損している。17～19はいずれも有段口縁を持つ鉢形土器である。法量・器型は異なるが、外傾する口縁帯に強いヨコナデを加えて外反する感じに仕上げる点では共通している。17は頸部でほぼ水平に屈曲し、頸がほとんど伸びないうちに短い口縁帯が付く。最大径は口径にあるが、胴部中位もそれに迫るほど張り出す。外面は口縁部以外を赤彩し、塗り分けている。18は頸部が形成されず、口縁部の下方は急に丸みをもってすぼまる器型である。かなり摩滅している。19は大型鉢であり、17を偏平にした感じの器型であるが、頸部と口縁部により伸びがある。20は小型の蓋形土器で、直線的にひらく笠形の器型である。21～23は有段の坏部または脚部を持つ高坏形土器である。21は口径30 cmを超える大型品である。有段の口縁部は外反し、内面の端部近くで肥厚し段をつくり、さらに端では水平な面を取る。外面の口縁下端に沈線を1条施している。22は21より小径だが、坏の身は深い。外反する口縁は端部を水平方向に拡張し、内面を肥厚して外下がりの面を取っている。赤彩痕が部分的に残る。23は支柱から脚部であり、棒状の支柱に有段で大きく外反する脚が付く。脚端は粘土紐を凸帯状に貼り付けたものが剥離したと思われる。外面



第33図　出土遺物実測図(2)　(S＝1/3)



第34図　出土遺物実測図(3)　(S＝1/3)

はやや摩滅している。24・25は脚部であるが、おそらく高坏であろう。24は小型で、無段脚であろう。外反して広がり、端部は面取りしてその直上をハケ状具で連続して斜めに刻む。25は端を折り返してさらに拡張するものであり、それによって形成された面に細かいハケ状具による矢羽根状の連続刻みを行っている。その他の遺物では、グリーンタフの剝片が出土している。第56図19がそれで、重さ4.8gを測り、玉未製品と推定する。

ＳＩ－Ａ４（第34図26～29、第55図9）

26・27は甕形土器であり、どちらも中型で、有段口縁を持つもの。26はほぼ直立する口縁帯と肩部に、櫛状具で波状文を施す。肩部の波状文を境界として、そこから上はヨコナデ、下はハケと外面の調整は分かれる。27は短い口縁帯が外傾し、擬凹線を持つもので、全体に厚手で鋭さには欠ける。28は脚部でおそらく高坏の無段脚であろう。端部はわずかに折り返し、その少し手前ではスタンプ施文を行っている。29は高坏形土器の有段坏部であり、口径30 cm前後の大型品である。口縁部は大きく外反するもので、その端部は肥厚して水平方向に広く面を取り、渦状スタンプ文が施されている。土器以外では石製品が出土している。第55図９は軽石であり、所々擦痕らしき溝が走ったり、穴があいたりしている。

ＳＩ－Ａ５（第34図30～34）

30～32は甕形土器であり、うち31・32は貼床の下から出土したものである。30は外傾する直線的で重厚な有段口縁に、擬凹線を持つ。31は小型の甕で、断面三角形の一辺を口縁帯とする。実測図には表れないが、頸部以下は内面ヘラケズリ調整である。32は、短い口縁帯が外反し、端を太く丸くおさめる有段口縁を持つ。内面ヘラケズリ調整の頸部以下も含めて全体的に厚手のつくりである。33は高坏か器台の有段脚であろう。３条の沈線文帯と渦状スタンプ文帯を交互に巡らしている。34は器台の有段脚である。やや外反して大きく広がる口縁帯には、擬凹線が雑に施されたのちヘラミガキして仕上げられる。器壁はきわめて厚い。

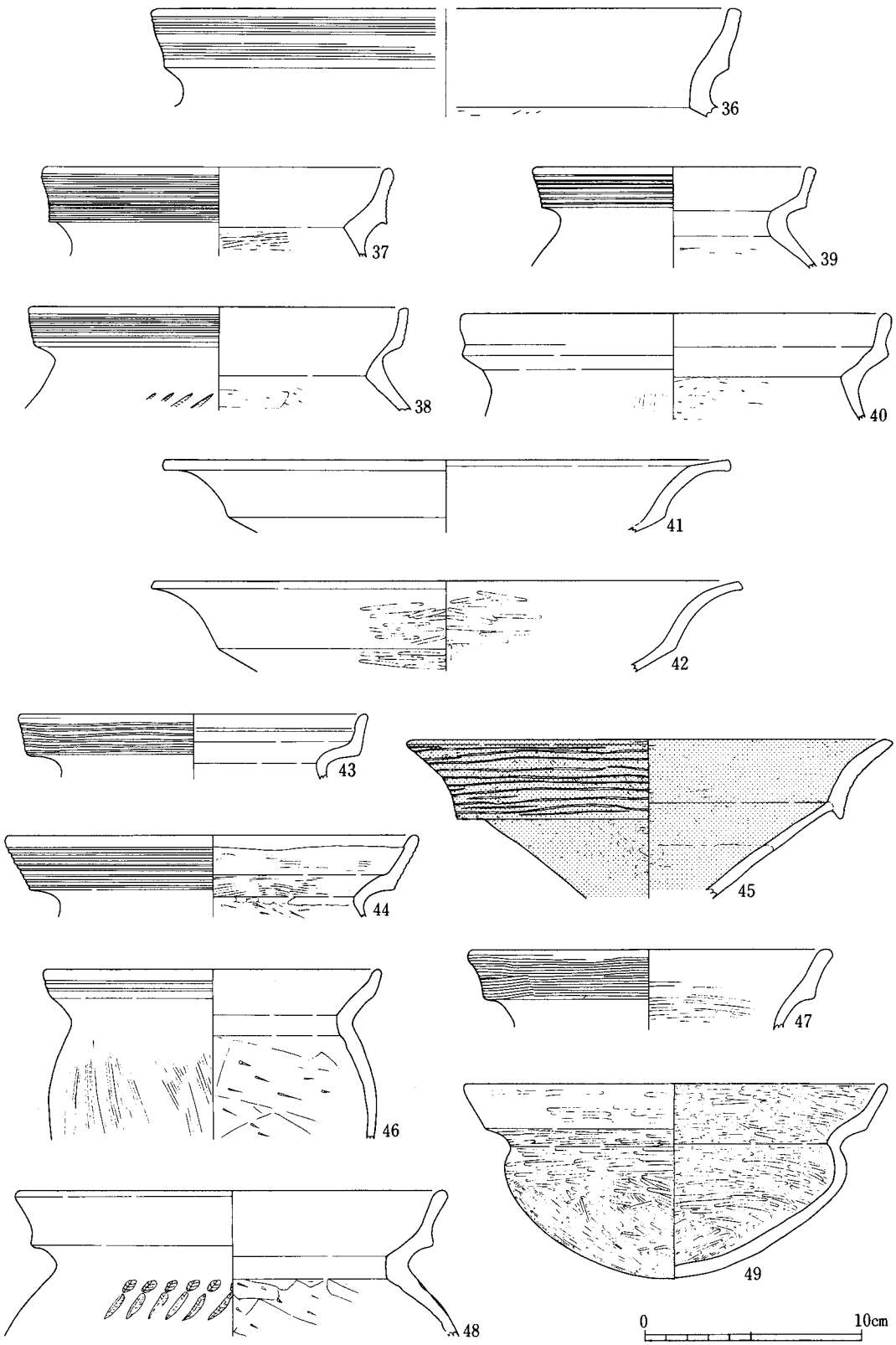
ＳＩ－Ａ６（第34図35、第56図23）

35は直線的にひらく厚手の口縁部であり、壺形土器と思われる。他には銭貨があるが、検出面からの出土でもあり、遺構の時期を示すものではない。第56図23は寛永通宝で、銭径2.4 cm、重さ2.9gを測る。字体から古寛永と判断され、江戸時代前半、17世紀代のものであろう。

ＳＩ－Ａ７（第35図36～42）

36～40は有段口縁の甕形土器で、40以外はすべて擬凹線を持つ。36は口径25 cmを超える大型品で、直線的で重厚なつくりである。内面は段を持たない。37は頸部から口縁基部がきわめて分厚く、他の有段口縁とはつくりの違いを感じさせる。内面頸部以下はヘラミガキ状の調整であるが、遺存部分が少ないので、明確には言えない。38は頸部直下にハケ状具による連続刻みを行う。39は小型の甕で、やや外傾する直線的な口縁帯を持つ。40はほぼ直立する短い口縁帯に強いヨコナデを加えて中位をへこませるものである。41・42は高坏形土器の有段の坏部である。どちらも比較的薄手のつくりで、口縁部は強く外反し、その端部は面を取る。41は内面端部近くでさらにほぼ水平近くまで屈曲させ、幅の広い面を取る。やや摩滅している。

ＳＩ－Ａ９（第55図８、第56図14・15）



第35図　出土遺物実測図(4)　(S＝1/3)

図化しえた出土遺物は、石製品のみである。第55図８は軽石であり、各面に擦痕がある。使用により小さくなったのであろう。第56図14・15はグリーンタフ剥片で、玉の未製品である。どちらも管玉の角柱に近づいてはいるが、一般的な製品よりもやや小さめな印象である。14は重さ0.5gを測り、施溝分割により形成されている。15は重さ0.4gを測る。

ＳＫ－Ａ２（第35図43～45）

43・44は有段口縁に擬凹線を持つ甕形土器で、上部からの出土である。43はわずかに外傾する有段口縁であるが、内外面とも段をしっかりとつくる。内面は口縁帯に沈線１条を施し、口縁基部に水平面を取る。44は外傾する有段口縁で、端部を内面に丸めこむ。厚みがあるが、丁寧なつくりであり、鈍い感じはない。45は器台形土器であり、有段の器受け部である。坑底から出土した。内外面とも赤彩してあり、外反する口縁帯にはミガキののち細い沈線を１本ずつ施している。支柱にゆるやかにすぼまってつながって行くものと思われる。

ＳＫ－Ａ３（第35図46～48）

46～48は中型の甕形土器である。46は頸部でくの字に屈曲したのち、その先端をヨコナデでゆるやかに立ち上げて、境界が曖昧な口縁帯を形成し、２条の沈線を施す。47は口縁外面に段を付け有段口縁とし、擬凹線を入れるが、内面では全く無段である。48は外傾する口縁帯に強いヨコナデを行って、その中位をへこませるもの。頸部直下には連続刻みを２段にわたって行う。使用された用具はハケ状具か櫛状具であろうが、太くあまり鋭くないものであろう。全体に重厚で丁寧なつくりである。

ＳＫ－Ａ４（第35図49）

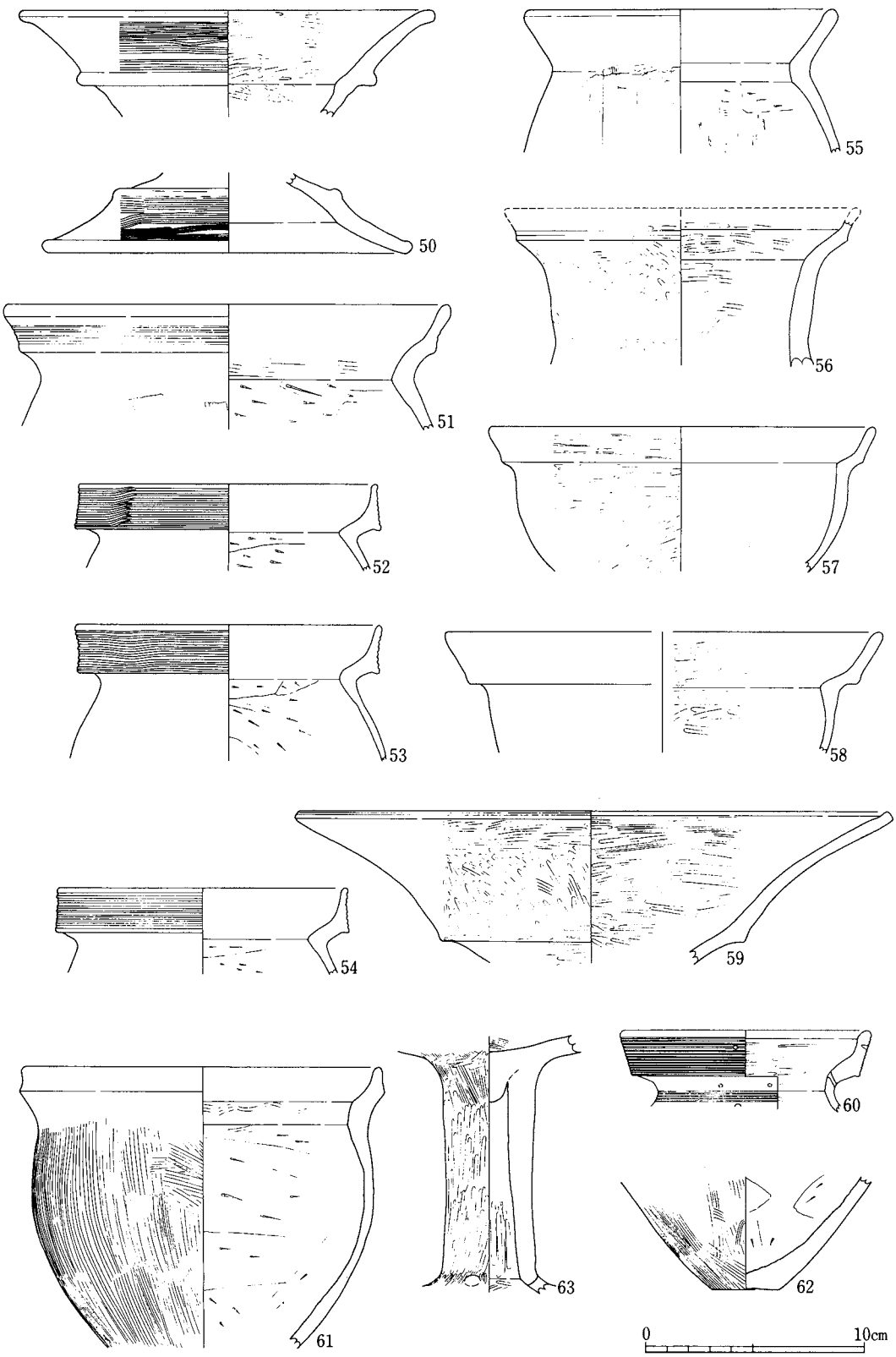
49は有段口縁の鉢形土器であり、外傾する直線的な口縁帯と、偏平な半球形の体部からなる。底部は丸底である。ＳＤ－Ａ２出土の土器片と接合している。

ＳＫ－Ａ５（第36図50）

50は器台形土器の器受け部と脚部である。どちらも重厚なつくりで有段形態・胎土・調整等が似ることから、同一個体とした。器受け部は段が強く突出しており、擬凹線を細く多く施す口縁帯はわずかに外反気味である。脚部は器受け部ほど段が強く出ず、より偏平な器型になる。

ＳＫ－Ａ６（第36図51～59）

51～55は甕形土器であり、そのうち51～54は有段口縁に擬凹線を持つものである。51は比較的厚手の口縁部である。短い口縁帯が外傾し、その中位が凹ませてある。52～54は小型の甕であり、いずれもほぼ直立する口縁帯と、分厚い口縁基部を持つものである。口縁基部以外は薄手なこと、頸部の屈曲が内外面とも強くてはっきりしていること、擬凹線の条数が多いことなども共通している。55は頸部の屈曲が弱いくの字口縁甕である。重厚なつくりの口縁部はシャープさには欠ける。頸部以下は内面へラケズリ調整を行う。56は壺形土器である。端部を欠くが、広口で長頸の有段口縁壺であろう。57・58は有段口縁を持つ鉢形土器である。57は、直線的で外傾する短い口縁帯に、屈曲の弱い頸部、半球形の体部が付く。58は57とほぼ同じ器型であるが、大型で、より伸長する口縁帯を持つ。59は器台形土器であろう。口径25cmを超える大型の器受け部である。有段の口縁は著しく伸長し、大きく外反しており、端部は斜めの面を取る。



第36図　出土遺物実測図(5)　(S＝1/3)

ＳＫ－Ａ７（第36図60）

60は小型の壺形土器であり、有段の口縁部である。口縁帯は厚手で外傾し、端部は内面に丸めこんでいる。口縁帯の擬凹線は細かい櫛状具によるもので、同様の文様が頸部直下にも施されている。その下はスタンプ施文を行っているようであり、加飾に富んだ土器である。頸部には２個１対の紐穴が焼成前の両側穿孔で設けられている。口縁帯には貫通していないが穴が１つあり、頸部同様の紐穴の穿孔途次のものと考えられる。

ＳＫ－Ａ９（第36図61～63）

61は甕形土器であり、頸部でほとんどくびれずに立ち上がる口縁の端部を拡張し、有段状のきわめて狭い口縁帯を形成するものである。口縁部が分厚いのに対して頸部以下はヘラケズリで薄く仕上げている。62は底部で、安定感のある平底である。63は高坏形土器の棒状の支柱である。脚部との境には透かしを持つようである。

ＳＫ－Ａ15（第37図64）

64は重厚なつくりの高坏形土器で、径23 cmを測る有段の坏部である。有段部は外反して伸び、端部は水平な面を取る。

ＳＫ－Ａ16（第37図65・66）

65・66は甕形土器である。65は有段口縁の小型の甕で、擬凹線を持つもの。口縁帯は短く厚手だが、端は細くする。66も有段口縁ではあるが、口縁帯はほとんど伸びない。

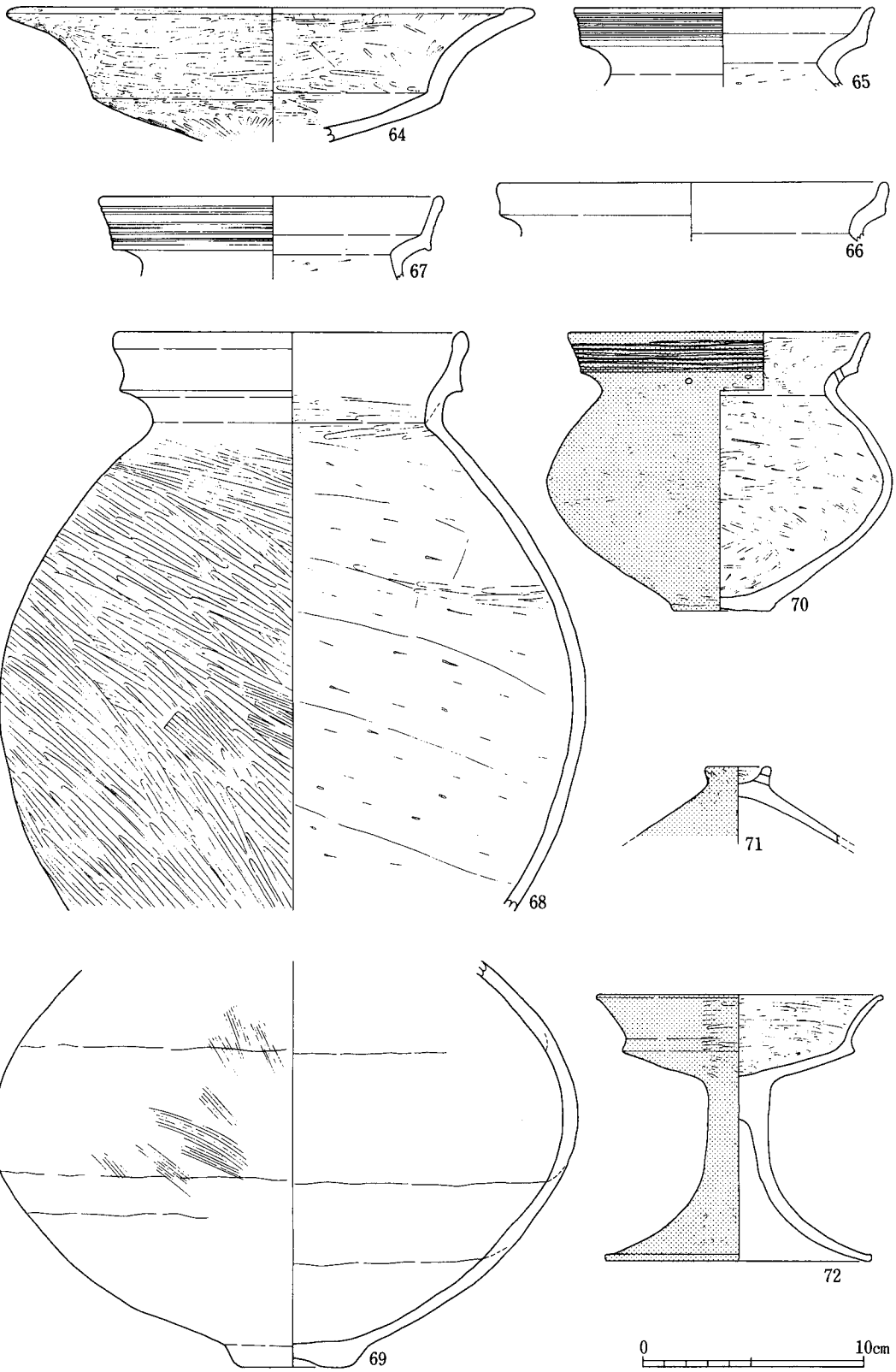
ＳＫ－Ａ18（第37図67）

67は有段口縁の甕形土器である。擬凹線を持つ口縁帯は直線的で、外傾する。内外面とも丁寧に段が形成され、めりはりの利いた器型である。

ＳＫ－Ａ19（第37図68～72）

ＳＫ－Ａ19ａ出土は69・70、ＳＫ－Ａ19ｂ出土は72、ＳＫ－Ａ19ｃ出土は68・71で、出土遺物はさほど多くないのでまとめて記述する。68は口径16 cmを測る有段口縁の甕形土器である。厚手で強いヨコナデにより中位がへこむ口縁帯、長めの頸部、なで肩で胴部中位からやや下位が張り出して最大径27 cmを測る胴部からなる。胴部の調整は外面ハケ後粗いナナメヘラミガキ、内面ヨコヘラケズリである。胴部外面のミガキは甕としては異例であるが、山陰地方では弥生後期の甕にみられる調整のひとつである。69・70は壺形土器である。69は頸部から上を欠く。最大径27 cmを測る偏球形の胴部に、雑に形成され稜が取れているが安定感がある径5.4 cmの平底が付く。器面は摩滅していて、継ぎ目とわずかのハケぐらいしか確認できない。70は有段口縁の小型壺で、外面は赤彩される。外傾する直線的な口縁帯は擬凹線施文後にヘラミガキしている。胴部は中位が張り出して最大径を取る。底部は安定感の高い平底である。径のわりに背が低く偏平な感じの土器である。頸部には２個１対の紐穴を設けており、外面からの焼成前穿孔が確認できた。71は蓋形土器であり、笠形にひらいて行くが先端を欠損する。外面は赤彩している。72は小型の高坏形土器である。有段の坏部は薄く仕上げられ口縁は外反する。支柱の上端は棒状の中実となっており、下半は反って広がる脚部と一体化している。

ＳＫ－Ａ20（第38図73～75）



第37図　出土遺物実測図(6)　(S＝1/3)

73は有段口縁の甕形土器である。口縁帯はほぼ直立するもので、きわめて太い条の擬凹線を持ち、端は内面下がりの面を取る。頸部は厚くしっかりと形成され少し長めになる。頸部直下に太いが鋭くない櫛状具による連続刻みを行う。74は中型の壺形土器で、不明確な頸部から筒状の口縁部がわずかにひらきながら伸びる。全体に厚手で雑なつくりである。口縁部下位と頸部直下に3条の櫛描波状文を乱雑に施している。75は有段口縁の鉢形土器で、外面を赤彩する。大きく外反する口縁帯、口径を超えない程度に張り出す体部を持ち、底部は欠ける。

ＳＫ－Ａ22（第56図18）

図化しえたのはＳＫ－Ａ22ｃ出土のグリーンタフの剝片1点のみである。第56図18はあら割りの際に、施溝分割によって切り離された原石の質の悪い部分であろう。重さ42.3ｇを測る。

ＳＫ－Ａ25（第38図76）

76は有段口縁の甕形土器で、擬凹線を持つものである。内外面とも段と面を丁寧にしっかりと形成し、口縁帯は外反して比較的よく伸びている。

ＳＸ－Ａ２（第38図77）

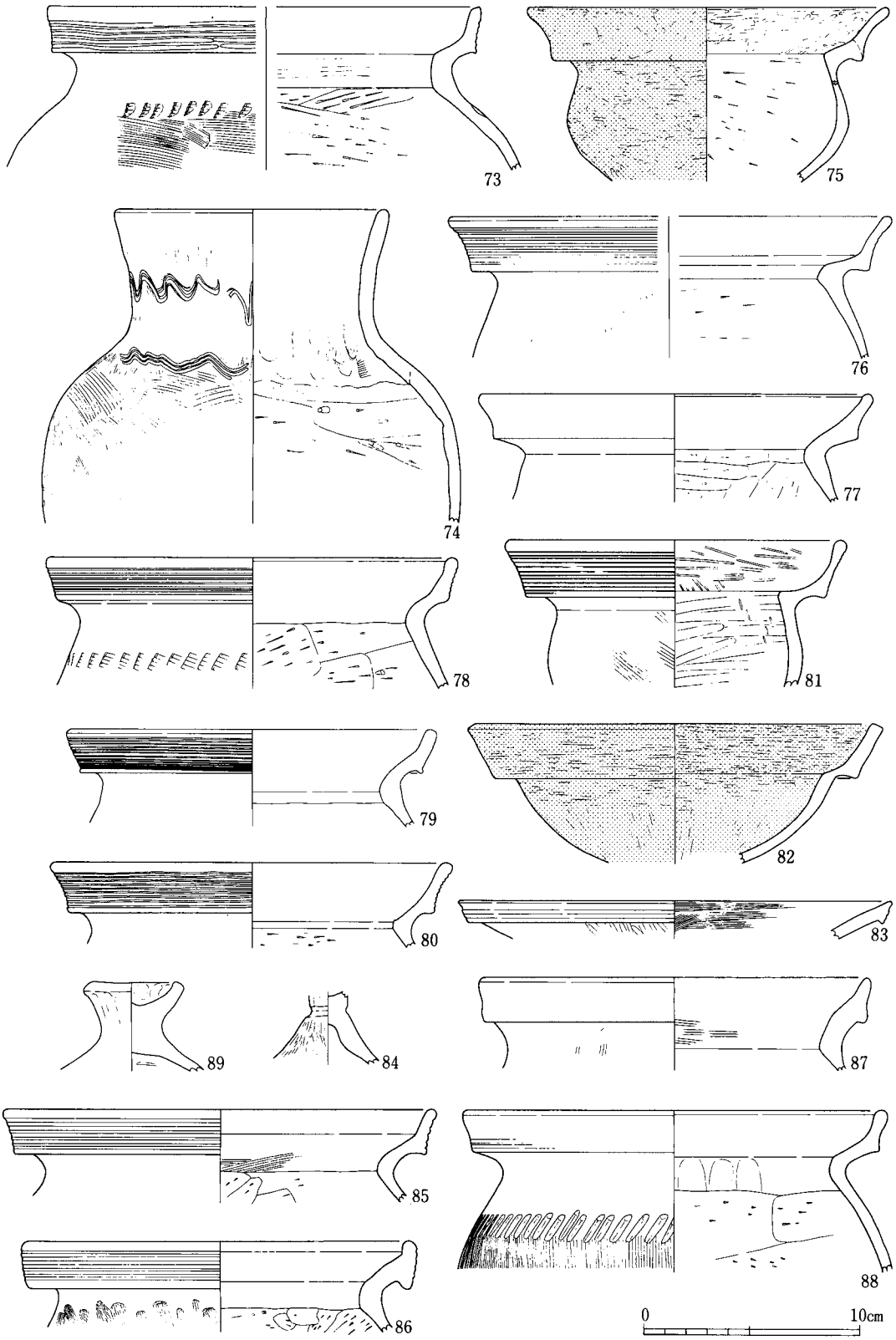
77は甕形土器である。有段口縁を持つが、内面では全く無段である。口縁帯は短く、ヨコナデで中位をへこませている。

ＳＸ－Ａ３（第39図、第40図、第41図、第56図16）

出土遺物が多いため、器種ごとに整理して記述を行う。

甕形土器（第39図90～101・104、第40図105～109）

全て有段口縁を呈するものである。90～101は擬凹線を施すもので、90～95は大型の部類に入る。90は径40 cmを超える大型品であるが、摩滅が著しい。91は径40 cmに近い大型品で、外傾する短い厚手の口縁帯を持つ。92は径25 cmを超える大型品で、口縁・頸とも稜がはっきりした厚手で丁寧なつくりである。口縁帯はわずかに外傾し端を厚める。93は径30 cm近い大型品。厚手のつくりで稜ははっきりしており、口縁帯は外傾する。94は直線的に外傾するが、厚手でシャープさを欠く短めの口縁帯を持つ。95は口縁帯の上端に細かく面が取られ、下端は突出しており、外観はめりはりが利いている。口縁内面は段の上がヨコナデ、下が粗いヘラミガキを行っている。96は小型の甕で、やや外傾する短い口縁帯を持つ。97はやや小型で、きわめて重厚なつくりの口縁部である。98は口径16.1 cmを測り、頸部周辺に太い櫛状具による乱雑な連続斜行刻みを行っている。99は口径13.5 cmを測る小型の甕で、ほぼ直立する口縁帯に、細い擬凹線11条を施す。頸部内面の調整は摩滅のためわからない。100はやや外傾する短い口縁帯を持つもので、頸部には98と同様な刻みを行っているようだ。101も短い口縁帯が外傾するものである。口縁部内面には円形の圧痕を有するが、浅く不明瞭で、指頭によるものかどうかはわからない。104～109は有段口縁の、無文でヨコナデのみのもの。104は直線的に外傾する短い口縁帯を持ち、径17 cmを測る。胴がほとんど張らない細身の器型で、内面に乱雑なヘラケズリを行い、薄手に仕上げる。105は口縁帯に強いヨコナデを加えて中位をへこませ、下端は突出させ、端を丸めるもの。内面は段がゆるやかである。頸部直下のハケ状具による連続斜行刻みを境界として、上はヨコナデ、下はハケと外面の調



第38図　出土遺物実測図(7)　(S＝1/3)

整を分けている。内面の調整はヘラケズリを用いるがあまり器壁は薄くない。106は重厚なつくりの口縁部で、外傾する短い口縁帯の中位を強いヨコナデでへこませている。107は屈曲が弱く、稜の鋭さを欠く器型。頸部と口縁部の境も、直立する口縁帯と口縁基部の境も不明確である。108は口縁端部を上方へ引き出して先細りの口縁帯をつくり出している。成形と調整は雑であり、器面は凹凸があって歪んでいる。109は外傾する直線的な口縁帯を持つが、起伏に乏しく稜が鈍い器型である。口縁内面は粗いヘラミガキが行われている。

底部（第39図102・103）

底径は102が5 cm、103が4.5 cmを測り、どちらとも安定感のある平底で、内面はヘラケズリ調整である。102はやや上げ底状を呈し、外面の底近くにもヘラケズリを行う。

壺形土器（第40図110～116）

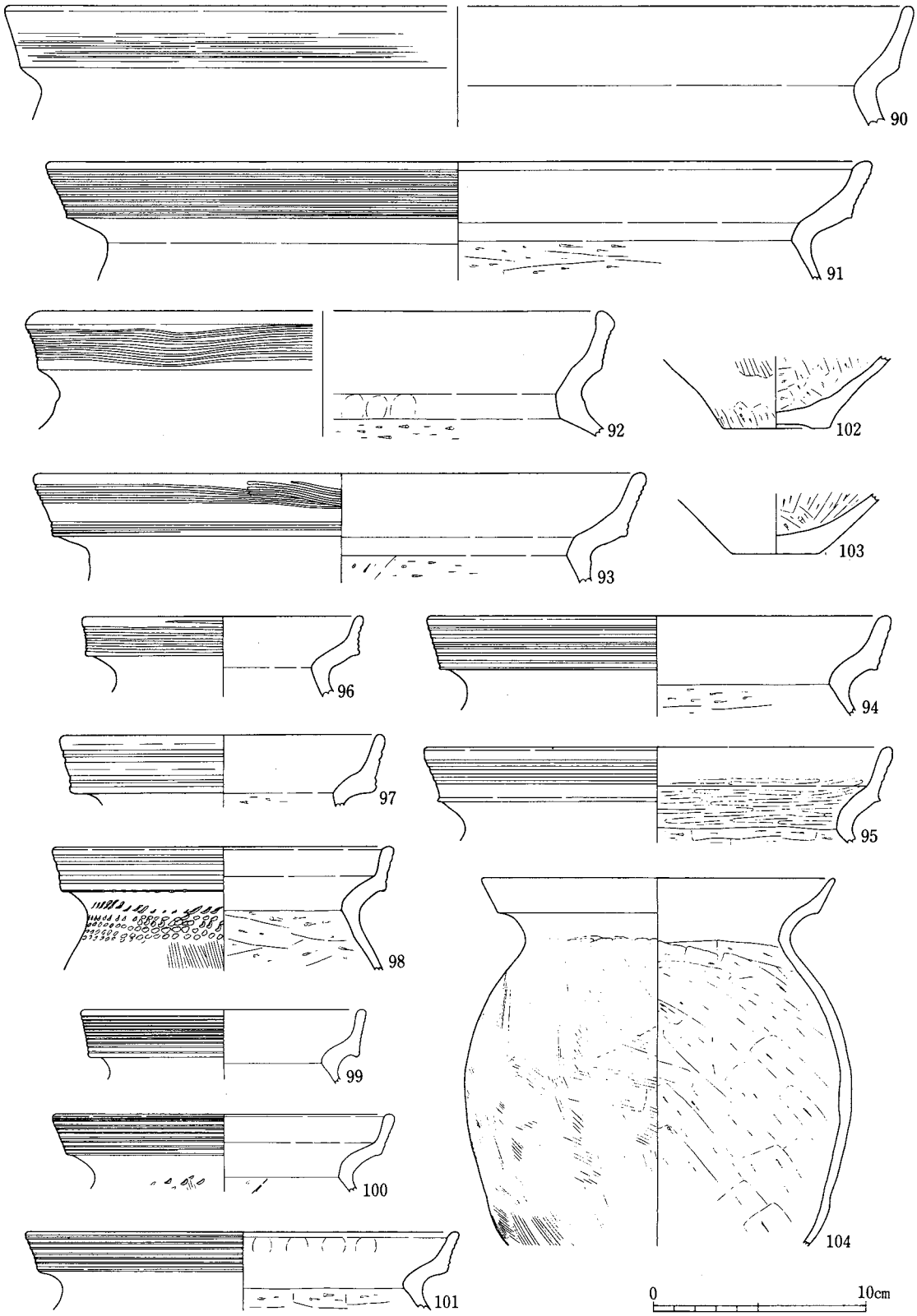
110は有段口縁を持ち、器面が赤く発色していることや、紐穴を持つことから壺とする。外傾する直線的な口縁帯を持つが、擬凹線は摩滅して不明確であり、起伏に乏しく稜が鈍い器型である。111は口縁部を欠損している。胴部中位に持つ最大径のわりに器高が大きく背の高い器型で、安定感のある平底が付く。調整は外面ハケ、内面は上位がヨコヘラケズリ、下位がタテヘラケズリであり、器壁は薄めである。頸部直下に渦巻状の線刻を行う。112はくの字口縁で広口の短頸壺であろう。重厚で屈曲が鈍い口縁部は、端部で斜めの面を取りわずかに内面に折り返している。113・114は有段口縁に擬凹線文を持つもの。113は直線的に外傾する口縁帯を持つ。口縁直下から見られる斜行文や、口縁内面を磨くことから、装飾性が豊かでつくりが丁寧な土器と考え壺とした。114は口縁帯がわずかに外反し、その下端は引き出され、突出している。段は内面もきわめてしっかりと形成される。厚い頸部と対照的に胴部は薄くなるようである。内外面とも赤彩される。115は有段の口縁部に、中位が張り出す胴部、雑に形成されるが安定した底部が付く。法量は口径推定13 cm、最大径17.2 cm、底径5.2 cm、器高15.8 cmを測る。全面ヘラミガキ調整で、外面と口縁内面はその上からさらに赤彩され華やかだが、胴部内面はヘラケズリ状に粗く調整され、光沢もない。113～115は赤彩・ミガキ調整などの加飾が製作時に行われているが、器面には煤が付着している。また、113・114は器型的に甕と変わるところがなく、壺として製作されたのち煮沸具へ転用されても違和感がない。だが、火を用いる祭祀行為の存在の可能性も考慮する必要があるため、ここでは2つの見解を掲げることにとどめる。116は肩部付近と推定でき、凸帯を1本持つ。ハケ状具による連続斜行刻みを交互方向に上下に組み合わせた矢羽根状文を、凸帯から上に2帯、下に1帯巡らし、凸帯下端にも連続刻みが認められる。

鉢形土器（第40図117）

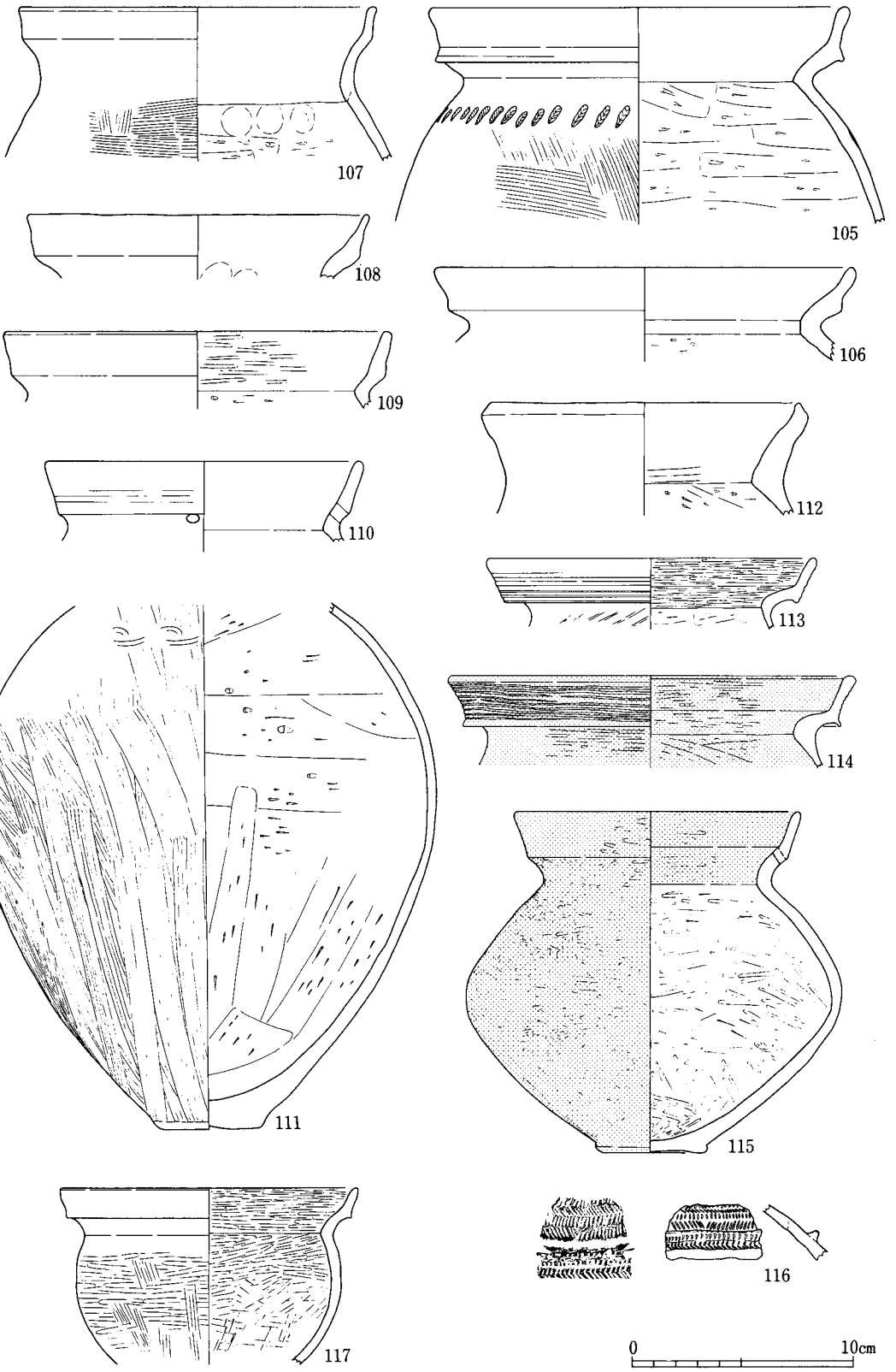
117は最大径が口径にあり、器高が小さくなりそうなこと、内外面をヘラミガキすることから鉢とする。短い有段口縁を呈し、口縁帯の下半にヨコナデを強く行う。器面に煤が付着しており、最終的には煮沸に使われていたようである。

高坏形土器（第41図118～122、126～129）

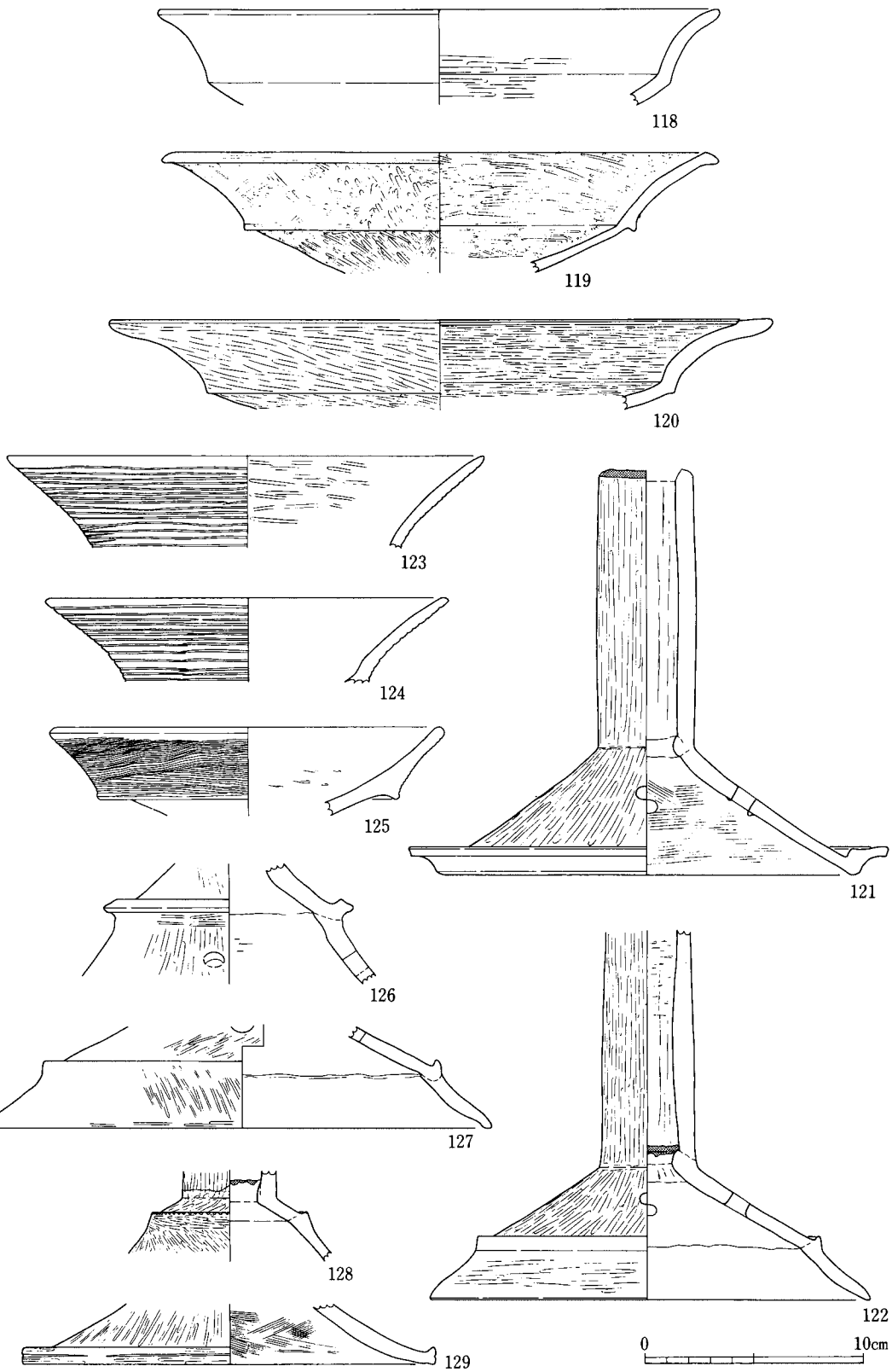
高坏の通例として、支柱内面および脚部内面以外はヘラミガキ調整である。118～120は有段の坏部で、口縁部が外反するものである。118はやや薄手のつくりで、器面は摩滅している。119も



第39図　出土遺物実測図(8)　(S＝1/3)



第40図　出土遺物実測図(9)　(S＝1/3)



第41図　出土遺物実測図(10)　(S＝1/3)

薄手のつくり。口縁部の上下端が突き出し、外反度を強めている。上端は斜めの面を取っている。120は径30cmを超える大型品である。口縁部の外傾・外反が著しく、大きくひらいている。内面では端部近くに肥厚による段を設け、独立した幅の広い水平な面を取る。121・122・126～129は脚部である。121・122は棒状の長い支柱が付く脚部である。121は無段脚で、端部を折り返して水平方向に拡張するもの。透かし穴は焼成前に外面から穿孔され、4方に持つ。目に見える部分は全てヘラミガキされる反面、内面と端部の折り返し下面はハケのちヨコナデにとどまる。支柱上端は坏部との境界であり、断面に漆の付着が認められた。122は有段脚で、外反してひらいて行くもの。透かし穴は4方に持つ。段部は外面で上方にわずかに突き出し、内面は接合痕を残す。支柱と脚は接合部で剝離しており、剝離断面に漆の付着が認められた。126～128は有段の脚部である。126はやや小径になるものか。段部が不自然に肥厚され、凸帯状となる。127は122と似た器型で、同一個体の可能性がある。128は段部に細かい連続刻みを行うもので、支柱は棒状のものが付くようであり、断面には漆の付着が認められる。121・122・128は断面に漆の付着が観察され、破損して補修する際に漆を用いて接着したものと推定される(1)。129は外反してひらく脚部で、端部はヨコナデして面を取り、上方に少し突き出す。一応高坏としたが、器台の可能性も捨て切れない。

器台形土器（第41図123～125）

123～125は有段の器受け部であり、径20cm前後と法量的にも似通う。123は外反する口縁部を細かく丁寧にヘラミガキした後、細く浅い沈線を1条ずつ平行させて引き、10条以上にわたる文様帯とする。端部は細くおさめる。124も123と同タイプであるが、端部は細めない。125は重厚なつくりであり、口縁帯はやや外反する。擬凹線は細いが乱雑に施される。ミガキ調整が内外面ともに確認できないことから脚部の可能性もあろう。

その他の遺物（第56図16）

第56図16はグリーンタフ剝片で、玉未製品である。重さ1.2gを測り、研磨されないが、管玉の角柱に近づいた段階にあると推定する。

ＳＸ－Ａ４（第38図78～84）

78～80は有段口縁に擬凹線を持つ甕形土器である。78は頸部直下に櫛状具による連続刻みを行うが、擬凹線とほぼ同じ原体と思われる。79はわずかだが口縁帯下端が突き出すもので、擬凹線は細かい。80は口縁帯がわずかに外反するものである。81・82は有段口縁の鉢形土器である。81は胴があまり張り出さずに最大径を口径にもちそうな点、器高が小さくなりそうな点、調整が一般的な甕より丁寧である点から鉢に含めた。器面に付着する煤は、最終的には煮沸に使用されたことを示してはいるが、それが製作当初の意図と合致しているとはいえないであろう。長めの口縁帯は擬凹線を持ち、外面が直接的なのに対し、内面は内湾している。82はさらに偏平な器型の鉢である。内外面とも丁寧なヘラミガキののち赤彩する。口縁帯は分厚く、直線的に外傾しており、端は外面下がりのシャープな面を取る。83は器台形土器の器受け部であろう。大きく外反するもので、端部は下方へわずかに拡張し、強くヨコナデしている。内面はハケ調整を残しており、

脚部の可能性もある。84は蓋形土器、反ってひらいて行くものであろう。つまみの付け根は軽い抉りが入っている。

ＳＸ－Ａ５（第42図130～136）

130～132は有段口縁の甕形土器である。130は口縁帯が長く伸びてやや外反し、擬凹線を持つ。131は短い口縁帯が直線的に外傾するもので、擬凹線は丁寧に引かれる。肩部には太いハケ状具による連続刻みがなされている。132は小型の甕で、全体に厚手のつくりである。口縁帯はほとんど伸びない幅の狭いもの。胴部は上位に最大径を持つがあまり張り出した感じはない。肩部にはハケ状具による連続斜行刻みが行われる。133は擬凹線を持つ有段口縁の壺形土器である。全体に厚手で、直線的に外傾する口縁帯に長めの頸が付く広口壺であろう。134は台付き土器の台部か蓋形土器であろう。大型で厚手のつくり、反ってひらく端部は面を取る。135は支柱であり、八の字にひらいて行くので、付く脚部は無段であろう。中空部のすきまが狭いことから、高坏と推定する。136は無段の脚部であり、おそらく高坏であろう。端は折り返して肥厚し、ほぼ水平な面をつくる。径約1.5 cmと大きめの透かし穴を持つ。

ＳＸ－Ａ６（第38図85～89）

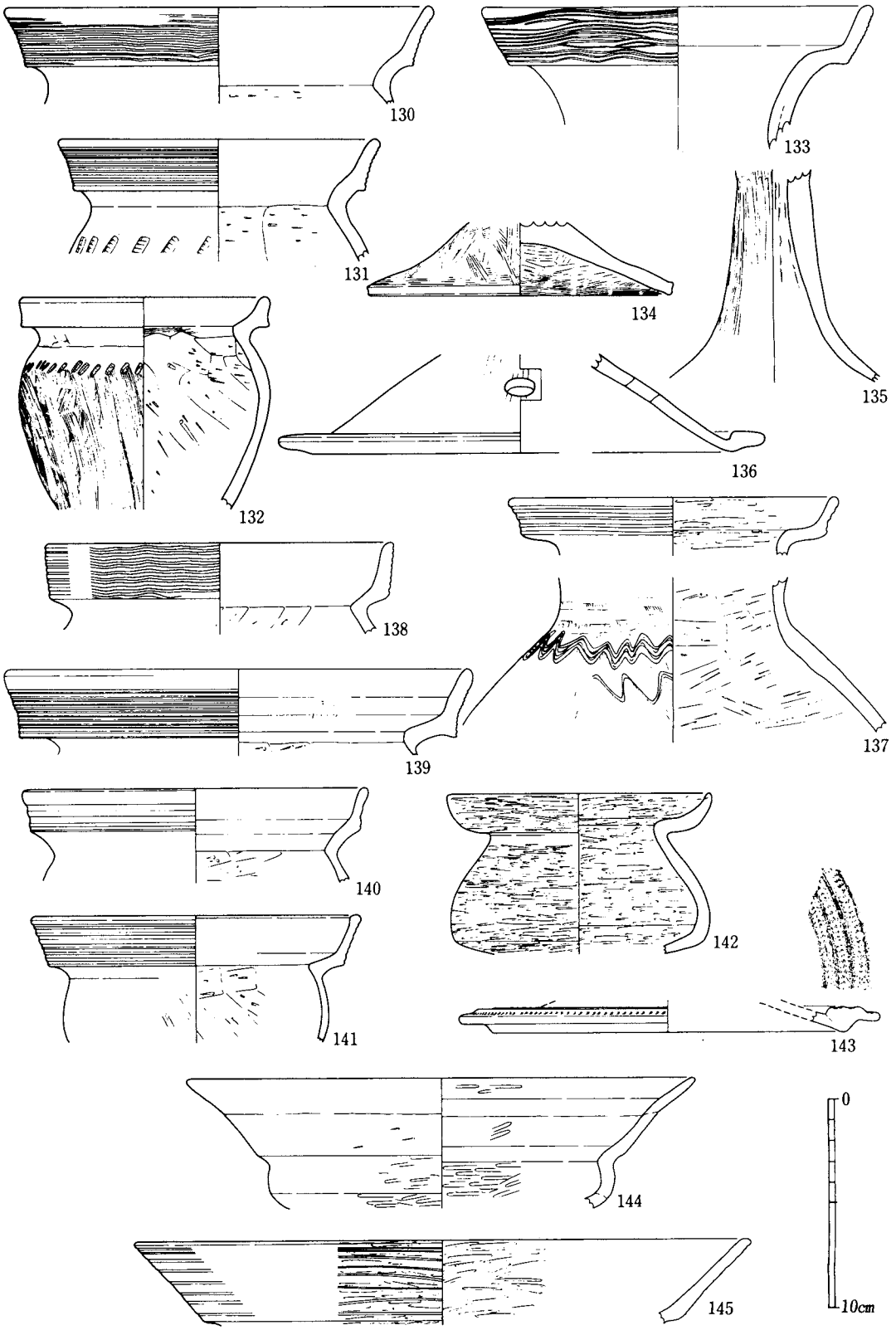
85～88は有段口縁の甕形土器であり、85・86は口縁帯に擬凹線を持つもので、87・88は無文でヨコナデのみ行うものである。86は屈曲した口縁の端部を上下に大きく拡張して口縁帯を形成し、上下端を丸くおさめたものであり、85などとは構造的に異なる。87も屈曲してきた口縁の端部を拡張して狭い口縁帯を形成するものであるが、86ほど下方へは伸びない。88は外傾する口縁帯に強いヨコナデを行い中位をへこませている。外面頸部以下は肩部に連続斜行刻みがなされ、刻みを境界として上がヨコナデ、下がハケときれいに調整を分ける。内面は頸部に指頭ナデ痕を残し、胴部はヘラケズリで薄く仕上げている。89は蓋形土器である。器面は平滑ではないが、大型でしっかりしたつくりのつまみである。

ＳＤ－Ａ１（第42図137）

中世以降の遺構であり、出土した弥生土器は後世に流れ込んだものであろう。137は広口の壺形土器で、擬凹線を持つ短い有段口縁に、ゆるくひらく頸部以下が付くものであろう。内面は口縁部ヘラミガキ、頸部以下ヘラケズリである。外面は頸部までヨコナデが及び、ハケを消している。頸部直下に乱雑な波状文を２帯施し、上は３条、下は２条である。

ＳＤ－Ａ２（第43図146～150）

146～148は甕形土器である。146は弱く屈曲して立ち上がるくの字口縁の端部を薄くつまみ出すもの。頸部直下にハケ状具による連続斜行刻みを行う。147・148は有段口縁に擬凹線を持つもの。147は胴部やや上位で少し張り出す器型で、最大径は胴・口縁とも約20 cmでほぼ同じくらいである。全体に薄手のつくりで、口縁部は、直線的に外傾する口縁帯から、内面で水平面を持つ基部まで丁寧に面が取られている。頸部は内面ヘラミガキ、外面直下にハケ状具による連続斜行刻みが行われる。148は全体に厚手で、鋭さには欠ける器型である。頸部直下に櫛状具による連続刻みを行う。やや摩滅している。149・150は高坏形土器の有段坏部である。149は径30 cmを超える大型品であり、坏身は深い。調整は全面ヘラミガキだが、外面は不定方向、内面は面ごとに方向が



第42図　出土遺物実測図(11)　(S＝1/3)

揃っている。外反する口縁部は端部をさらに継ぎ足したと思われ、内面には段を持つ。その内面端部の面と外面の口縁部のみ赤彩され、彩痕が残る程度の他の各部位とは明確な濃淡のコントラストがついている。150は径25 cmを超える大型品であり、149に比して身が浅く偏平な器型である。口縁部は外反し、内面の端近くを肥厚して段を付け、面を取る。

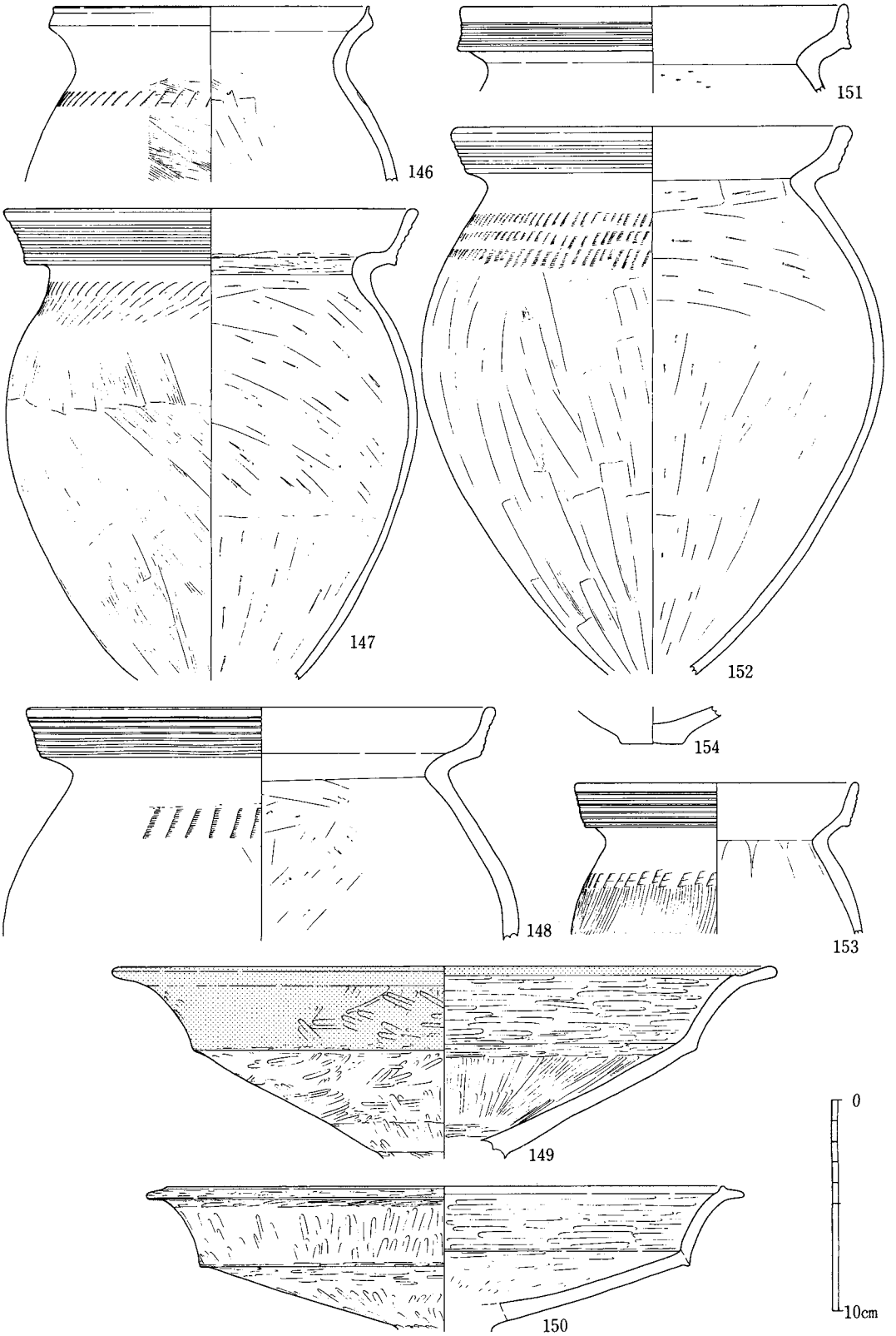
ＳＤ－Ａ４（第42図138～145、第55図５、第56図20）

138～141は有段口縁に擬凹線を持つ甕形土器である。138は口縁帯がほぼ直立する。139はやや大型で、重厚なつくりの甕である。段は比較的しっかりと形成され、口縁帯はわずかに外反する。140は口縁帯に何条かの凹凸が確認できるが、強いヨコナデに伴うものにも見えるので、明確な擬凹線とは言えない。141は胴があまり張り出さず、最大径を口径に持つ。口縁帯は外傾する直線的なもので端は太く丸くする。頸部は特に内面で屈曲が強く、それ以下はヘラケズリの徹底により薄く仕上げている。器面に厚く煤が付着することと、器面調整が煮沸に適していることから、甕に分類した。142は口径12.2 cmを測る壺形土器である。胴部最大径もほぼ等しい。内湾しながら立ち上がり端を細くおさめる受け皿状の口縁部に、下端近くが張り出す袋状の胴部が付く。143は高坏の有段脚部であろう。端を肥厚し、さらに水平方向に拡張して、複雑な稜と面を形成している。各面にはヘラミガキ後、連続刺突を巡らせている。刺突具の原体は貝殻腹縁と思われる。144は高坏形土器の有段坏部である。口縁部は長く伸びて大きくひらくもので、坏底部は低平で、丸みを持つようである。他の高坏と比べて段が明瞭ではなく、薄手である。145は径25 cmを超える大型品で、器台形土器の有段の器受け部であろう。口縁部は大きく外傾する直線的なものである。ヘラミガキの後、細い沈線を１条ずつ７条から８条引いている。

その他の遺物には石製品がある。第55図５は花崗岩質砂岩製の砥石で、半面を欠損するが、よく使いこまれている。第56図20はグリーンタフ剝片で、重さは12.6 gを測る。表面は風化しているが、原石からのあら割り段階にある玉未製品であろう。

遺構検出面（第43図151～154、第44図、第55図６・10）

151～153、155～158は甕形土器であり、程度の差はあるがすべて有段口縁を呈し、157・158を除くすべてが擬凹線を持っている。151はぶ厚い口縁基部と、やや内傾する短い口縁帯から成る。152は口径が18.5 cm、胴部のほぼ中位が張り出して最大径21.8 cmを測る器型である。重厚だが稜が鈍く短い口縁帯が、内面で屈曲が強い頸部に付く。胴部の外面調整はハケののち板状工具で軽くなでている。肩部にはハケ状具による連続斜行刻みを３段にわたり行う。153は小型の甕で、直線的な口縁帯はやや外傾する。肩部に３本単位の櫛状具による連続刻みを行う。刻みから上はきれいにヨコナデしている。155は口径30 cm前後の大型の甕であり、きわめて重厚なつくりである。口縁端部を上下に拡張して口縁帯をつくり出している。頸部は内面が強く鋭く屈曲しているのに対し、外面では鈍い。156も大型品であり、外傾する短い口縁帯を持ち、口縁帯下半のみ擬凹線が入る。157はやや小型で、端部を上下に少し拡張して口縁帯を形成し、強いヨコナデを加えたもの。158は直線的で短い口縁帯が外傾するものである。内面では屈曲が鋭いが、外面では鈍い、長めの頸を持つ。159～162は壺形土器である。159はゆるやかに外反しながらひらく壺の口縁部であり、口縁端部にヨコナデを加え、有段状に面を取る。160はほぼ直立する有段口縁を持つ長頸壺であろ



第43図　出土遺物実測図(12)　(S＝1/3)

う。頸部はきわめて重厚である。161は算盤玉状に張り出す胴部で、ゆるく外反する口縁部が付くと思われる。外面は赤彩され、頸部直下から胴部中位にかけては、全面にヘラミガキの後施文を行う。連続斜行刻みと沈線のセットを基本とし、斜行の方向を交互に変えて文様帯を上下に4段連ねている。胴の張り出し部分は幅の広い凸帯を貼り付け、中位に沈線、その上下に交互方向の連続斜行刻みを施す。凸帯には2本1対の棒状浮文を縦位に貼り付ける部位もあり、その部分には刻みが及ばない。頸部から凸帯までの文様は一体化したもので、文様帯は計6段となるが、3段の矢羽根状刻みとも見なせる。内面は4～5段の接合痕と指頭痕が見られ、雑なナデ仕上げである。162は有段口縁を持つものであり、器型的には甕と変わらないが、赤彩やミガキ調整などの煮沸に適さない要素から壺に含めた。154・163・164は平底の底部である。154は径約3 cmと小径であるが、接地面がしっかりと形成されて安定感がある。163はきれいに接地せず不安定である。外面の調整はタタキをすり消したものの可能性がある。164は角がとれているがしっかり接地する。外面は細いハケ調整、内面は幅の広いヘラケズリ調整を行う。165は手づくねの小型土器であり、口径4.3 cm、底径3.2 cm、器高3.9 cmを測る。166は高坏形土器の有段坏部である。口径30 cmを超える大型品であり、坏底部も径25 cm前後と広い。口縁部は大きく外反し、内面端部を肥厚しほぼ水平な面をつくる。167は棒状の支柱である。168～170は器台形土器であり、すべて有段の器受け部に擬凹線を持つ。168は器受け部から支柱まできわめて重厚なつくりである。わずかに外反する口縁帯は、端部を丸くおさめている。細い擬凹線を持つが、施文のち磨かれるため、一部でかすれている。支柱はゆるやかにひらいて器受け部や脚部につながるものであり、外面タテヘラミガキ調整を行うが、ミガキと直行して切る目的不明のケズリ状の痕跡がある。169は大きくひらくがほとんど外反しない厚手の口縁帯を持つもので、外面が赤彩される。170は外反する短い口縁帯を持つもので、全面が赤彩される。大型壺の可能性もある。171・172は脚部である。171は無段脚で、端部に粘土紐を貼り付け分厚くし、ヨコナデにより凹凸をつけて2つの面を取り、さらに端部に斜めの面を取っている。172は有段脚で、大きく外反して広がり、端部を折り返しておさめるものである。外面は端部折り返しの内側まで赤彩される。段部には細かい刻みを巡らし、その下には細い沈線を4条施している。

その他の遺物としては石製品がある。第55図6は質のよくないグリーンタフによる板状の製品であり、欠損し、用途は不明である。10は軽石であり、各所に擦痕が見られる。

包含層（第45図～第52図、第55図2～4・7・11～13、第56図17・21・22）

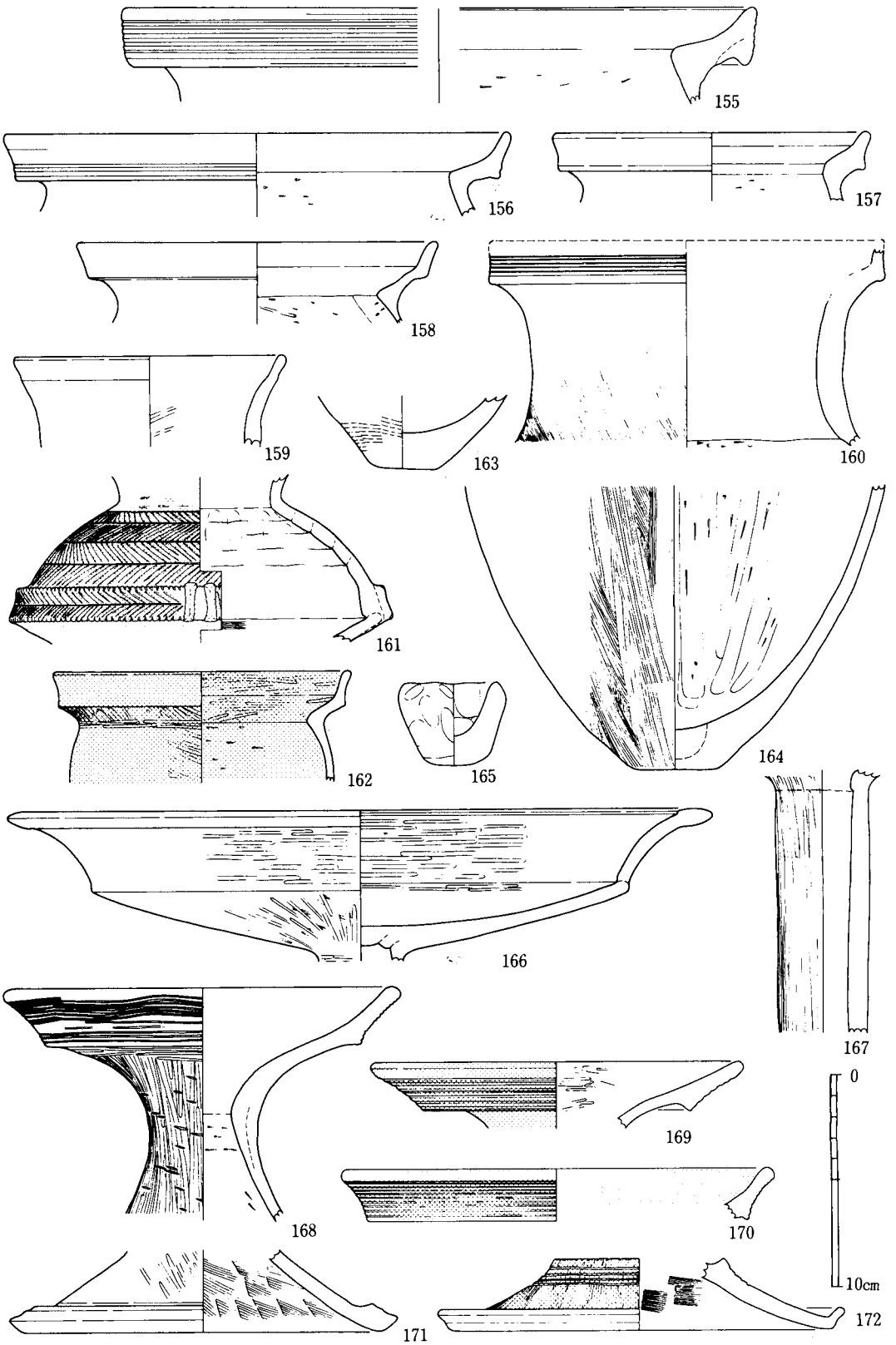
きわめて多量の遺物を出土しているが、その大多数は弥生土器であり、器種別に記述する。

甕形土器（第45図173～186・188、第46図189～207・209、第47図、第48図230～238）

もっとも多量かつ多様な器種であり、形態・文様から大まかな分類を行い、記述する。

a）擬凹線を施す口縁帯を有する甕（第45図173～186・188、第189～207）

173・174は断面が三角形の口縁部を持つものである。173は小型のわりに頸部が厚くて長い。174は口縁帯上端がわずかに伸びている。175～186・188、189～207は有段口縁を持つものである。175～186・189は口縁帯が直線的に伸び、直立もしくは外傾するもの。175は幅広で中へこみの口

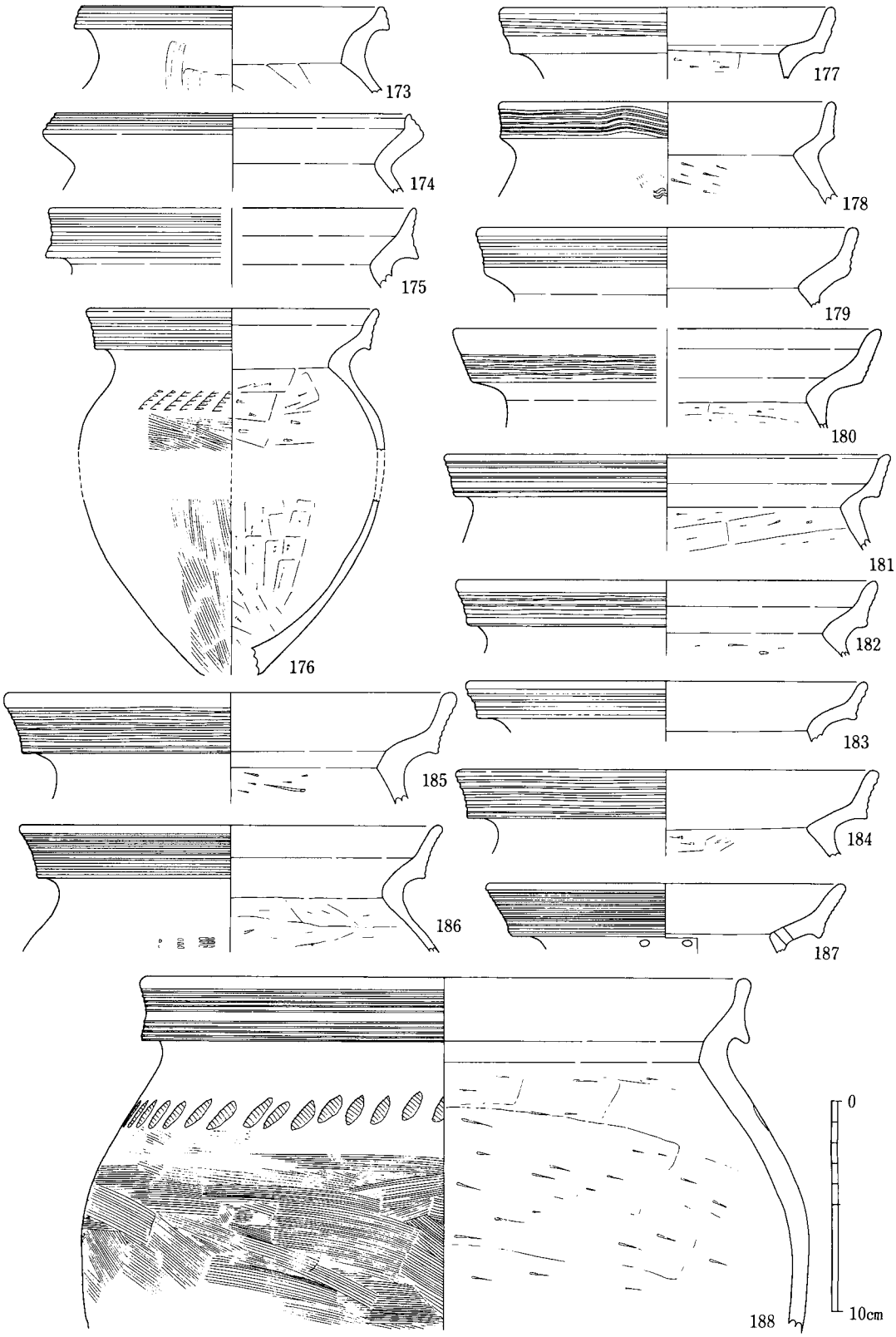


第44図　出土遺物実測図(13)　(S＝1/3)

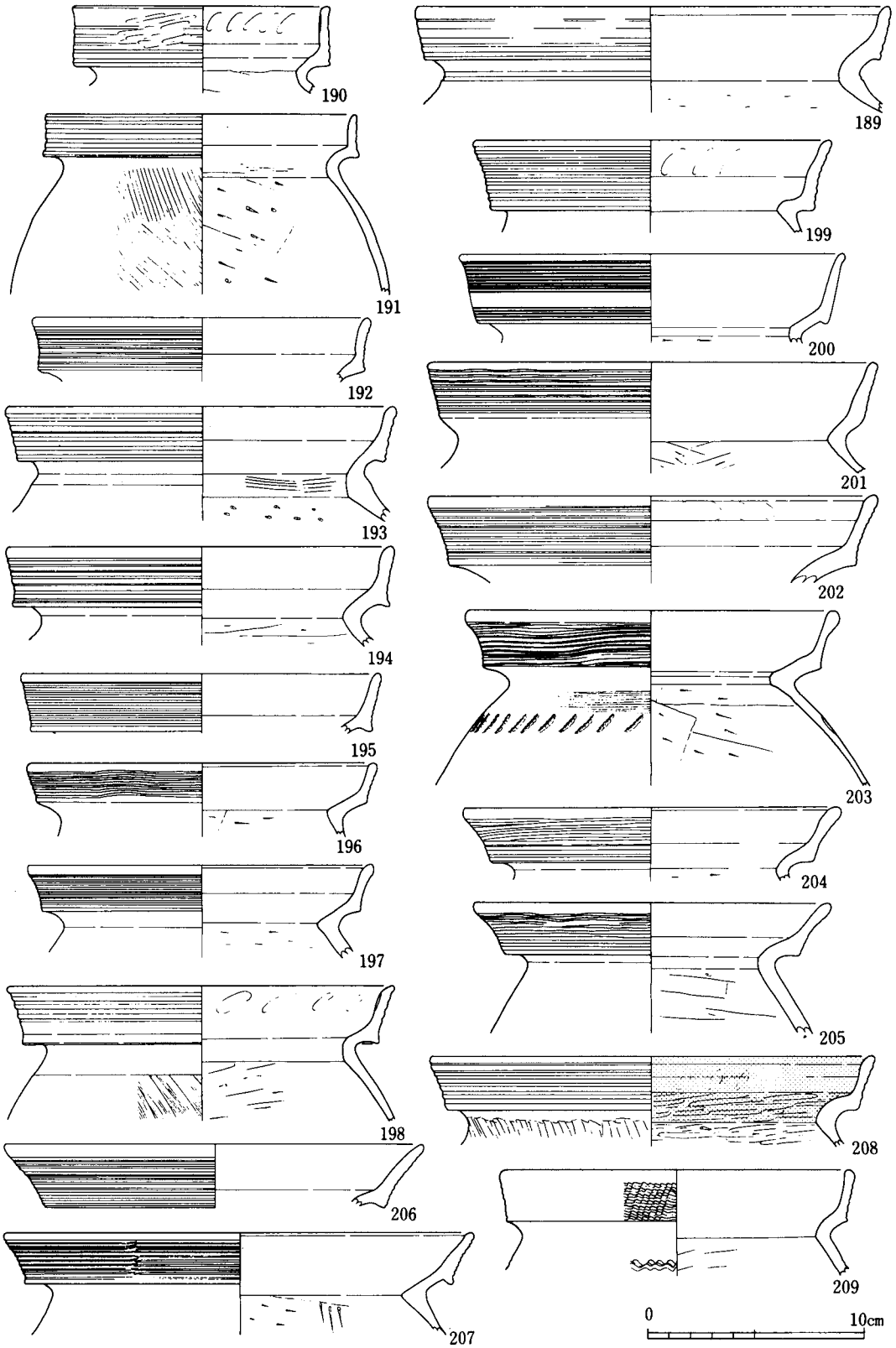
縁帯を持つが、頸部から口縁基部が厚手で、173タイプの断面三角形の口縁が上方に著しく伸長した感じである。176は口径13.7cmを測る小型の甕。最大径は胴部上位に持つが余り張り出さない。外面の頸部直下にはハケ状具による連続斜行刻みが行われるが、刻み・擬凹線・ハケの条はよく似ており、同一原体による可能性が高い。内面の頸部以下はハケのちヘラケズリのちヨコナデと3次にわたる調整が確認でき、薄く仕上がる。177は口縁基部にはほぼ水平な面を持ち、内面頸部の屈曲が鋭い。178は直立気味の口縁帯を持つ。頸部以下に文様の痕跡があり、波状文の類と推定される。179・180・182は口縁内面の段が不明確で、全体的に重厚だが稜が鈍いつくりである。183・184は口縁基部が長く伸び、ほぼ水平な面をなすものである。185・186は、後述するものほどではないが、口縁帯が伸長しており、わずかに外反するもの。186は肩部に刻みが遺存している。188は口径28.7cmを測る大型の甕で、きわめて重厚なつくりである。現状での最大径は34.5cm、胴部上位に持つものか。口縁帯は短くほぼ直立し、強くヨコナデされ中へこみし、下端は拡張され突き出す。器面調整はナデ・ハケ・ケズリともすべて横方向になされている。頸部直下には太いハケ状具による連続斜行刻みが行われている。190・191は口縁帯が直立あるいはやや内傾するもので、比較的段が明確で、薄手のつくりである。190は小型の甕であるが、口縁帯は直立してよく伸び、外面は擬凹線のち所々ミガキ、内面はヨコナデされ指頭圧痕が巡る。191は口縁帯がやや内傾する。192～203は口縁帯がよく伸長し外傾あるいはやや外反しているもの。193は頸部が厚くなる。194は口縁帯下端が少し突き出るもので、胎土には角閃石の粒子が含まれる。196・197はともに内面の屈曲が鋭い。197は口縁端部をやや厚くしている。198は口縁帯内面に指頭圧痕を残し、端を細める。頸部以下はきわめて薄手である。199もよく伸びる口縁帯の内面に指頭圧痕を残す。200はきわめて長くて薄い口縁部であり、端部近くで外反する。201は段がやや不明瞭である。202は口縁内面に指頭圧痕らしいへこみが認められる。203は口縁帯に強いヨコナデを加えて中位を薄くする。しっかりと各面が形成されており、頸部以下はきわめて薄い。頸部直下にハケ状具による連続斜行刻みを行う。204～207は口縁帯の伸長、外傾度・外反度が特に高いもの。205は頸部以下がやや厚手である。207は口縁帯下端が少し突出している。内面では口縁部が無段で、頸部は屈曲が鋭い。

b）無文の口縁帯を有する甕（第47図）

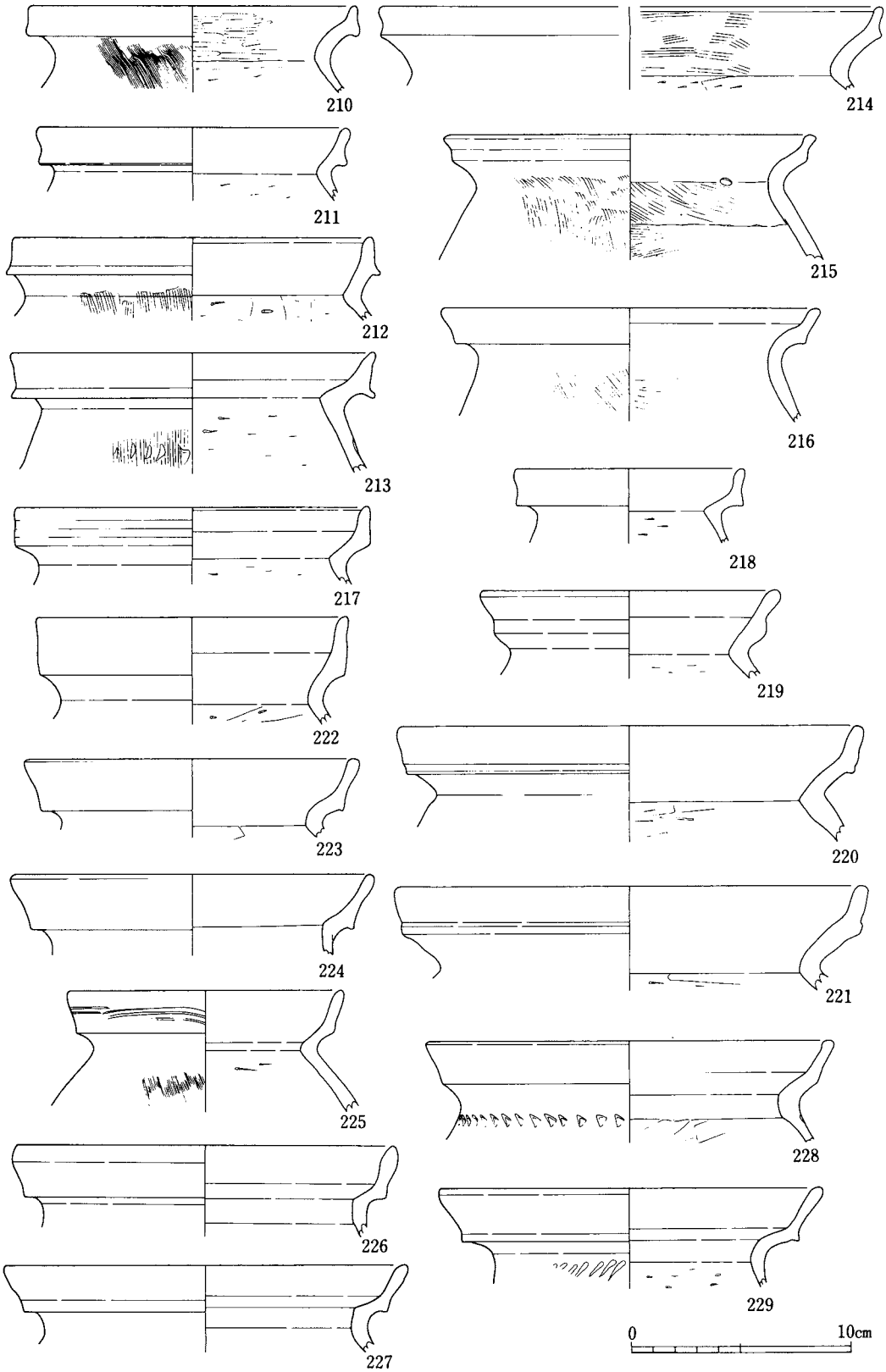
210～216は明確な有段口縁ではなく、口縁帯も狭小なものである。210～213は口縁の伸長度に差を持つが、口縁帯下端が突き出す点では共通している。210は伸長がきわめて微小なものであり、口縁内面は粗いヘラミガキ調整を行う。212は口縁帯が内傾し、下端の突出ははっきりと稜をなす。外面は頸部までハケが及んでいる。213も212同様に突出が稜を持つもので、頸部直下には刻みを行う。刻みは太く先が鋭い原体によるものであろう。214～216は狭小ではあるが有段といえる口縁帯を持つもの。214は大型の口縁部で、内面にハケを残す。口縁帯は中位を強くヨコナデしてへこませる。215は214とほぼ同じ口縁形態をとるもので、頸部の屈曲は弱い。頸部以下の調整は内外面ともハケが多用され、内面には粗大のくぼみが観察される。216は直線的な口縁帯を持ち、頸部の屈曲が弱いものである。217～226は口縁帯が直線的に伸び、直立もしくは外傾するもの。217はほぼ直立する口縁帯を持つが、前述したタイプが若干伸びた程度である。摩滅している。218は



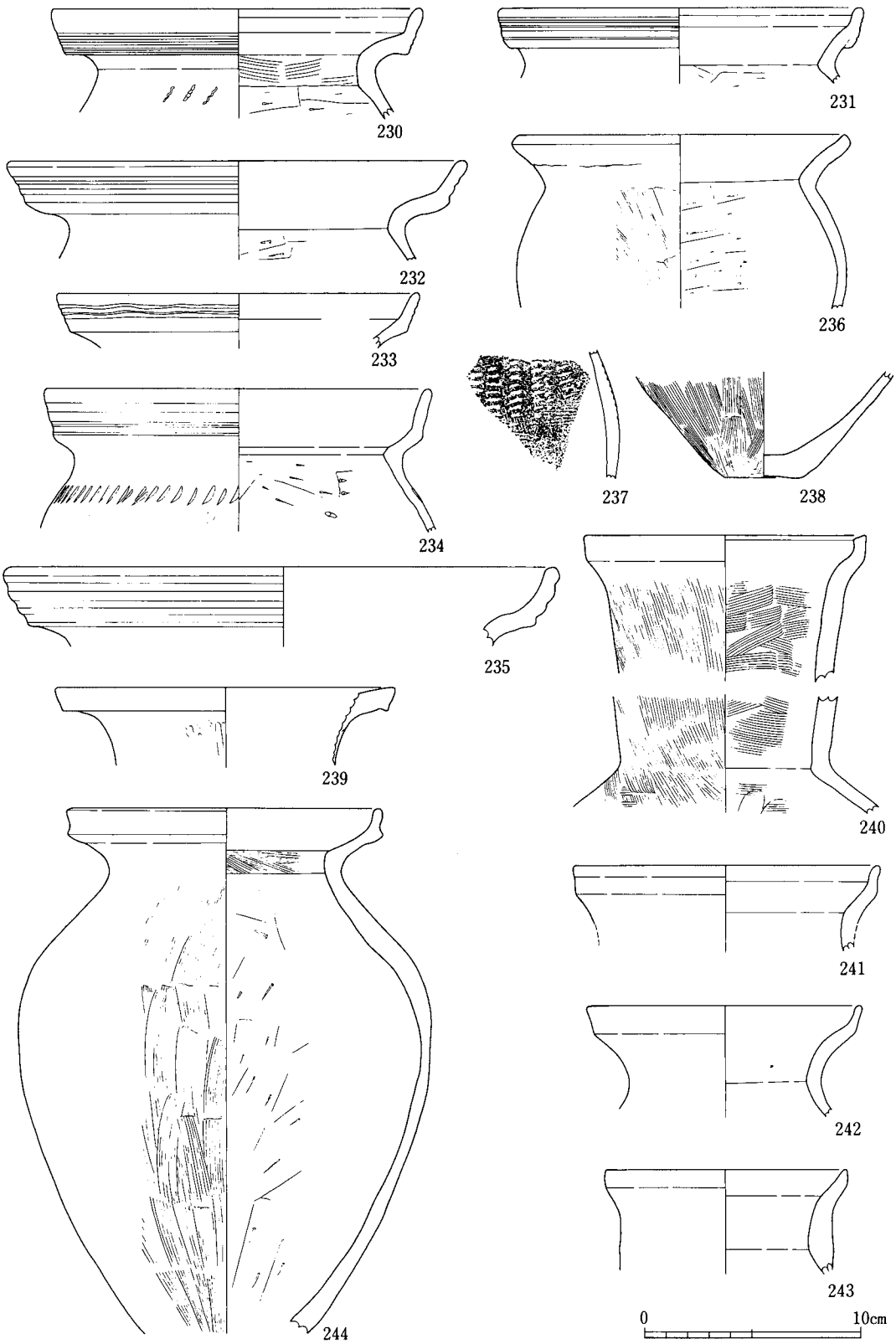
第45図　出土遺跡物実測図(14)　(S＝1/3)



第46図　出土遺物実測図(15)　(S＝1/3)



第47図　出土遺物実測図(16)　(S＝1/3)



第48図　出土遺物実測図(17)　(S＝1/3)

小型の甕で、中へこみのほぼ直立に近い口縁帯を持つ。頸部以下は薄く仕上げるようだ。219～221は重厚なつくりのもの。219は小型の甕で、全体に丸みを帯びる器型。中へこみの直立する口縁帯を持つが、内面では段が確認できない。220は口縁帯下端がわずかに突出し、頸部は長めで屈曲が強い。221もやや頸が長い印象である。222はほぼ直立する長い口縁帯を持つ。223・224は外傾する口縁帯が強いヨコナデにより中へこみとなる。225は擬凹線にも見える条が走るが、煤が厚く付着し判別できない。226は口縁帯下半を内外面からヨコナデして薄くし、対照的に上半を厚くする。頸部は筒状に伸びるようである。227～229は口縁帯の伸長・外傾度ともに特に大きいものである。227は、226同様に口縁帯下半を薄くつくる。228は直線的な口縁帯を持ち、自然な感じで内面に丸め込む。頸部直下には先端が三角形の工具による連続刻みを行なっている。229は口縁帯の伸長が著しく、その下半を薄く仕上げ、下端を突出させる。頸部は強くすぼまり、直下に棒状具による連続斜行刻みを行っている。

c）有段口縁で、口縁帯施文が不明確なものや特異な甕（第46図209・第48図230～235）

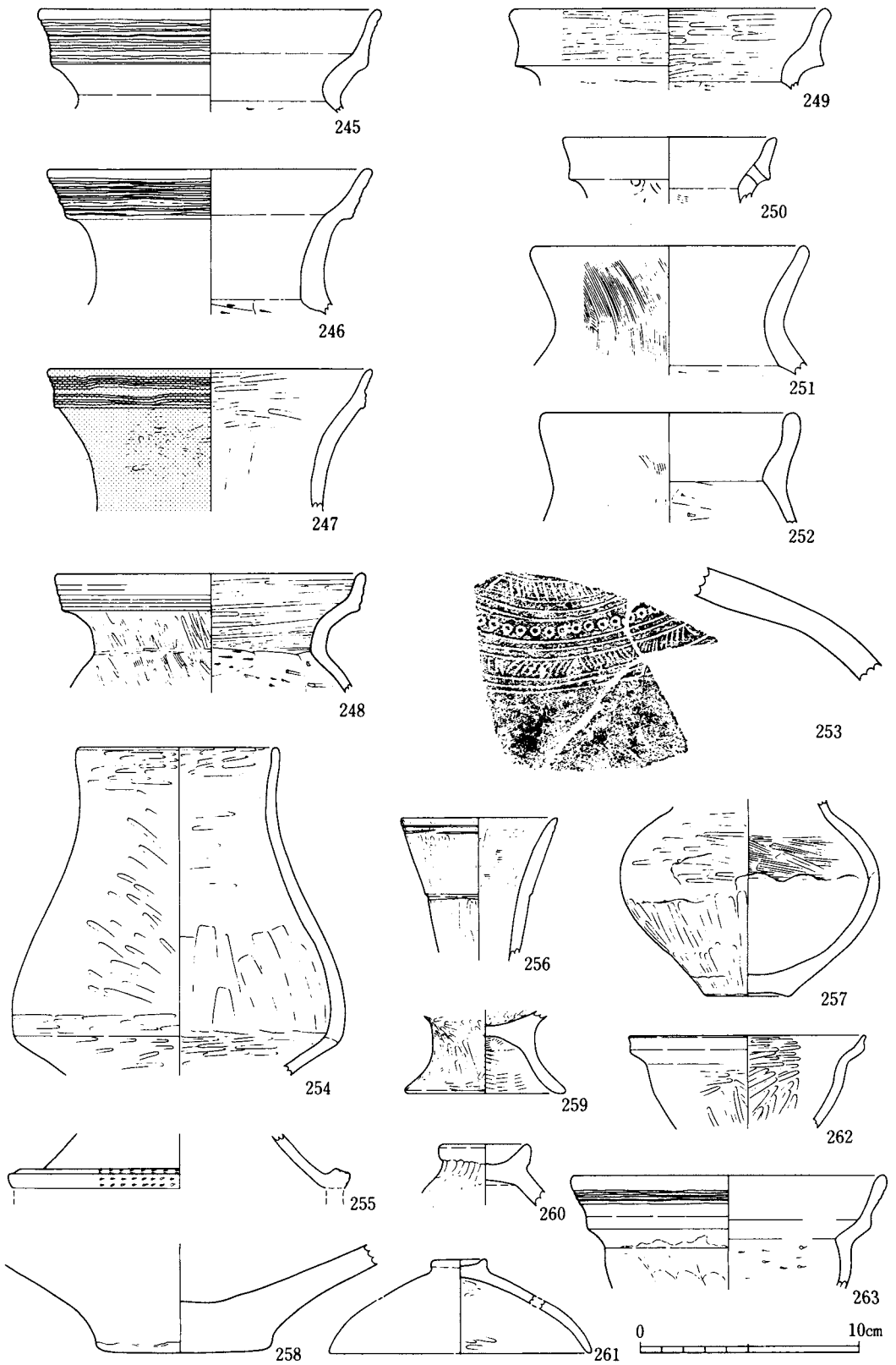
209は直線的な口縁帯と肩部に、櫛状具による振幅の小さい波状文を施すもの。230は全体に重厚なつくりであり、外傾する短い口縁帯の上半が無文、下半が擬凹線を持つ。頸部直下に撚糸状の連続圧痕を残す。231の口縁帯は粘土紐を一周させて貼り付けたような形態を取り、間隔が不揃いで深い擬凹線を施す。232は稜が鈍い大きく外傾する口縁帯を持つ。施される擬凹線は、幅が広いが浅く、強いヨコナデと判別しがたい。233は外傾する短い口縁帯の中位に2～3条の乱れた擬凹線を持つ。234は232同様、口縁帯の施文がヨコナデと判別しがたいもの。頸部直下に太いヘラ状具による連続刻みを持つ。235は大型の甕で、口縁帯は境界が不明確なほど丸みを帯びて内湾している。太く浅く条間も広い擬凹線は強いヨコナデと判別しがたい。

d）その他の甕（第48図236～238）

236はくの字口縁で、端部に面を取るもの。237は甕の肩部付近であり、太い櫛状具による刻みを持つ。238は底部であり、安定した平底である。

壺形土器（第45図187、第46図208、第48図239～244、第49図245～258）

187・208は有段口縁に擬凹線を持ち、頸部も短く屈曲も弱そうなことから、甕とよく似た器型と推定する。187は厚手で大きく外傾する口縁帯を持つ。頸部には2個1対の紐穴を持つが、穿孔方向等は不明。208は外傾する直線的な口縁帯を持つ。内面が完全に赤彩され、外面にもその痕跡を残す。239は外反する口縁の端部に面を取る広口の壺であろう。240は筒状に伸びる長頸壺で、端部近くでふくらませて有段状におさめ、面を取る。調整にはハケが多用される。241は長めの頸を持ち、そこから外反してひらく口縁部の端を上方へ立ち上げて口縁帯とする。242・243は摩滅し遺存が悪く、器型がはっきりしない。242は241と同様の短い口縁帯を持つが、頸部のくびれは強い。243は端部近くでわずかに広がる口縁部。外面からは内湾状に、内面からは外傾状に形成し、先端を尖らせておさめる。244は頸部のくびれが強いため、あえて壺に分類した。口径14.6cmを測る。頸部から大きくそり返る口縁端部はほぼ垂直に立ち上がり、形成された狭小な口縁帯はヨコナデにより中位をへこませる。胴部は上位で張り出し最大径19.5cmを測り、背の高い器型である。全体に重厚なつくりで、煤等の付着はない。245～250はしっかりした有段口縁を持つ壺であ



第49図　出土遺物実測図(18)　(S＝1/3)

る。245～248は有段口縁に擬凹線を持つもの。245はよく伸びてわずかに外反する口縁帯を持つ。煤が付着するので甕の可能性もある。246・247は長い頸を持つもの。246は全体的に重厚なつくりである。247は口縁帯外面を除いては全面ヘラミガキ調整で、外面は全て赤彩される。短い口縁帯は中位がへこんでいる。248も胴部内面と擬凹線部分以外はヘラミガキ調整である。249･250はヨコナデにより中へこみとなる口縁帯を持つ。249は口縁部全面にヘラミガキ調整を行っており、口縁基部は重厚なつくりである。250は小型品であり、頸部に焼成前の穿孔が外面からなされ、単位･個数等は不明であるが、紐穴と推定できる。251・252は短頸で広口のくの字口縁をもつ壺で、重厚なつくりもの。251は頸部の屈曲が弱く、ゆるやかにひらくもので、外面は端部近くまでハケが及ぶ。252は内面では頸部の屈曲が認められるが、外面ではほとんど広がらず、口縁がほぼ直立するもの。253は外面をヘラミガキしており、壺の肩部付近と推定される。きわめて厚手で、かなりの大型品であろう。施文は2条の沈線間を一定単位で方向を変える斜行文でうめる文様帯、2条の沈線文帯、竹管連続刺突文帯で構成され、まだ上へ続いている可能性がある。文様の類例は中国地方に多く見られ、また、胎土や器面の焼き上がりに密な感じがなく、他と大きく異なることから、搬入品の可能性もある。254は胴部下位が強く張り出し、そこから徐々にすぼまって行く、袋状の長い口縁部が付く壺であり、明瞭な頸部を持たない。全面にヘラミガキ調整を行うが、内面の胴部上位については粗い。内面の胴部下位から底面についても磨いているが、成形がなされてしまってから磨くのは物理的にも難しいであろう。可能な方法としては第一に、口縁部を接合する前に磨く。第二に、広口の口縁部を付し、磨いた後絞り込むなどが考えられよう。255は壺の胴が張り出した部分で、凸帯を付ける。凸帯は垂直・水平の2方向に面をとり、それぞれに上下2段の列点を巡らしている。256は細く長い頸を持つ壺の口縁部であり、ゆるやかに広がって行き、端は細める。全面ヘラミガキ調整で、口縁部の中位に沈線1条、端近くに2条を施している。257は小型の壺で、口縁部を欠く。胴部の上下ではっきり調整が異なり、その境界が接合痕とほぼ対応することから、完全に分割して成形･調整が行われたものと思われる。258は底部である。きわめて厚い平底で、胴部はかなり張り出すものであろう。253とは同一個体の可能性がある。

鉢形土器（第49図262・263）

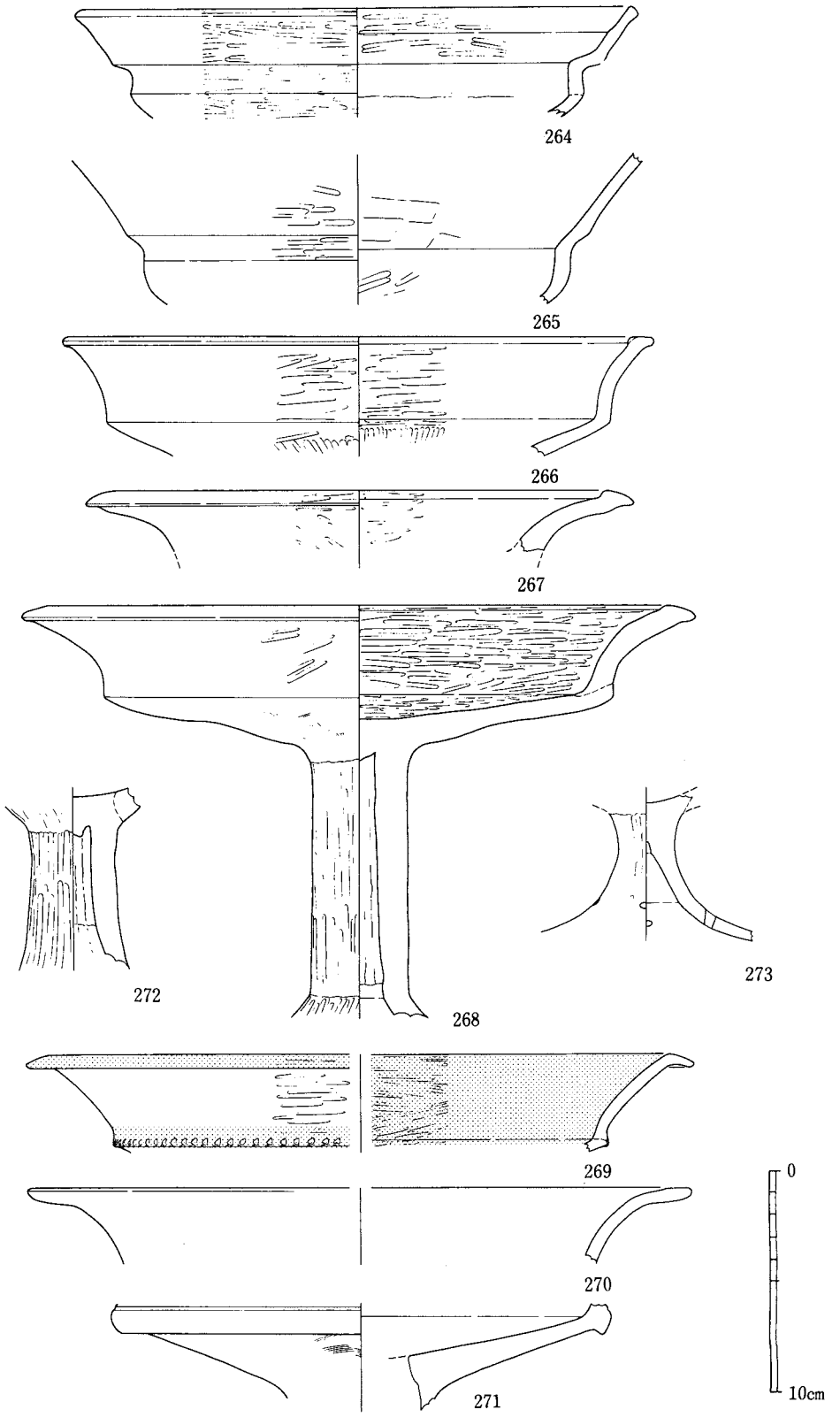
262は小型の鉢で、上端は屈曲して広がる口縁部に狭い口縁帯が付いている。内外面ともヘラミガキ調整である。263はよく伸びた有段口縁を持つ。口縁帯は中位のみ擬凹線を施し、他は無文帯としている。調整は胴部外面粗いナデ・内面ヘラケズリ、他はヨコナデである。

蓋形土器（第49図260・261）

260はくぼみが深いつまみしか遺存しないが、かなり大型の蓋と推定する。261はやや内湾してひらくため、器高が少し大きくなる。内外面ともに丁寧なミガキ調整である。

高坏形土器（第50図、第51図277～281）

坏部は全て有段である。264･265は丸みの付いた坏底部を持ち、段部が抉れるもの。264は一度ほぼ水平に屈曲してから立ち上がって直線的に伸び、端部で面を取るもの。坏底部内面に接合痕を残す。265は口縁部が直線的に長く伸びている。266～270は直線的な坏底部から短めの口縁部が立ち上がり大きく外反するもの。266は口縁端部を内外へ肥厚し、ほぼ水平に面を取る。267は厚



第50図　出土遺物実測図(19)　(S＝1/3)

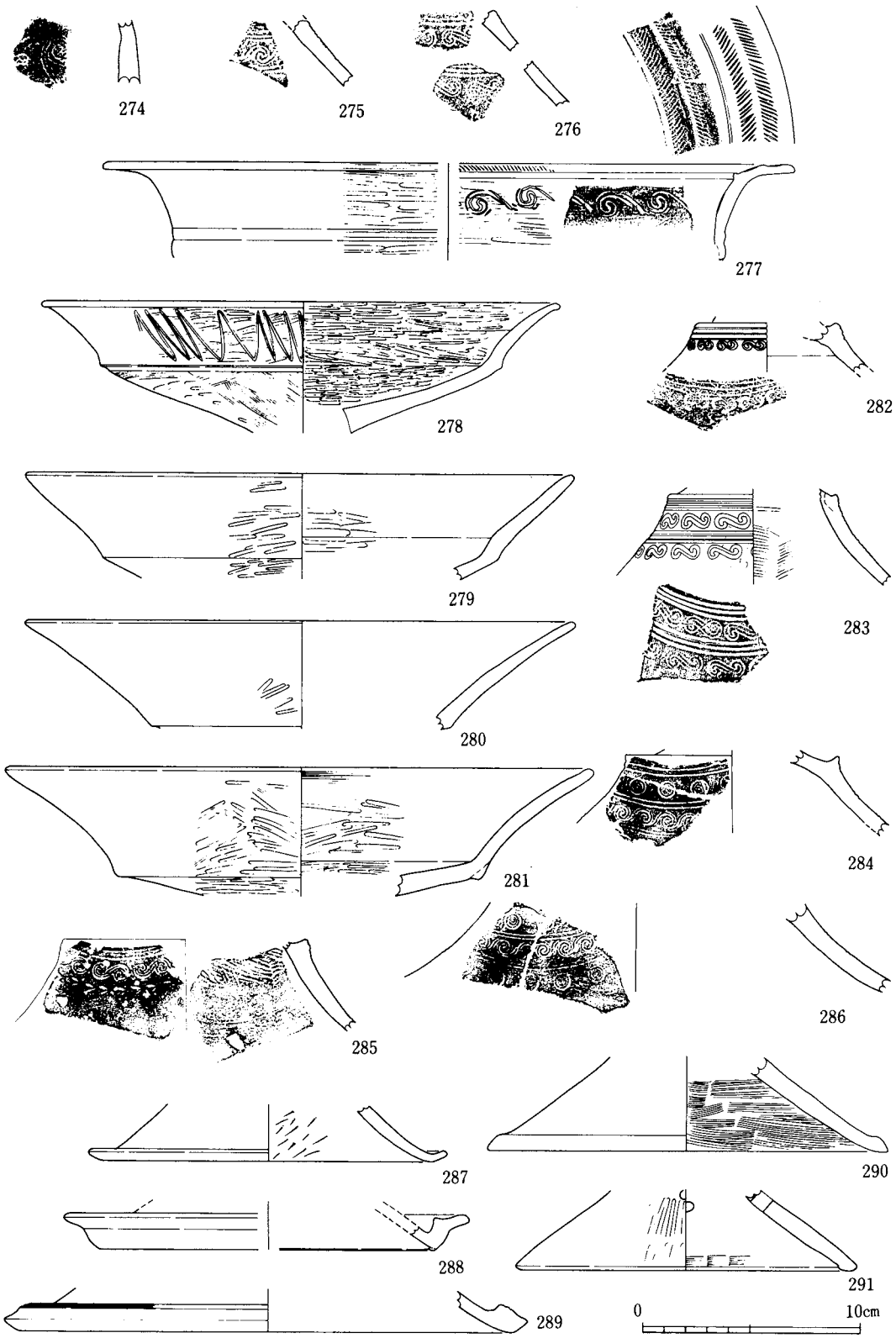
手で、口縁端部の直下を内外面ともヨコナデでへこませており、結果として端部の如意状に突出した外面下がりの面が強調されている。268は坏部径30cmを超える大型品で、支柱も遺存しており、きわめて重厚なつくりである。器壁が厚いため、坏口縁端部は外面下がりの広い面を肥厚なしで取っている。坏底部がほぼ平坦で広く、対照的に口縁部は短く、身の浅い坏に、棒状の支柱が付く。269は口縁部を外面下がりに折り返している。全面に赤彩痕が見られるが、内面と外面段部、端部の面は特に鮮やかで、製作時から濃淡の塗り分けができていたものと推定する。他、口縁部内面に渦巻状の赤彩が認められ、段部は棒状具により上下2段の刻みを巡らすなど加飾に富む。270はほぼ水平まで外反する口縁端部に面を取る。271は坏底部が遺存するが、段部が凸帯状であるなど、特異な形態を呈し、254・255のような壺の可能性もある。272・273は坏底部が遺存する支柱である。273は脚が外反して大きくひらいて行くもので、小型品と推定する。277は坏部径30cmを超える大型品で、きわめて加飾に富むもの。大きく外反する口縁の端部内面の下位と中位を細く凸帯状に肥厚するが、細かいハケ状具による斜行刻みを仕切りごとに交互方向で施し、その下位には径1cm程の大型の渦状スタンプ文を施している。278～281は口縁の伸長と外傾・外反が著しく、比較的薄手なものである。278は口縁部外面に振幅の大きい1条の波状文を施し、端部は外面に引き出す。外面の坏底部はハケが残り、丁寧な調整とはいえない。280・281は口縁の伸長が大きく、特に281などは相対的に坏底部が小さく見える。

器台形土器（第52図292～301、303・304）

292～296は有段の器受け部で、外傾もしくは外反する口縁部に擬凹線もしくは沈線を持つもの。292は器受け部径25cmを超える大型品で、ゆるやかに外反する口縁部に細い擬凹線を持ち、端部を内面に折り返し気味に若干肥厚している。内外面は赤彩される。293は同一個体の器受け部と支柱であろう。段部は重厚だが、内面は無段で、なめらかに支柱へつながるようだ。やや摩滅している。294は口縁部が外反しよく伸びて身の深い器型に、1条ずつ引いた多条沈線を持つ。295は、短めで直線的な口縁が大きくひらくため、身が浅い。内外面赤彩である。296は器受け部径25cmを超えるであろう大型品で、外反する口縁部は先細りになり、1条ずつ引いた多条沈線を施している。内外面は赤彩される。297～300は脚部で、297～299は擬凹線もしくは沈線を持つ有段脚、300は無段脚である。297は外反してひらく重厚なつくりで、脚径18.8cmを測る。段部は強く突き出るためさらに厚い。施される擬凹線は細い。298は幅の広い有段部が外反してひらくもので、径の割に背が高い。段部直上に透かしを持つようである。1条ずつ引く細い多条沈線を持つ。299は幅の狭い直線的な有段部に太い支柱が付き、全体に重厚なつくりである。300は外反してひらき、端部に面を取り、わずかに下方へ折り返す。透かしを持つようである。301は支柱である。303・304は大型で有段の器受け部で、加飾に富むもの。同一個体の可能性が高い。摩滅しており、調整等は不明瞭である。303の施文は外反する口縁部に上から沈線帯・渦状スタンプ文帯・鋸歯スタンプ文帯・沈線帯と展開する。304の施文は、先端を欠くが上から渦状スタンプ文帯・沈線帯・鋸歯スタンプ文帯・沈線帯と展開する。

脚部・支柱（第51図274～276、282～291、第53図302）

高坏か器台か判別しがたいものを集めたが、大半は高坏と思われる。274は線刻で蕨手文を施す



第51図　出土遺物実測図⑳　(S＝1/3)

もの。275・276・282～286は沈線とスタンプ文で加飾される有段脚である。282・283の施文は沈線帯と渦状連結スタンプ文帯で構成される。284のスタンプ文は上が同心円状、下が渦状を1個ずつ押圧したのち線刻で連結させたものである。285の文様帯は上から、沈線帯、渦状連結スタンプ文帯、ヘラ状具による矢羽根状列点文帯である。286のスタンプ文は上と下が同心円状、中が渦状を1個ずつ押圧したのち線刻で連結させたものである。287～291・第52図302は無段脚であろう。287・288は端部を折り返すもので、288はさらに水平方向に拡張する。289は端部を凸帯状に肥厚している。290・291は直線的にひらくもの。290は端に面を取る。291は透かしを持つ。302はラッパ状に脚部へ広がり、端部に面を取るもの。やや摩滅している。

台付き土器（第49図259、第52図305）

高坏と器台以外に付く台をまとめた。259は台のみが遺存し、端部径7.6cmを測る。外反してひらくがあまり広がらない。外面と土器身の底面が磨かれていることから、装飾壺等の台と推定する。305は台付き鉢である。鉢部はわずかに内湾しつつ大きくひらくもので、台部は直線的にひらく。調整は台内面がナデ、それ以外は全てヘラミガキである。鉢の外面が赤彩される。

その他（第52図306～308、第55図2～4・7・11～13、第56図17・21・22）

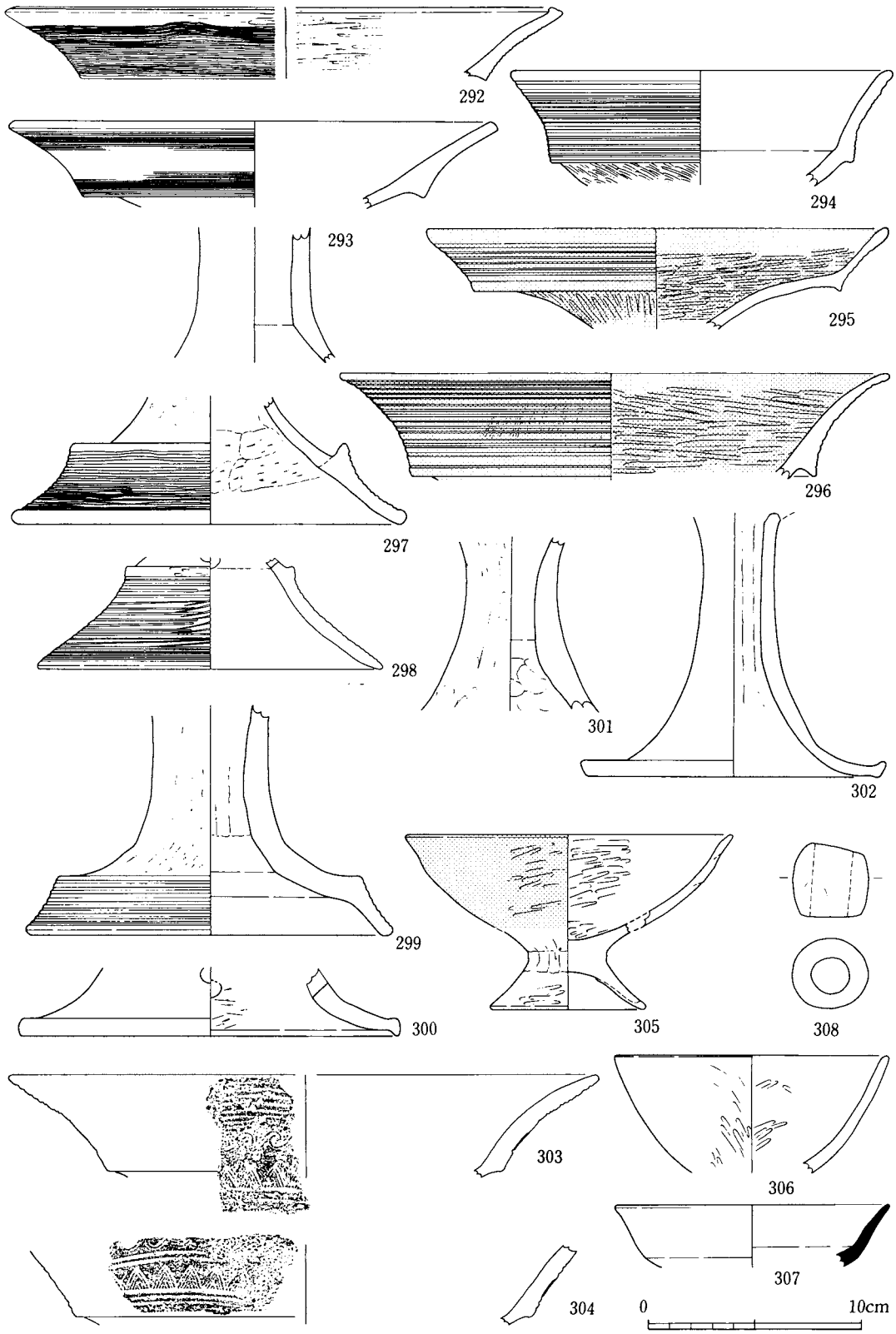
306はわずかに内湾しながらひらく薄手の器型で、弥生土器にはあまり例がなく、調整は雑なミガキであることから古墳時代に降る鉢としたい。307は須恵器の無台坏である。口径のわりに器高が小さい偏平な器型で、口縁は先細りしながらひらく。奈良時代、8世紀中葉の年代が与えられる。308は土錘である。重さ28.8gを測る。第55図2は花崗岩質砂岩の凹み石であり、半分以上欠けている。3は2と同じ石材であり、すり石・凹み石の類であろうが、大半を欠損する。4は砂岩か凝灰岩の長細い敲石で重さ1425.1gを測る。両端共に敲打痕が見られる。7は白色凝灰岩で、面がきれいに擦られており、角形の砥石と推定する。11～13は軽石である。11・13は擦痕や穿孔が観察できる。12はそれらが明確でない。第56図17・21はグリーンタフの剥片で、玉未製品である。17は重さ0.5gを測り、管玉の角柱に近づいた段階のものである。21は重さ6.1gを測り、原石からのあら割りの段階で生まれた剥片であろう。22は含鉄フリントの剥片であり、色調は赤褐色を呈し、重さ22.8gを測る。形態的にはスクレイパー状であり、薄い部分に刃部状の軽い調整を行っている。

2．B調査区（竹松D遺跡）の遺物

その大半は古墳時代の土師器である。ただし319・329・330・333・337は弥生時代から古墳時代への過渡期前後の土器であるので、あえて土師器とは呼ばない。また、338は古墳時代の須恵器、339は中世の珠洲焼陶器である。

SK－B1（第53図309～318、第55図1、第56図24）

309～314は甕形土器である。309～311は厚手のつくりで、やや立ち気味のくの字口縁と、雑な成形・調整を行うもの。309は口縁端を弱くつまみ上げる。310は、胴部と比較すると薄手の口縁部の内面にヨコハケをはっきりと残す。311は胴長の器型で前2者より小型品である。ハケメは観察できない。312・313は口縁端部に独特の肥厚を行う畿内布留式土器の系譜に連なるものである。



第52図　出土遺物実測図(21)　(S＝1/3)

312は遺構内ではなく、検出面からの出土である。肩部に一本引きの波状文を施し、胴部外面のヨコハケ・内面のヘラケズリ調整とも徹底している。314はくの字口縁を持つきわめて小型の甕もしくは鉢形土器であろう。全体的に厚手のつくりで、成形も調整も雑である。315～318は高坏形土器である。315は坏部、器面調整はハケのちナデであり、外面ではハケを残している。316～318は支柱から脚部である。全体に器高が小さく、屈曲して広がる脚部はなお低平である。316は下方にふくらみながらゆるやかに広がる支柱に大きく屈曲して広がる脚部がつく。器外面はハケのちやや雑なヘラミガキで仕上げている。317は全体に厚手のつくりで、下方へゆるやかに広がり、支柱と脚の境界は不明確である。器外面はナデとヨコナデで仕上げている。318は坏下半部も遺存している。支柱はほぼ棒状でわずかに下方がふくらむ。脚部はほぼ水平に屈曲し接地面が広いものである。器外面はナデとヨコナデで317より丁寧に仕上げる。

土器以外の遺物としては石器と木製品がある。第55図1は安山岩系の石器で、重さ82.8gを測る。長楕円形の小型のすり台状の製品と推定できるが、側面に敲打痕があり、たたき石にも使われたようだ。第56図24は木製品で、用途は不明である。心棒全体にかかっていた漆の被膜が、端のみに茸の笠状に残ったものと推定する。乾燥し、重量3.2gと軽い。

ＳＫ－Ｂ２（第54図322～327）

322・323は甕形土器であり、どちらもくの字口縁を有する。322は端部に取った水平面がわずかに肥厚気味になる口縁部と、球形の胴部からなる。323は口縁端部が内方へわずかに肥厚する。322・323とも口縁部の肥厚やヨコナデは布留系甕に類似するが、直線的な口縁、歪んで接合痕を残す雑な成形、ハケ調整などについては大きく異なる。324～326は高坏形土器で324・326は坏部、325は脚部である。324は口縁が直線的に広がって身が深くなる坏部である。薄手のつくりで、調整は雑なナデである。326は口縁が外反し、坏身が324より浅くなる。調整はナデであるが、一次調整のハケは完全に消し去られていない。325はゆるやかに下方へふくらむ重厚な支柱に、ほぼ水平に屈曲して広がる脚がつく。327は鉢形土器であり、内湾する口縁部は径16.6cmを測る。外面に接合痕、内外面の一部にミガキ調整が観察される。

ＳＤ－Ｂ１（第53図319・320）

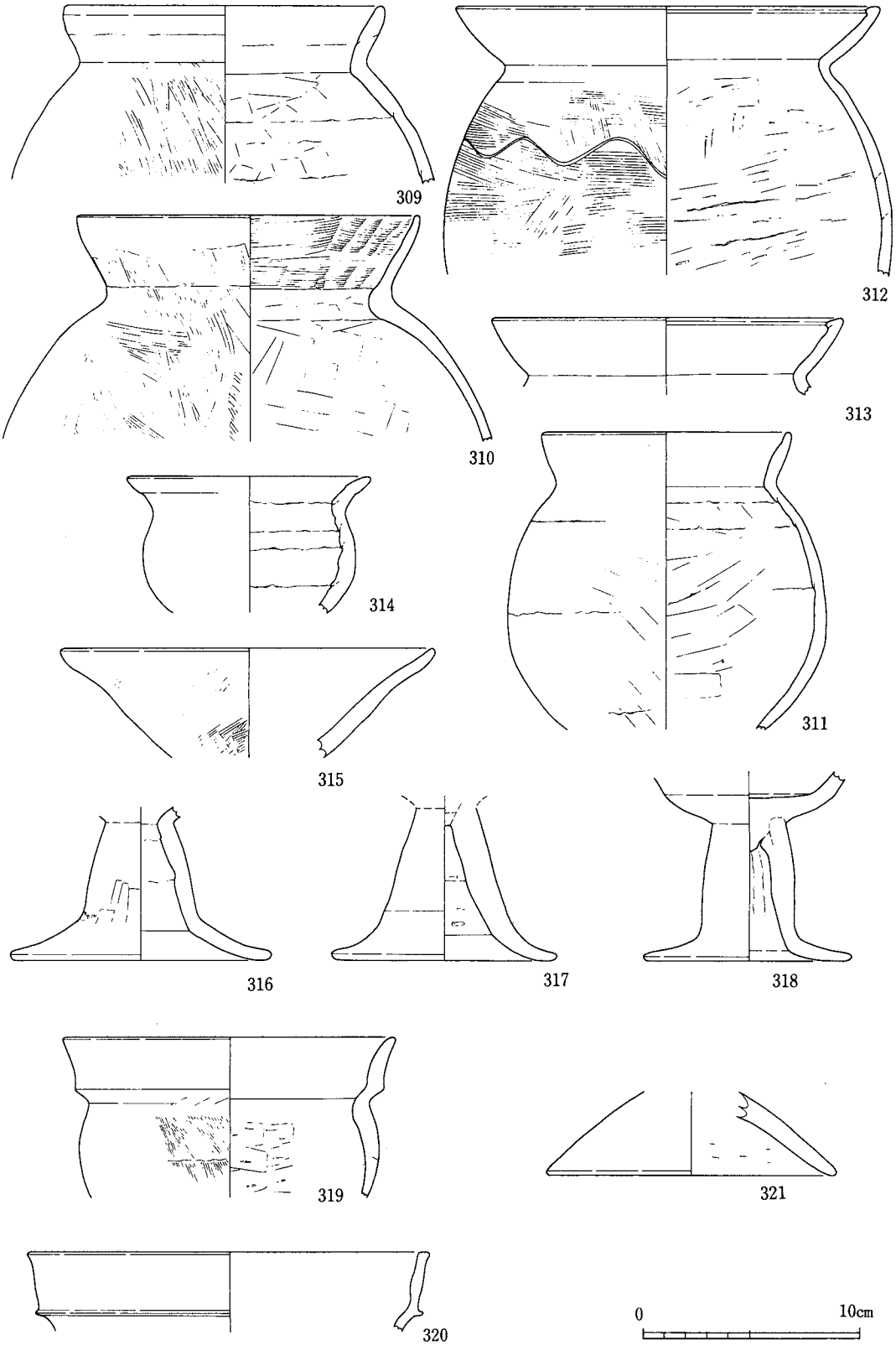
319・320は甕形土器である。どちらも有段口縁を呈するが、319は在来系の有段口縁で擬凹線を持たない土器、320は外来の山陰系土器の系譜に連なるものである。319は口径を最大径とし胴がほとんど張らない器型から、法量的にやや小さいものであろう。胴部に接合痕を残す。

ＳＤ－Ｂ５（第53図321）

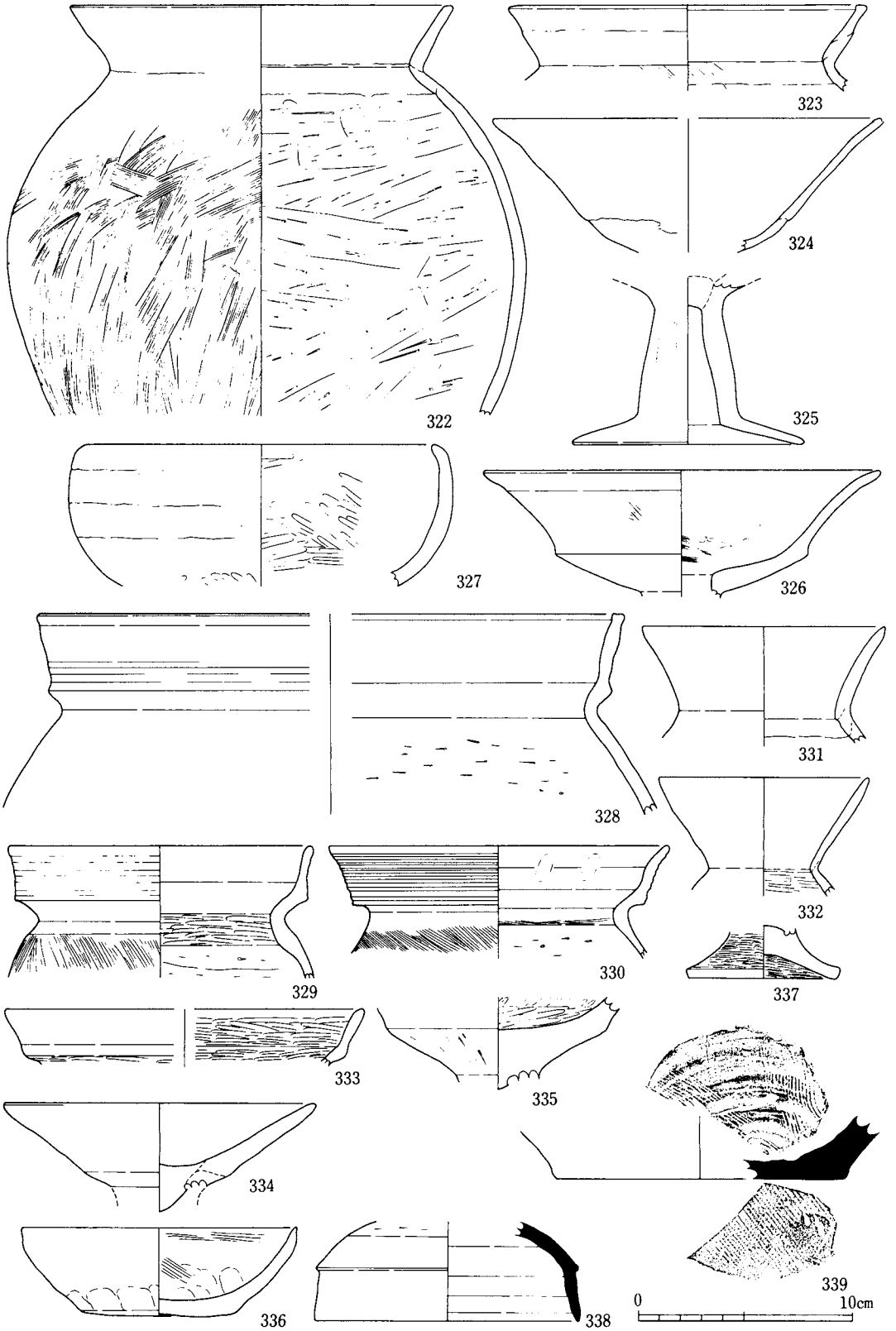
321は遺構内のものではないが、近接して遺構面から出土したので、関係の深いものとしてここに掲載する。321は高坏の脚部であろう。ヨコナデを多用する粗雑な調整を行う。

包含層・遺構検出面（第54図328～339）

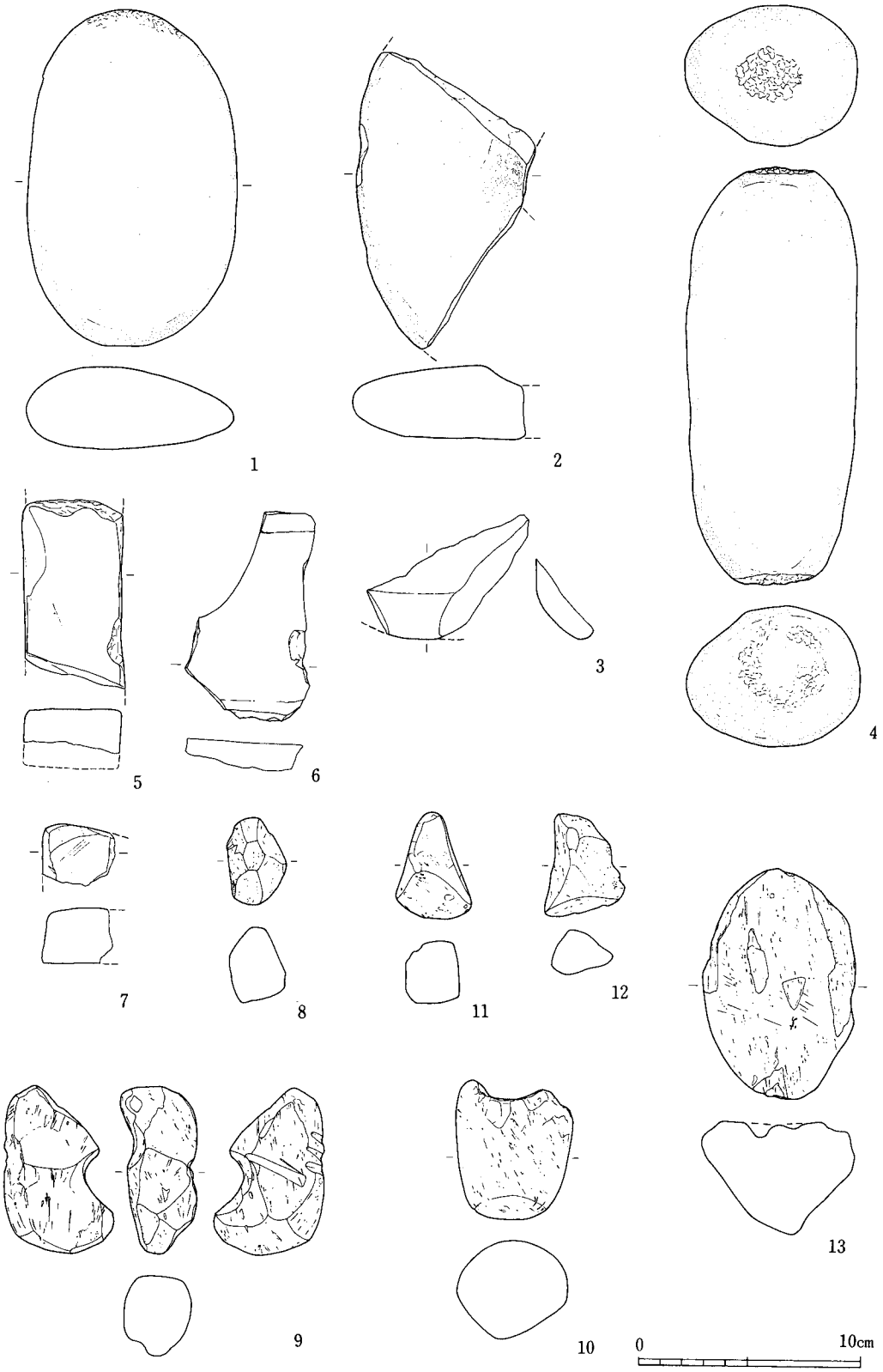
328～330は甕形土器である。328は大型品であり、山陰系土器の系譜に連なるものであるが、有段口縁の稜など随所に鋭さを欠く。329・330は発達した有段の口縁帯に擬凹線文を持ち、「月影式」以来の北加賀の在来系の土器である。どちらも比較的薄手のつくりだが、口縁部・頸部の形態に差異が見られる。329は口縁帯が直立し、屈曲が明確な頸部はその内面に粗い横方向のヘラミガキ



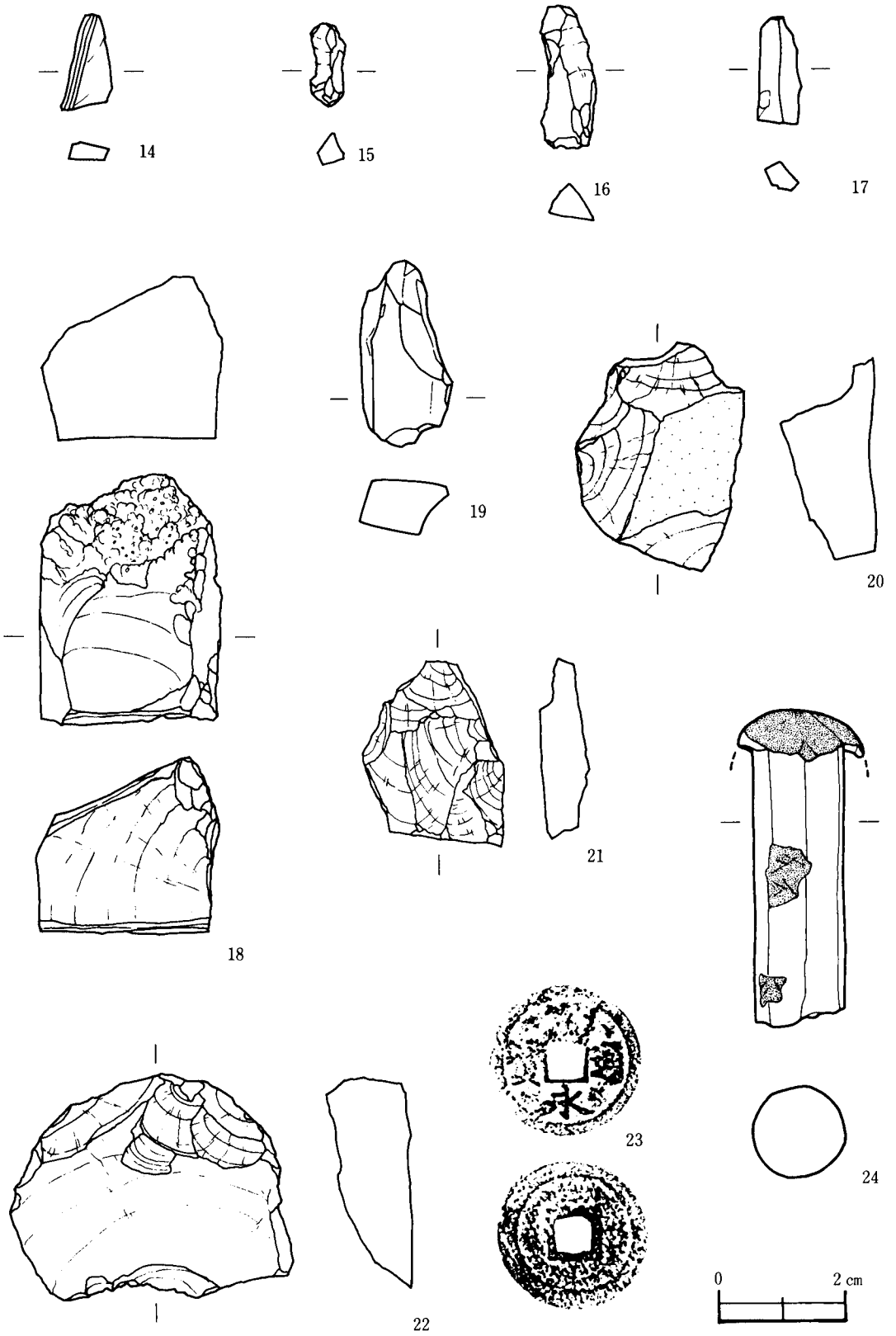
第53図　出土遺跡実測図(22)　(S＝1/3)



第54図　出土遺跡実測図(23)　(S＝1/3)



第55図　出土遺物実測図(24)　(S＝1/3)



第56図　出土遺物実測図(25)　(S＝1/1)

図No.	出土位置	図No.	出土位置	図No.	出土位置
	A調査区遺跡検出面・包含層	182	A130～140 包含層	216	A160～170 近代(？)川フク土
		183	A270～280 包含層	217	A116～130 包含層
		184	A210～220 包含層	218	A180～190 包含層
151	遺構検出面	185	A150～160 包含層	219	A70～80 包含層
152	A238 遺構検出面西	186	A130～140 包含層	220	A210～220 包含層
153	A238 遺構検出面	187	A270～280 包含層	221	A170～180 包含層
154	遺構検出面	188	A131 包含層	222	A130～140 包含層
155	A236 遺構検出面	189	包含層	223	A220～230 包含層
156	A235～240 遺構検出面	190	A310～320 包含層	224	A272 包含層
157	A140～150 遺構検出面	191	A170～180 包含層	225	A190～200 包含層
158	A235～240 遺構検出面	192	A130～140 包含層	226	A130～140 包含層
159	A240～245 遺構検出面	193	A130～140 包含層	227	A130～140 包含層
160	A238 遺構検出面	194	A120～130 包含層	228	A270～280 包含層
161	A236～238 遺構検出面	195	A70～80 包含層	229	A80～90 包含層
162	A240～248 遺構検出面	196	A180～190 包含層	230	A116～130 包含層
163	A236～238 遺構検出面	197	A116～130 包含層	231	A116～130 包含層
164	A236 遺構検出面	198	不明	232	A200～210 包含層
165	A140～150 遺構検出面	199	A310～320 包含層	233	A130～140 包含層
166	A236 遺構検出面	200	A170～180 包含層	234	A170～180 包含層
167	A237 遺構検出面	201	A210～220 包含層	235	A240～250 包含層
168	A236 遺構検出面	202	A130～140 包含層	236	A280～290 包含層
169	A236 遺構検出面	203	包含層	237	包含層
170	遺構検出面	204	A130～140 包含層	238	A130～140 包含層
171	A235～240 遺構検出面	205	A130～140 包含層	239	A230～240 包含層
172	A235～240 遺構検出面	206	A130～140 包含層	240	A130～140 包含層
173	A230～240 包含層	207	A180～190 包含層	241	包含層
174	A170～180 包含層	208	A140～150 包含層	242	A220～230 包含層
175	A90～100 包含層	209	A210～220 包含層	243	A130～140 包含層
176	A140～150 包含層	210	A160～170 包含層	244	A130～140 包含層
177	A220～230 包含層	211	A80～90 包含層	245	A120～130 包含層
178	A170～180 包含層	212	A116～130 包含層	246	A150～160 包含層
179	A270～280 包含層	213	A90～100 包含層	247	A170～180 包含層
180	A130～140 包含層	214	A170～180 包含層	248	A280～290 包含層
181	A130～140 包含層	215	A279 包含層	249	A190～200 包含層

第6表 昭和63年度調査区遺物出土位置一覧表(1)

図No.	出土位置
250	A190～200　包含層
251	A130～140　包含層
252	A210～220　包含層
253	A130～140　包含層
254	A210～220　包含層
255	A150～160　包含層
256	A140～150　包含層
257	A131　包含層
258	A130～140　包含層
259	A197　包含層
260	A210～220　包含層
261	A220～230　包含層
262	A210～220　包含層
263	A130～140　包含層
264	A140～150　包含層
265	A220～230　包含層
266	A234　包含層
267	A220～230　包含層
268	A141～142　包含層
269	A220～230　包含層
270	A280～290　包含層
271	A270～280　包含層
272	A210～220　包含層
273	A208　包含層
274	A150～160　包含層
275	A230～240　包含層
276	A200～210　包含層
277	A150～160　包含層
278	A131　包含層
279	A220～230　包含層
280	A320～330　包含層
281	A160～170　近代(？)川フク土
282	A190～200　包含層
283	A200～210　包含層
284	A116～130　包含層
285	A116～130　包含層
286	A116～130　包含層
287	A320～330　包含層
288	不　明
289	A230～240　包含層
290	A130～140　包含層
291	A220～230　包含層
292	A150～160　包含層
293	A140～150　包含層
294	A116～130　包含層
295	A130～140　包含層
296	A130～140　包含層
297	A130～140　包含層
298	A220～230　包含層
299	A141～142　包含層
300	A210～220　包含層
301	A130～140　包含層
302	A278　包含層
303	不　明
304	A230～240　包含層
305	A200～210　包含層
306	不　明
307	A456　包含層
308	A495　たちわり
	B調査区遺構検出面・包含層
328	B100～110　包含層
329	B15～30　包含層
330	B60～70　遺構検出面
331	B90～100　包含層
332	B110～115　包含層
333	B340～350　包含層
334	B90～100　包含層
335	B70～80　包含層
336	B40～50　包含層
337	B80～90　遺構面
338	B180～190　地山レキ層直上
339	B110～115　包含層
	石器・石製品他
1	SK－B1
2	A140～150　包含層
3	A80～100　包含層
4	不　明
5	SD－A4
6	A236～237　遺構検出面
7	A90～100　包含層
8	SI－A9
9	SI－A4
10	A236～237　遺構検出面
11	A120～130　包含層
12	A140～150　包含層
13	A130～140　包含層
14	SI－A9
15	SI－A9
16	SX－A3
17	A270～280　包含層
18	SK－A5
19	SI－A3b　上部
20	SD－A4
21	A90～100　包含層
22	A140～150　包含層
23	SI－A6　検出面
24	SK－B1

第7表　昭和63年度調査区遺物出土位置一覧表(2)

を帯状に行う。330は口縁帯が外反し、内面には指頭圧痕を有する。331～333は壺形土器である。331はくの字口縁の広口壺である。厚手のつくりで、頸部以下は接合痕が内面に残る。332は胴部下半を欠損するが、丸底の直口壺と推定できる。薄手のつくりで、胴部内面はハケ調整、それ以外の部位はヨコナデとナデを行うようである。333は有段口縁を呈するもので、内外面ともヘラミガキ調整であることから壺とした。334・335は高坏形土器で、共に坏部である。334は大きく外傾して直線的に伸び、身は深くない。全面ナデ調整である。335はきわめて厚手の坏底部のみ遺存する。336は椀形土器である。指頭圧痕や凹凸のある仕上げの平底など、つくりは丁寧とはいえず、定型化には至っていない。337は台付き土器の台部で、完存している。これより上はすぐ土器身となり、低平で安定感がある。338は口径推定12.6cmを測る須恵器坏蓋である。厚手のつくりで、天井部と口縁部の境界は突出するが、弱い。口縁部はやや低平でわずかにひらく感じで端部は強く外面へ下がる面を取る。器面はロクロナデ調整で仕上げるが、天井部外面のみロクロヘラケズリを行っている。338はこれらの特徴から和泉陶邑窯MT15型式、6世紀前半の年代が与えられる。胎土からは在地窯産出品と推定でき、その出現時期とほぼ一致するものと言える。339は珠洲焼陶器の片口鉢底部である。内面には12条以上の単位のオロシメを入れ、底部は静止糸切りを行っている。オロシメの形状や密度等の特徴から珠洲III期、13世紀後半の年代が与えられる。

第4節　ま　と　め

1．A調査区（竹松C遺跡）について

A調査区では、竪穴住居跡10軒、土坑約30基、溝4条、落ちこみ6基を検出した。うち、SD－A1、SK－A1を除く遺構の大半は、土坑等に出土遺物が少ないものがあって完全にはいえないが、弥生時代後期後半に築かれたものと考えてよい。遺構内外からの出土遺物も圧倒的に弥生土器が多く、他の時期の遺物は包含層中に須恵器や陶磁器が数破片認められるにすぎない。きわめて短期間のうちに営まれた遺跡といえよう。

遺構はA－91～324にかけて確認され、集落の範囲は南北約230mと推定できる。10軒の竪穴住居跡については、全掘できたものはないが、1軒がある程度以上の間隔をおいて配置されていることが確認できた。複雑な切り合いや、密集した感じはない。SI－A3a・3bについては住居の拡張が行われたもの、SI－A9については焼失したものと見ている。他の遺構についても全掘できたものは小土坑やピット程度である。切り合うもので、新古が判定できるものはA－230付近のSI－A4（古）・SD－A2（新）ぐらいであり、他のものは不明確であるが、複雑な切り合いをなすものはほとんど存在しないようである。このような遺構の状況は、存続期間の短い集落でもあり、機構的な改変が少なかったことを傍証するものと考えられよう。

出土遺物の大半を占める弥生土器について、遺構・遺構検出面・包含層出土品のほぼすべてが弥生後期後半、法仏式の範疇におさまる点は特筆できよう。さらに、竪穴住居跡SI－A3などを典型として他の竪穴住居跡・土坑・溝などの遺構の大半に見られる様相は、甕・高坏・器台などには重厚な古い形態のものが多く、次代の弥生時代終末へ連なって行く要素が少ないことから、

後期後半でも比較的古相に比定できるものと思われる。出土土器が多量な落ち込みＳＸ－Ａ３・Ａ４および遺構検出面や包含層出土土器については、流入性が高い遺構のため、古相を主体とするが新相も混在しているものと考えている。全体的には、新しい形態・系譜の器種がきわめて少ないことから、Ａ調査区出土土器の中心時期は後期後半の古段階に位置付けられるであろう。

北加賀の弥生後期後半の標式土器である法仏式については、きわめて豊富な器種のバリエーションを有し、新古の形態が混在する漸移的な変化が進む時期と理解されている。その細分の指標の設定はきわめて難しい問題であるので、第９章で改めて検討することにしたい。

また、本調査区ＳＸ－Ａ３から漆を用いた補修痕のある高坏が３点確認されている(1)が、土器のこう着財を用いる補修については第４章で検討がなされているので参照してほしい。

Ａ調査区で検出した遺構はおそらく竹松Ｃ遺跡の中心的な集落の一部であり、弥生時代後期後半の集落跡を、調査区が縦断したものと推定される。松任市域、特に手取川扇状地扇端部の遺跡は礫原・河道・低湿地が複雑に交錯する紡錘形の島状地形の中の微高地上に立地するのを常とし、本調査区では特に顕著であったが、長期定住に及ぶものが少ないこともおおよそ共通している。そして、弥生後期からまとまった集落が確認され、特に後期後半以降遺跡数が増大していく傾向にあり、北加賀において重要な画期となるものと言える。さらに、石川県立埋蔵文化財センターが行った竹松遺跡群の昭和60年度・61年度・62年度の調査、松任市教育委員会が昭和62年度に行った調査でも遺構・遺物とも主体を占める時期でもあり、遺跡群の一大ピーク期と言える。Ａ調査区で確認された遺構・遺物は竹松遺跡群および扇状地扇端部遺跡の両方での遺跡のあり方と弥生文化の推移を考えるうえで、きわめて重要な事例となるものと考えられよう。

２．Ｂ調査区（竹松Ｄ遺跡）について

Ｂ調査区では、弥生時代、古墳時代、中世の遺物が出土しているが、遺構についてはほぼ古墳時代に限られ、遺物量から見ても遺跡の中心時期と考えてよかろう。調査区幅が狭いため不明確だが、遺構は周辺の溝状遺構と一連の周溝を持つ建物と推定したい。また、ＳＤ－Ｂ１とＳＤ－Ｂ４が一連のもので、削平された古墳の可能性を秘めた周溝であるとも考えられよう。

ＳＫ－Ｂ１出土土器には布留系甕、くの字口縁甕、畿内系高坏などがある。このうち布留系甕312については、形態的に斉一性が保たれた、漆９・10群(2)に併行しうる土器であるが、検出面からの出土であり、必ずしも遺構に付随するとはいえない。くの字口甕は口縁が立ち気味で、器壁は厚く、雑な調整・成形を行うものである。畿内系高坏には丁寧なミガキ調整がほとんど見られず、古い要素は少ないと考え、漆11・12群の時期に比定したい。ＳＫ－Ｂ２出土土器には畿内布留式に似て非なる甕、椀に似た雑なつくりの鉢、ミガキ調整を失った畿内系の高坏などがあり、漆12群前後に併行する時期が想定される。ＳＫ－Ｂ１・ＳＫ－Ｂ２出土土器は、該期の北加賀の土器様相が不明確な事もあり、細かい時期は限定できないが、おおよそ漆11・12群に併行する時期のものと見ることができる。Ｂ調査区については、312やＳＤ－Ｂ１・包含層出土土器に弥生後期から古墳前期前半まで溯る要素を持つものが散見するが、遺構出土遺物を重視して、古墳前期後半から中期に中心時期をもつ、Ａ調査区とは別個の遺跡像を考えておきたい。

Ｂ調査区で得られた古墳前期から中期にかけての遺構・遺物は、６年次にわたる竹松遺跡群の

発掘調査において、平成元年度及び平成2年度の調査でも確認されている。また、北陸自動車道を挟んでB調査区に近接した地区を松任市教育委員会が平成2年度に発掘調査を行い[3]、住居跡を含む古墳前期の集落跡を確認し、石製品の生産をほぼ専業的に行ったと推定される遺構・遺物が得られている。B調査区はこれらと礫層を狭んでやや距離的に離れることから、新発見の独立した遺跡と推定でき、竹松D遺跡と命名した。これらの事象から、竹松遺跡群内で該期に動向が存在することは確実であり、それは弥生後期後半と同様に、竹松遺跡群のひとつのピークを示すものと考えられるであろう。

第6章　註

1　石川県立埋蔵文化財センター主事北野博司氏の努力により、国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に調査していただいた。

2　石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡　I』1986年　での田嶋明人氏の編年観を参考にした。以下の記述についても同じ。

3　松任市教育委員会の前田清彦氏から教示を得た。調査区の位置は第25図参照のこと。時期的にはB調査区の主体的土器にやや先行する様相が強い。

第７章　平成元年度の調査（浜竹松Ｂ・Ｃ遺跡）

第１節　調査の経緯と経過

本遺跡は、県営ほ場整備事業御手洗・出城地区竹松工区平成元年度施工区に係る事前の分布調査によって新たに発見されたものである。

分布調査は昭和63年10月、平成元年１月に、作業員および重機により試掘を行い、遺跡の存在とその範囲を確認した。遺跡は大まかには４地点に中心があり、弥生時代後期～古墳時代後期のものと推定されたが、散発的、飛石的に遺物の出土する試掘地点もあってまとまった範囲としてはとらえにくい傾向があった。旧の耕地整理等による遺構面の削平、土の移動による遺物の拡散も予想された。

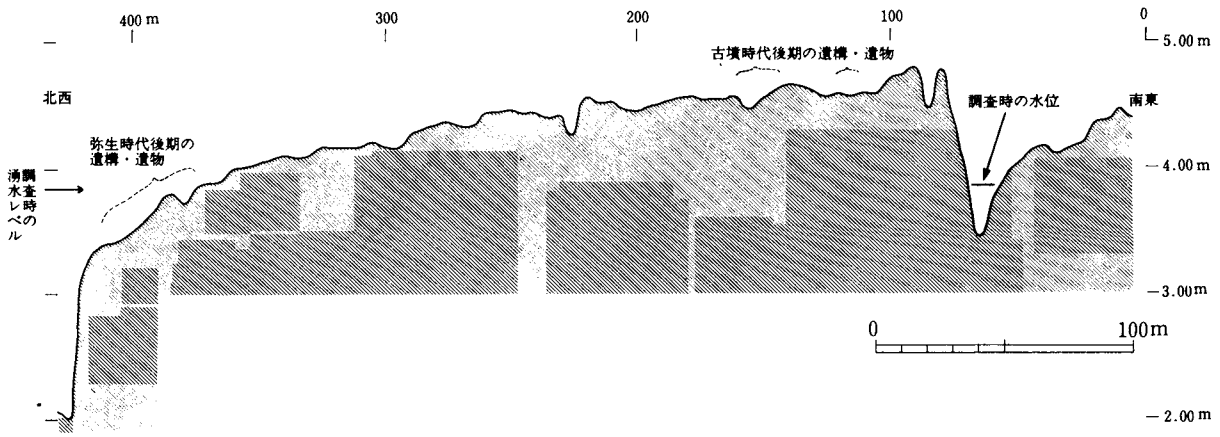
遺跡の取り扱いについては県松任土地改良事務所との協議により、面工事箇所は盛土等による保護措置を講ずることとし、掘削の深い排水路敷設箇所のみ、約860m² を発掘調査の対象とした。調査は平成元年５月８日より開始し、６月５日に終了した。

第２節　遺跡の地形と層序

１．微地形（第59図）と遺跡分布

本遺跡周辺は扇状地に特徴的な細長い尾根状の地形が発達し、遺跡は、３筋の谷地形に挟まれた２本の帯状の高まりに分布する。最も大きな地形的境界は西側の谷であり、中央部の谷は調査地点（65m 付近）で約1.3m 以上の深さを持つ。

遺跡の時期は西尾根南半が古墳時代中・後期、北半が弥生時代後期、東尾根南半が古墳時代前期、北半が弥生時代後期？をそれぞれ中心とすると推定される。



第 57 図　平成元年度調査区地形略図

第58図　平成元年度調査区位置図

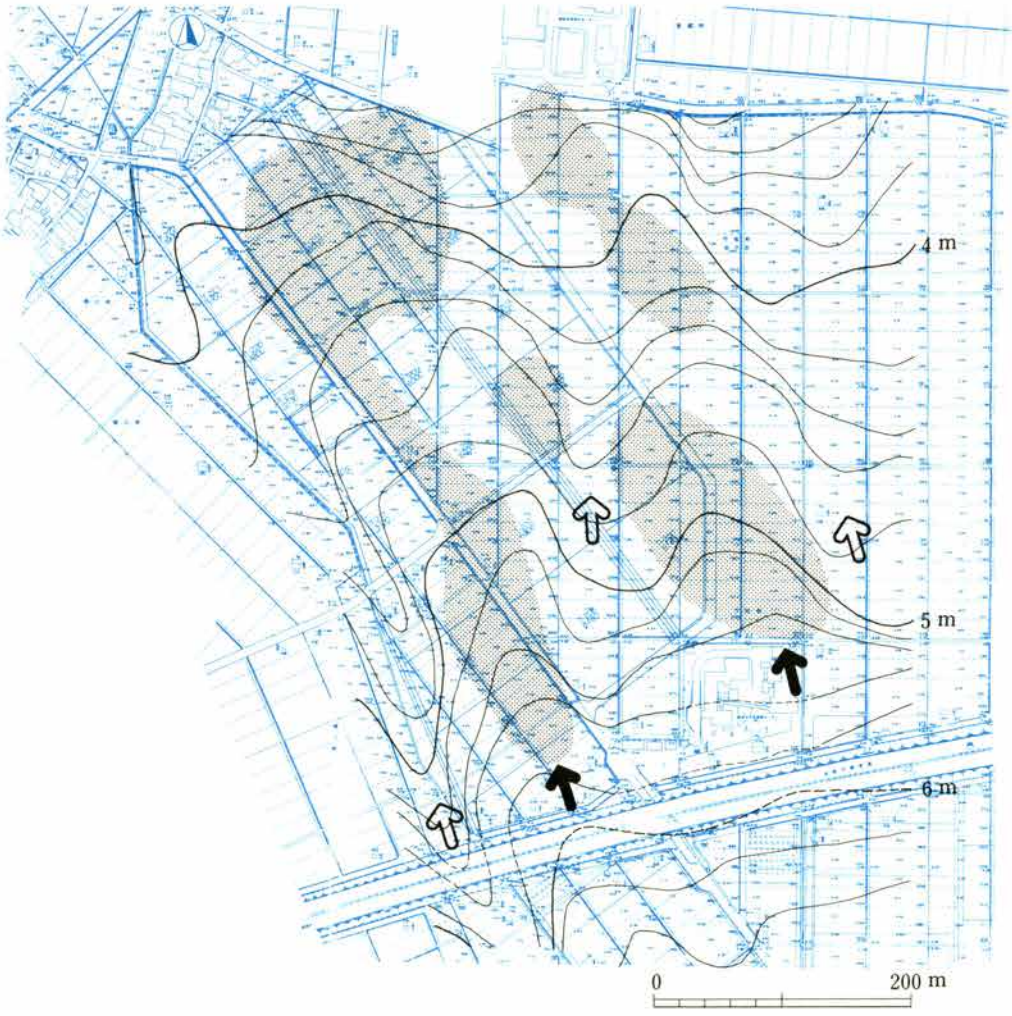
2．調査区の層序

調査区の層序は、微高地部分がほとんど削平を受けており、約15～20cm の耕土と10cm 前後の旧耕土（灰色シルト）からなる部分が多い。鞍部付近の土層を参考にすれば、その下に暗灰色シルトないしは茶灰色シルト（いずれもピート質含む場合あり）があって、中世期に形成されたものと推定された。弥生・古墳時代の包含層は微高地部分では黒褐色、地下水位の高い370m 以北では暗灰褐色の色調を呈する。北端部は急傾斜で落ちこみ、暗灰～青灰色のピート質土が堆積する。

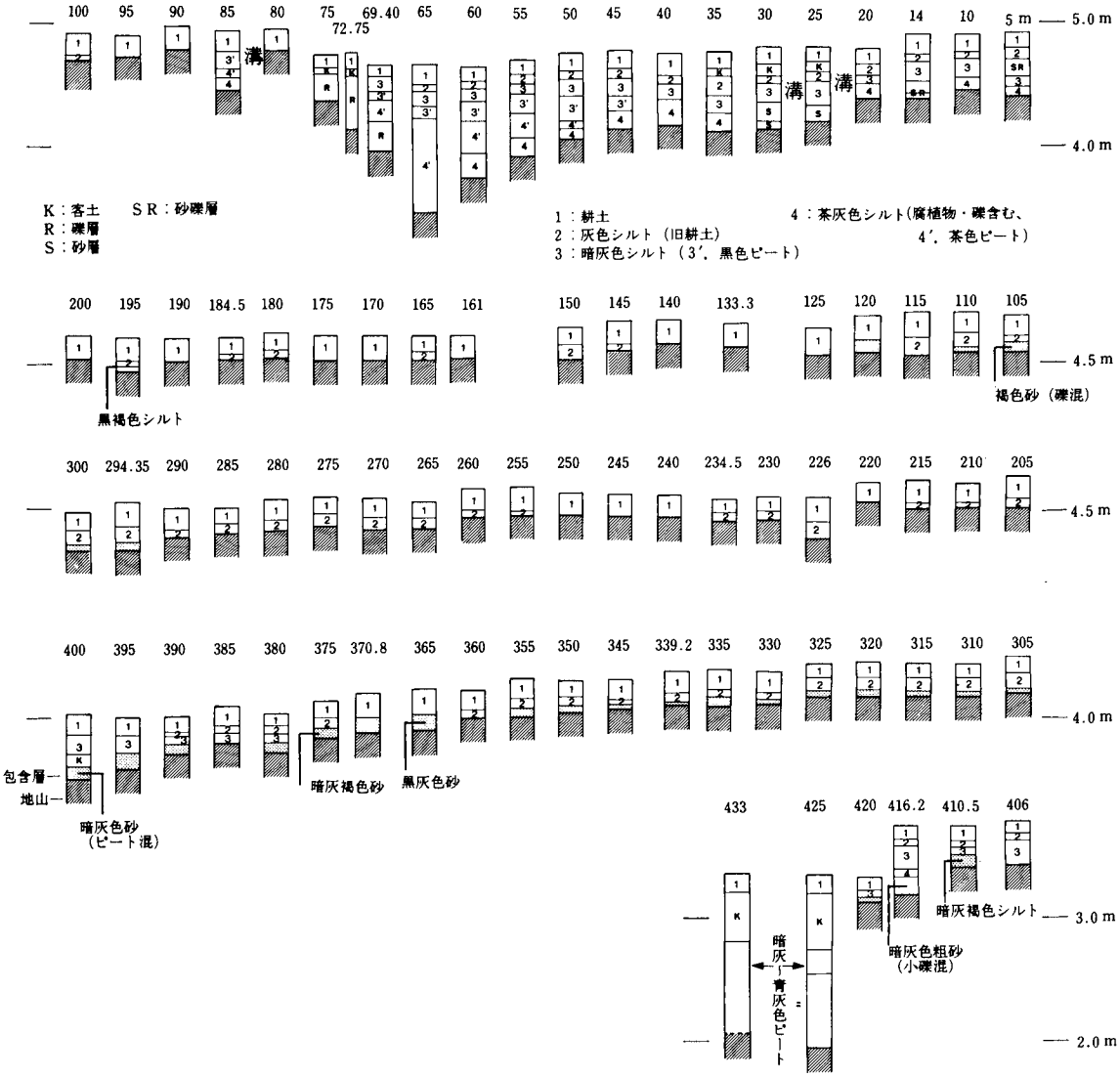
第３節　遺構と遺物

1．0～90m

南端部と13m 付近で２層直下から始まる砂礫層を埋土とする旧河道を検出した。30m 付近では、幅約0.6～1.0m、深さ0.2m の弧状を呈する溝が検出された。埋土は砂層であり、流れた形跡がある。検出層位から中世以前とみられるが出土遺物はなく、時期は不明である。その北側は緩やかに落ち込んでいき、60～65m をピークとする鞍部となる。北側の立ち上がりは比較的急で、



第 59 図　微地形と遺跡分布



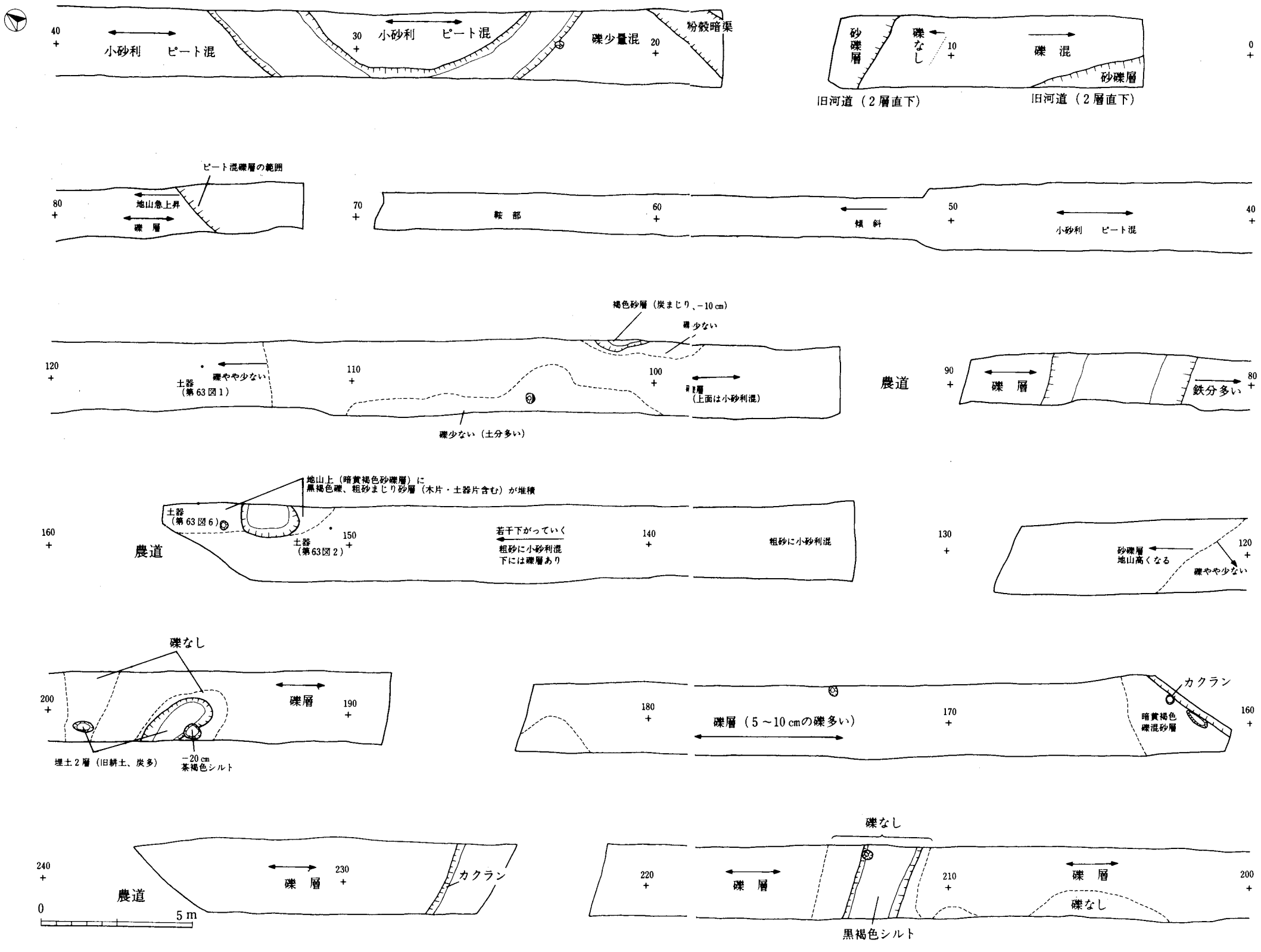
第60図　調査区土層柱状図（西壁）

68mから地山が礫層となる。調査時には標高3.85mのレベルまで湧水した。85m付近には調査区に直交する幅2.2m、深さ0.3mの溝が検出されたが、時期は不明である。

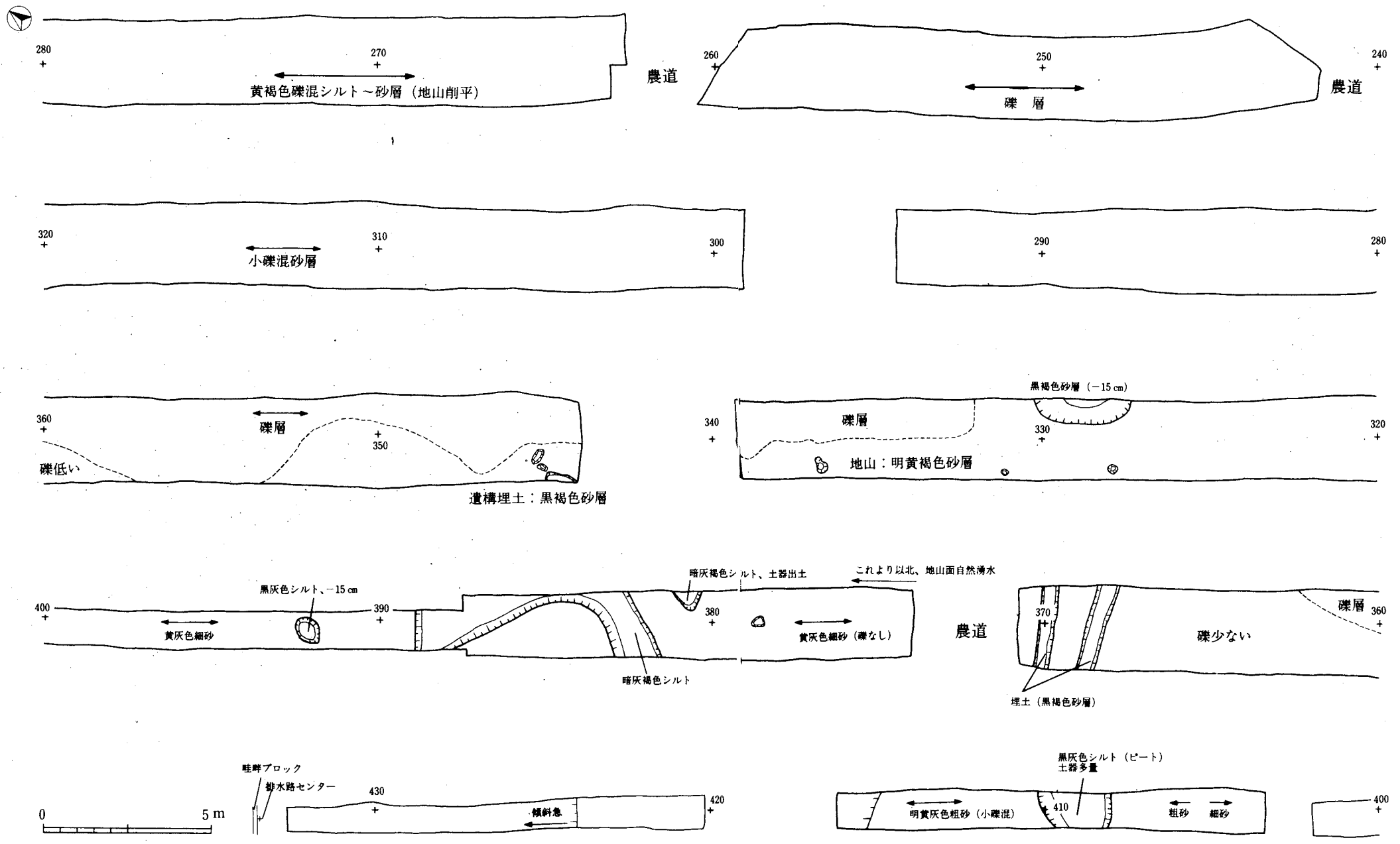
この間の遺物は、9mと20mと40m地点の4層中から磨耗した土器片が3点出土したにすぎない。その他、4層のピート質土中からは種子、木片等が多数出土している。

2．90～180m

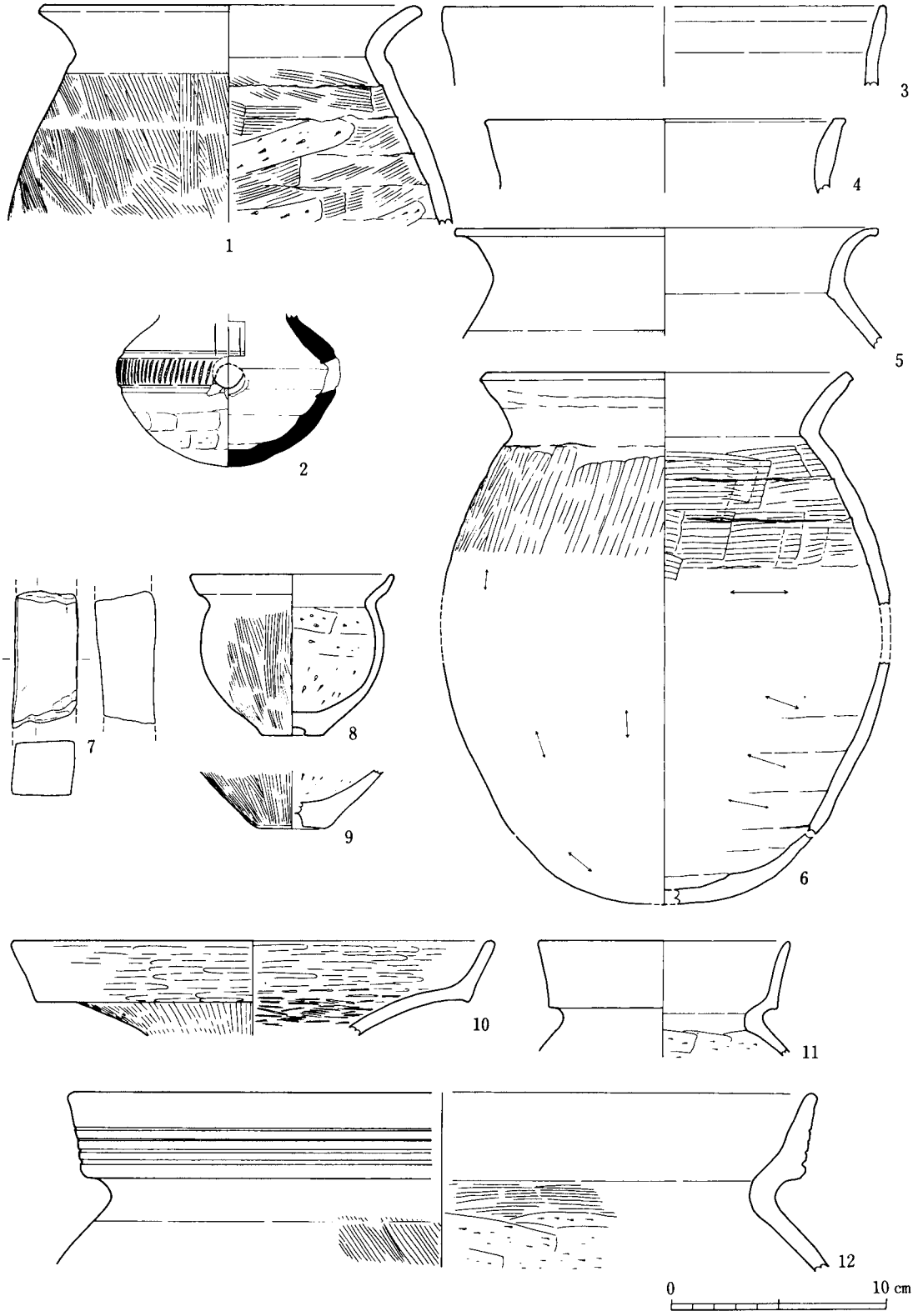
地山は礫層の露呈する部分がほとんどで、その中に不規則に土壌の存在する部分があり、少量の土器片が出土した。顕著な遺構は認められなかったが、153m付近で長径約0.8m、深さ0.15mの土坑が検出され、その周辺から比較的多く土器が出土した（第63図1～6）。いずれも古墳時代後



第61図　遺構実測図（0～24ｍ）（S＝1/150）



第 62 図　遺構実測図（240～440 m）（S＝1/150）



第63図　出土遺物実測図　(S＝1/3)

期（6世紀初頭前後）のものと考えられる。この付近の周囲に当該時期の遺跡が存在すると予想できる。

その他、中世陶器片（加賀）が2点、時期不明の紡錘形の管状土錘2点が出土した。

3．180～360m

地山は、260mまでが南側と同じく礫層を主とし、それ以北では砂層となる。330mに長径約1.2m、深さ0.15mの土坑（時期は弥生ないしは古墳）があった他は目立った遺構はない。

遺物は310～340mの耕土中から、弥生時代後期～古墳時代中期の土器片が少量出土した。他には、時期不明の土錘2点と砥石1点（第63図7）、近世以降の磁器片2点が出土した。

4．360～440m

地山は、礫層が消え、黄灰色細砂～シルト（406m以北は粗砂）となって、北側へ低く傾斜していく（第60図）。370mで調査区に直交して幅約0.2m、深さ0.05mの溝が2条検出された。調査時にはこの付近の地山中から湧水が認められた。この溝以北の遺構はいずれも、黒灰色～暗灰褐色シルトを埋土とするもので、出土遺物から弥生時代後期末の月影式期のものと考えられた。

381mの土坑中から第63図8が、410mの土坑中から第63図10～12ほか多数の土器片が出土した。前者は深さ0.15m、後者は0.20～0.25mの深さを測る。380～390mの間には、ほぼ直角に曲がる深さ0.20～0.25mの溝が検出された。調査区内で遺構の性格は判断しづらいが、墳墓ないしは住居に伴うものの可能性もある。

424m以北は地山が急激に落ちこんで沼状を呈しており、弥生時代後期の遺構はその縁辺に密に分布するものと予想される。

第4節　ま　と　め

今回の調査では目立った遺構等は検出されなかったが、分布調査を含め、遺跡分布のあり方について多くの資料を得ることができた。第2節1の微地形と遺跡分布で述べたように、湧水のある谷地形を挟んだ尾根状の微高地に4ケ所ほどの遺跡のまとまりがある。各地点ともさほど大きな規模ではなく、時期的にも一ケ所で長期に及ぶものはない。このようなあり方は、松任市周辺の手取川扇状地での、弥生時代～古墳時代遺跡に比較的よく見られる例と言える。

第８章　平成２年度の調査（浜竹松遺跡）

第１節　調査の概要

御手洗・出城地区竹松工区内で進められてきた県営ほ場整備事業は、平成２年度が田面工事の最後となり、工区内の最下流部に位置する松任市竹松町浜竹松地内を中心とする水田約６haが事業地となった。この竹松工区では、過去五ケ年間に県営ほ場整備事業に係る遺跡の緊急発掘調査が、７箇所の排水路部分で実施されてきた。平成２年度は、ほ場整備事業地内に分布する浜竹松遺跡の発掘調査を行なった。

浜竹松遺跡は、事業地の東側を走る主要地方道金沢・美川・小松線の建設時に多量の土器が出土したことで知られ、石川県遺跡地図に（県No1192･93）登録される周知の遺跡である。前年度の平成元年10月に実施された分布調査で、その分布範囲が明らかとなった。

発掘調査は、当センターと竹松工区を所轄とする石川県松任土地改良事務所との協議で、主要地方道の西側に敷設される排水路予定地を調査範囲とすることで合意された。現地における発掘調査は、平成２年５月11日から同年６月７日にかけて行なった。調査面積は約300m²で、調査に係る費用は、県農林水産部耕地整備課および文化庁の負担による。

なお、第65図に表示してあるように発掘調査区は南北二本の調査区に分かれる。これは、発掘調査予定地の一部に野菜が栽培されていたことに因り、発掘調査の実施が不可能な状況で、部分的な土層観察による調査しか行なえなかったことによる。南北二本の調査区で、南方の調査区（Ｓ調査区）は、幅２ｍ長さ102mで、Ｓ１～10区に分割した。また、北方の調査区（Ｎ調査区）は、幅２ｍ長さ22mで、Ｎ１・２区とした。

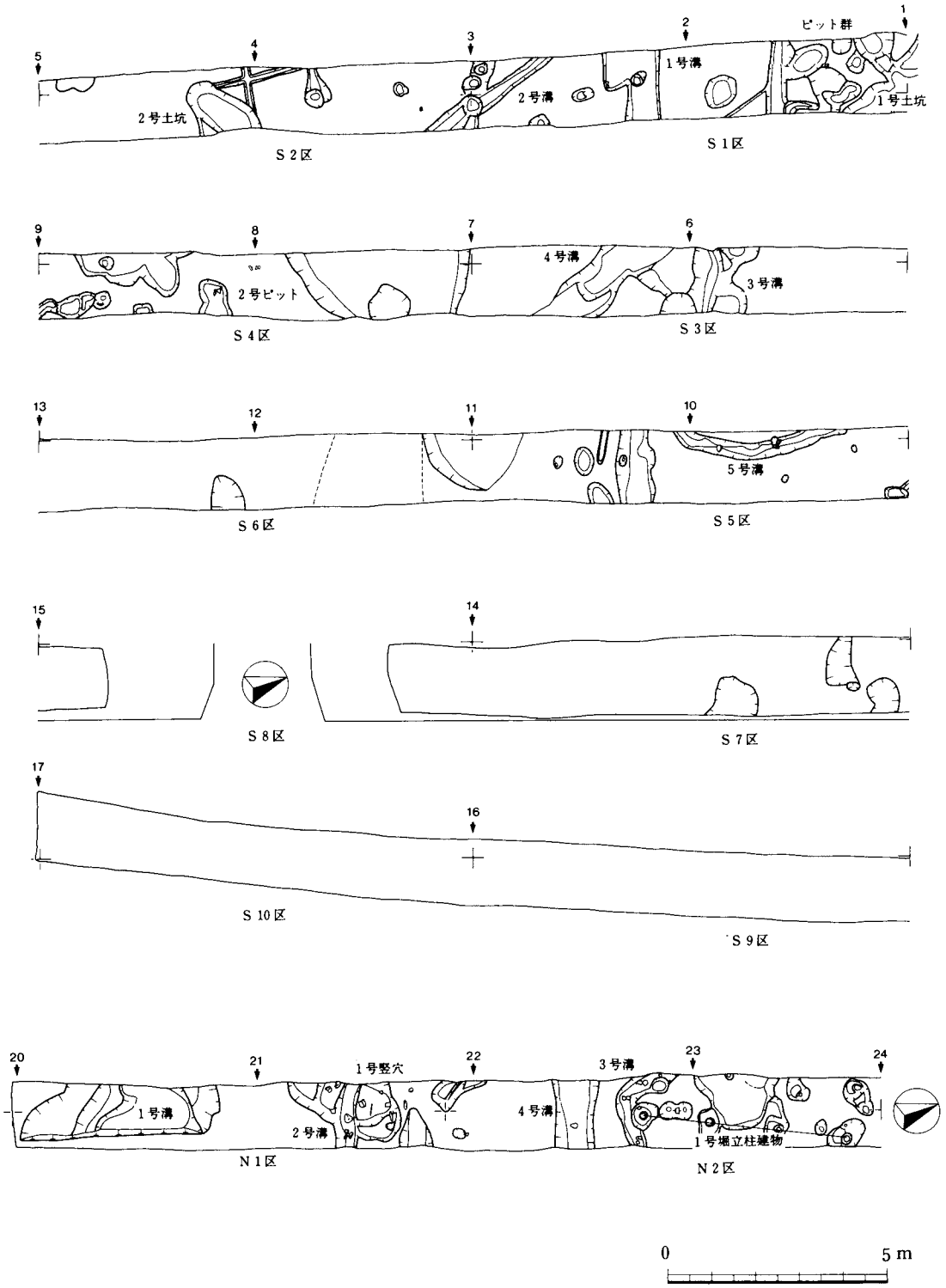
発掘調査の結果、Ｓ調査区では弥生時代後期から古墳時代前期の土坑・溝・ピット等の遺構が、Ｓ１～５区の範囲から検出された。一方、Ｎ調査区では弥生時代後期終末の竪穴住居跡や奈良時代の掘立柱建物跡などが全域で検出されたことで、この浜竹松遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期・奈良時代・室町時代の三時期が復合する集落遺跡であることが明らかとなった。

第２節　遺跡の位置と層序

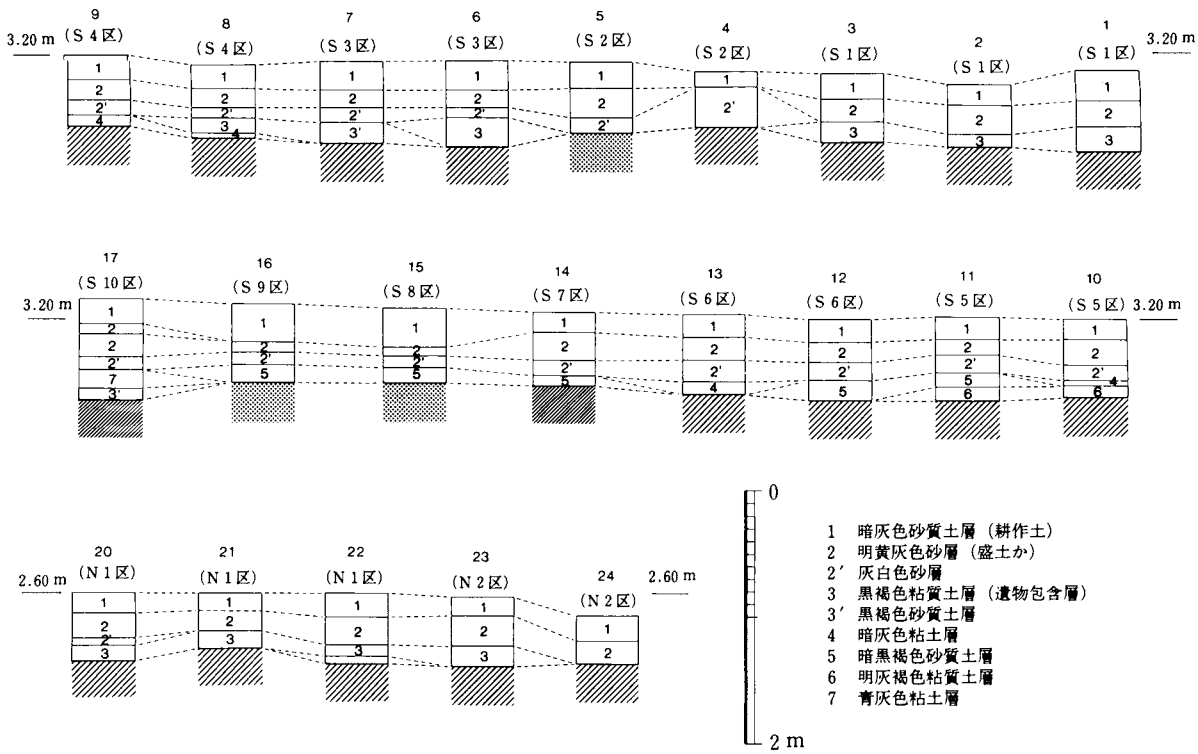
浜竹松遺跡は、松任市竹松町地内の臨海部として、通称浜竹松と呼称される地籍に所在する集落遺跡であるが、周辺地域は手取川扇状地の北端部にあたり、弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた小規模な集落遺跡が群在する地域として知られている。遺跡は標高3.2m前後の水田下に広がり、西方の日本海の砂浜までは300mと至近距離に位置する。そして、海岸近くには北の安原海岸砂丘へと連なる小砂丘が形成されている。この砂丘は標高20m近くを測り、現在の植生は松とニセアカシヤの混合林で、日本海から吹き付ける海風を遮断する防風堤の役目を果たすことからも、遺跡の立地と変遷に大きな影響を及ぼしてきたと考えられる。

現在、遺跡の上を県道である主要地方道金沢・美川・小松線が走り、事業予定範囲の東側を画

第64図　平成2年度調査区位置図　（1／3,000）



第 65 図　平成 2 年度調査区全体図　(S＝1/150)



第66図　調査区土層柱状図（S＝1/60）

している。そして、N調査区の北方80mには、手取川扇状地の用水河川である倉部川が流下し、砂丘を貫いて日本海へ注いでいる。この倉部川河口部分には、本遺跡の他にも中世の遺跡と推定される倉部川遺跡や弥生から古墳時代の相川新雁田川遺跡などが分布し、古くから臨海的な集落が形成されていたことが知られる。しかし、当地の臨海集落が文献史料にのぼるのは、冷泉為広の「越後下向日記」の延徳三年（1491）三月十一日に「マツタウ(松任)里　左ニクラベノ浦(倉部)松アリ一本」が最初であろう。

本遺跡の基本層序は、N・S両調査区の西壁で観察した。層序の概要は、第66図に示したとおりである。N・S両調査区とも地山の変化を別にすると基本層序には大きな変化は無い。

S調査区の基本層序は、第1層暗灰色砂質土層（耕作土）、第2層明黄灰色砂層（盛土か）、第3層黒褐色粘質土層（遺物包含層）で堆積する。地山は黄灰白色砂質土層および黄灰色の砂礫層で、標高は2.4～2.7mを測る。各層ともS1～3区では安定した堆積を示すが、S4区より南下するほどに漸移層や地の起伏が見られる。さらに、南端のS9・10区では地山が降下し、暗灰色の堆積土から、低湿地部であった可能性が高い。

一方、N調査区では、地山が淡黄色砂質土層に変化し標高も2mと大きく降下するが、第1～3層の基本層序には変化が無い。遺構はS調査区より増加するが、覆土は遺物包含層と同色である黒褐色砂質土層を主体とするものが数多く認められた。

なお、N・S両調査区に広く堆積する第2層の明黄灰色砂層は、砂丘を構成する砂層と同質のものであり、中世後半期に起ったであろう砂丘の移動や飛砂現象に因る堆積と考えられる。

第３節　Ｓ調査区の遺構と遺物

１．Ｓ調査区の遺構

本遺跡の南側に設定したＳ調査区では、標高2.4～2.6m の地山面から、土坑２基、溝９条の他に多数のピットを検出した。遺物包含層や遺構覆土からの出土遺物は、概ね弥生時代後期終末・古墳時代前期・奈良時代末の三時期に比定されるところから、検出した各種遺構群も各時期の所産であろう。以下、土坑から順に説明したい。

(1)　**土　坑**（第67図　図版60）

土坑はＳ１区北端で第１号土坑、Ｓ２区中央で第２号土坑の２基を検出したが、いずれも調査区外へ広がるためにその全容は不明である。

第１号土坑は、調査区の北東隅に位置する土坑状の遺構で、深さ10cm 前後と浅い。出土遺物からII期の遺構と考えられる。なお、周囲に群在するピット群はＩ期のものである。

第２号土坑は、Ｓ区の中央で黄色砂礫層を地山とする。規模は上幅90cm、長さ186cm、深さ20cm を測り、比較的端正な形状を呈する。遺物の出土は少なく時期は不明である。

(2)　**溝**（第67・68図　図版59）

溝はＳ１～５区にかけて小規模なものを９条検出した。溝の方向は、調査区を斜行して南北方向をとるものと、調査区を横断して東西方向をとるものに大別される。

第１号溝はＳ１区を横断する。上幅は75・130cm、深さ９cm を測る。上幅に対して浅い溝で、流下方向は不明ながらも、時期はＩ期に比定される溝である。

第２号溝は、第１号溝の南側に位置する。南北方向からやや西偏し、調査区を斜行する。規模は、上幅28～54cm、深さ12cm を測り、布掘り状に連なるピットと交差する。覆土と少量の土器片から、時期はＩ期の可能性が高いと考えられる。

第３・４号溝は、Ｓ３区で近接する溝である。第３号溝は、調査区を横断する溝で、北側に切り合うピットが列ぶ。上幅は一定しないが、深さは15cm 前後を測り、西方へ流下する溝であろう。

第４号溝は、上幅90～118cm、深さ10～16cm を測り、底の形状から土坑状の遺構の可能性を残している。出土遺物から時期は、III期に比定される。

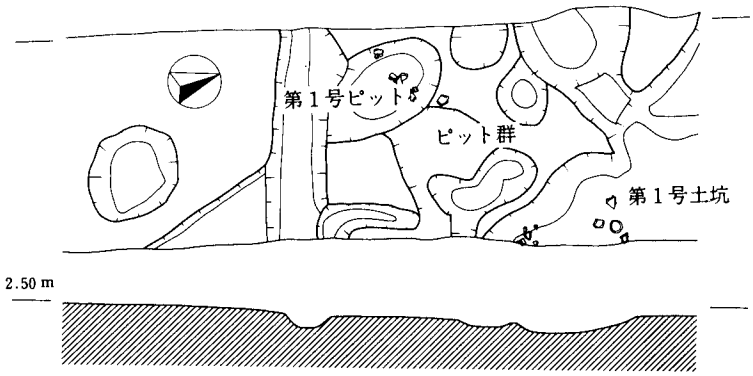
第５・６号溝は、Ｓ５区で近接する溝であり、Ｓ調査区内での遺構分布範囲の南限を示す溝である。第５号溝は、Ｓ５区の西壁近くに弓なりに走る。規模は上幅38cm 前後と一定であるが、深さは北端で10cm、南端で20cm を測り、南方向へ流下する溝であろう。時期は不明である。

第６号溝は、深さ10cm を測るが、上幅は一定しない溝で、時期も不明な遺構である。

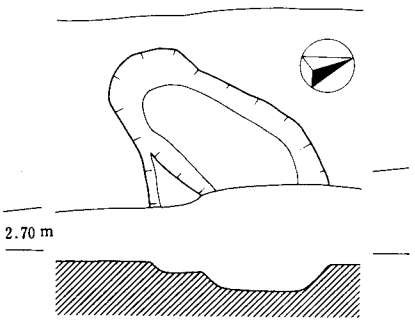
(3)　**ピット・その他**

Ｓ１区の第１号溝の北側に小規模なピットが群在する。各ピットとも径は、40～66cm とバラツキがあるものの、深さは８cm 程と浅いものである。形状から柱穴的な遺構とは大きく異なり、包含層内でのローリングによる遺構と考えられる。時期はＩ期に比定される。

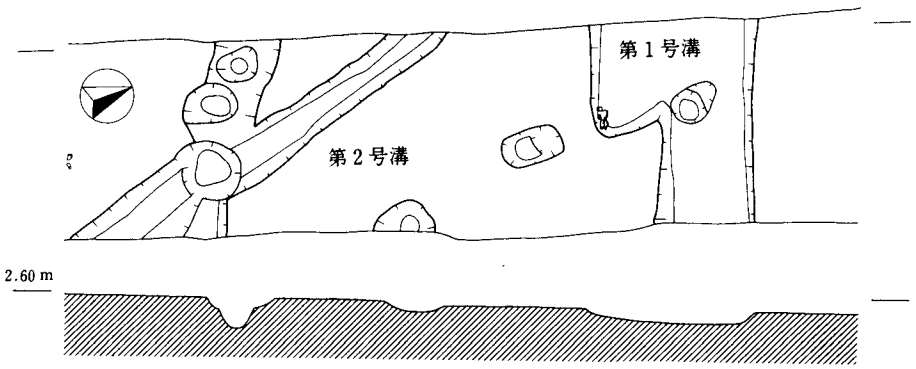
また、Ｓ４区の北側で検出された窪地は、上幅430cm、深さ18cm を測り、竪穴住居跡を思わせる形状を呈する。南側の立ち上がり部分より、弥生時代後期前半の甕が出土し、本調査で最も古



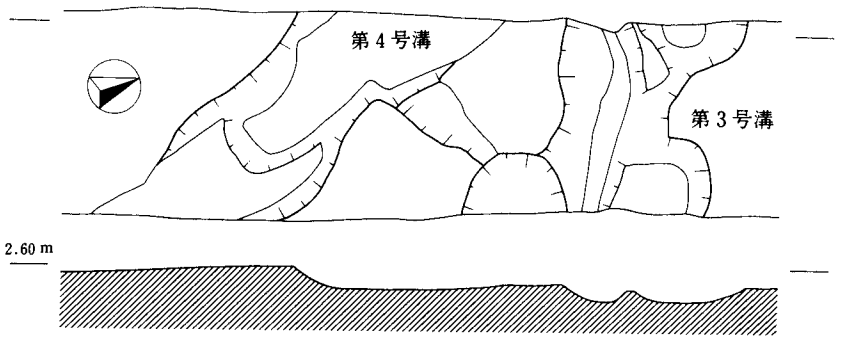
第1号土坑他実測図



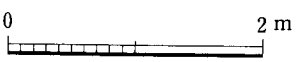
第2号土坑実測図



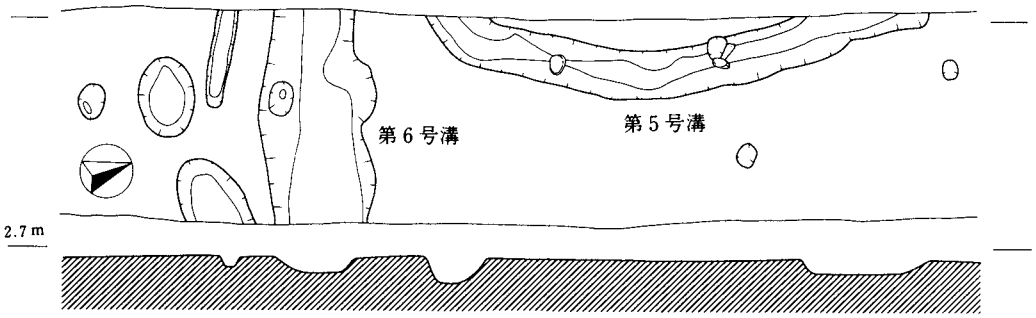
第1・2号溝実測図



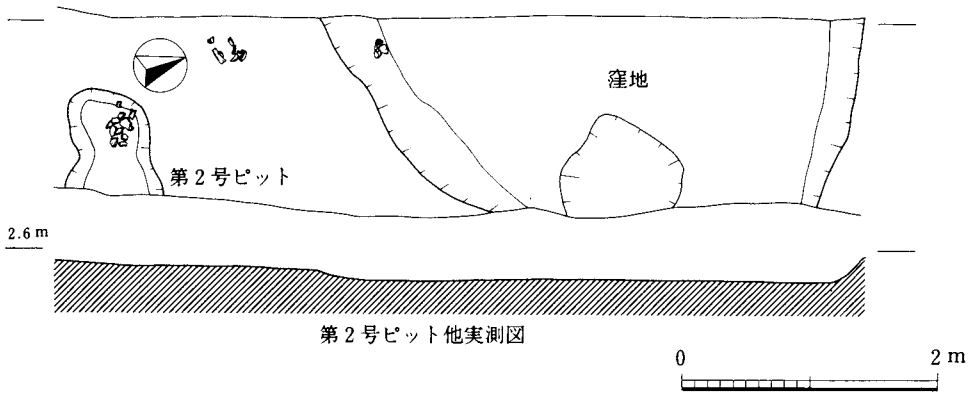
第3・4号溝実測図



第67図　S調査区遺構実測図(1)　(S=1/60)



第5・6号溝実測図



第2号ピット他実測図

第68図　S調査区遺構実測図(2)　(S=1/60)

い遺構であることが知られた。

さらに、この窪地南側の地山面からは装飾器台が出土し、横の第2号ピットからは、I期の段階に比定されるであろう甕腹片が多く出土した。

2．S調査区の出土遺物

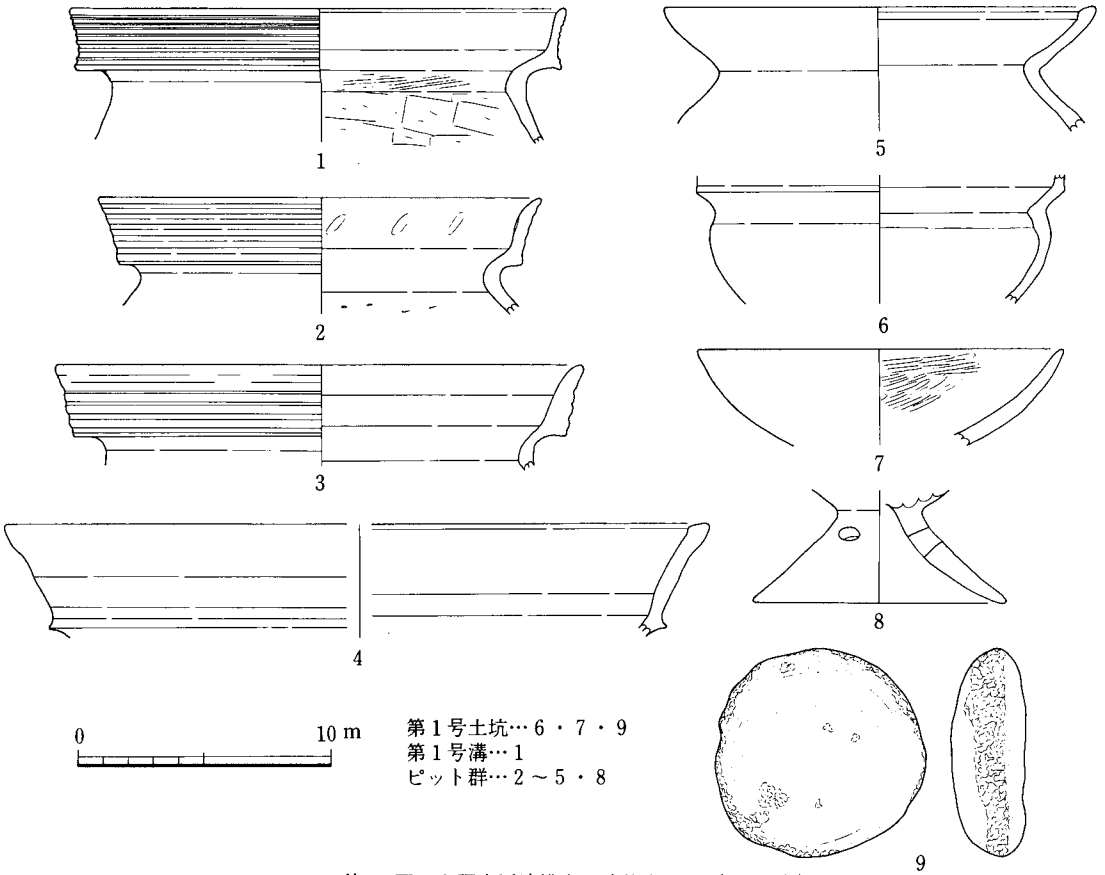
(1)　遺構出土遺物（第69図　図版61）

S調査区の各遺構から出土した遺物の中で、図化可能なものを取り上げて報告した。遺物が出土した遺構は、第69図に示してあるように、S1区で検出した第1号土坑・第1号溝・ピット群の三遺構である。遺構順にしたがって報告したい。

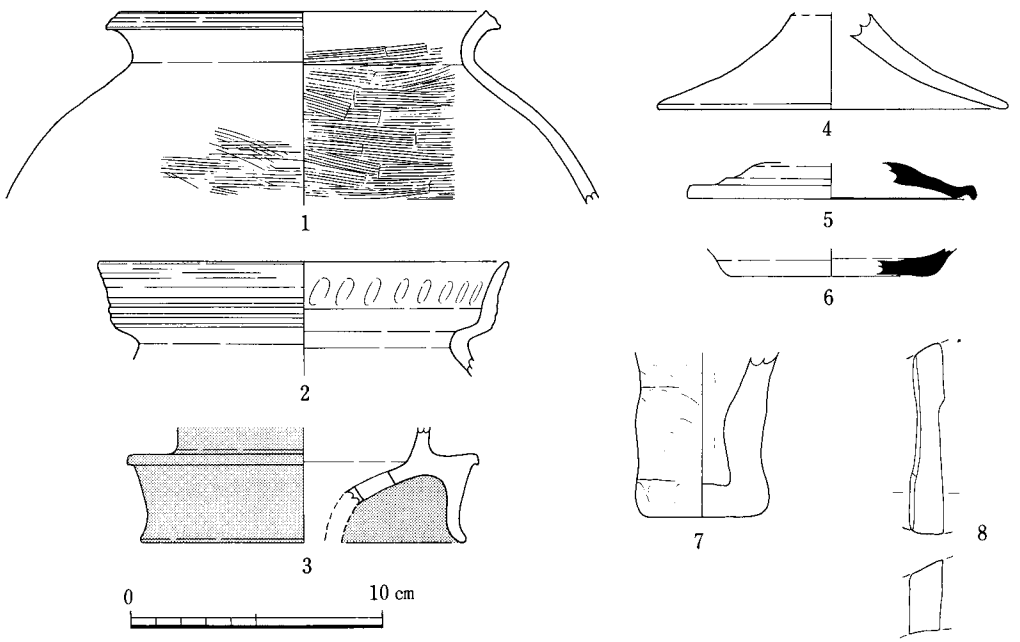
第1号土坑　6は口縁部と底部が欠損した鉢である。胎土は浅黄色で、細かい砂粒を多く含む。内面のミガキは粗い。7は小型の高坏と考えられ、口径14.4cmを計る。胎土は灰黄色を呈する。内面のミガキ、外面のナデとも良好である。6は月影式に属するものと考えられるが、7の高坏は本遺跡のII期に属するものであろう。

9は径8.3cm、厚さ2.8cmの円盤状の石器である。側縁部の全面が剝離し、側縁部を打撃する使用が知られる。石質は粗い凝灰岩質砂岩とみられ、重量は287gを計る。

第1号溝　1は擬凹線文が入る有段口縁の中型甕である。口縁部は直立化し、口径19.4cmを計る。胎土は浅黄色を呈して、石英砂粒を多く含んでいる。本遺跡のI期とする法仏式に包含される遺物であろう。



第69図　S調査区遺構出土遺物実測図（S＝1/3）



第70図　S調査区包含層出土遺物実測図　(S＝1/3)

ピット群　2・3も擬凹線文が入る有段口縁の甕形土器である。2は口径17.4cmで、口縁部が外傾化して内側に面をもつ。3は口径20.8cmで、口縁断面が三角形を呈する。胎土は黄橙色を呈し、質感とも2の甕とは異なる。2・3とも月影式の中型甕であろう。

4・5は古墳時代前期の甕形土器である。4は口径約28cmで、口縁下端に隆帯を張り付けた山陰系の大型甕であろう。胎土はにぶい黄橙色を呈し、細かい砂粒を含む。5は口径16.8cmで、口縁部が強く外反する。胎土はにぶい黄色を呈する。高畠式の中型甕であろう。

8は小型高坏の脚部である。胎土は浅黄橙色を呈し、外面のミガキは粗い。

(2)　S調査区包含層出土遺物（第70図　図版61）

1はS4区の窪地から出土した甕で、口径14.6cmを計る。口縁端部は狭く1条の凹線文を施し、胴部下半が不明ながらも外面はハケ後ナデ、内面はハケと器面調整が荒い。内外面ともタタキやケズリは認められない。胎土はにぶい黄橙色を呈する。胴部より下位の破片の外面には、煤状の炭化物が付着している。畿内の弥生IV様式系の中型甕であろう。

2は擬凹線文が入る有段口縁の甕形土器で、口径16.2cmを計る。3は装飾器台で、垂下帯が幅3.5cm、径14.2cmで、下方に幅広な作りをみせる。また、脚近くの受部に径1.3cm前後の孔を5箇所設けてあり、細部ではあるが特異形態の装飾器台である。胎土はにぶい黄橙色を呈し、外面は赤彩が施されている。2・3とも月影式に包括される土器であろう。

4は脚部片で、内外面とも丁寧なミガキがなされているが、器種は不明である。

5・6の須恵器は、奈良時代末から平安時代初め頃の製品であろう。5は口径11.2cmで、少し歪んでいる。小松窯跡群産とみられる。6の坏身は、底径約8cmで、辰口窯跡群産とみられる。7は中空の手捏土器である。端部は径5cmで、平坦な面をもつ。胎土は粗く外面の調整も粗雑である。製品としては、把手や支脚が想定される。8は泥岩質の砥石の破片であろう。

第4節　N調査区の遺構と遺物

1．N調査区の遺構

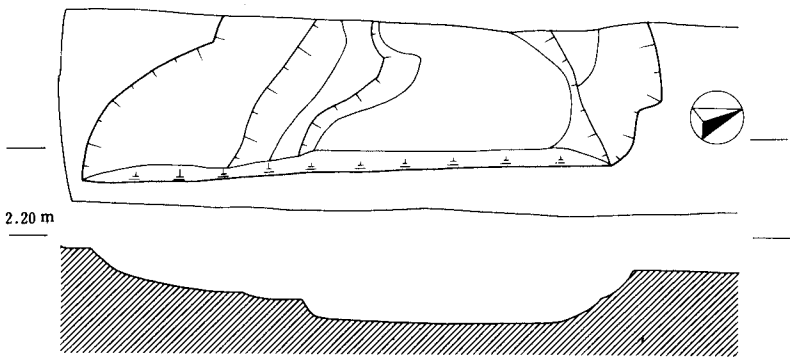
N調査区は本遺跡の北端部に設定した。地山は淡黄色砂質土層で、標高2m前後を測り、S区よりも0.5m程降下するが、各時期の遺構が複合した状況で検出した。遺構は竪穴住居跡1基、溝4条、掘立柱建物跡1棟などで、時期は概ね弥生時代後期終末・平安時代・室町時代の三時期と考えられるものである。以下、竪穴住居跡から順に説明したい。

(1)　竪穴住居跡（第71図　図版62）

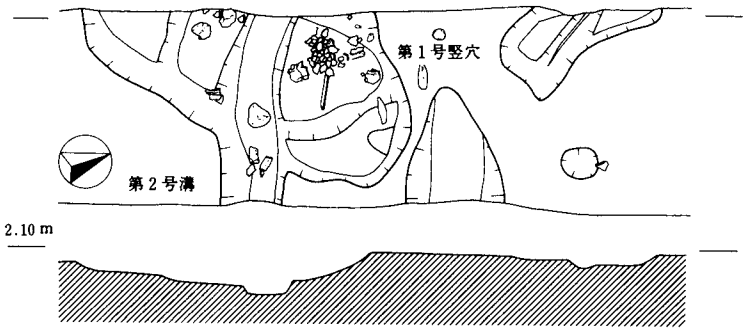
第1号竪穴住居跡は、N1区で第2号溝と切り合う状況で検出した。平面形は楕円形に近く、一見したところ土坑状の遺構と見受けられるが、深さ16cmの床面は平坦で締まりが強く小型の竪穴住居跡の一部とした。覆土は黒褐色粘質土で、多くの甕形土器や石片とともにヒョウタン種子（図版64）がブロックで出土した。出土土器から本遺構は、I期の月影式期のものとみられる。

(2)　溝（第71図　図版63）

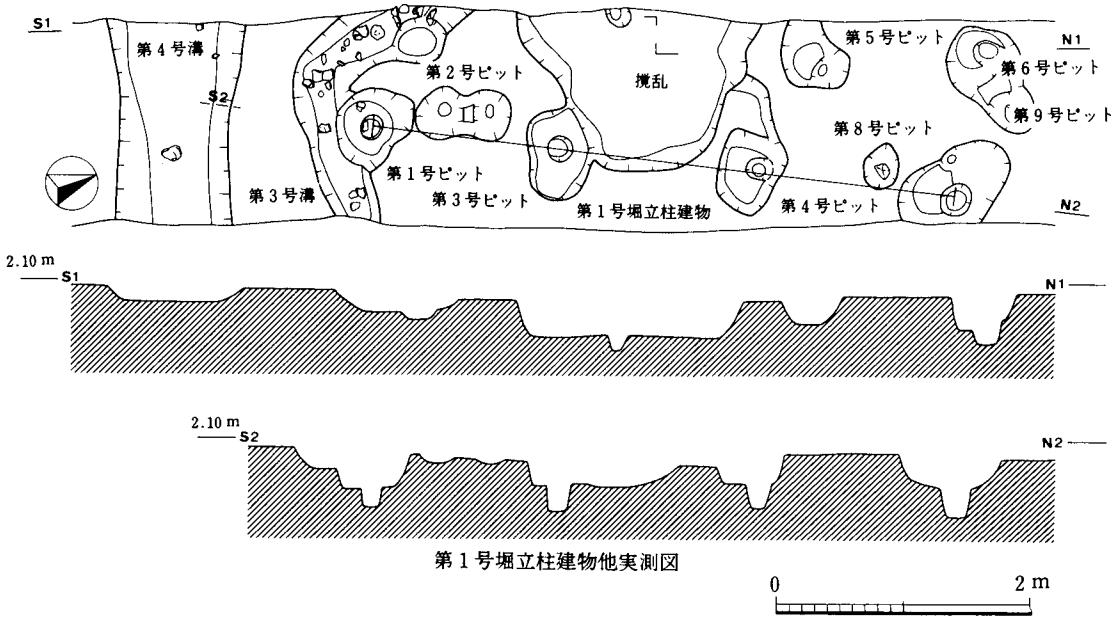
溝は4条検出したが、いずれも調査区を横断する溝であるが、時期により規模や覆土に違いをみることができる。



第1号溝実測図



第1号竪穴・第2号溝実測図



第1号堀立柱建物他実測図

第71図　N調査区遺溝実測図　(S=1/60)

第1号溝はN1区の南側で検出した溝状遺構である。規模は最大幅430cm、深さ58cmを測るが、形態は乱れ底も波打つものである。覆土は黄色系の小砂利層と砂質土層の互層堆積で、通水機能があった痕跡が認められた。覆土の下位より15世紀代の白磁が出土したことで、IV期に比定される溝である。

第2号溝は第1号竪穴住居跡と複合するが、新旧関係は不明である。規模は上幅50cm前後、深さ20cmを測りやや湾曲する。第3号溝はN2区に位置する。平面形はくの字形をみせるが、規模や覆土とも第2号溝のそれと類似している。溝の内部より多くの土器が出土したが、その中に東海系の壺がある。両溝ともI期に比定される。

第4号溝は調査区に直交する溝で、上幅90～100cm、深さ10cmを測る。溝幅に対して浅い溝であり、覆土が掘立柱建物跡と同一の暗黄灰色粘質土である点からして、同時期の溝と理解される。

(3) **掘立柱建物跡**（第71図　図版62）

N2区内で調査区を斜行する掘立柱建物の柱列を検出した。第1号掘立柱建物跡がそれである。

第1号掘立柱建物は、3間（450cm）まで検出した。柱間の寸法は150cmと均一で、柱根部の痕跡から直径20～30cm程の柱が使用されていたことが知られる。時期はIII期と推定される。また、第1号掘立柱建物の北西側で検出したピットは、いずれも掘立柱建物の柱穴と認定できるもので、第8・9号ピットからは木柱根が発見されたことも考え併せると、この地点で掘立柱建物の建替えが数回あったことが窺われる。

2．N調査区の出土遺物

(1) **竪穴住居跡出土遺物**（第72・73図　図版64）

第1号竪穴住居跡からは、一括性の強い土器が出土した。1～4は擬凹線文が入る有段口縁の甕形土器である。1は胴部を欠損するが、口径18.4cm、器高29.7cmに復元される。口縁内面が面取りされ、体部が薄手に仕上げられている。胎土はにぶい黄色を呈し石英砂粒の混入が多い。外面全体に煤状の炭化物が付着している。2は口径19.4cmで、1に比べ胎土が粗い。3・4はいずれも口径19.4cmに復元される中型甕である。

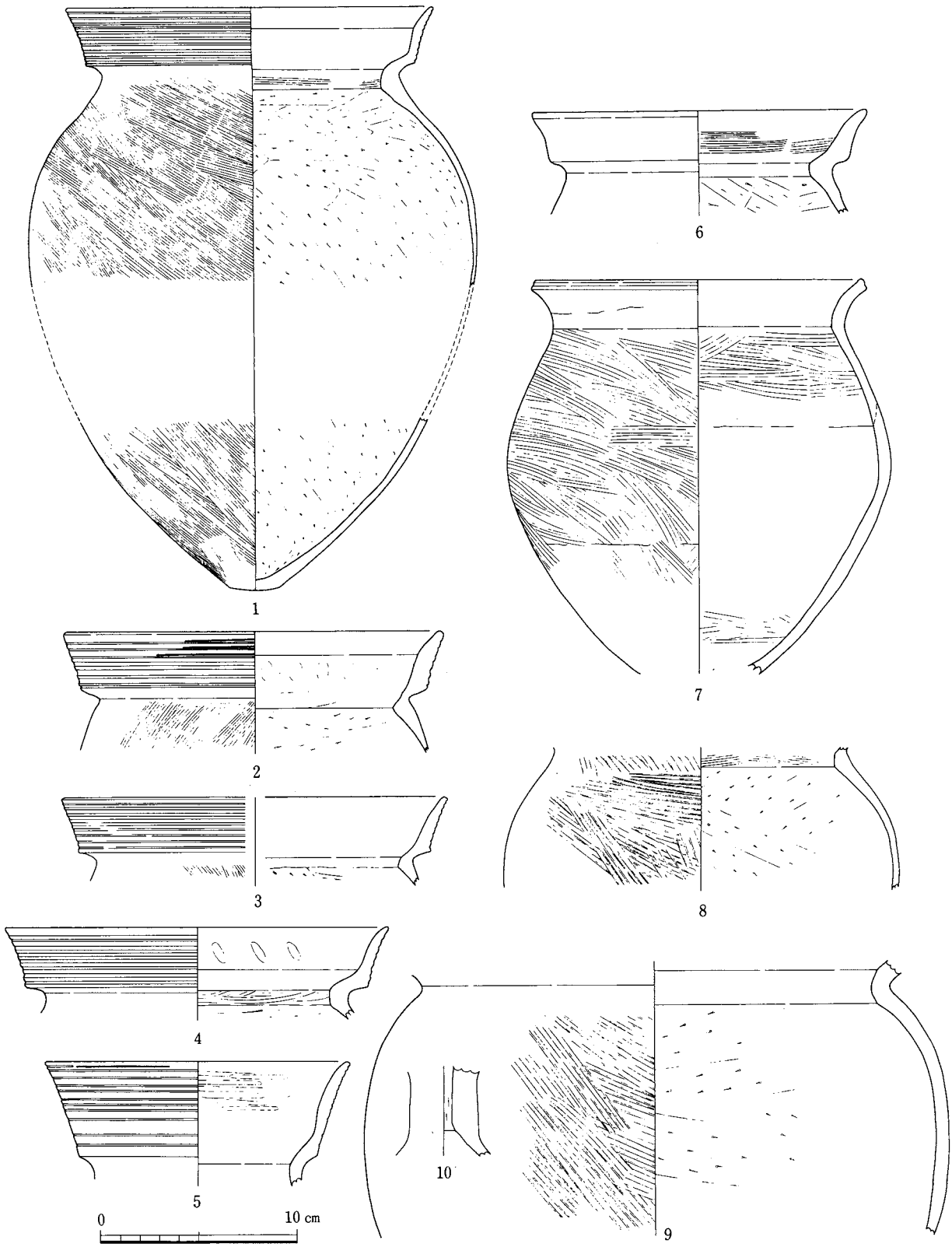
5は細い擬凹線文が入る有段口縁の鉢である。口径15.4cmで、胎土はにぶい橙色を呈する。幅広い口縁の内面にはミガキが施されるが、全体の調整は粗いものである。

6は無文の有段口縁の甕形土器である。口径16.8cmで、胎土は2と共通し粗いものである。

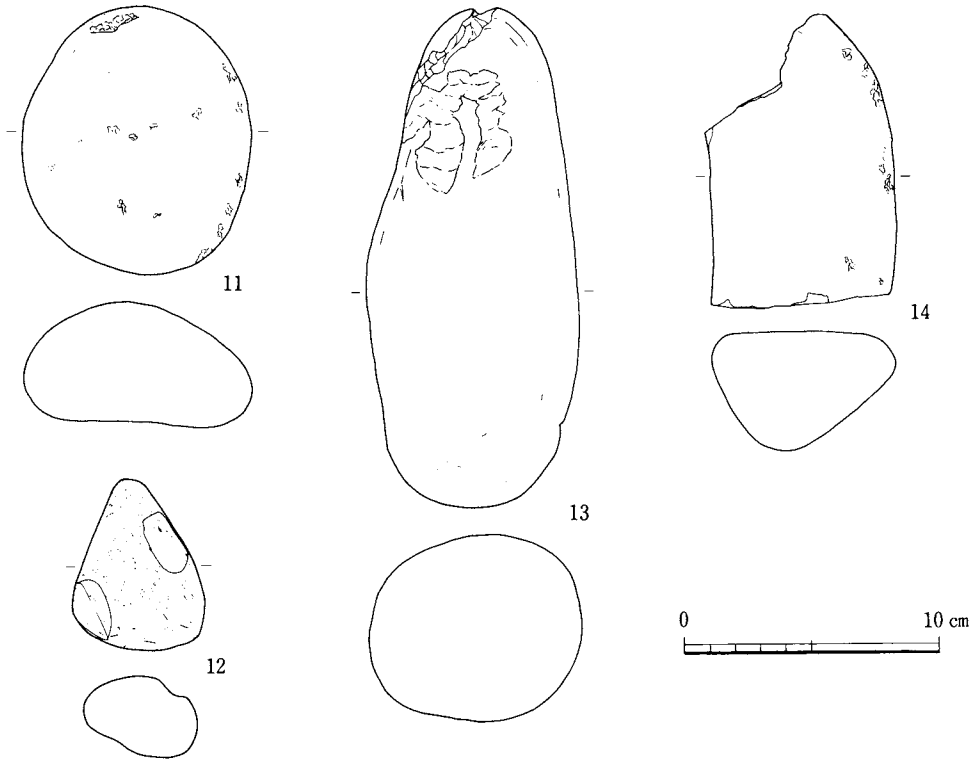
7はくの字口縁の甕形土器である。いわゆる能登型甕といわれる土器で、口径16.6cmを計る口縁端に擬凹線文が入る。内外面の調整に使用しているハケは粗い。胎土はにぶい橙色を呈して、混入される砂粒は、粒形が亜角の褐色粒が量的に多く、他の甕形土器の胎土とは異なる。

8・9は甕形土器の体部片である。内面はいずれも頸部までケズリがなされる。9は胴部最大径が30cmに近く大型の甕とみられる。10は小型の高坏の脚部片である。

石器としては使用痕を残す礫が4点出土した。出土地点はいづれも第1号竪穴住居跡の北壁部近くからであった。11は一面が偏平な円礫で、重量は659gを計る。偏平な面が使用で平滑になっている。12は軽石の円礫である。重量は13gで、一部に刃跡と削痕が認められる。砥石として利用されたと考えられる。13は楕円形を呈する円礫で、上端に打撃痕があり側面に被熱した痕が残る。



第 72 図　N調査区第 1 号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)　(S＝1/3)



第73図　N調査区第1号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)　(S＝1/3)

重量は1,940gである。14は上下両端を欠損する。表面は平滑である。

なお、本竪穴住居跡から出土した土器群の時期は、甕形土器を中心として構成される土器群であるが、いずれも月影II式に位置づけられる。

(2) **溝出土遺物**（第74図　図版64）

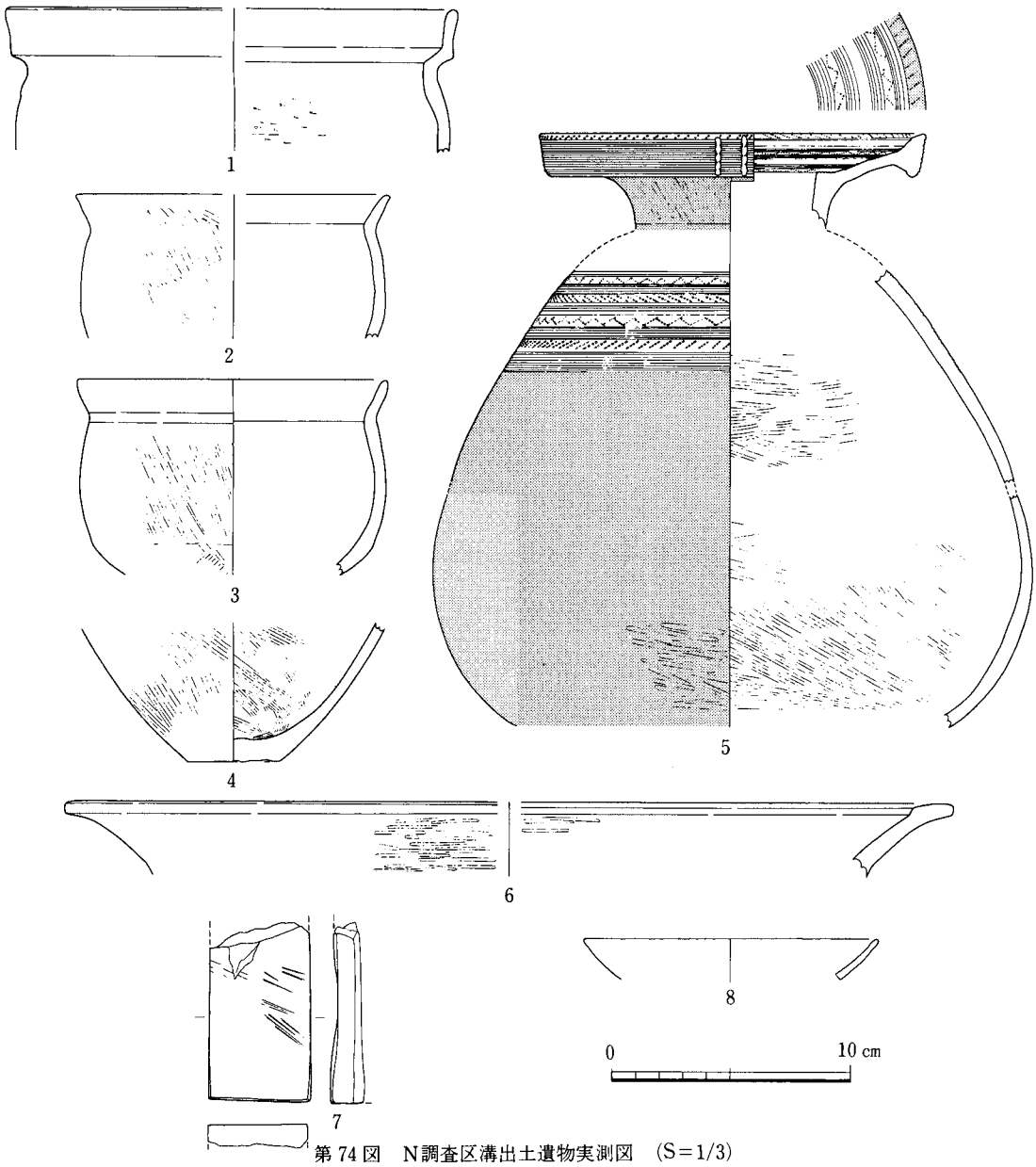
N調査区で検出した4条の溝で、図化可能な遺物が出土した遺構は、第1・3号溝の2条であった。1～6の土器は第3号溝から出土し、7の砥石と8の白磁皿は第1号溝より出土した。

第1号溝　7は幅4.3cmの仕上げ砥石である。石質は成層状凝灰質泥岩で、灰白色の石色を呈する。また、三側面には切断時のノコ目が、裏面には裁断時の剝離面が残っている。8は口径12.2cmの白磁皿である。15世紀中頃のものである。

第3号溝　1～4は甕形土器である。1は口径約16cmの無文の甕である。2・3は小型の甕である。2は口径約13cmで、口縁部が波打ち外面のハケは粗い。胎土は灰白色を呈して砂粒の含みが少ない。3も口径13cmで、胎土は灰白色で砂粒の混入が少ない。4は底径約3.8cmの甕形土器の底部片であろう。内外面のハケ調整は粗く外面に炭化物が付着している。

5は濃尾地方のパレス壺を模倣したものである。口径約16cm、胴部最大径25cmの中型壺で、底部を欠損している。口縁部は断面三角形で、内面の受部に三段の文様帯をつくり、外面に二本の棒状浮文を付けている。また、外面の文様帯は、四段の細密な施文帯で構成され、文様帯を除く器面は全て丁寧なミガキと赤彩が施されている。胎土は橙色を呈して砂粒の混入も少ない。

このパレス壺は、1）下膨れの器形、2）口縁部と外面の施文パターン、3）赤彩方法の三点



第74図　N調査区溝出土遺物実測図　(S=1/3)

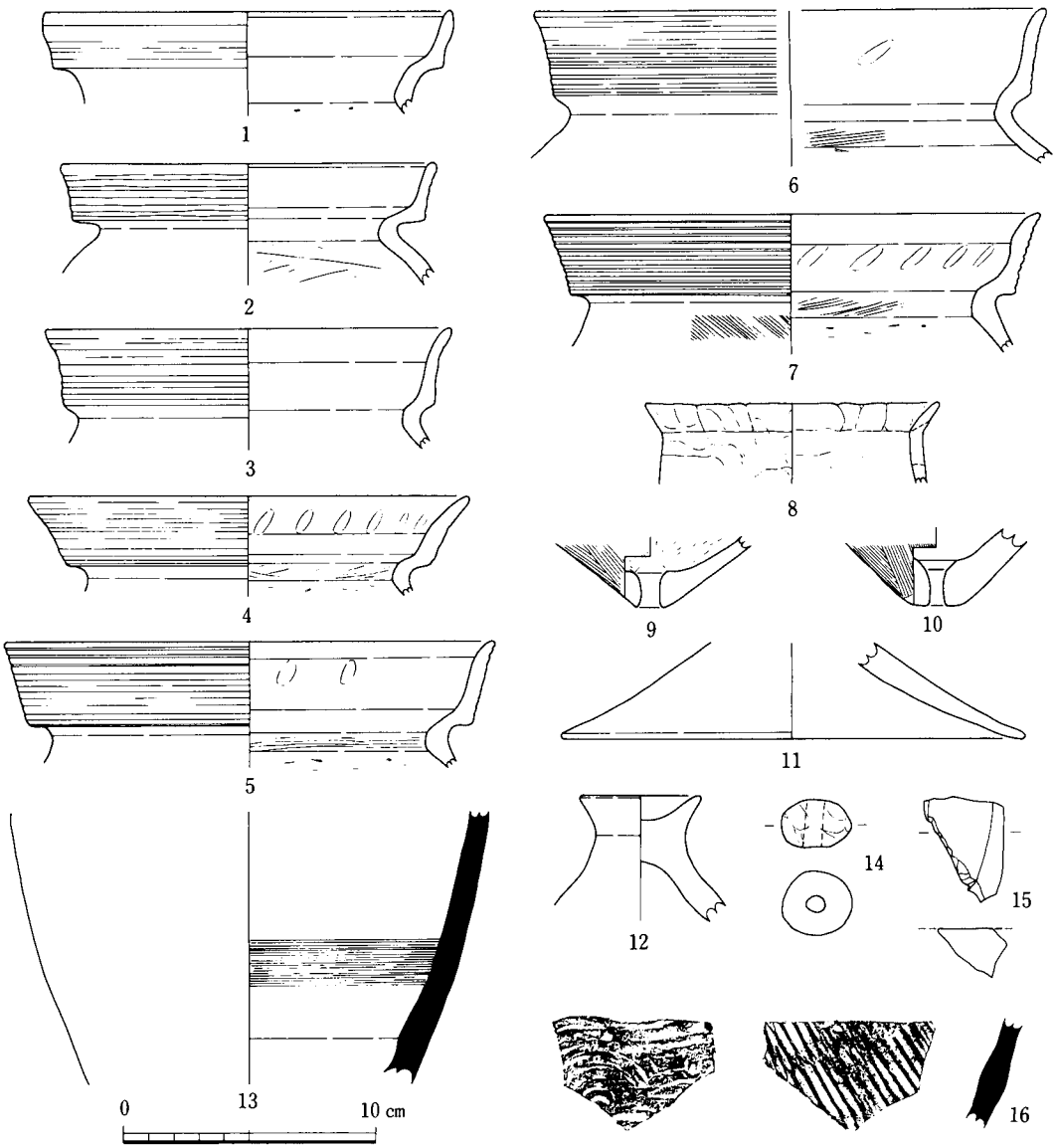
とも、濃尾地方のパレス壺を忠実に模倣した在地土器である。

6は口径約37cmに復元される高坏である。内外面とも横方向のミガキが比較的丁寧に入る。

以上の土器の時期は、1・6が法仏式、2・3・5が白江式に属するものであろう。

(3) 包含層出土遺物（第75図　図版64）

1～7は擬凹線文が入る有段口縁の甕形土器である。2は口径14.8cmで、口縁外面の擬凹線文が弱く、法仏式の可能性が高いとみられる。1・3は共に口径16cmであるが、3の胎土はにぶい橙色を呈し、4以降の甕と共に月影式の甕であろう。4は口径17.4cmで、内面の指オサエは密で外面上端まで炭化物が付着している。5は口径19.4cmと一回り大きい甕である。6は口径約20



第75図　N調査区包含層出土遺物実測図　(S=1/3)

cmで、胎土が浅黄色を呈し擬凹線文も弱い。7は口径約19.5cmで、胎土・調整とも4に類似した中型の甕である。8は小型の甕形土器である。口径は11.4cmで、口縁の整形や器面調整が荒い。

9・10は底に穿孔をもつ土器で、月影式前後の有孔鉢の底部とみられる。いずれの胎土も黄橙色を呈し質感も似ている。11は高坏等の脚部片で、胎土は灰白色を呈する。12は蓋形土器である。

13は須恵器の瓶類の体部である。胎土は灰色を呈し強く締る。外面下半はケズリで、内面にカキメ状の調整痕があり、器種は双耳瓶の可能性が高い。14はソロバン玉形態の土玉である。甕形土器と同質の胎土で、重量は11.5gである。15は赤褐色の安山岩質の石片である。16の須恵器の甕類は、胎土の質感から能登の高松窯跡群産の可能性が高い。

この他に包含層からの出土遺物としては、中世の陶磁器片や銅銭がある。陶磁器としては、時

期不明の加賀焼の甕類の体部片３点と、15世紀代の龍泉窯の青磁碗（端反・直立）や14世紀頃の瓶類の小片がある。銅銭は北宋の「咸平元寶」（図版64）がある。中世の遺物の多くは、N調査区の包含層中より出土したものである。

第５節　ま　と　め

浜竹松遺跡は今回の発掘調査成果から、弥生時代後期から室町時代に至る生活関連の遺構が、復合した集落遺跡であることが知られた。その浜竹松遺跡で検出した遺構と出土遺物から復元される歴史像は、内容からしてもⅠ～Ⅳ期の時期に整理することで、その概要が具体化されるものである。最後にまとめとして各時期の概要を説明したい。

Ⅰ期　弥生時代の集落が出現し存続した期間で、弥生時代後期前半から古墳時代前期初頭の時代と推定される。弥生時代後期前半は本遺跡で最古の資料であり、S調査区の窪地に限定されるもので、まだ集落形成には至っていないと考えられる。その後、法仏式期には全域に活動が広がり、月影式期には竪穴住居などを構築するまでに集落活動が発展し、白江式期に移行した段階で、活動が減速化している。このⅠ期の動向は、本遺跡のみならず近隣の集落遺跡と共通するもので、その地域景観としては、小規模なムラが至近距離で散居する状況が想定される。

Ⅱ期　前段階で減速した集落活動が、弱いながらも一定期間続いた後に途絶える期間で、古墳時代前期と推定している。遺構はS調査区の第１号土坑だけで、少ない遺物が全域に分布する。このⅠ期からⅡ期にかけての集落活動の変動に関しては、地域の支配関係の変化に連動した、ムラの再編に起因すると理解されているが、その実像には不明の点が多い。

Ⅲ期　集落活動が復活した時期で、奈良時代末から平安時代前期と推定している。遺構としては、N調査区の第１号掘立柱建物跡が中心となるが、遺物はS調査区にまで広がりをみせる。掘立柱建物の規模や遺物量からして、復元される集落活動は小規模なものであり、Ⅰ期で想定されたムラと大差ないものと考えられるが、地域景観には違いがある。それは、周辺部にムラの分布が無く、僅かに倉部川の対岸から本遺跡と一体視される土器資料が検出されているだけである。

Ⅳ期　Ⅲ期の集落域と重なる範囲に生活関連の活動が展開された時期で、鎌倉時代後半から室町時代前半と推定している。遺構としてはN調査区の第１号溝だけであるが、陶磁器から倉部川の対岸約300mの地点で、中世の遺構群が検出された倉部館跡（県No1196）と共に、〝倉部浦〟と呼称された臨海集落群の一角を占めていた生活域と考えられる。

浜竹松遺跡の動向を４期に分けて整理してみたが、各時期に共通する未解明な問題として、周辺の農耕地の変遷、海岸線と砂丘の変動、立地から窺える漁撈活動の三点が上げられる。いずれも、本遺跡の狭小な調査区の成果では到底解明に及ばぬ問題であるが、今後この地域の考古学研究を推し進める過程で、解決の糸口が見い出されることに期待したい。

第８章　参考文献

石川県立埋蔵文化財センター　『漆町遺跡Ⅰ』　1986年
石川県立埋蔵文化財センター　『倉部』　1990年
小葉田　淳　「冷泉為広卿の『越後下向日記』と加賀の旅路」『日本歴史』第472号　1987年

第9章　総　　括

第1節　北陸の弥生後期後半の土器について

本書で扱った遺物は、昭和63年度A調査区をはじめとして、弥生後期後半の土器が大半であった。北加賀地方の後期後半の土器については、谷内尾晋司氏によって、松任市法仏遺跡出土土器を用いた法仏Ⅰ式・Ⅱ式（谷内尾1983）が設定されており、北陸の編年観として、また基準資料として内外でかなり広く認識されている。とはいえ、設定からすでに10年近くが過ぎ、該期の資料が蓄積されるにつれて、基準資料との様相差が露呈するなど、当初の概念と様式的な理解が追いつかなくなってきているのは事実である。

本節では、昭和63年度A調査区出土土器群について器種分類を行ってその組成を把握すると共に、これまでに蓄積された資料を整理して北加賀地域での編年観を再考するとともに、さらに県内各地の土器と比較することにより、より広域での地域性についても論及してみたい。

1．器種分類（昭和63年度A調査区出土土器群を中心とする）

出土土器は甕・壺・鉢・高坏・器台に大別される。以下、各器類毎に分類を行う。

a）甕形土器

煮沸に用いられる器類。もっとも多量かつ多様な形態差を有する。擬凹線の有無と、口縁形態の差異という属性の組み合わせによって分類した。口縁形態は、有段口縁、断面三角形、くの字の3種である。その結果、以下の数種にまとまるが、さらにそれぞれで細分が可能であるほどに多種多様であった。器型については、全形を知りうるものが限られているため不明確であり、口縁形態等と絡めて考えにくい。一般に、胴部最大径は中位かやや上に持つが、張り出しは強くなく、縦横比の関係から背が高く見えるものが多い。調整については、口縁部はヨコナデ、頸部以下は外面ハケメ・内面ヘラケズリがほぼ定着しているが、口縁内面にヘラミガキを行うものも若干認められる。肩部周辺の連続刺突文は甕にはかなり普遍的に見られるようである。施文原体はハケ状具が主体だが、様々なものがある。法量的には口径で大（25cm前後かそれ以上）・中（20cm前後）・小（13cm前後）程度に分けられよう。

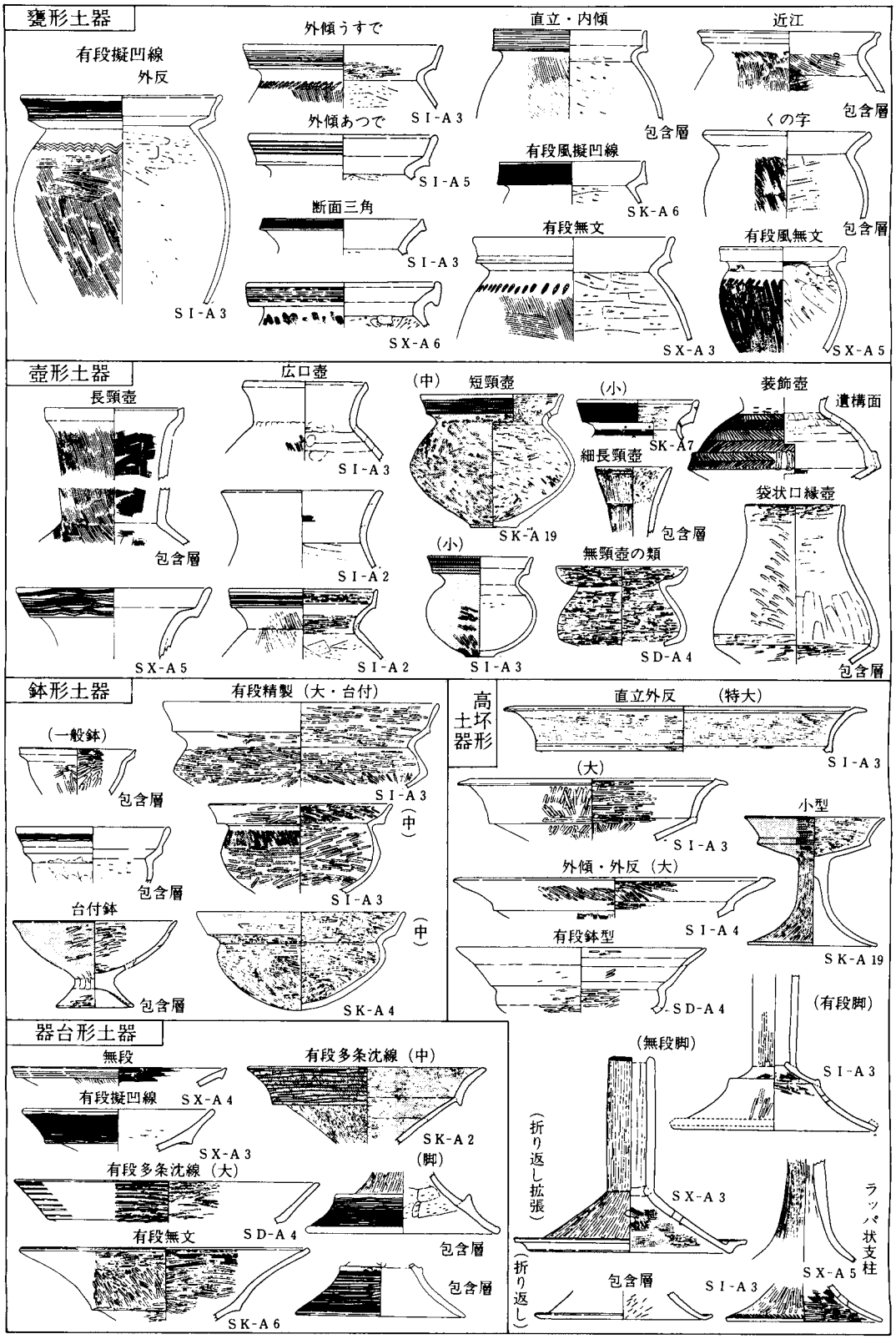
有段擬凹線型　有段口縁で擬凹線を持つもの、次の3種に細分される。

(1)外反型　口縁帯がよく伸長したものに見られるが、量的には少ない。

(2)外傾型　さらに多様な形態差が見られる。端部形態の差異、器壁の厚薄、外傾の程度等の要素が複雑に絡み合うので、共通性を統べるのは容易でない。口縁帯をヨコナデにより凹ませて外反に見せる手法は、外反するものとは区別してここに含める。

(3)内傾・直立型　包含層出土土器で見られる。量的には少ない。

有段風擬凹線型　有段型と断面三角型の中間的な口縁を持ち、擬凹線を持つもの。外見は有段口縁に似るが、内面の段は明確でない。



第76図　出土土器分類概念図（S＝1／6）

断面三角形型　断面三角形口縁で擬凹線を持つもの。端部を上下に拡張するものとしないものがある。後者は楠正勝氏のいう瀬戸内系に相当するものか（金沢市教委 1989）。

有段無文型　有段口縁で無文のもの、細分は有段擬凹線型に準ずる。

近江型　口縁帯が短い近江地方の受口状口縁甕に類似するもの。本遺跡では確認されなかったが、口縁下端に連続刺突文をもつものもある。本遺跡ではＳＸ－Ａ３や包含層から出土しているが、在地化が進んでおり、有段無文型との区別は難しい。

有段風無文型　くの字型と有段無文型の中間的な口縁を持つもの。端部面取りからさらに肥厚・拡張を行っている。狭い口縁帯が形成されるが無文である。

くの字型　量的には少ない。端部を自然におさめるものと面を取るものがある。

ｂ）壺形土器

貯蔵機能を持つ器類。やはり全形を窺えるものが少なく、主に頸部から上の分類となる。器型では長頸・広口・広口短頸・特殊器型に、口縁形態では有段とくの字に大別される。用途の別を表すものと考える器型に重点を置いて以下のように分類した。法量的にもまとまりが見られる。

長頸壺　頸部が筒状に延び、全長の５割前後を占めるほどになるもの。調整はハケメを基調とし、厚手のつくり。本土器群では確実なものは包含層出土の１点しなない。

広口壺　頸部がある程度伸び、口縁部が屈曲して広がるもの。口縁形態では有段とくの字があり、前者にヘラミガキ調整、後者にハケメ調整が多い。口径 15 cm 前後の法量にまとまる。

広口短頸壺　広口壺と比べて頸部が詰まっているもの。口縁形態はほぼ有段口縁に限られ、胴部は張り出し球形に近く、体部は平底を常とし、器高は小さい。概して精製品・赤彩品や、頸部に紐穴を持つものが多く、ＳＫ－Ａ７例のように山陰地方に類似した装飾を持つものもある。口径 14 cm前後の中型品と 10 cm前後の小型品がある。

特殊器型壺　量的にはきわめて少ないが、精製品や装飾を持つものが多く、非実用的な性格が強いと考えたい。次の４種があり、法量的にはそれぞれ規格性を持つものと思われる。

⑴**細長頸壺**　扁球形の胴部に細く長い筒状の口縁部が付くもの。包含層から１点出土している。

⑵**無頸壺**　ＳＸ－Ａ３より１点出土しているが、図化できなかった。第 76 図の分類に示したＳＤ－Ａ４例はその変形したものであろう。他遺跡の例では脚台が付くものもある。

⑶**袋状口縁壺**　無頸壺状の胴から口縁部が内傾もしくは内湾気味に伸び袋状の容器となるもの。包含層から１点が出土している。他遺跡の例を見ると脚台が付くようである。

⑷**装飾壺**　算盤玉状に突き出す胴部に凸帯を貼り、さらに浮文・連続刻み等で加飾するもの。遺構面から出土した 161 のみで、おそらくはくの字に屈曲してひらく口縁と、脚台が付く。

⑸**大型壺**　甕を凌ぐほどの法量を持つもの。すでに分類したもののいずれかに含まれるのであろうが、きわめて少量で、その実態は不明確である。

ｃ）鉢形土器

量的には多くない。甕・壺に比較的忠実な形態で器高が小さい鉢と、独特の精製鉢に大きく分かれる。後者は有段口縁で全面ミガキ調整の精製品を常とし、赤彩品も多い（以下有段精製鉢と表記する）。本遺跡では大型で支柱か脚台のつくであろうＳＩ－Ａ３例や、頸部が不明確で体部が

丸底に近づいたＳＫ－Ａ４例も見られる。

ｄ）高坏形土器

脚部･支柱内面を除いた全面のヘラミガキ調整を常とする。本遺跡では完形品が出土せず、坏･支柱・脚を一体化した分類ができないので、各部位ごとに行った。

⑴坏部　すべて有段で口径30 cm前後の大型品がほとんどである。３種にわかれる。

直立外反型　坏底部で強くはっきりと屈曲し、直立気味に立ち上がった後、外反していき、端部は面を取る。ＳＩ－Ａ３例のように坏部内面に小凸帯を設けて段を付けるものがある。

外傾外反型　坏底部で屈曲する時点で大きく外傾し、外反するもの。端部は面を取るか肥厚するなど手を加えるものと自然におさめるものがある。有段の屈曲が不明瞭なものが見られる。

有段鉢型　坏底部が丸みを持ち、有段精製鉢に類似した器型をとるもの。

⑵支柱・脚部　支柱は棒状の長いものと、ラッパ状で脚と一体化して広がるものがあり、前者が多いようである。脚部は無段脚と有段脚に分かれる。有段脚にはスタンプ文や沈線を施すものがある。端部の処理では、折り返すもの、折り返してさらに拡張するもの、凸帯を付けるもの、自然におさめるものの４種に分かれる。一般に自然におさめるものは無段脚とラッパ状の支柱に付き、それ以外は棒状支柱に有段・無段どちらも付いてよいようである。

⑶肥手　図化しえなかったが、ＳＫ－Ａ13と包含層からそれぞれ１点ずつが出土している。

⑷小型高坏　ＳＫ－Ａ19出土の１点だけであるが、組成内にその存在を認めたい。

ｅ）器台形土器

何らかの容器の台として常にセットで用いられる器類であり、それ単独では存在しえない。器受け部・支柱・脚部からなる。無段と有段の器型があり、施文技法とも組み合わせて次の４種に分類できる。脚部は器受け部とほぼ相似型でやや小さいものが付くと思われる。法量的には中型（器受け部径20 cm前後）と大型（器受け部径30 cm前後）に分かれる。

無段型　端部に面を取る形式的には古いもの。小破片でその存在は確実ではない。

有段擬凹線型　概して重厚なつくりで、器受け部はあまり外反しない。法量的には中型にほぼ限られる。擬凹線が細いものは山陰地方の器台を比較的忠実に模倣したものと考えられる。

有段多条沈線型　外反する器受け部に、丁寧なヘラミガキに前後して、細く条間の広い平行沈線を施すもの。櫛状具で一度に引くものと、１本ずつ引くものとがある。中型と大型がある。

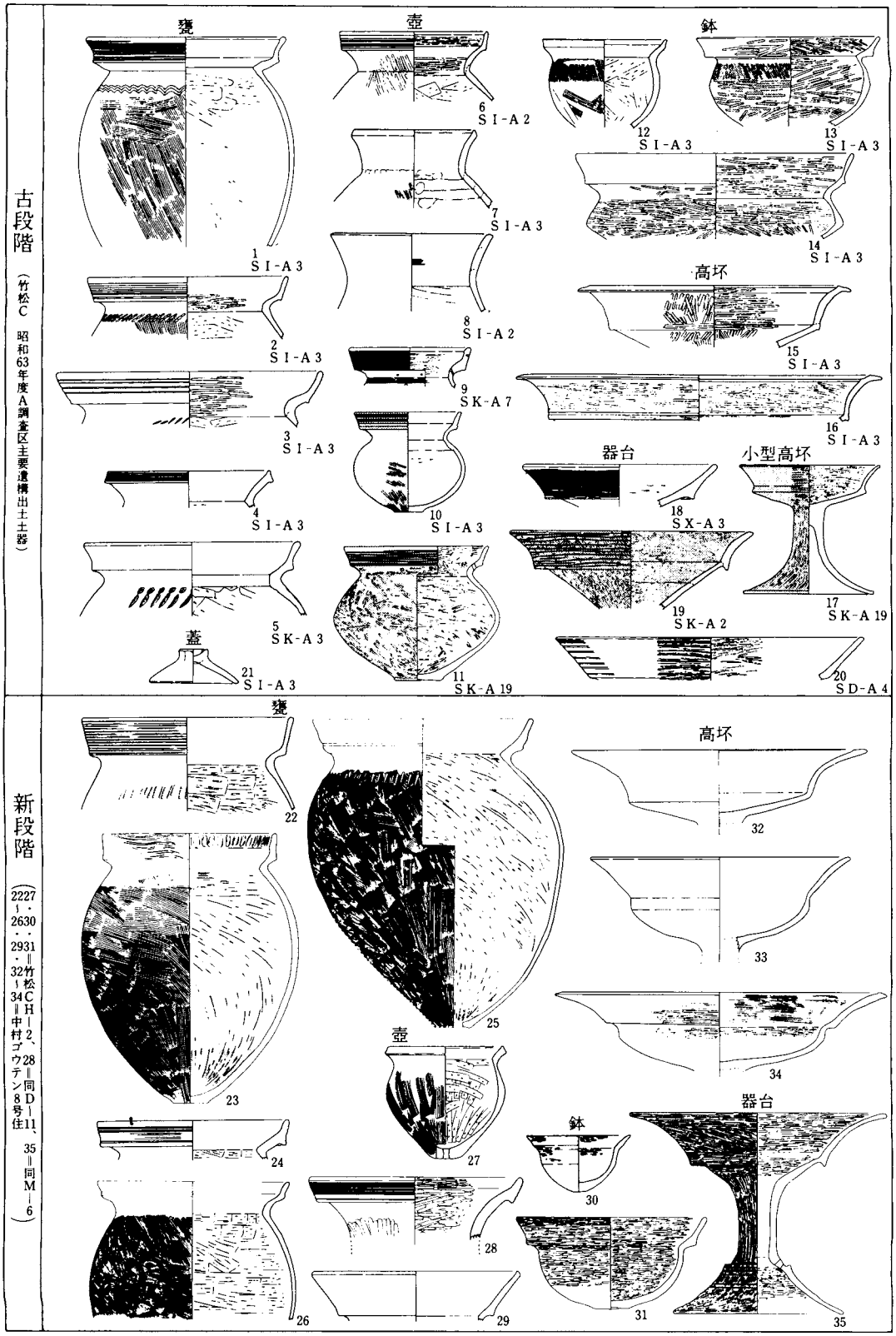
有段無文型　器受け部の伸長・外反がきわめて大きく、無文のもの。本遺跡では希少例であるがＳＫ－Ａ６から出土している。大型である。

２．松任の状況と編年的位置付け

ａ）資料の提示

竹松遺跡群昭和63年度Ａ調査区出土土器群（以後、単にＡ調査区と表記する）

竪穴住居跡、土坑、溝等の遺構からかなりまとまって出土した資料があり、第６章では弥生後期後半の古段階を中心とする時期に位置付けられる、とした。本項では後世の所産であるＳＤ－Ａ１、ＳＫ－Ａ１、より広い時期幅を含む可能性があるＳＸ－Ａ１～Ａ６および包含層･遺構面の出



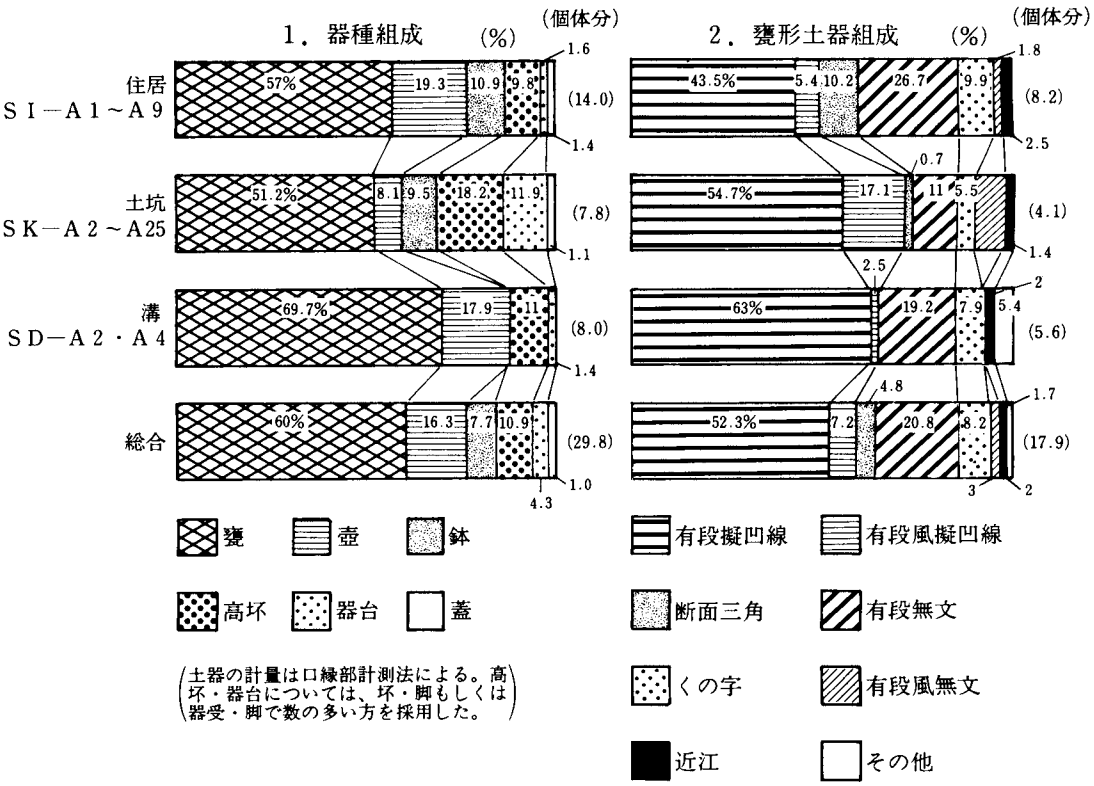
第77図　松任の状況　(S=1/6)

土土器を除いて扱い、この段階の土器組成をほぼ把握することに努めたい。

甕は有段擬凹線型が主体で、有段風擬凹線型を含めた占有比は50%前後となる(第8表)。さらにその主体は外傾型である。その中に口縁のつくりが丁寧で、内面にヘラミガキを行ったものが認められ、山陰地方と共通する技法として注目される。有段無文型は20%前後、断面三角型は5%程度である。壺は広口壺と短頸壺が定量認められ、SK—A7例など山陰的な装飾を持つものが存在する特殊器型壺はSD—A4例ぐらいできわめて少ない。鉢は有段精製鉢に注目したい。法量差・形態差はあるが、口縁帯は個体の多くを占めるほどに伸びていない。高坏については、重厚な直立外反型・外傾外反型が主体である。形態的により後代まで続く有段精製鉢型の高坏は口縁がほとんど外反しないものである。支柱はほとんどが棒状である。脚は有段脚と、棒状支柱に付く直線的な無段脚が主体である。器台は有段の細擬凹線型と多条沈線型が主体である。各器類に山陰的なつくりが強く表出した種が含まれる点が特記される。

竹松C遺跡出土土器群(松任市教委1988)

竪穴住居跡H—2および溝M—6出土土器をまとまりが強いものとしてとりあげる。甕は主体の有段擬凹線型に口縁の伸長が見られ、内面に指頭痕を持つものも存在する。壺・高坏については不明確である。鉢は有段精製鉢があり、その小型品も確認できる。器台は大型の有段無文型で器受け部の外反・伸長が大きく、脚部にスタンプ文を施すものである。A調査区出土土器とは共通する要素も持つが、より後出的な様相と言える。



第8表　昭和63年度A調査区出土土器組成表

中村ゴウデン遺跡出土土器群（松任市教委 1989）

8号住居址出土土器群を取り上げる。甕は主体の有段擬凹線型に口縁の伸長が見られ、内面に指頭痕を持つものも存在する。他には有段無文型や、有段風無文型が見られる。近江型は変質が著しく、有段無文型との判別は難しい。壺は広口壺がある。鉢は出土していない。高坏は外傾直立型と有段精製鉢型があり、どちらも口縁の伸長が大きい。全体的にA調査区出土土器よりも新しい様相を示し、後期後半の新段階に位置付けられる。

b）松任の編年観の再考

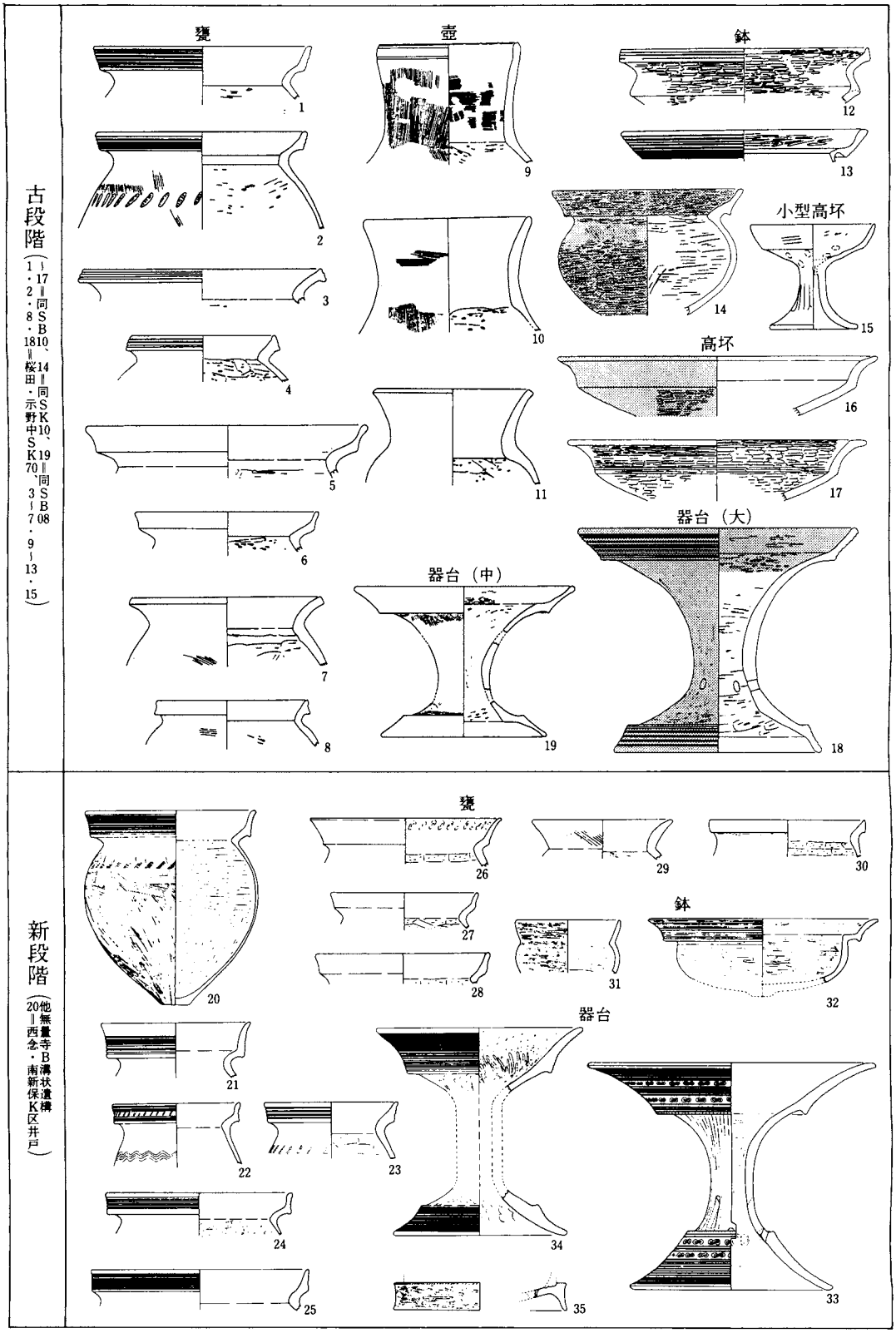
松任における弥生時代後期後半の編年観は、これまで法仏遺跡出土土器群（谷内尾 1983）に重点が置かれていた。なぜなら法仏遺跡は竪穴住居跡出土土器から法仏Ⅰ式が、土壙群出土土器から同Ⅱ式が設定され、後期後半が二分して捉えられてきた北加賀の法仏式土器の標式遺跡であるからである。しかし、公開されているのは土器群のほんの一部であり、出土状況などは万人の知るところではない。甕形土器の多様性については指摘されているが、その他の器種については全体に組成の把握がよくなされておらず、法仏遺跡単独では、推移や変化を説明しきれていない。特に、栃木英道氏が指摘した如く器台や特殊器型壺への評価が不足しているといえよう(1)。法仏遺跡の出土土器群はたしかに古段階・新段階の両相を含んではいるが、こうした理由からⅠ式・Ⅱ式土器の取扱いには慎重でありたい。今回提示した資料はこの状況を補いかつ修正するに足るものと考え、A調査区主要遺構出土土器群を後期後半の古段階に、中村ゴウデン遺跡8号住居址および竹松C遺跡H－2・M－6出土土器を新段階に当てることとする。

古段階・新段階を比較すると、甕形土器は古・新を通じて有段擬凹線型が主体である。一般に口縁帯内面の指頭圧痕、口縁帯の伸長、もしくは外反が新しい要素と理解されているが、各土器群を見るかぎり、あくまでもそれは傾向であって、古い要素もまた残存する。古段階にも口縁の伸びたものは存在するような漸移的な変化をするようで、段階的な理解が難しく、絶対的な指標とはなりえない。古段階・新段階とも多岐にわたる複雑な甕組成がなされるようである。近江型の甕はすでに在地化が進んだものがどちらにも存在するようである。

壺は新段階については、全体的に出土例が少なく不明確である。鉢は有段精製鉢に変化があり、古段階に見られた大型の有台品や頸部がはっきりしたものは見られなくなり、偏平な器型に落ち着くようである。高坏は古段階に見られた重厚さが新段階には失われつつあり、有段鉢型が盛行し、全種を通して口縁の伸長・外反が著しくなる。下半はラッパ状の支柱～脚と棒状支柱有段脚の2種がある。器台は古新で様変わりし、新段階には擬凹線型・沈線型にかわって有台無文の大型品が盛行すると考えたいが、A調査区SK－A6や、高松町中沼C遺跡(2)の例を見ると、主体ではないが古段階から存在しているようなので、新出器種とは言えないであろう。

c）小結

概観すると、松任地域の弥生後期後半新段階は、各器類に見られる軽薄化や、口縁の伸長・外反といった形態変化に加えて、高坏・器台など一部の器類における主体器種の変化に特徴付けられる。ここではさらに山陰的な要素が希薄化している可能性を挙げておきたい。



第78図　金沢の状況　(S＝1/6)

3．金沢の状況について

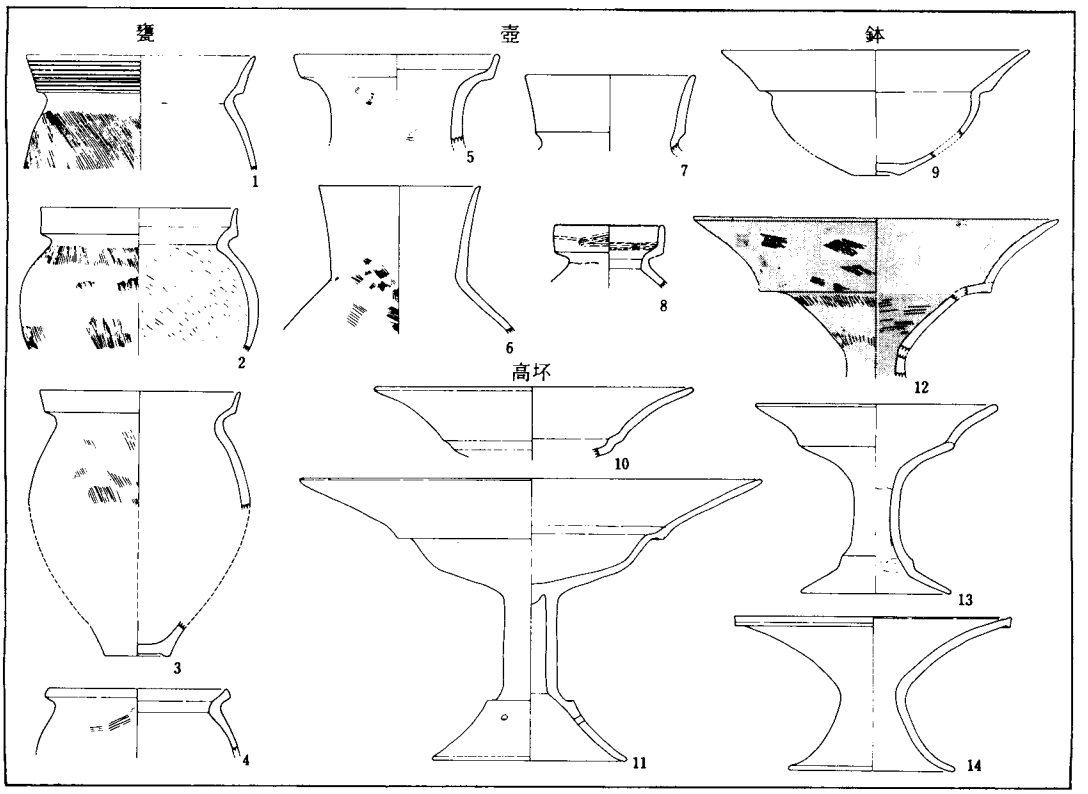
a）資料の提示

桜田・示野中遺跡出土土器群（金沢市教委 1991）

平地式建物ＳＢ 10・土壙ＳＫ 70 出土土器を取り上げる。甕は前項分類のほぼすべてが見られる。主体は有段および有段風擬凹線型だが口縁帯が伸びたものは顕著でない。ＳＢ 10 では断面三角型も定量見られる。壺ではくの字口縁の広口壺が多く見られる。多様な形態差が見られ、中には長頸壺に近いものや直口縁気味のものもある。鉢は精製鉢に、有段口縁が短く頸部がはっきりしたものや、大型で脚台が付くらしい断面三角形口縁を持つものが認められる。高坏は有段で直立外反型と外傾外反型で構成される。脚部は無段が主のようである。器台については有段で擬凹線や多条沈線を持つものが主体であるが、口縁帯は短い。無文で短い口縁帯を持つものもある。調査担当者の増山仁氏はＳＢ 10（古）・ＳＫ 70（新）と序列しているが、甕組成以外に指標を見い出しがたいため、ここでは両者がほぼ同時期で上下限に幅を持つものと見ておきたい。後期後半のなかでも古段階に位置付けられよう。

無量寺Ｂ遺跡出土土器群（金沢市教委 1982）

溝状遺構出土土器を取り上げる。甕は有段擬凹線型が主体で、典型的な断面三角型が見られない。有段口縁のものは外反したり内面に指頭圧痕を持つものが見られる。鉢はかなり偏平度の強い有段精製鉢がある。器台は大型で大きく外反する有段のもので、多条沈線とスタンプ文を盛んに施している。中型で擬凹線を持つ有段器台もある。装飾器台も破片であるが、確認される。壺・



第79図　金沢市塚崎遺跡出土土器群（Ｓ＝１／６）
（１～７・９～14＝21 号竪穴、８＝７号竪穴）

高坏については明確でない。性格不明の遺構であり、厳密な一括性は問えないが、その主体的な時期を後期後半の新段階に位置付けたい。

西念・南新保遺跡（金沢市教委 1983・同 1989）

弥生中期から古墳前期までの推移を1遺跡で確認できる数少ない事列である。その存続期間は出土土器によって全13期に区分されており（金沢市教委 1989）、後期後半には8・9期が相当する。基準資料の多くを溝状遺構によるため、一括性は弱いが、甕等の豊富なバリエーションや新相・古相の存在は窺い知ることができ、それらは上記2遺跡にそれぞれほぼ共通している。

塚崎遺跡出土土器群（石川県教委 1976・吉岡 1991）

丘陵上に立地し、多くの竪穴住居跡や貯蔵穴を有する弥生後期後半から終末にかけての集落遺跡であり、その全域に調査が及んだ数少ない例である。吉岡康暢氏は出土土器を3時期に区分し、塚崎Ⅰ～Ⅲ式を設定している(3)。ここでは弥生後期後半、塚崎Ⅱ式の基準資料である7号竪穴・21号竪穴出土土器を取り上げる（第79図）。甕は有段口縁主体であるが、擬凹線を持つものよりむしろ無文のものが目立ち、口縁帯は伸びたもの・短いもの両方が認められる。断面三角型はほとんど見られない。壺は長頸壺・短頸壺・広口壺があり、短頸壺には有段口縁の小型品が見られる。鉢は有段精製鉢で口縁がよく伸びたものが見られる。高坏は口縁が伸長・外反した有段精製鉢型のものが主体で、他の類も口縁がよく伸びている。器台は有段で口縁が外反・伸長した無文のものが主体で、その中型品も確認される。後期後半の新段階に位置付けられよう。

額谷ドウシンダ遺跡出土土器群（金沢市教委 1984）

円形周溝状遺構および1号土坑出土土器(4)を取り上げる。甕は有段無文型が多く、断面三角型は見られない。有段型のものは口縁帯が伸びている。壺は小型短頸壺と特殊器型の袋状口縁壺がある。鉢は口縁がよく伸長した有段精製鉢と有孔鉢がある。器台・高坏等は不明確であるが、他器類の形態からは古段階まで溯りえないので、後期後半の新段階以降(5)としたい。

b）金沢の編年観について（第78図・第79図）

金沢では弥生後期後半について、特に古段階の資料の不足もあって松任の法仏式とほぼ同一視されてきたが、最近得られた資料を交えて独立した編年観を組み立ててみたい。まず、桜田・示野中遺跡出土土器群を古段階に、そして無量寺B遺跡出土土器群の主体的なものを新段階に当てる。両段階の不備な組成については西念・南新保遺跡出土土器群を補足的に用いていきたい。

金沢においては、弥生時代の遺跡の多くは低湿な沖積平野の微高地上に立地している。前記した3遺跡の出土土器は、同地域の一般的な集落の組成と考えてよかろう。だが、例外的に山麓部の丘陵上に立地する遺跡がいくつか存在する。塚崎遺跡と額谷ドウシンダ遺跡がその主なものであるが、沖積平野とは異なった土器組成をもっているようであり、両遺跡とも甕組成にその差がよく現れている。沖積平野の遺跡では有段擬凹線型が確実に主体となり、特に新段階には過半数を上回るのに対して、塚崎遺跡での占有率は20～40%(6)に過ぎず、有段無文型が同量かそれ以上、くの字型と合わせると有段擬凹線型を上回っている。額谷ドウシンダ遺跡もほぼ同じ傾向を見せ、立地の差異と様相差がある程度関連することを証明している。古段階については不明だが(3)、新段階に金沢で少なくとも2つの土器圏が存在していることを指摘できよう。

c）小結・松任と比較して

北加賀の地勢は犀川を境として、松任を中心とする手取川扇状地、金沢を中心とする沖積平野、金沢で山麓から派生する丘陵部に大別できる。金沢では、後期後半の土器に沖積平野と丘陵部に様相差が認められた。松任はその遺跡の大半が扇状地扇端部に立地し、その地勢は犀川西岸まで及んでいる。この項では、主として金沢沖積平野と松任の資料を比較することで、両地域の環境の違いも含めた地域性が土器組成に反映されているかどうかを考えてみたい。

金沢の古段階、桜田・示野中遺跡出土土器群は、甕の組成要素では松任とかわらないものの、量比では異なっている。主体である擬凹線型は口縁の短いものや有段風のものが顕著であり、若干の時期差を含んだとしてもその差は明確である。断面三角型の量比は遺構によってかなり偏差が見られる。壺は多彩な形態のくの字の広口壺が見られる。器台には擬凹線もしくは多条沈線を持ち有段で口縁が短いものとその無文型が見られ、中型品も存在する。後期前半以来のタイプと融合した独特の器型といえよう。松任で見られた有段口縁が伸長した多条沈線型はあまり見られない。広汎地域で比較的変化が明確な高坏や有段精製鉢については両者にあまり隔たりは感じられない。桜田・示野中遺跡は甕組成に古い要素を残す遺構も見られるが、A調査区とは組成要素に共通するものが多く、あまり隔たりを感じさせないことから、若干先行する時期幅をもつものと理解したい。松任との様相差は、山陰との関連が強い土器の僅少さ、くの字広口壺や甕に見られるような古くから系譜を引くものの残存などに求められそうである。

新段階については、特に金沢沖積平野で資料が不足していることからも、古段階ほど明確な様相差を指摘できないので、松任・金沢の平野部の様相差の有無については現状では保留すべきであるが、金沢のなかで、丘陵部と平野部で差異が生じていることは指摘できる。以上のことから、古段階・新段階ともに金沢・松任では土器様相の差異が存在していることは確実といえる。

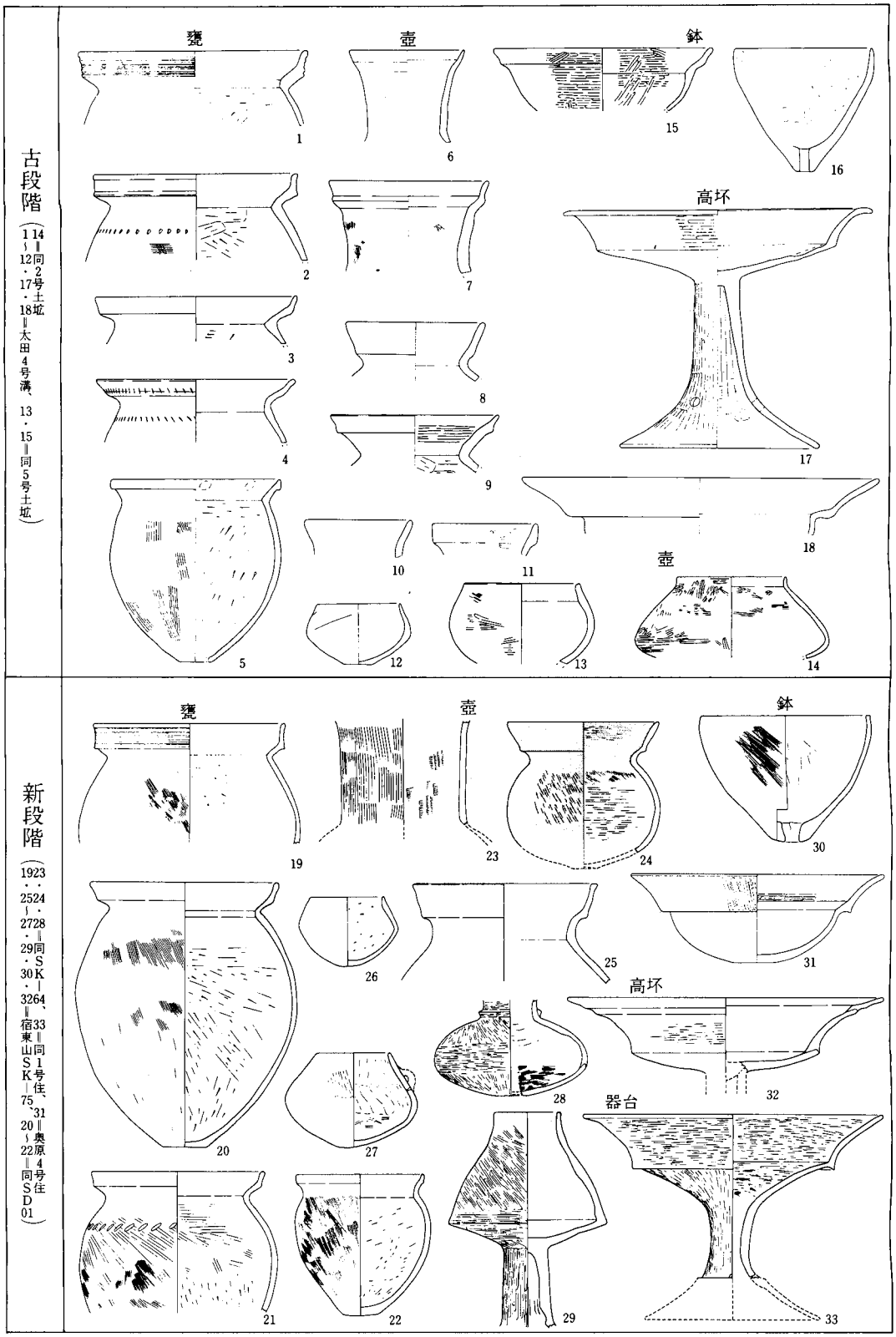
4．能登の状況について

地域がかなり広域に及ぶわりに調査例が限られているため、能登内部での様相差にまでは論及できない。ここでは北加賀との比較の対象として、概観するに留めたい。

a）資料の提示と能登の編年観（第80図）

後期後半古段階は羽咋市太田遺跡4号溝出土土器群（羽咋市教委1991）を主体的に用いる。甕は近江系を含めてほぼすべての類が認められる。有段擬凹型は占有比10～20％と少なく、口縁の伸びも小さい。むしろ有段無文など無文系が合わせて80％前後となり、主体といえそうである(7)。壺では長頸壺が顕著であり、無頸壺やその台付き品も確認できる。短頸壺、特に有段の小型品は少ない。高坏は大型で重厚なつくりで、有段直立外反型の短い口縁部を持つものが主体である。鉢は有孔鉢と有段精製鉢がある。器台については有段・無段両方が見られるが、口縁の伸びは小さい。松任で見られた有段擬凹線型ははっきりとは認められない。

新段階は押水町宿東山遺跡1号住（SD—01含む）・SK—64・SK—75出土土器群（県埋文センター1987a）および七尾市奥原遺跡第4号住居址出土土器群（県埋文センター1982）を用いる。甕は有段擬凹線型が少なく、特に宿東山遺跡では有段無文型が盛行している。壺は広口壺・



第80図　能登の状況(S＝1/6)

長頸壺・中型の有段短頸壺がある。特殊器型壺は各種存在し、細長頸壺・無頸壺・台付きの袋状口縁壺がある。鉢は有孔鉢と有段精製鉢が見られる。器台については無文型が盛行する。高坏・器台・有段精製鉢の口縁の伸長・外反が著しい。

b）小結・北加賀と比較して

能登における該期の様相の推移を概観するなら、加賀とはまた異なった独自の展開があるといえよう。各器類を構成する種は共通するものの、その主体をなすものは古段階からすでに異なっている。甕においては有段擬凹線型が明らかに客体であること、壺において長頸壺・無頸壺が顕著だが有段短頸の小型壺が稀なこと、器台において有段擬凹線型が見られないことなどである。古段階の全体的な組成の特徴として、後期前半段階の系譜を持つ在地的な土器を多く有し、松任では強く感じられた山陰地方に類似する土器が少ない組成といえよう。

新段階については、甕は北加賀では主体の有段擬凹線型に口縁の伸長・外反が認められ、能登との差が一層際立つ傾向にある。対照的に高坏・器台は北加賀同様の変化が進んでいる。盛行する各種の特殊器型壺については、細長頸壺は高松町中沼C遺跡で、袋状口縁壺は奥原遺跡第2号住居址で古段階から認められるため、この段階で出現するものではないことを付け加えておく。

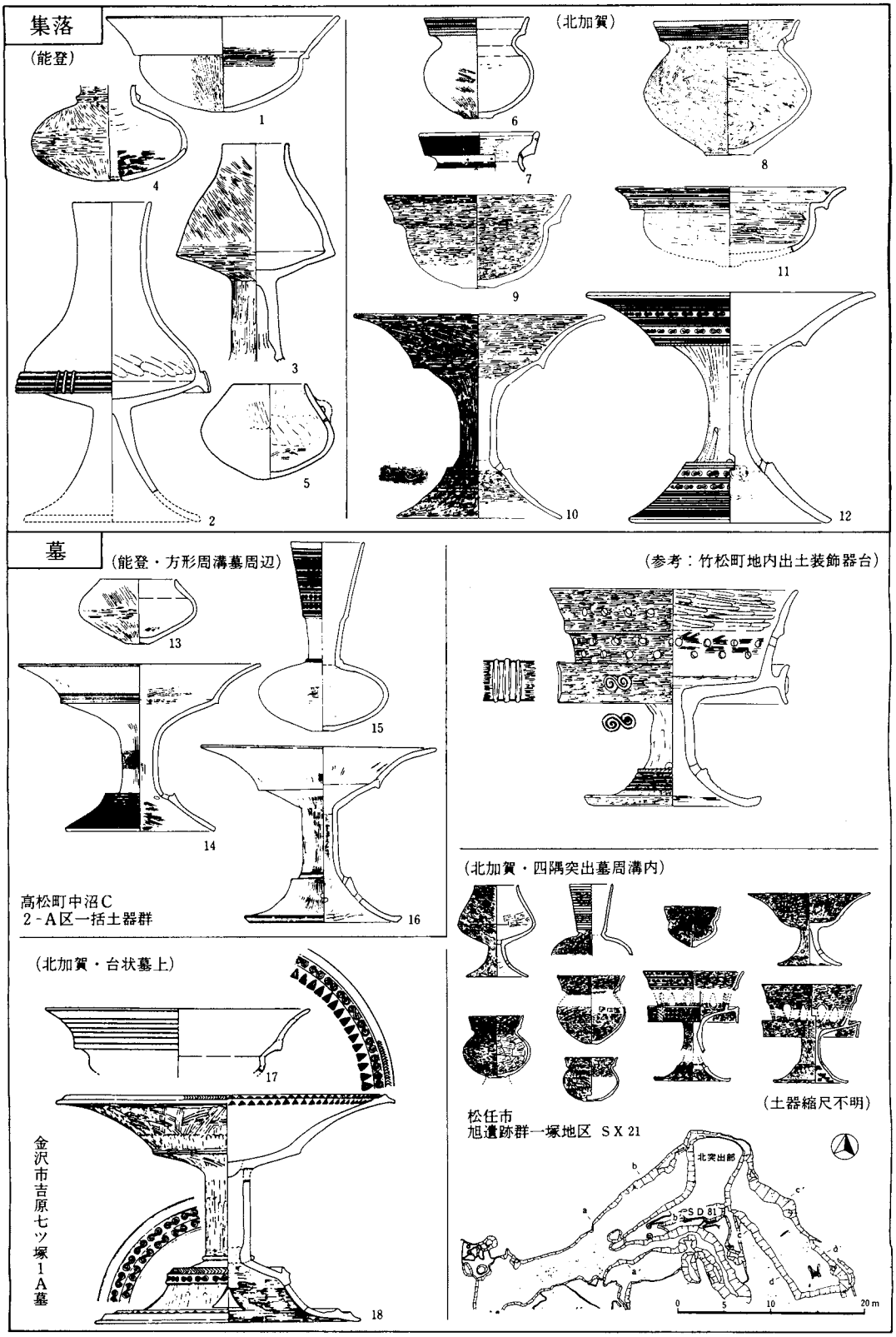
5．祭式土器について

a）墓と集落・北加賀と能登（第81図）

有段精製鉢や特殊器型壺は、実用性が低い器型に加えて赤彩率や加飾率が高い。また、一般的な甕壺に比べると集落遺跡では希少だが組成に確実に認められることと、墓から出土例が多いことから、日用品ではなく、各種の祭祀行為に用いられる儀器、祭式土器[8]として考えたい。同様な性格の器種として、短頸壺の一部や、これらの台となる器台、器台に類似した形態の高坏も含めることができる。加飾方法の代表としてはスタンプ文があげられよう。祭式土器は墓と集落の両方に見られ、また北陸一円に分布するが、本項では遺跡の性格および地域によってどのような差が見られるのかをそれぞれの比較によって考えてみたい。

県下の該期の墓址の代表例としては、高松町中沼C遺跡、金沢市吉原七ツ塚墳墓群（小嶋1992）、松任市旭遺跡群一塚地区（松任市教委1990）を挙げることができる。中沼C遺跡では方形周溝墓に近接して検出された土器集中地点が、埋葬に伴う数次にわたる供献祭祀行為の存在を示している。供献土器は器台と無頸壺、器台と細長頸壺の明確なセットからなる。七ツ塚墳墓群では方形台状墓1A墓上から有段精製鉢・高坏・器台が出土している。高坏と器台はスタンプ施文に三角形透かしと、加飾が盛んである。旭遺跡群一塚地区の四隅突出墓SX21は墳丘が遺存しておらず、供献土器は前2者と異なり周溝から検出されたもののみである。装飾器台の存在が特筆されるほか、細長頸壺・袋状口縁壺も確認されている。この3遺跡は立地や形態は様々であるが、いずれも被葬者を上級首長層に限定できる点では共通している。これら墓址と集落の祭式土器の様相を比較すると、墓址に際立つ特徴として、①中沼C遺跡に見られるような厳密なセット関係の存在、②スタンプ文に代表される過装飾性、の2点を挙げることができる。

集落においてもセット関係が認められないわけでなく、松任では倉部出戸遺跡（県埋文センター



第81図　北加賀・能登の祭式土器 (S=1/6)

(集落土器1=七尾市奥原4号住、2=同2号住、3・5=押水町宿東山SK-75、4=同SK-64
6=松任市竹松C　SI-A3、7=同SK-A7、8=同SK-A19、9=同H-2、10=同M-6、11・12=金沢市無量寺B溝状遺構)

1990 b）・竹松C遺跡、金沢では無量寺B遺跡などで、大型器台と有段精製鉢が共伴もしくはそれに近い状況で出土している（第81図）。また、A調査区ではSK－A6で同様の状況が見られるが、他に中・小型の有段短頸壺が器台に乗る可能性も考えられる。しかし、中沼C遺跡の器台16と細長頸壺15のように製作時からその組合せが考えられていたかのような[9]規格性は顕著でない。①②からは墓と集落で用いる土器の区別を指摘できる。①に関して、集落では使用に際してより自由な組合せが存在したものと考えるならば、墓域祭祀においての差別化された厳粛な格式が存在していると捉えることも可能である。

一方、土器組成の項で述べてきたように能登で特殊器型壺（細長頸壺・無頸壺・袋状口縁壺等）がよく見られる点で、北加賀と能登という地域別でも祭式土器のあり方には差異が見られる。

このあり方を見るかぎり、中沼C遺跡は能登的な様相をもっているので、加賀の集落遺跡のセットと比較すべきでないかも知れない。しかし、器台プラスアルファというセットが厳密であるという点では地域を超えて十分に集落と墓址の差異を認めるものと考える。

また、装飾器台は北陸でも北加賀以西においてよく見られる[10]が、ここで述べた墓と集落の祭式土器の差別化に一役かっている可能性がある。装飾器台が出土した一塚地区SX21は後期後半新段階から終末期にやや近づいた位置付けがなされる[11]が、同時期の集落からは、これまでに装飾器台の確実な出土例はない。この段階ではきわめて僅少な存在と言える。また、装飾器台は器台プラス有段精製鉢もしくは壺のセット形態が結合した、かなり象徴的な性格が強い儀器と考えることもできる。そうした貴重品が下賜され、使用できた階層は一塚地区内での確認例がSX21と規模の大きい方形周溝墓SX22ぐらいであることからもいくつかの集落を統べるようなかなり広域の首長級と想像したい。その出現する時期は、中沼C遺跡で墓域の末期（後期後半新段階）にセット関係の弛緩が報告されており、それに若干前後するものと見るのが妥当であろう。装飾器台の出現に意義を求めるならば、後期後半に確立し発展した北陸の祭祀様式の頂点を示すもの、もしくは弥生終末への祭祀の転換を示すものという2つの捉え方があろう。装飾器台の動向は弥生時代の後期後半・終末の画期と深く関わるものであるから、その意義付けは該期にとってのきわめて大きな問題であり、今後より詳細な検討が加えられたのち理解されるべきと考える。

以上から、祭式土器においても北加賀・能登間の地域性、そして墓と集落での使い分けが存在する可能性を考えることができよう。

b）スタンプ施文土器について

スタンプ文は北陸の弥生後期後半の土器に見られる大きな特徴の一つであり、竹松遺跡群においても、特にA調査区で多くのスタンプ施文土器が出土している。包含層資料が多いゆえに時期的な細分は難しいが、1遺跡でこれだけ多くの出土例はあまりないことからも、スタンプ文のあり方を考える上で、松任における良好な資料になるものであろう。

スタンプ文の施文方法は、すべてが横方向に連ねて押印し、ひとつの文様帯を形成するものである。スタンプ文の種類は名越勉・甲斐忠彦両氏の分類に沿うと、連続過文（原体は1個の渦文で、線刻によって連結させるもの、B類[12]）、S字状渦文（2個の渦文が連結した原体を用いるもの、D類）、同心円文（E類）、印刻渦文、鋸歯文（LRのみ）の5種が確認でき、また非スタン

プ原体で同様のモチーフを持つものとして線刻の渦文をあげることができる。スタンプ施文が行われる器類については壺、高坏・器台がある。この2つの属性を組み合わせた数量をまとめたものが第9表であり、これを基にして、主に文様形式と器類の相関について述べてみたい。

まず、文様形式では、B類とD類が主体である。両者はすなわち渦文の「連結」をモチーフとしているものであるが、前者は1個1個独立したものがすべて連結、後者は連結した2個が独立している点で異なる。少数派であるE類・陰刻渦文・鋸歯文はすべて1個1個独立している。B類から線刻を除くと陰刻渦文やE類とほぼ同じ形状になることから、むしろ原体の種類としては2個連結のものと1個単独のものに分かれ、その両者の主体が渦文であると考えたい。また、異形式のスタンプ文は同じ文様帯内には共存しないが、沈線文帯を隔てた別文様帯としては共存している。脚部に2例、器台器受け部に1例[13]確認されたが、それは「連結された」渦文（B類かD類）と単独文（E類か鋸歯文）の組み合わせになっている。

施文器類は高坏・器台が圧倒的に多く、壺は小型短頸壺1点に見られるだけであるので、前2者が施文対象の主体とみたい。高坏・器台について、スタンプ施文が脚部に行われたものはすべて坏部（器受け部）が遺存しておらず、どちらかの器類に限定するのは難しい。そして施文部位の主体は坏部（器受け部）よりも脚部、特に有段脚のようである。

まとめると、スタンプ文の主体は「連結された渦文」であり、主要な器類は高坏・器台、さらにその有段脚部であると言うことができよう。E類・陰刻渦文・鋸歯文についても高坏・器台にのみ見られることから、少数形式についても施文器類の傾向はほぼ共通するものである。

器類＼文様		B類	D類	E類	陰刻渦文	鋸歯文LR	不明	線刻	※合計	出土主要遺構	組み合わせ例 B+E	B+鋸歯	D+D	合計
壺		0	0	0	0	0	1	1	2	SK−A7、SX−A3	0	0	0	0
高坏（坏部）		1	0	0	1	0	0	1?	3?	SI−A4、包含層	0	0	0	0
器台（器受部）		1	0	0	0	1	0	0	1	包含層	0	1	0	1
高坏か器台	有段脚	3	6	2	0	0	0	0	9	SI−A5、包含層 SK−A9（未図化）	2	0	2	4
	無段脚	0	0	0	0	0	1	0	1	SI−A4	0	0	0	0
合計		5	6	2	1	1	2	2?	16 19	———	2	1	2	5

第9表　昭和63年度A調査区出土スタンプ施文土器一覧表

（※同一個体のものは1個とするので数字があわない）

北陸のスタンプ文については、栃木英道氏が特に詳細な検討を行っており[14]、それによって得られた北陸のスタンプ文諸形式および施文される器類の傾向がA調査区出土品とほぼ一致していることから、北陸の集落での一般的なあり方として大過ないものと考えられる。ただ、A調査区における高坏・器台への施文の極端な集中と壺への希薄さは他地域よりさらに傑出している。これは土器様相に見られた地域差と相関し、もともと松任の組成に特殊器型壺が含まれないことに大きく起因するものと考えたい。スタンプ文は、弥生後期後半において北陸一円に分布する祭式土器の属性の一つとして広く認識されるが、ここではスタンプ文の施文器種に存在する地域差については、土器様相の差異に同調することが看取された点を付記しておきたい。

6．結び

ここまでは松任の弥生時代後期後半の土器組成について各地と比較することによってその特色を考えてきた。まず、金沢・能登および古段階・新段階を含めて概観しておきたい。全体として後期後半の土器は非常に豊富な器類・器種を有することがいえる。それは基本的には数種の系統しかないものが、相互に干渉しあって生み出された膨大な「中間形態」「派生形態」の類を組成に含むからに他ならない。この前後の時期が比較的シンプルな組成を取ることからも、当時期の特徴の一つと言えよう。この現象は程度の差はあるが全器種毎の細かい形態差に現れている。甕形土器に特に目付くのは煮沸という最も苛酷な条件で使われ、その分頻繁に多くつくられることにより、型式の微妙な変遷を顕著に受けたからであろう。甕は絶対的な新古の指標足りえない場合もありうるのである。他の器類については、使用条件が甕よりも良く、使用サイクルが長いことからか、特に高坏・器台において形態変化が比較的明確であるといえる。また、地域によってほぼ共通する組成要素を持ちながらその主体となるものが異なる状況も看過できない。

この時期でもう一つ特徴的なことは、高坏・器台の盛行・大型化とともに祭式土器群が決して多くはないが確実に組成に含まれていることである。量的にまとまって出土する墓址のものは埋葬に伴う供献祭祀に使用されたのだろう。また、実用性が高いとは思えないわりに、集落では少数ながらかなり普遍的に出土するところを見ると季節の祭や病気治癒の祈祷などに用いられた祭式土器の類と推定できる。この器種は後期後半期にはじめて確立するものであり、該期の大きな特徴であると同時に北陸における独自の祭祀の成立を反映するものと考えておきたい。さらに墓址・集落の祭式土器に使い分けの傾向が見られ、墓址祭祀の差別化が確認されたことも大きな特徴といえよう。北陸地域圏の形成、そのなかでの差別化された祭祀を必要とするだけの権力を所有した首長階級の出現が読み取れるのではないだろうか。

北陸内部での地域性については、これまで主として弥生時代後期終末の時期で活発に論議がなされていた。今回、北加賀・能登の後期後半の土器を比較することにより、後期終末に顕在化する地域色は既にその前段階に萌芽していることが明らかになったと見てよいだろう。私見であるが、この時期に地域性を生む要因の一つは、山陰をはじめとする他地域からの文化波及のレベル差にあると考える。山陰からの波及に限ってみると、北加賀でも手取川扇状地の松任には比較的ストレートに影響していることが看取されるが、犀川を隔てて金沢沖積平野ではやや弱まり、能

登へはさらに弱くなるが伝わっている。それに加えて各地域の事情によってどの程度受容したかで生み出された文化なのではないだろうか。後期後半の文化形成前の北陸各地域の状況については比較する資料が不足しているので明確でないが、北陸の弥生土器が、中期から櫛描文系、凹線文系と他地域からの波及・定着・在地化をくり返して推移してくることを考えると、当然波及する側と北陸各地で受容する側の事情等で小地域差が普遍的に存在し、画期たる外来の文化波及ごとに地域性が顕在したり弛緩したりした可能性は否定しないでおきたい。

まとめると、弥生時代後期後半の北陸には、ほぼ共通した組成の土器を用い、北陸独特の専用祭式が確立し盛行するといった広域のまとまりが見られ、葬祭に別個の儀礼が確立するほどに各地の首長権が拡大する。その一方で後期後半の文化が成立した時点には生じていたであろう地域間で異なる状況の下で弥生社会が展開していったものと考えてみたい。

本節では、主に土器から北陸の弥生後期の社会を考えてきたが、結果として北加賀と能登の比較にとどまり、西の南加賀・越前、東の越中・越後にまで検討が及ばなかった。ゆえに「北陸」を標傍するには誇大の感が否めず、厳密には誤りである。また、土器の検討に終始し、住居・墓など遺構の形態の検討や、祭祀に観念的な説明を盛りこむこともできていない。そして後期後半期の社会が終末へと移行する過程については一切ふれられなかった。この3点を今後の大きな課題と明記しておく。弥生時代・古墳時代の社会については、まだまだ多くの検討すべき事象があり、それぞれの研究成果を累積し総合的な理解へと昇華させることを今後も目標としたい。

第2節　竹松遺跡群の変遷について

本書では、第3章から第8章で、竹松町地内に所在する遺跡について発掘調査成果の報告を行った。その地区はほ場整備事業の竹松工区内に限られ、隣接して群在するすべての遺跡について調査し網羅するものではないが、きわめて多くの遺跡を有する広大な松任の手取川扇状地扇端部においてある程度限定された地域の遺跡の動向を見るならば、それはここで「竹松遺跡群」として扱うべきものであると考える。本節は、各遺跡の調査成果および分布調査データ、そして隣接地区での状況も交えて竹松遺跡群の推移を追ったものである。

1．各遺跡の概要

浜竹松遺跡（平成2年度の調査）

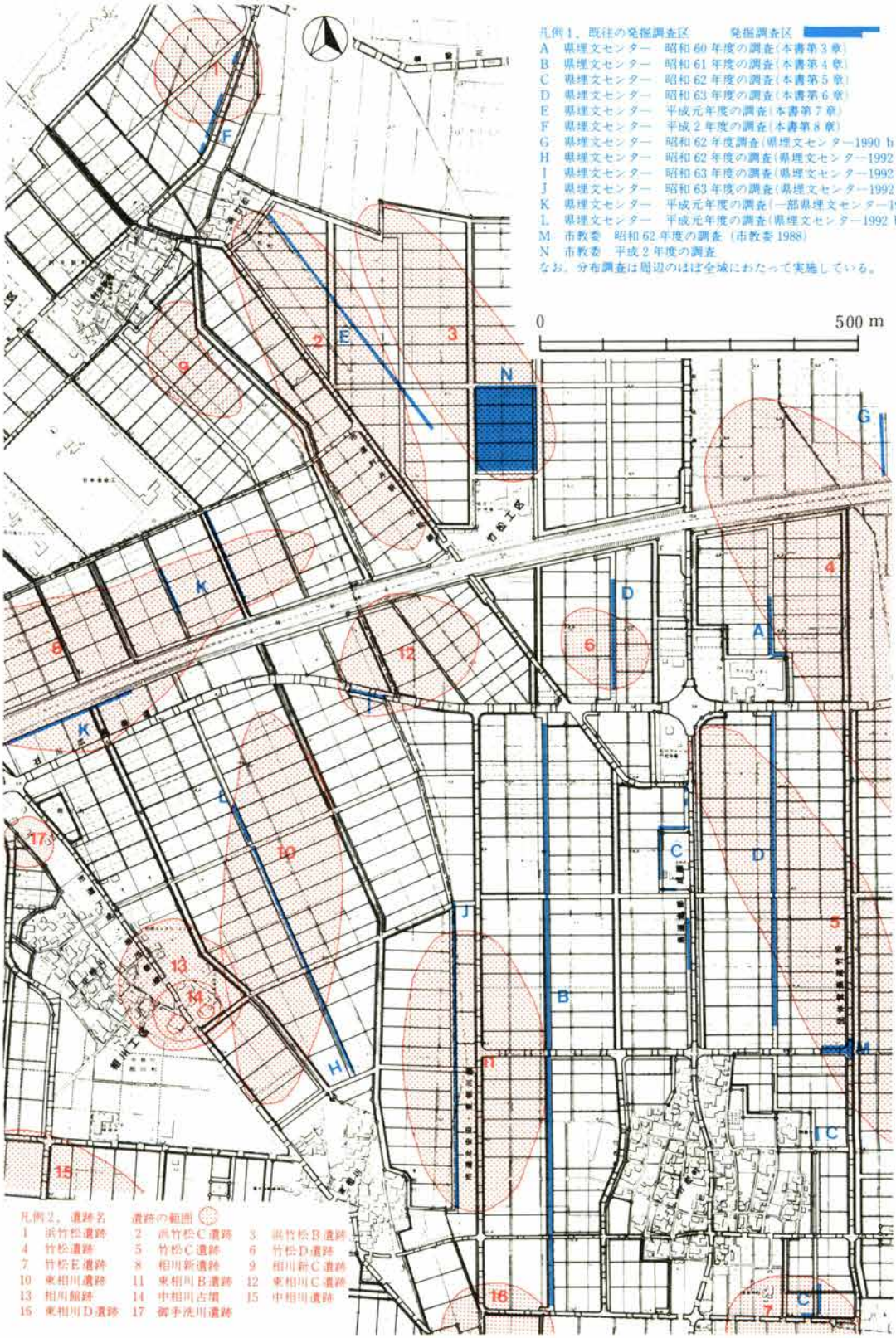
比較的小規模な遺跡であるが、弥生後期に集落が成立し、以後継続的に弥生終末期～古墳前期まで活動する。古代、中世にもそれぞれ短期間ながら生活の痕跡を確認できる。

浜竹松B・C遺跡（平成元年度の調査、市教委による平成2年度の調査）

各地点の出土遺物からは弥生後期、弥生終末、古墳時代の遺跡の存在が推定できる。遺構・遺物は小規模ながら数箇所のまとまりが見られ、短期間のうちに位置を変えているようである。

竹松遺跡（昭和60年度の調査、昭和62年度の調査[15]）

2次にわたる調査のどちらも遺跡の縁辺を確認したにとどまり、実態は不明確であるが、出土遺物からは弥生後期後半には成立していたと推定される。



第82図　既往の調査及び詳細遺跡分布（S＝1／10,000）

竹松C遺跡（昭和62年度の調査、昭和63年度の調査、市教委による昭和62年度の調査）

弥生時代後期後半に集落が形成されるが、終末へ存続することなく、きわめて短期間のうちに終息している。集落のまとまりは昭和63年度の調査と市教委による調査で確認されている。

竹松D遺跡（昭和63年度の調査）

古墳時代前期～中期に小規模な集落が営まれたものと考えられる。

竹松E遺跡（昭和62年度の調査）

弥生後期の土器も出土しているが、遺跡の主体は古代、奈良時代後半の集落と推定される。また、遺物は出土していないが、中世と推定される遺構も存在する。

東相川B遺跡（昭和61年度の調査）

弥生後期～古代の集落遺跡である[16]。昭和61年度の調査区は当初は竹松C遺跡に含まれると推定されていたが、分布調査の結果も総合すると隣接する東相川B遺跡の縁辺部に相当するものと理解される。

2．竹松遺跡群の動向

弥生中期以前

本遺跡群では活動が確認されていないが、旭地区・横江地区などで縄文後晩期から集落が存在しているようであり[17]、扇状地扇端部への進出と開発は始まっているといえよう。

弥生後期

後期前半には、浜竹松遺跡で活動が見られ、この現象は東へ約700m離れた倉部出戸遺跡でも共通する。全域でとはいえないが、遺跡群の活動が始まる可能性がある。後期後半には確実に全域で本格的な活動がなされ、竹松C遺跡では地域の核となるような集落が形成される。浜竹松遺跡でも集落が形成され、浜竹松B・C遺跡や竹松遺跡でも出土遺物の主体時期である。また、隣在する東相川B遺跡や中相川遺跡などでも集落が形成され、多くのムラが群在する状況がはじめて現出するものと思われる。弥生後期、特に後半期は竹松遺跡群の成立期と理解できよう。

	弥生後期	弥生終末～古墳前期	古墳中・後期	古代	中世
浜竹松遺跡	■	■		■	■
浜竹松B・C遺跡	■	■	■		
竹松C遺跡	■				
竹松D遺跡		■	■		
竹松E遺跡	■			■	
東相川B遺跡	■	■	■	■	

第10表　竹松遺跡群各遺跡の消長

弥生終末期～古墳時代前期

弥生後期で成立した集落は、浜竹松遺跡のように存続するものと、竹松C遺跡のようにとだえるものにわかれ、また新たに出現するものも見られる。浜竹松B遺跡では石製品製作の機能を集約したような専業的な集落の存在が推定されている(18)。弥生時代から古墳時代への転換という大画期が含まれるので、集落の位置や構造などの変化が起きる転換期と考えたい。

古墳時代中期・後期

遺跡数・資料数ともにかなり限定されており、速断はできないが、現状では活発な展開は確認できない。竹松遺跡群の衰微期として、同時に群在した集落の終息期として捉えられる。

古代・中世

海岸近くの浜竹松遺跡、扇央部近くの竹松E遺跡・東相川B遺跡などを残してほとんどの遺跡がその活動を停止する。両遺跡が存在しえた要因としては前者については水利の良い立地、後者については開発の主体地域の扇央部への転換に伴うものと考えたい。

3．まとめ

以上のことから、竹松遺跡群の成立期として弥生後期、転換期としての弥生終末～古墳前期、群在した集落が完全に解消に向かう衰退期としての古墳中期・後期の3画期を設定する。弥生終末～古墳前期に関してはさらに小画期の設定が必要と感じる。また、古代・中世に関しては資料が少ないとはいえ、一括して扱い検討が不足している点、反省したい。

こうした展開のなかで、最も人的活動が顕著で、各遺跡で急速に集落が形成される弥生後期後半が遺跡群の最大のピークになると考えられる。竹松C遺跡が大規模な集落を形成しながら次代へ存続せず、その一方で比較的小規模ながら浜竹松遺跡が古墳前期まで存続していることなど、各遺跡間の差は細かい立地条件も含めて興味深い問題である。また、墓制については一切遺構が検出されず、まったく不明確であるが、集落とのバランスを考えると当然その存在は示唆しておくべきであろう。旭遺跡群のような大規模な墓域が集落に対応するようなかたちで存在している可能性は高いし、複数の集落の共同墓地的な集約された墓域を考えることもできよう。

ここまで、竹松遺跡群の成立と展開について述べてきたが、あくまで理解の一例に過ぎず、まだまだ不明確な部分は多い。扇状地扇端部全体を通して見た場合、竹松遺跡群とは遺跡の立地・弥生後期のピーク・短期間の営みなど共通する項目が多いが、弥生中期の活動の有無など異なる点も認められる。遺跡群としてより正確なグルーピングを期するならば、隣接する東相川、中相川、平木、浜相川、相川新など各地区の検討も必要となろう。各地区の遺跡のあり方、扇状地の遺跡のあり方、そして竹松遺跡群の位置付けは、これまでに蓄積された資料の報告と検討、そして今後の新しい資料の出現とともに徐々に明らかになって行くものと期待したい。

第9章　註

1　同氏が県埋文センター1987 cにおいて指摘し、以後その概念を加えたものが修正法仏式となっている。

2　高松町教委 1987。同遺跡2－A区一括土器a群で有段口縁化・加飾が顕著でない古相の細長頸壺とセットをなしている。また、出土状況に不安があるが最古期のSK－01からも無文化した器台が出土している。

3　塚崎I式～III式土器について、後期後半はI式・II式が相当するが、古段階にあたるI式は資料が少なく、II式は新段階を中心とするもののI式及び後期終末に相当するIII式に重複する部分を持つ時期幅の広い小様式と理解している。塚崎遺跡は古段階に成立するが、遺構・遺物とも少量であり、中心時期は新段階以降であろう。

4　両遺構をあわせて、近年確認例が増加している「周溝を有する建物」となる可能性が高い。
5　現状では後期後半新段階と終末古段階との厳密な境界が不明瞭であるため、こう表現する。
6　県埋文センター1984に提示された数値より。
7　羽咋市教委1991で明記された出土土器全体の点数による。各遺構・包含層も一括されているが、時期幅の小さい資料で、4号溝の傾向に近いものと考える。
8　該期の土器研究の着手と同時に注目され続けてきた。吉岡康暢氏は1991年刊の著書でそのパターン化を試行し、詳細に論じている。
9　第81図15の胴部最大径と同16の内底面径がほぼ同じであり、セットとして組み合わせた際にぴったり納まり、それぞれが使用に際しての「相方」を意識して製作された可能性がある。
10　石川考古学研究会1986で宮本哲郎氏が集成し、検討している。
11　松任市教委1990および、(5)に同じ
12　銅鐸文様の分類に共通する。県埋文センター1987ｃ。以下同じ。
13　第52図303・304に認められるが、両者が同一個体の可能性が高いことから1例とする。
14　県埋文センター1987ｃ。各地のスタンプ文の集成と分布の検討、さらにD類の細別と石川県下での分布について述べている。
15　県埋文センター1990ｂ。第2章に所収。ほ場整備の工区が旭第2地区であるため、本書には掲載されていない。
16　県埋文センター1992ｂ。ほ場整備相川工区関連として昭和61年度に遺跡の中心部が調査された。
17　県埋文センター1990ａ、県埋文センター1992ａ、松任市教育委員会による平成2年度の横江遺跡の調査などで確認されている。
18　本書第6章註3に同じ。調査担当者の前田清彦氏より教示を受けた。

第9章　参考文献

石川県教育委員会　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II　塚崎遺跡』　1976年
石川県立埋蔵文化財センター　『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』　1982年
石川県立埋蔵文化財センター　『鹿首モリガフチ遺跡』　1984年
石川県立埋蔵文化財センター　『宿東山遺跡』　1987年ａ
石川県立埋蔵文化財センター　『敷地天神山遺跡群』　1987年ｂ
石川県立埋蔵文化財センター　『吉竹遺跡』　1987年ｃ
石川県立埋蔵文化財センター　『松任市一塚イチノツカ遺跡』　1990年ａ
石川県立埋蔵文化財センター　『倉部』　1990年ｂ
石川県立埋蔵文化財センター　『横江』　1992年刊行予定ａ
石川県立埋蔵文化財センター　『相川遺跡群』　1992年刊行予定ｂ
石川考古学研究会　『シンポジウム「月影式」土器について』報告編　1986年
金沢市教育委員会　『金沢市無量寺Ｂ遺跡』　1982年
金沢市教育委員会　『金沢市西念・南新保遺跡』　1983年
金沢市教育委員会　『金沢市額谷ドウシンダ遺跡』　1984年
金沢市教育委員会　『金沢市西念・南新保遺跡II』　1989年
金沢市教育委員会　『桜田・示野中遺跡』　1991年
小嶋芳孝　「加賀地方における弥生後期社会の一様相」『考古学と生活文化』　1992年
㈶鳥取県教育文化財団　『秋里遺跡（西皆竹）』　1990年
高松町教育委員会　『中沼Ｃ遺跡』　1987年
東海埋蔵文化財研究会　『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』　1991年
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団　『岩吉遺跡III』　1991年
羽咋市教育委員会　『太田遺跡』　1991年
松任市教育委員会　『竹松Ｃ遺跡』　1988年
松任市教育委員会　『中村ゴウデン遺跡』　1989年
松任市教育委員会　『旭遺跡群発掘調査概報』　1990年
谷内尾晋司　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号）1983年
吉岡康暢　『日本海域の土器・陶磁［古代編］』　六興出版　1991年

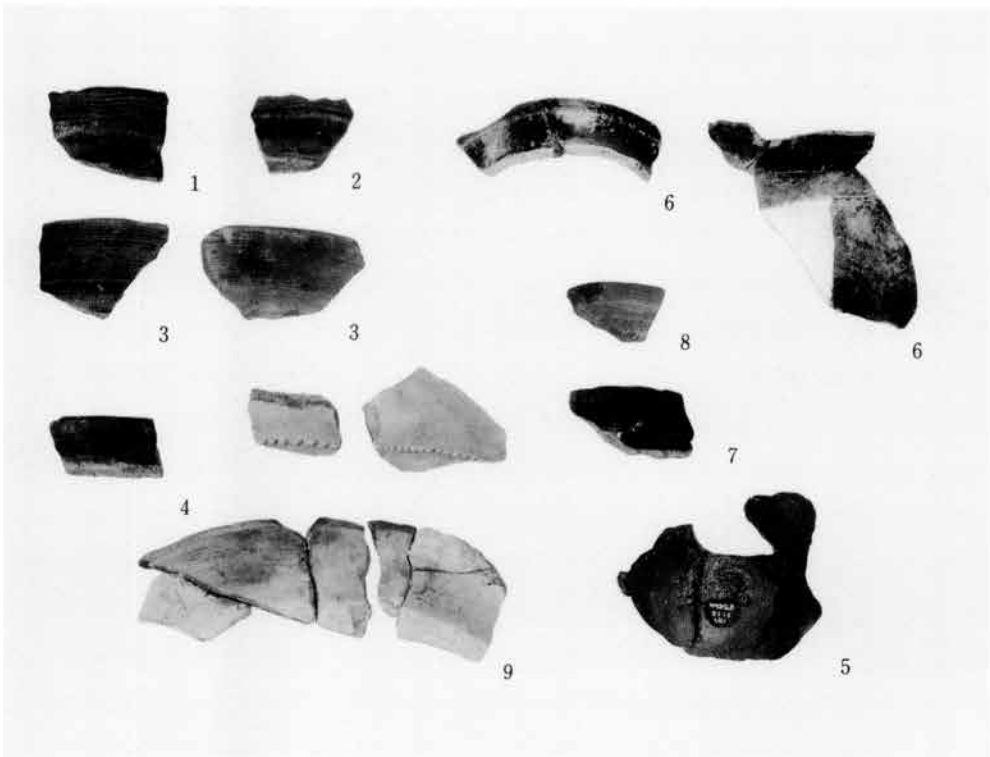
図　　版

調査区全景（北から）

第1・2号溝（北から）

図版2　昭和60年度の調査　2

落ちこみ（北から）



出土遺物

調査区遠景（南東から）

調査区北側全景（北から）

第14区から北側

第25区から北側

第28区（南から）

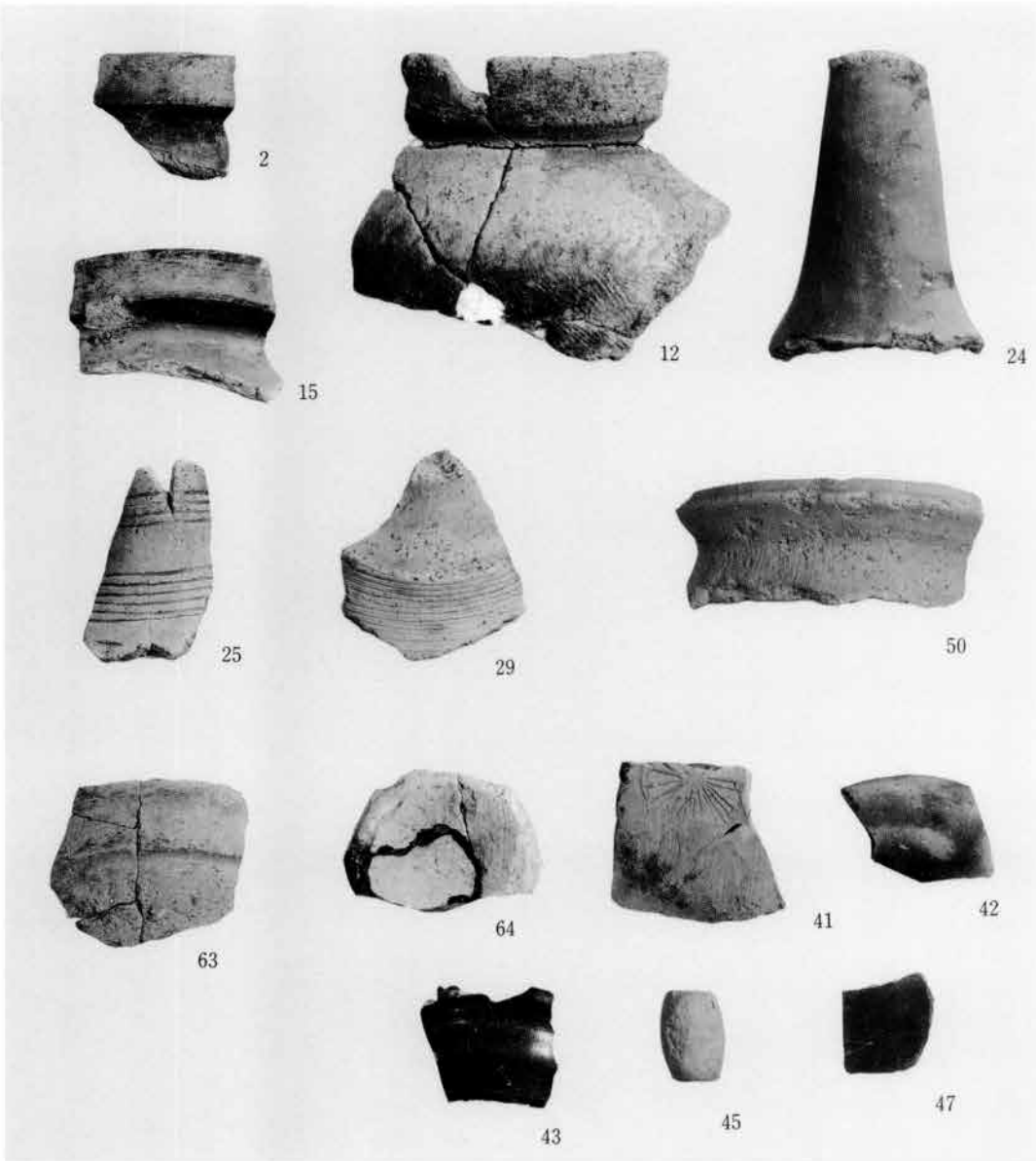
第37区から北側

第43区から南側

第47区～52区（北から）

第3号溝土器出土状況

第7・8号溝（北から）



出土遺物　（S＝1／3）

Aトレンチ全景（北から）

Cトレンチ全景（西から）

Dトレンチ全景（南から）

Fトレンチ作業風景（南から）

Fトレンチ全景（南から）

Fトレンチ作業風景（南西から）

Fトレンチ遺構（西から）

Iトレンチ表土除去風景（南から）

Iトレンチ全景（北から）

G・Hトレンチ作業風景（南東から）

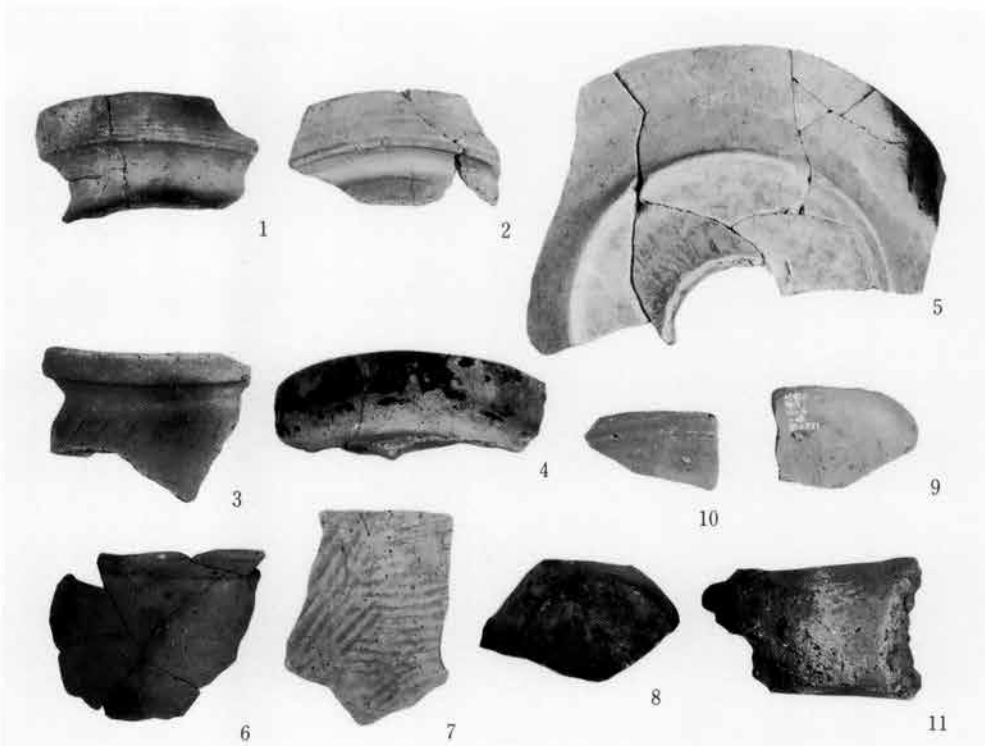
Hトレンチ全景（東から）

Hトレンチ掘立柱建物（南東から）

Hトレンチ竪穴住居跡（北東から）

Hトレンチ竪穴住居跡　竈（西から）

Hトレンチ竪穴住居跡　竈（南から）

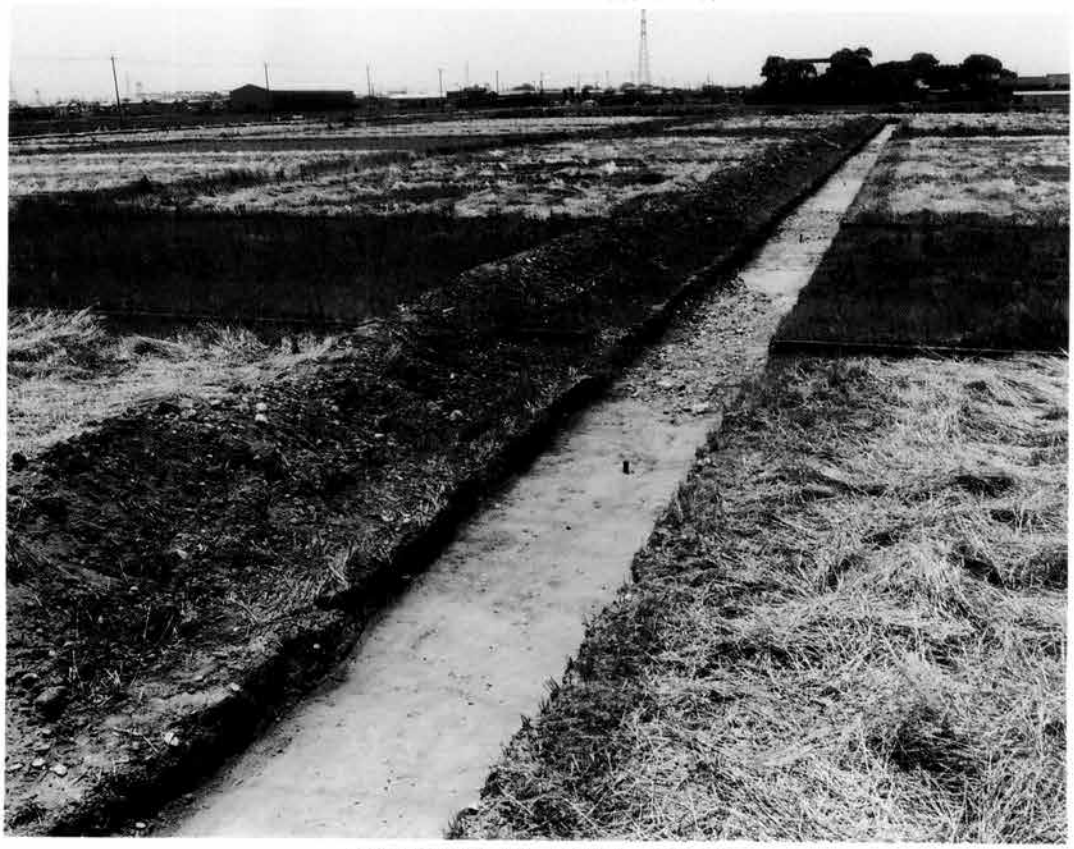


出土遺物

A調査区全景（北から）

A調査区北半部（A—300以北、南から）

A調査区中央部（A－117以南、北から）



A調査区南半部（A－330以南、北西から）

ＳＩ－Ａ１・８、Ａ調査区北端部（Ａ－110以北、南から）

ＳＩ－Ａ１・８（南から）

SI－A2、SK－A2（南から）

SI－A2、SK－A2（南東から）

ＳＩ－Ａ３ａ・３ｂ（北から）

ＳＩ－Ａ３ａ・３ｂ（南から）

ＳＩ－Ａ４、ＳＤ－Ａ２（南から）

ＳＩ－Ａ５、ＳＫ－Ａ７・８・９（北東から）

ＳＩ－Ａ６（南から）

ＳＩ－Ａ７（北から）

ＳＩ－Ａ９（北から）

ＳＫ－Ａ１、ＳＤ－Ａ１（北から）

ＳＫ－Ａ３（南から）

ＳＫ－Ａ４（東から）

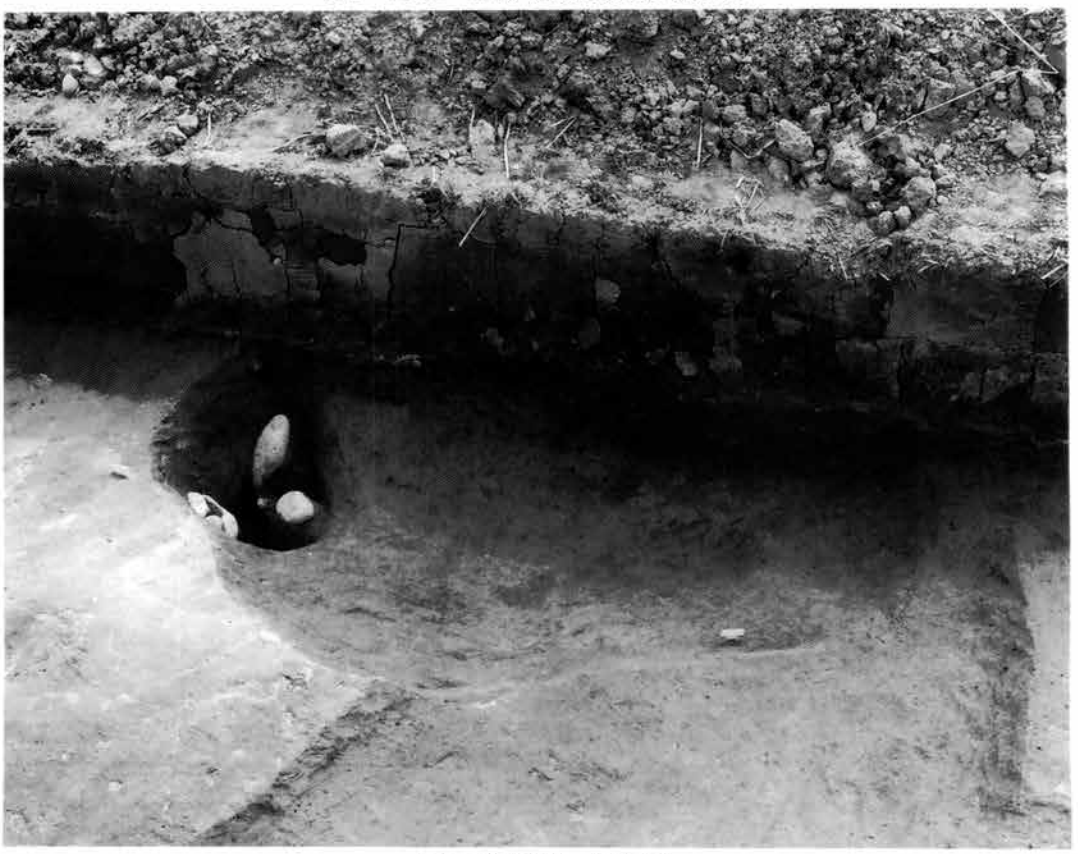
SK－A５・６（東から）

SK－A15・16（東から）

SK－A19a・19b・19c（北東から）

SK－A17・18・19a・19b・19c（北東から）

ＳＫ－Ａ20ａ・20ｂ、近代木製暗渠（東から）



ＳＫ－Ａ22・22ｃ（西から）

ＳＸ－Ａ６、ＳＫ－Ａ26（南東から）

ＳＸ－Ａ１（南から）

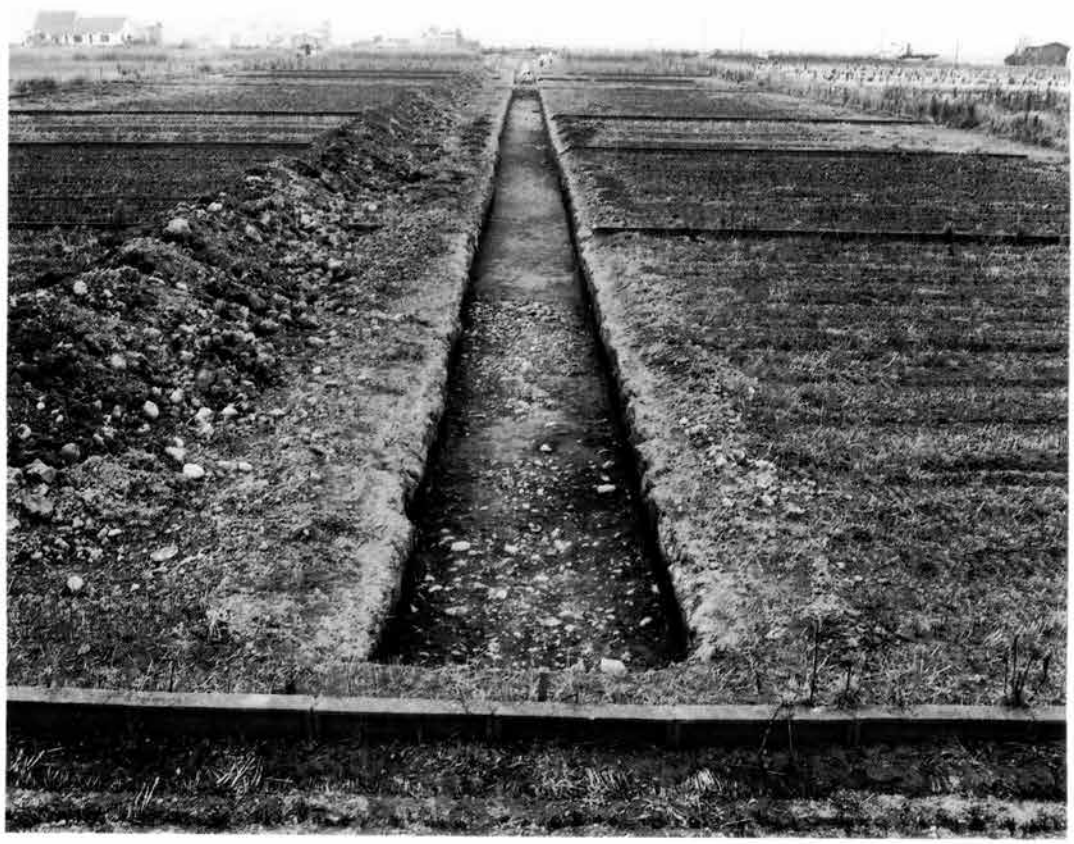
ＳＸ－Ａ３（南東から）

ＳＸ－Ａ４（南から）

SX－A５（南から）

SD－A４（南から）

B調査区全景（B－0以北、南から）



B調査区全景（B－192以南、北から）

B調査区北半部（B－120以北、南から）

SK－B1（東から）

SK－B２（西から）

SX－B３（西から）

ＳＤ－Ｂ１（南から）

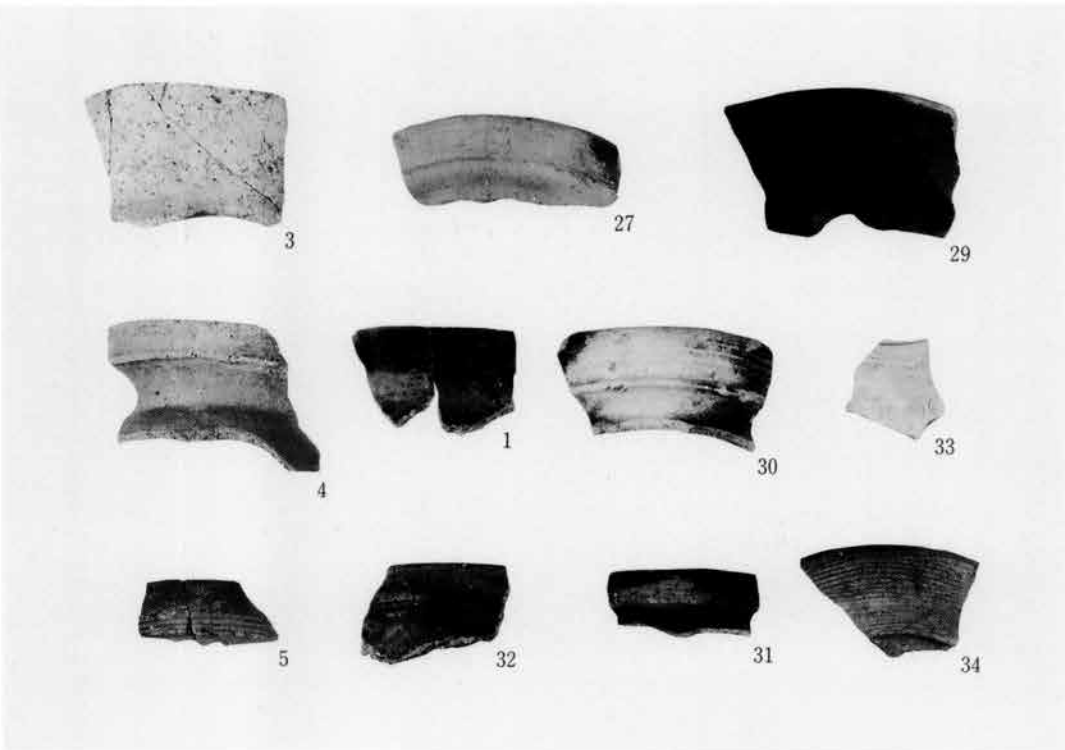
ＳＤ－Ｂ２・３、PitＢ11・12（南から）

ＳＤ－Ｂ２・３（南から）

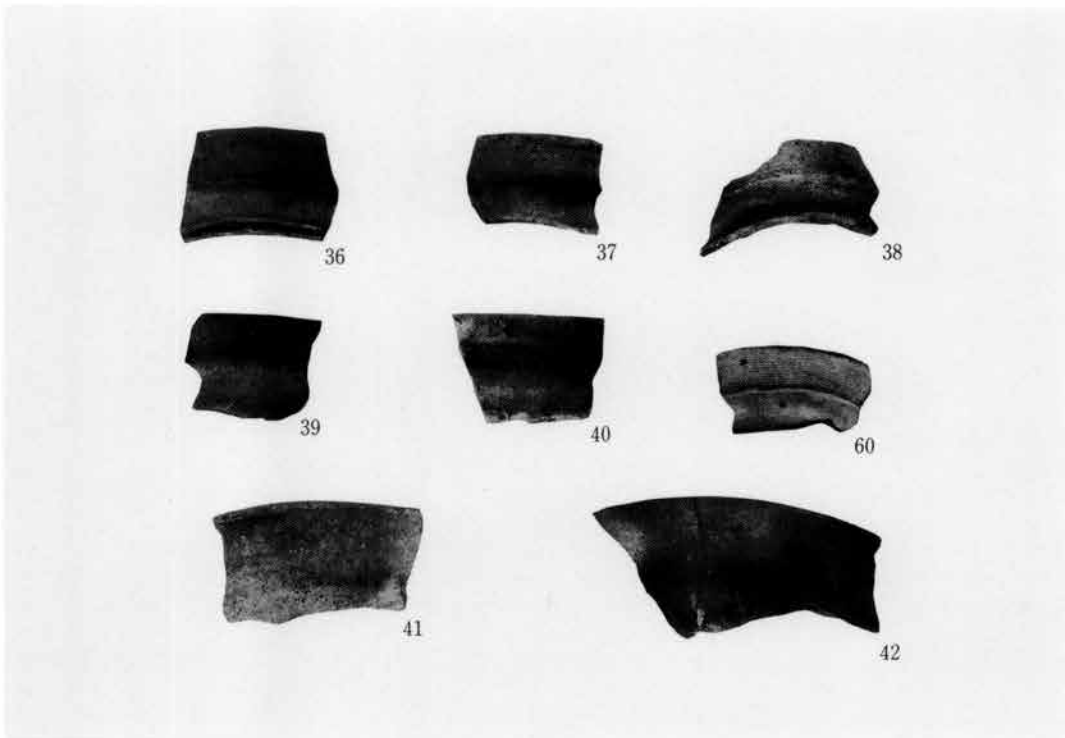
ＳＤ－Ｂ４、Ｂ調査区中央部（南から）

ＳＤ－Ｂ５、Pit 群（南東から）

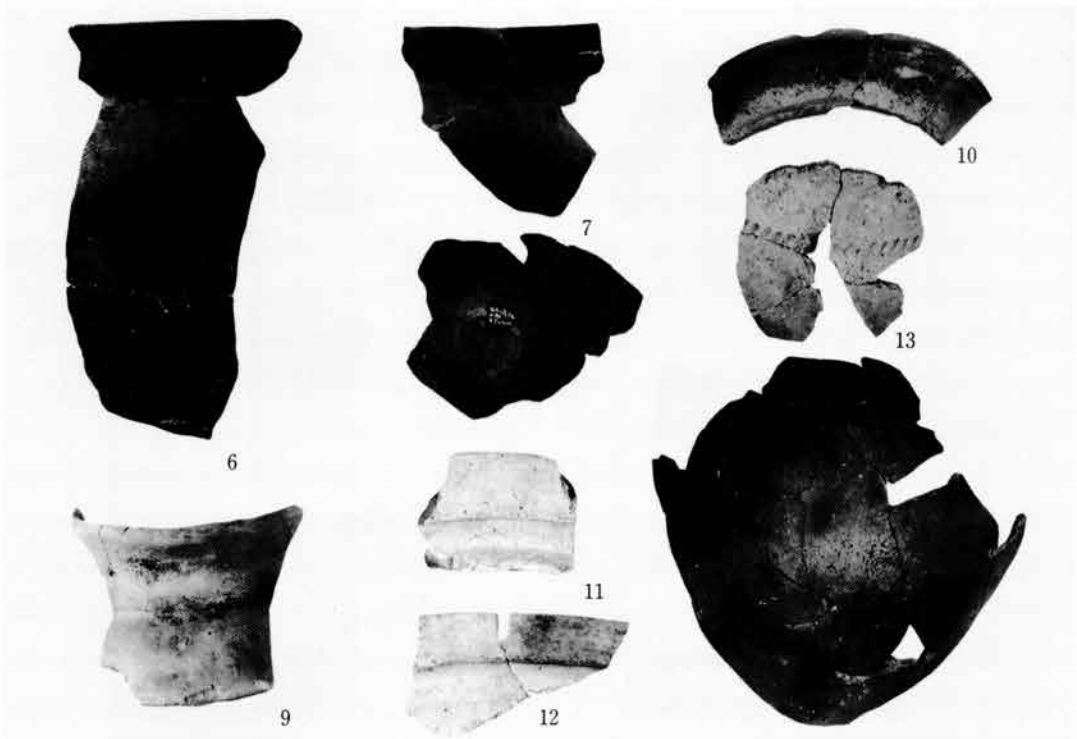
Ｂ調査区南端部（北から）



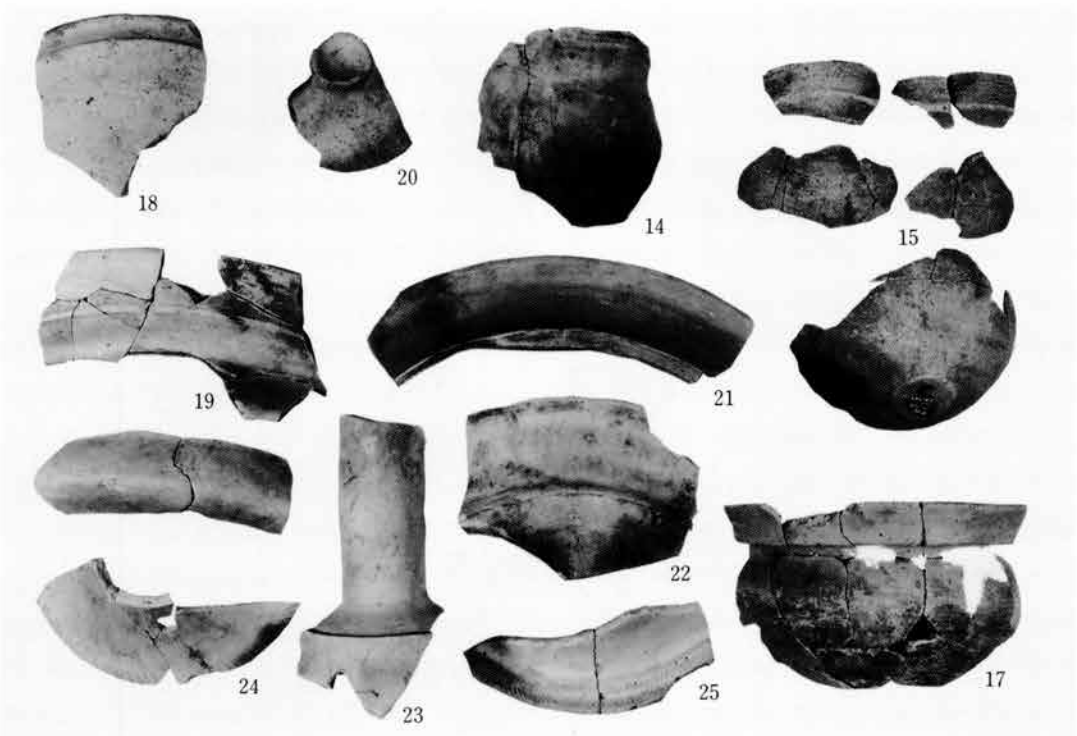
ＳＩ－Ａ１・２・４・５出土遺物



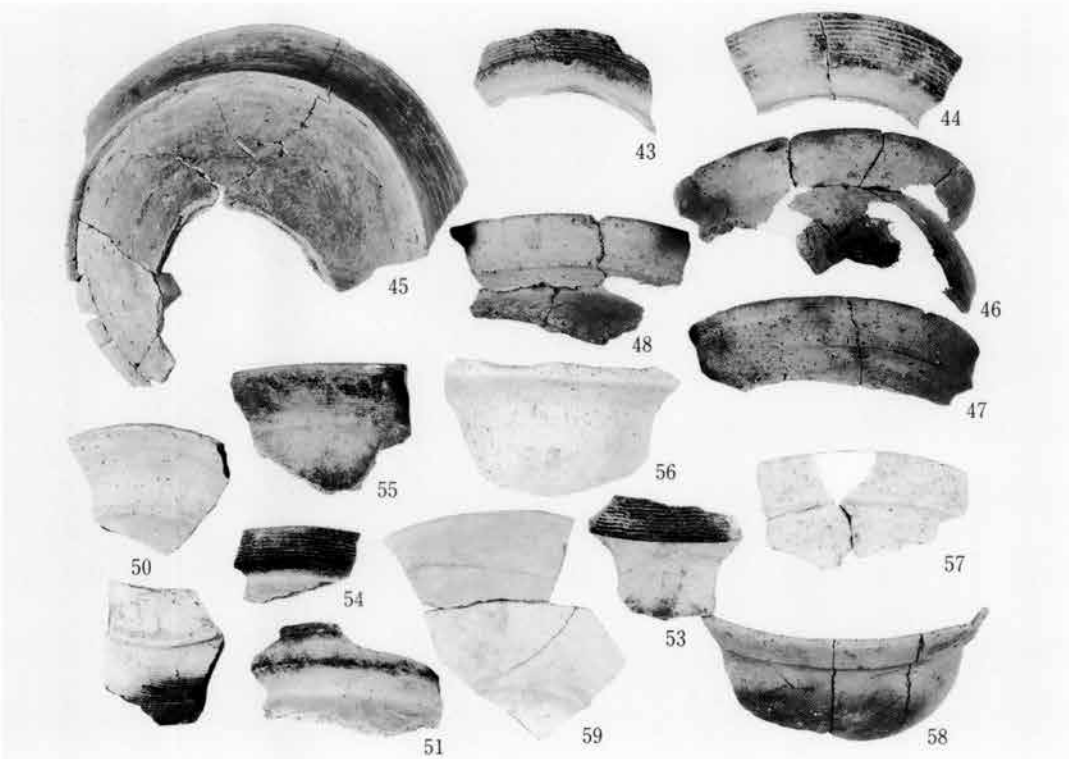
ＳＩ－Ａ７・ＳＫ－Ａ７出土遺物



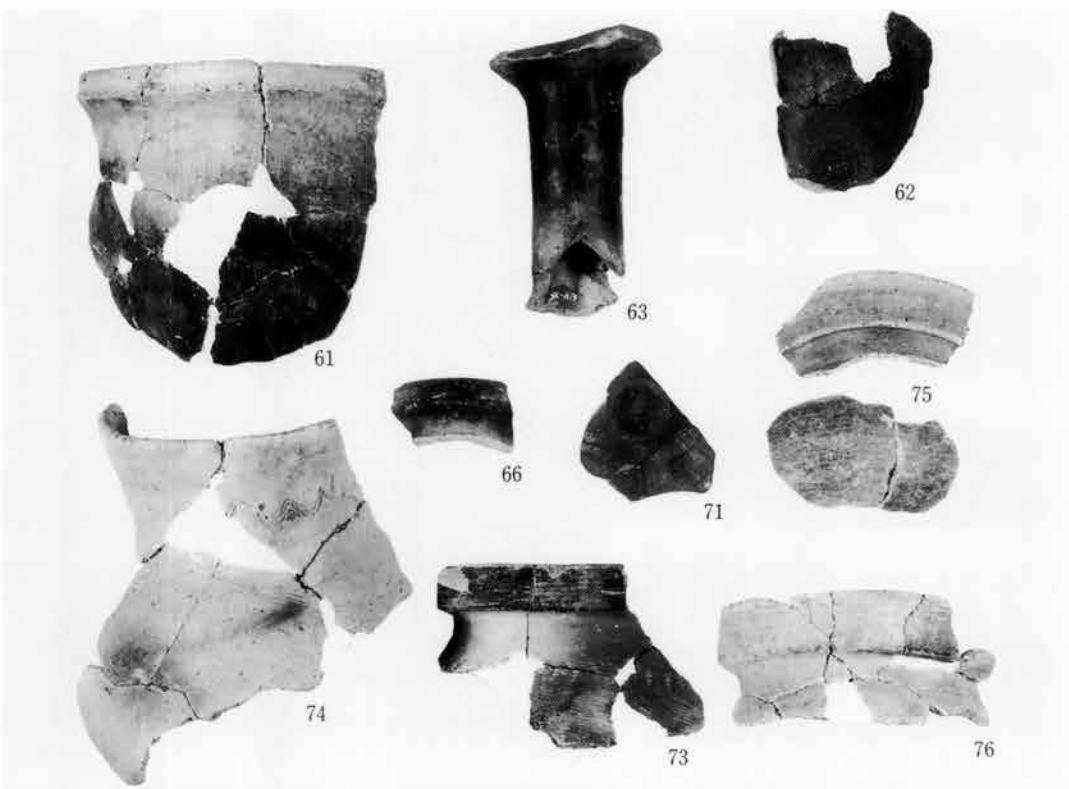
ＳＩ－Ａ３出土遺物(1)



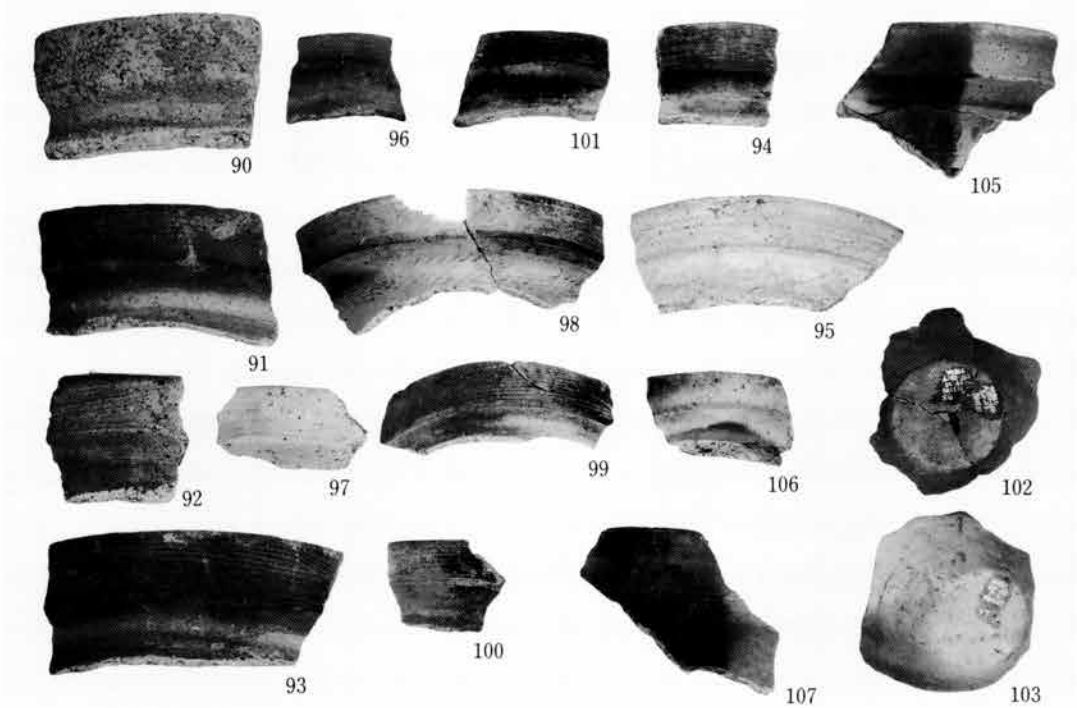
ＳＩ－Ａ３出土遺物(2)



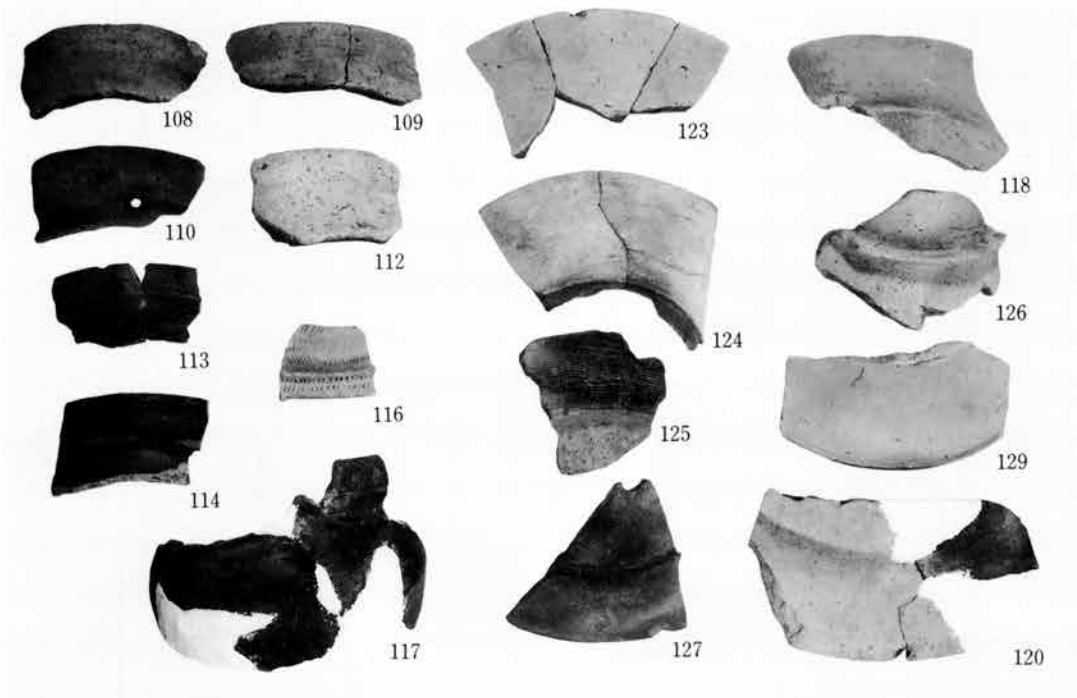
ＳＫ—Ａ２・３・５・６出土遺物



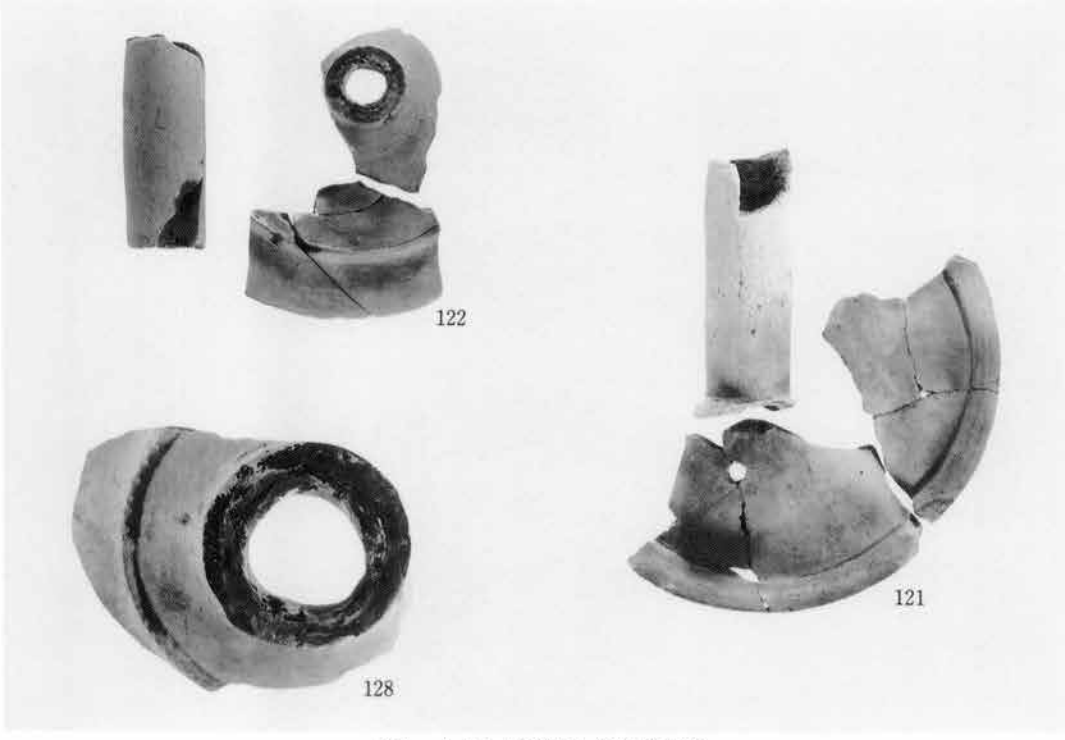
ＳＫ—Ａ９・16・19・20・25出土遺物



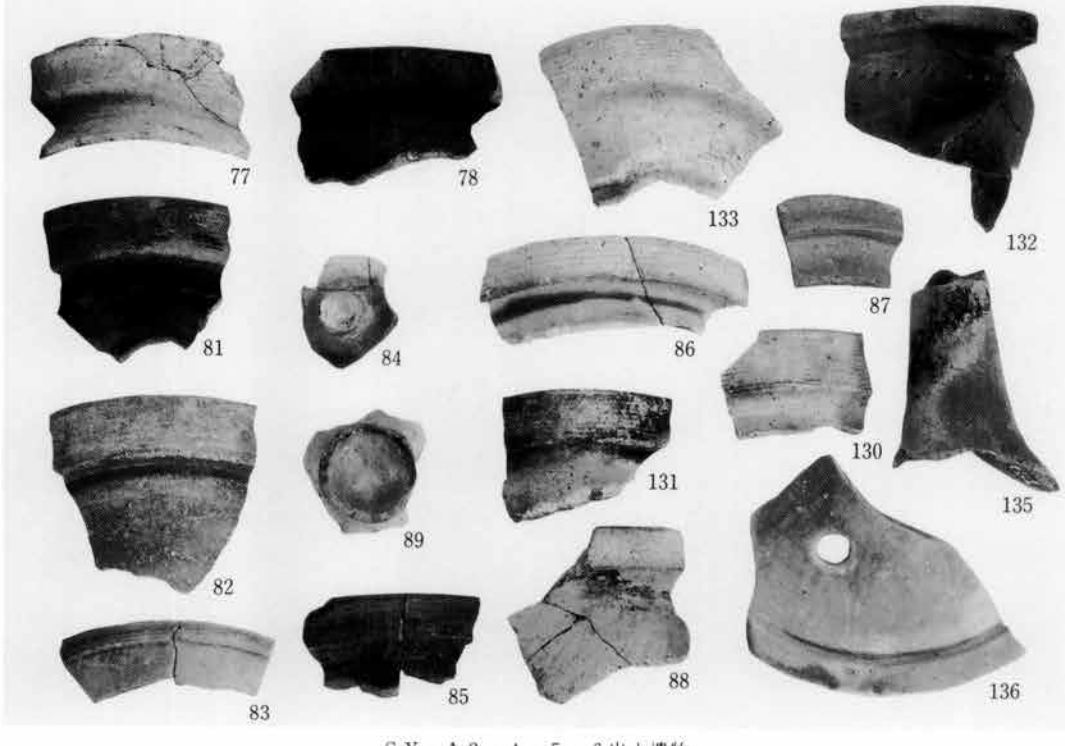
SX－A3出土遺物(1)



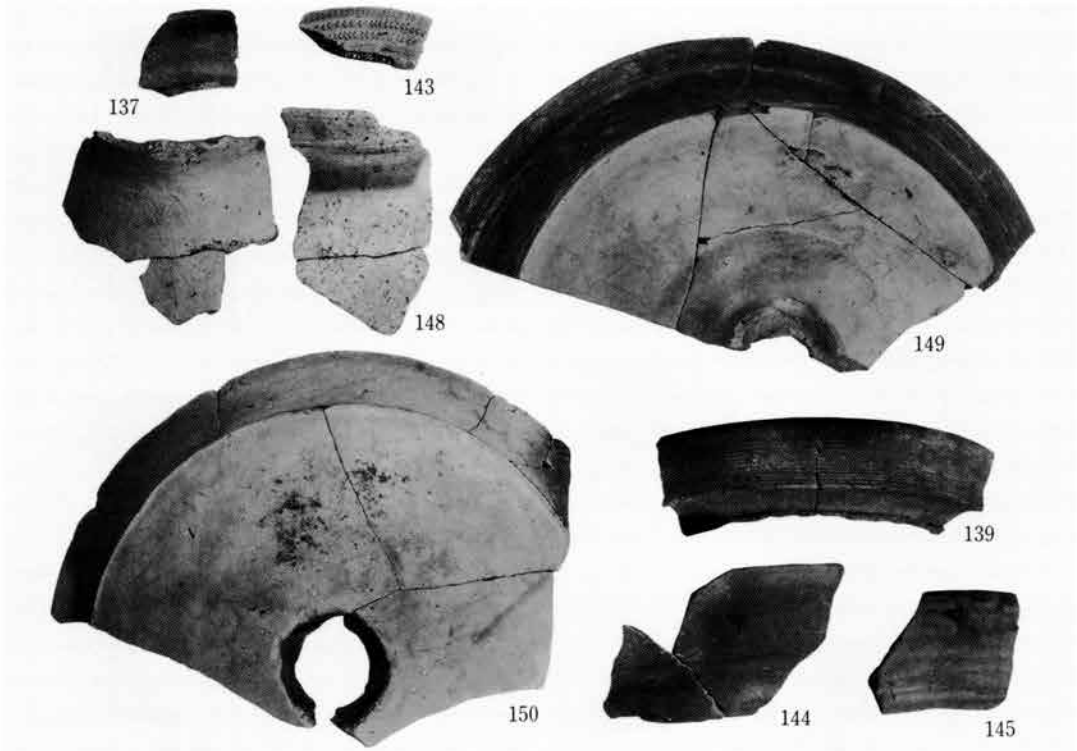
SX－A3出土遺物(2)



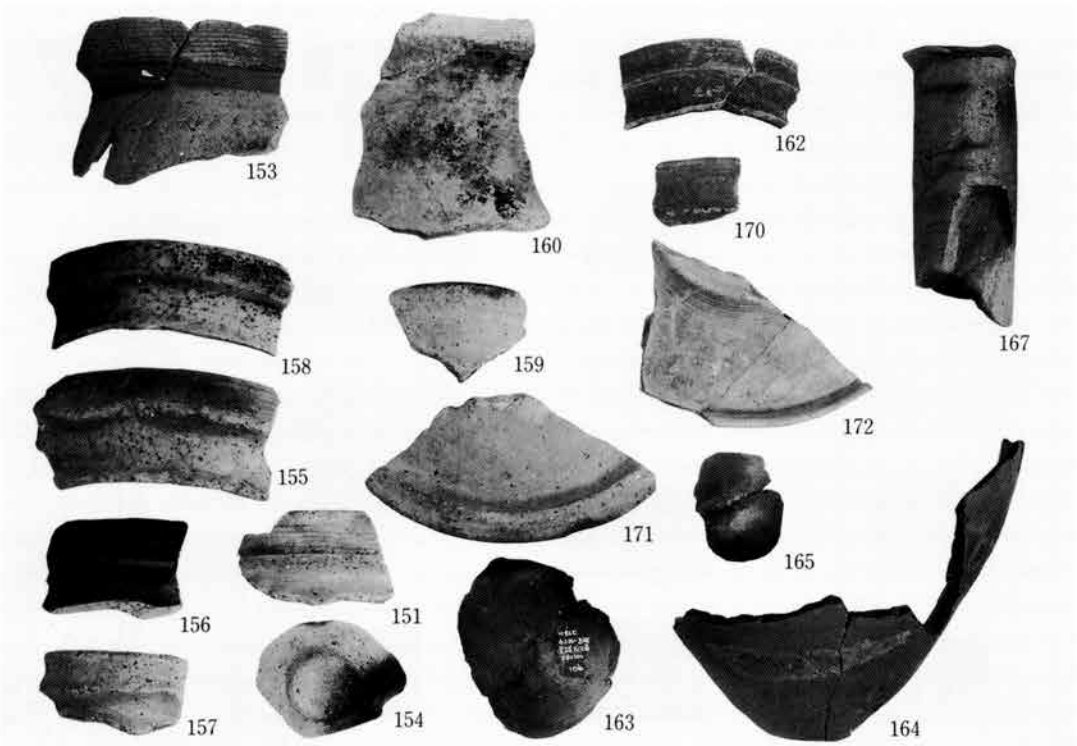
ＳＸ－Ａ３出土遺物(3)　漆補修高坏



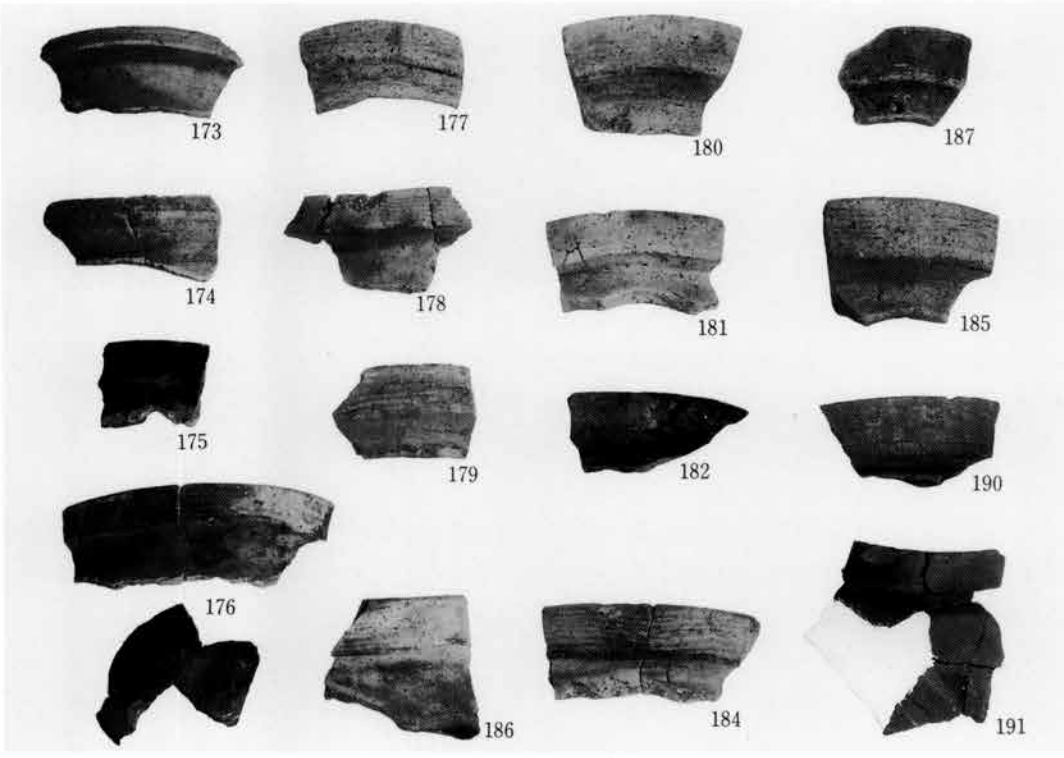
ＳＸ－Ａ２・４・５・６出土遺物



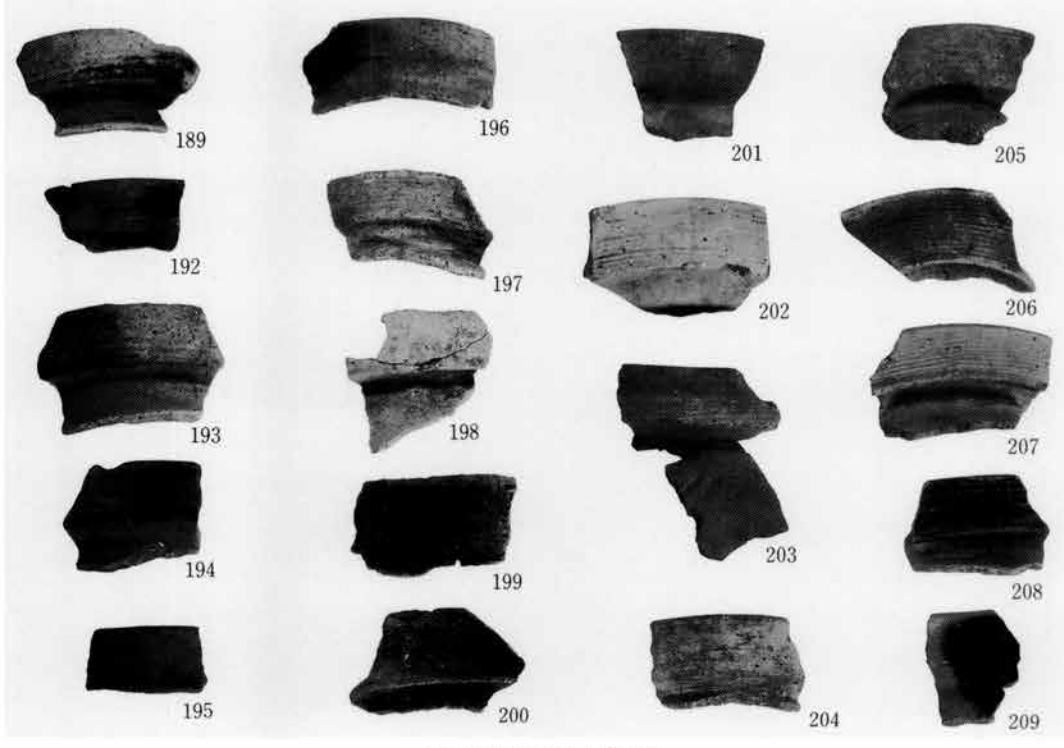
ＳＤ－Ａ１・２・４出土遺物



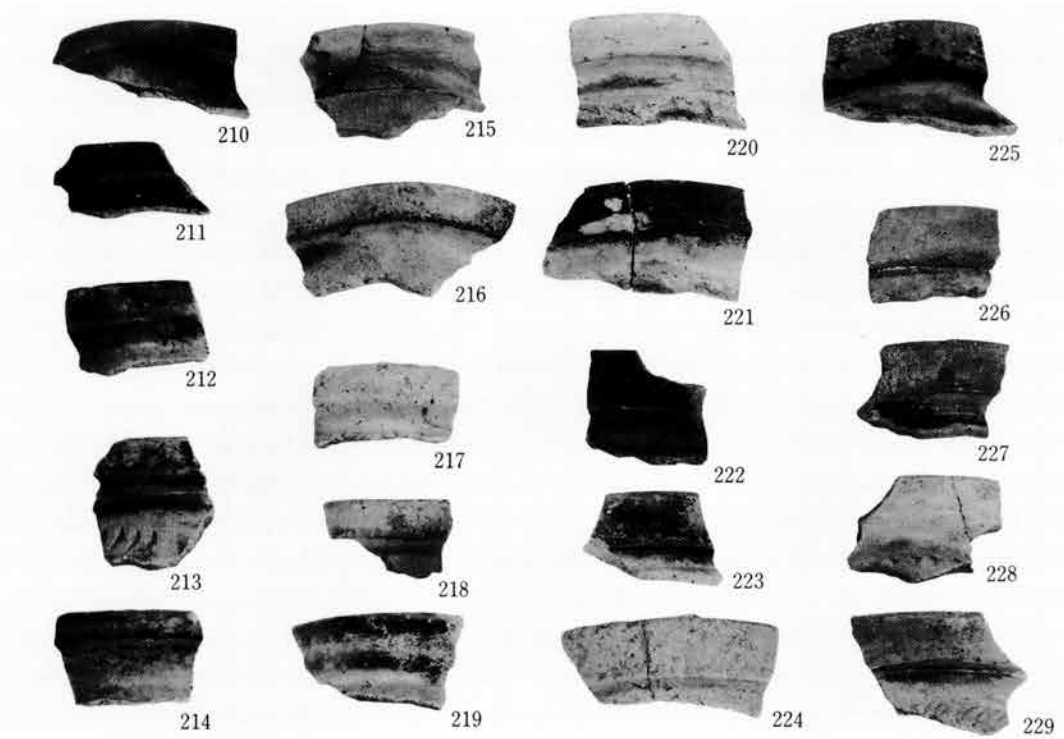
遺構検出面出土遺物



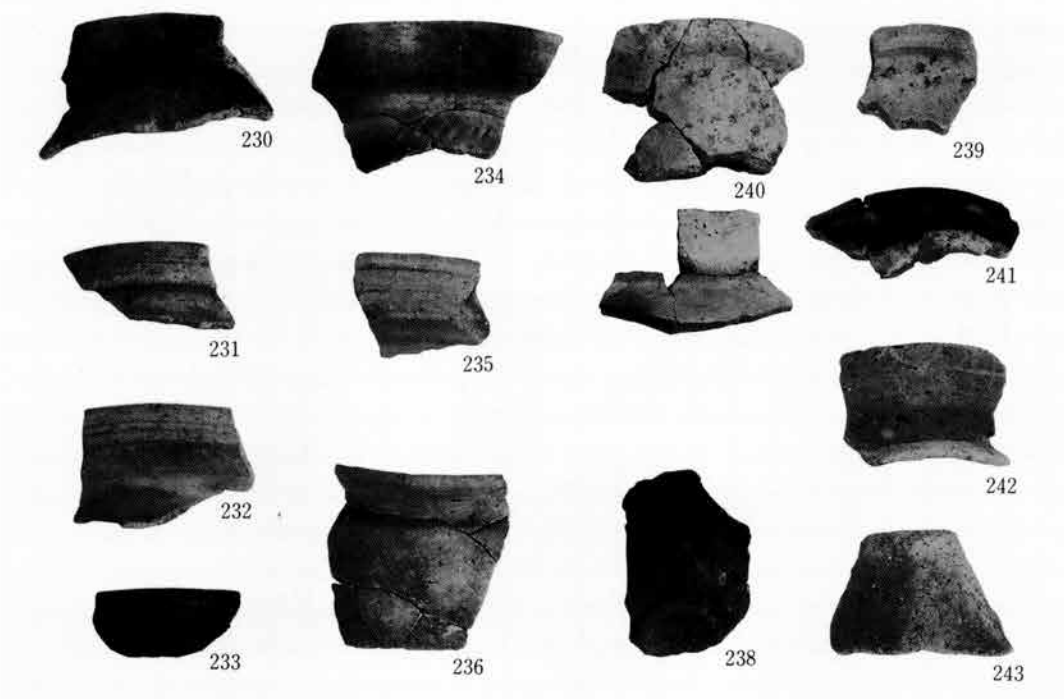
A調査区包含層出土遺物(1)



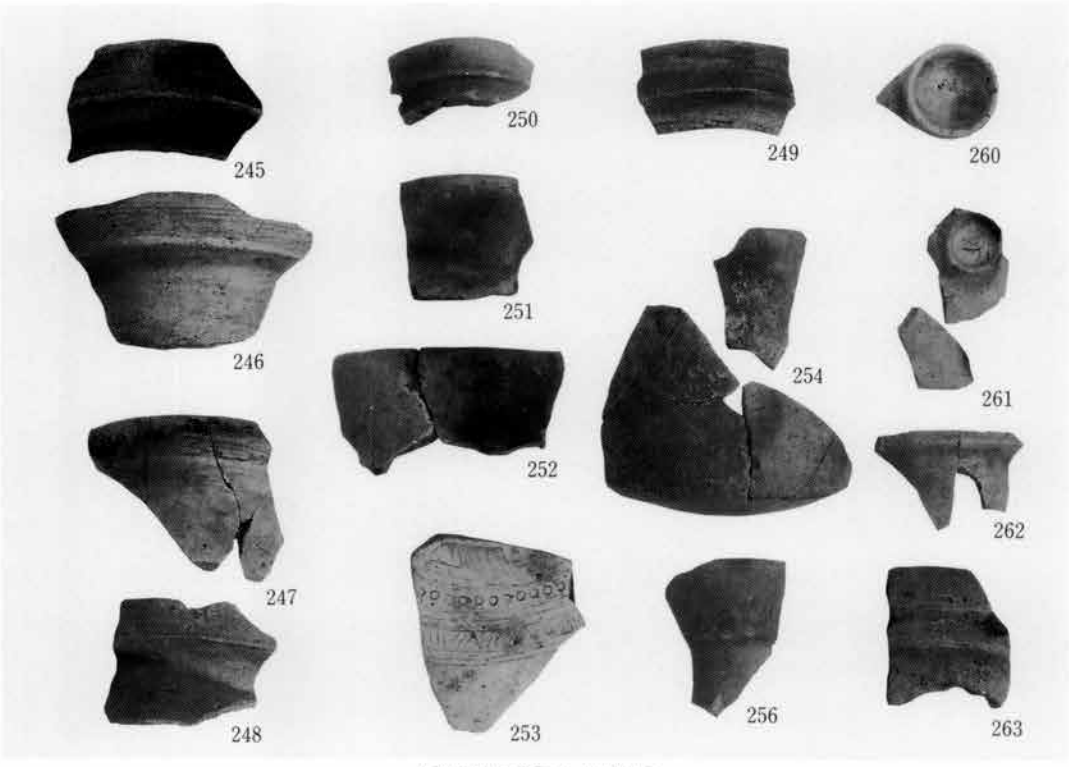
A調査区包含層出土遺物(2)



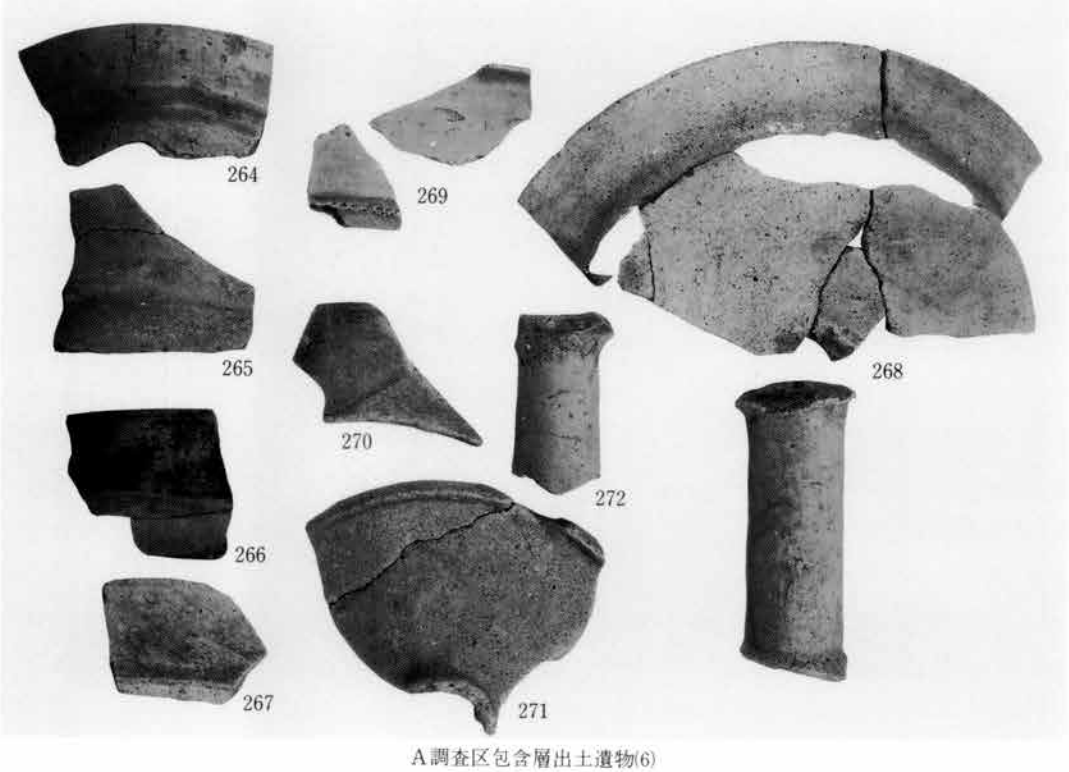
A調査区包含層出土遺物(3)



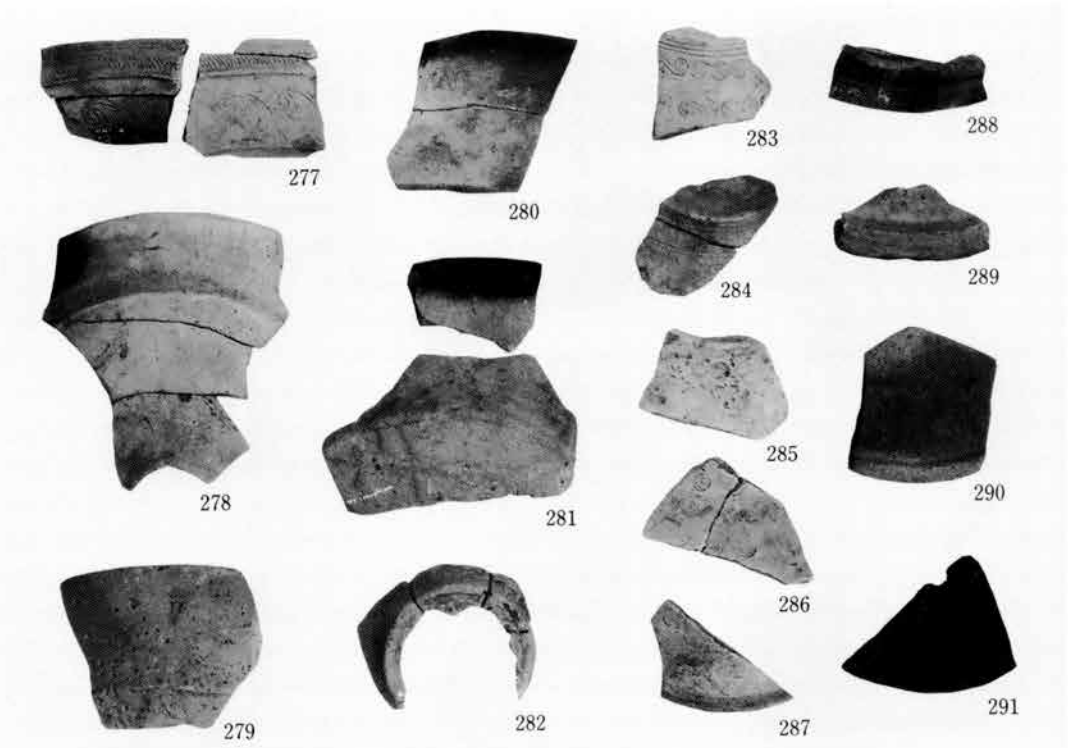
A調査区包含層出土遺物(4)



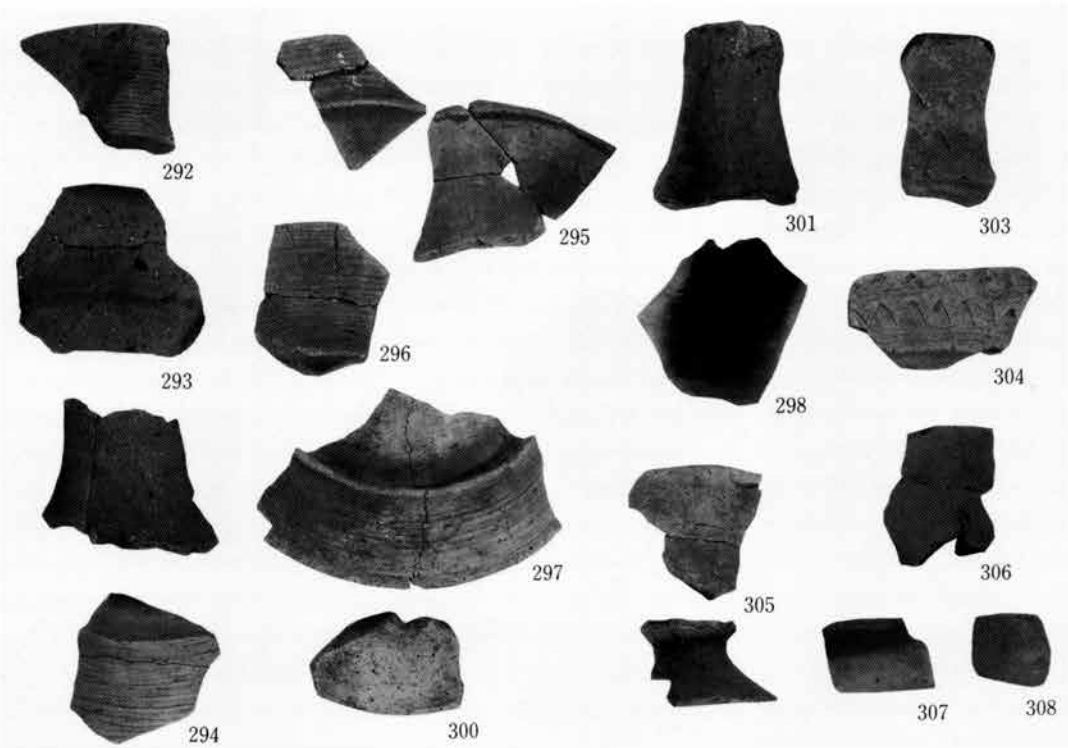
A調査区包含層出土遺物(5)



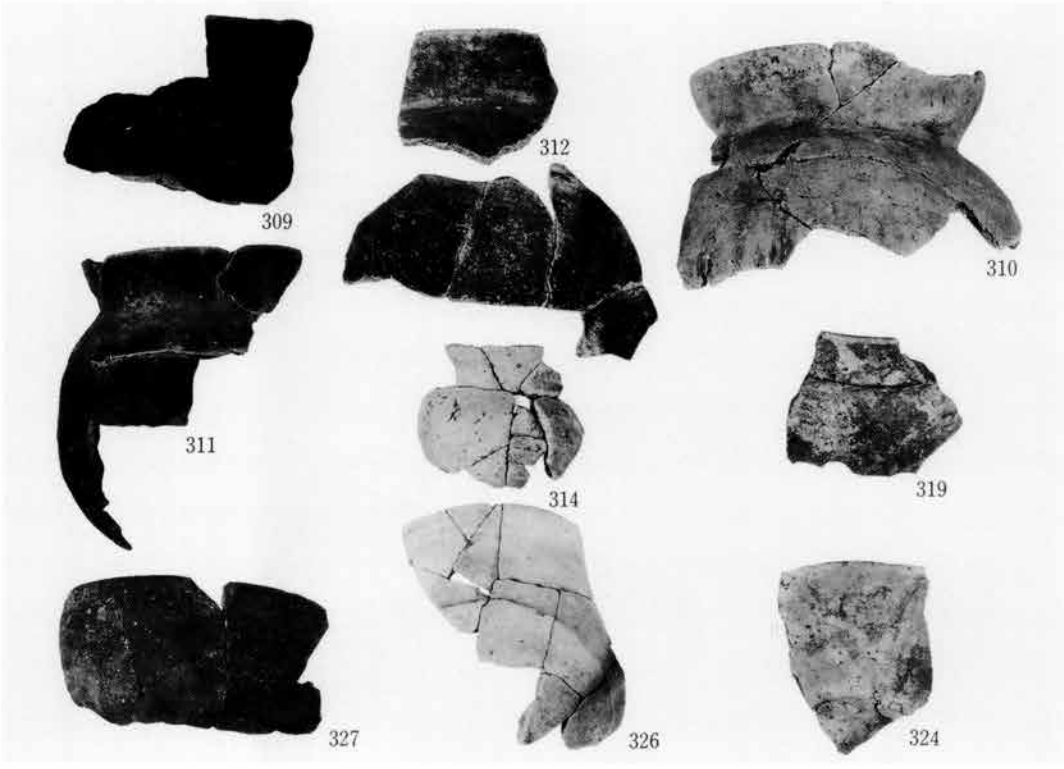
A調査区包含層出土遺物(6)



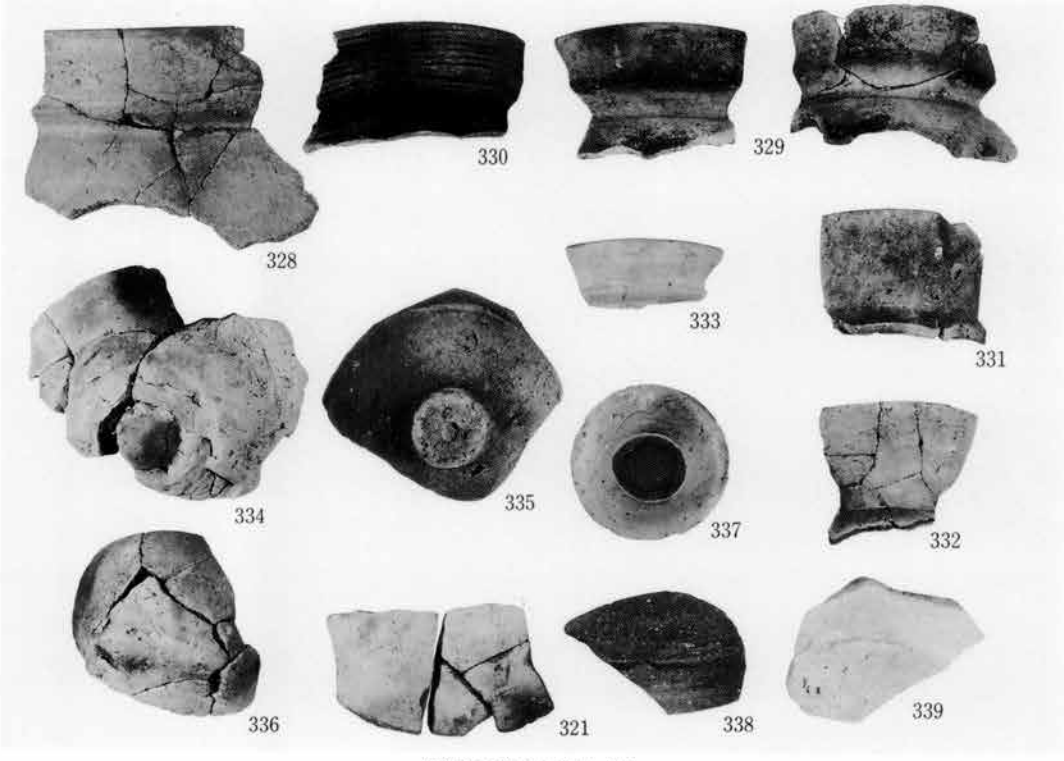
A調査区包含層出土遺物(7)



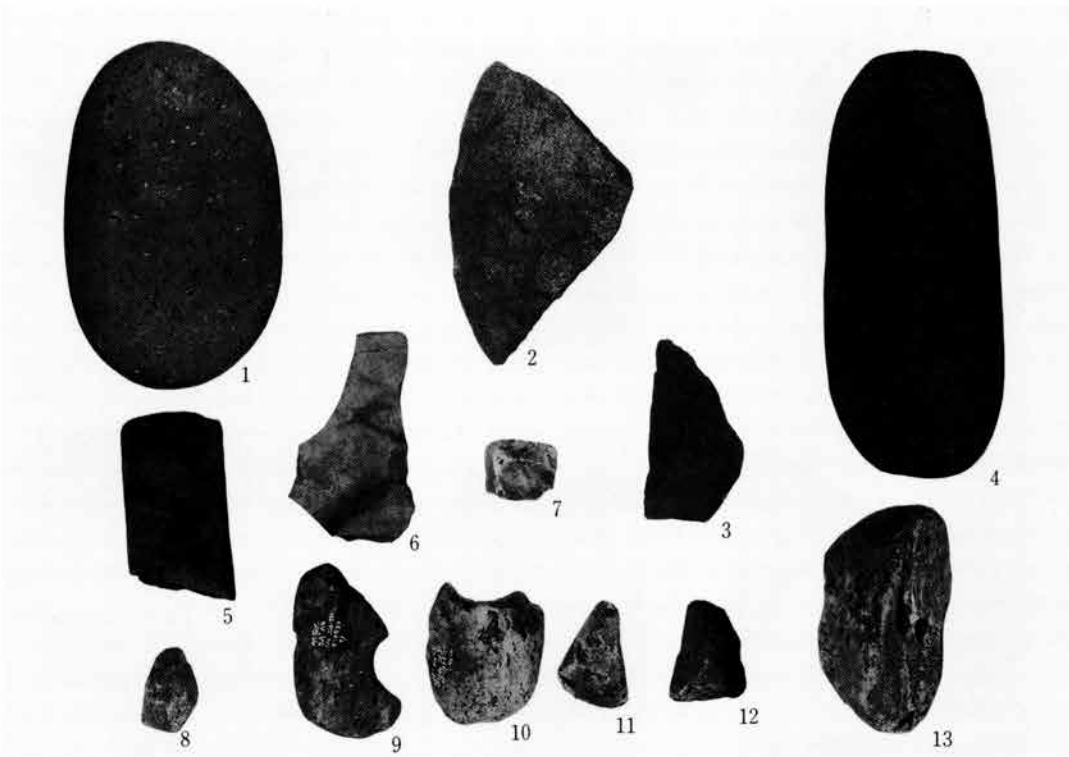
A調査区包含層出土遺物(8)



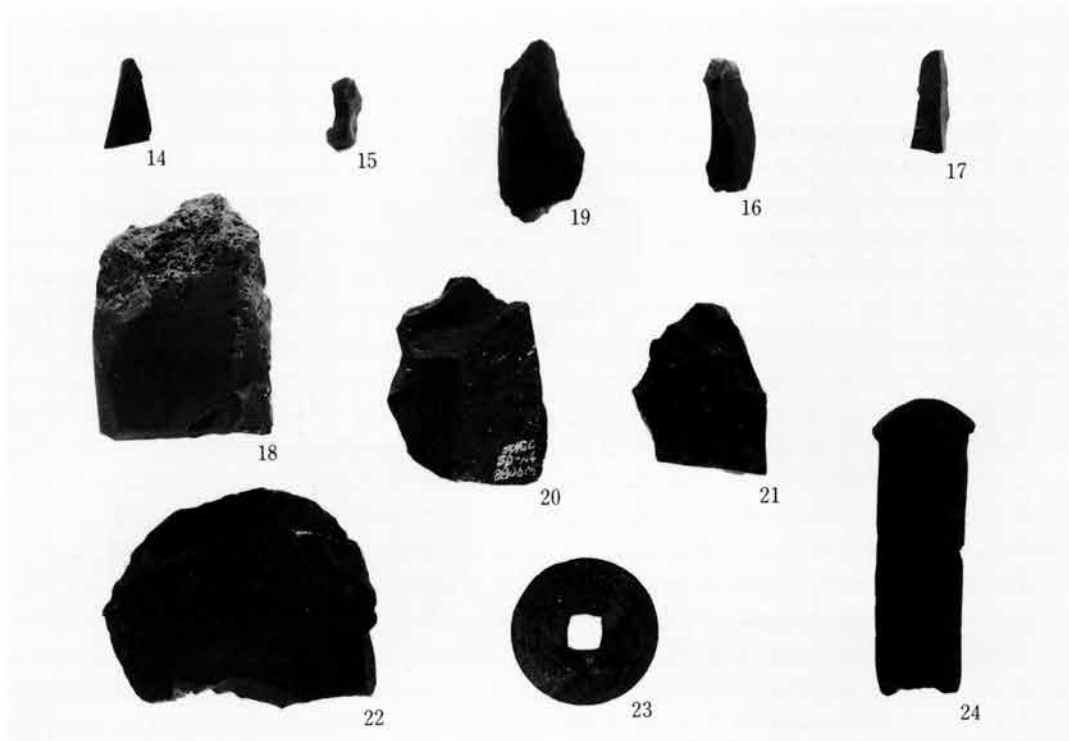
ＳＫ－Ｂ１・２出土遺物



Ｂ調査区包含層出土遺物



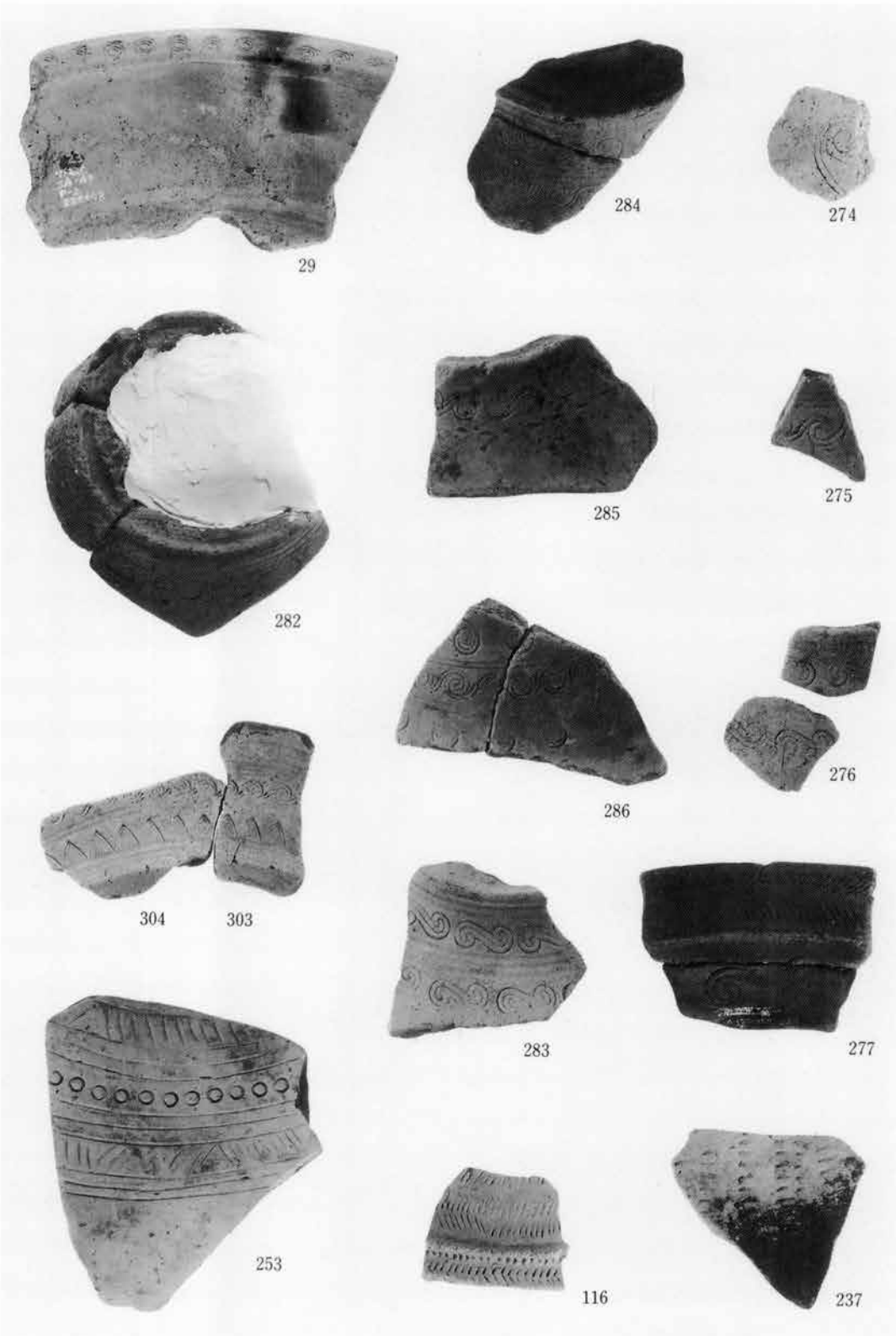
A・B調査区出土石器・石製品他(1)



A・B調査区出土石器・石製品他(2)

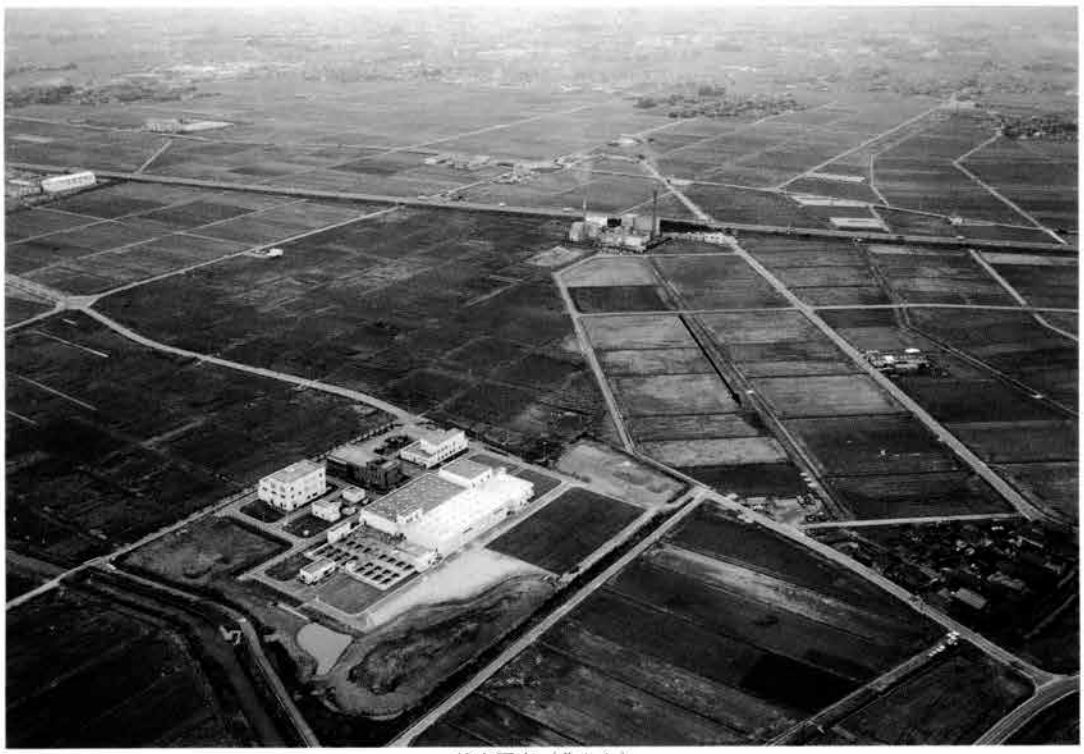
A・B調査区出土土器完形品他(1)

A・B調査区出土土器完形品他(2)



A調査区出土施文土器

航空写真（南から）



航空写真（北から）

調査区全景（北から）

60m付近全景（北から）

155m付近全景（北から）

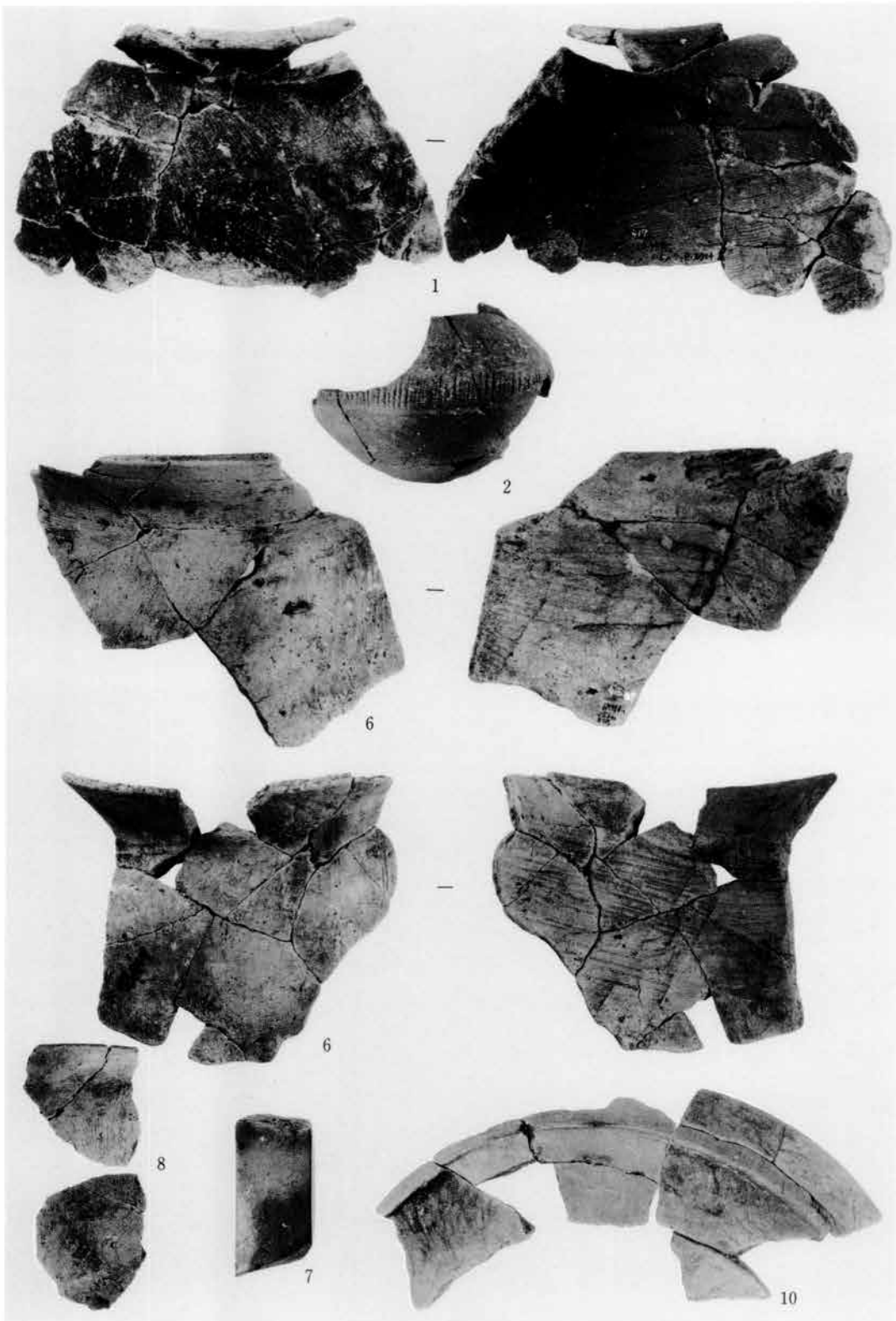
170～180m付近全景（北から）

190m付近全景（南から）

100m付近作業風景（北から）

360m付近全景（北から）

385m溝状遺構（東から）



出土遺物

調査区遠景（北から）

S調査区1～7区全景（北から）

S調査区9～10区全景（北から）

第1号ピット・ピット群（北から）

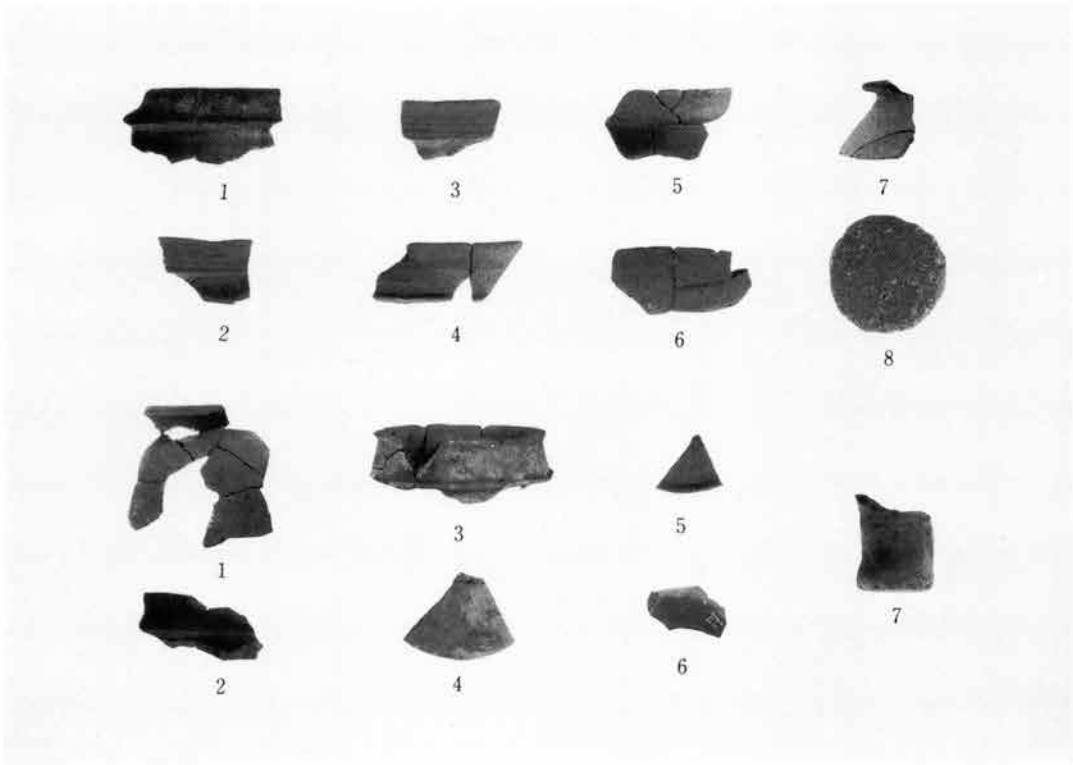
第1・2号溝（北から）

第5・6号溝（北から）

第1号土坑・ピット群（東から）

窪地（北から）

S調査区作業風景（南から）



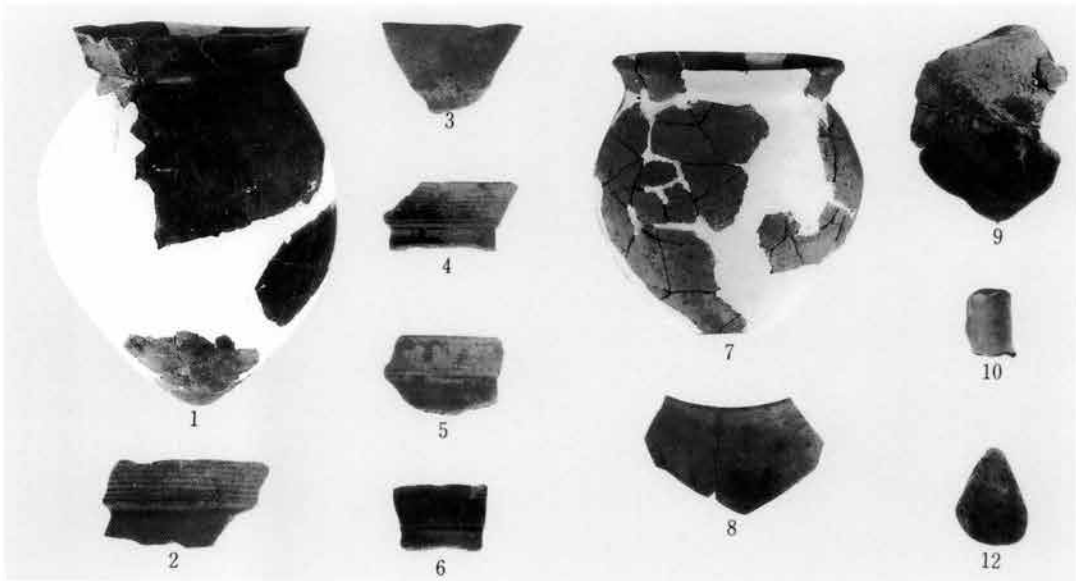
S調査区出土遺物（上—第69図・下—第70図）

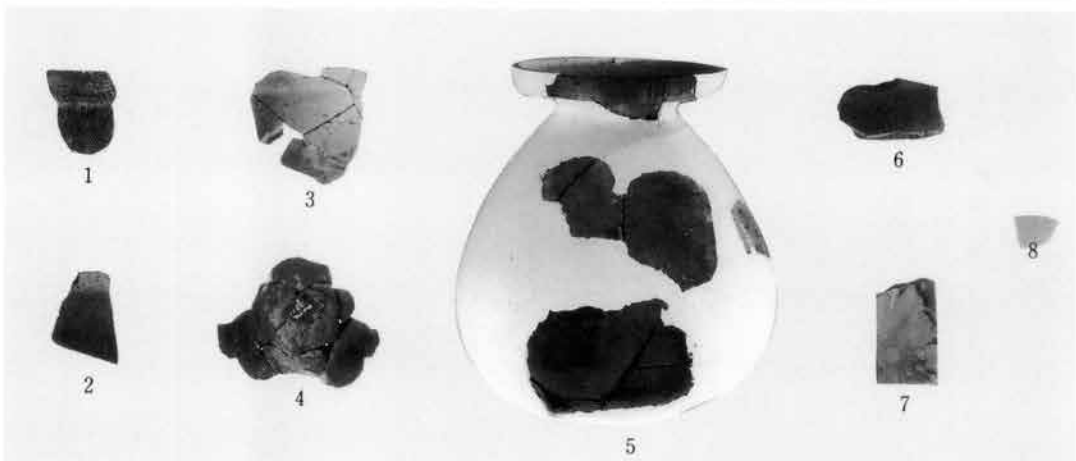
N調査区全景（北から）

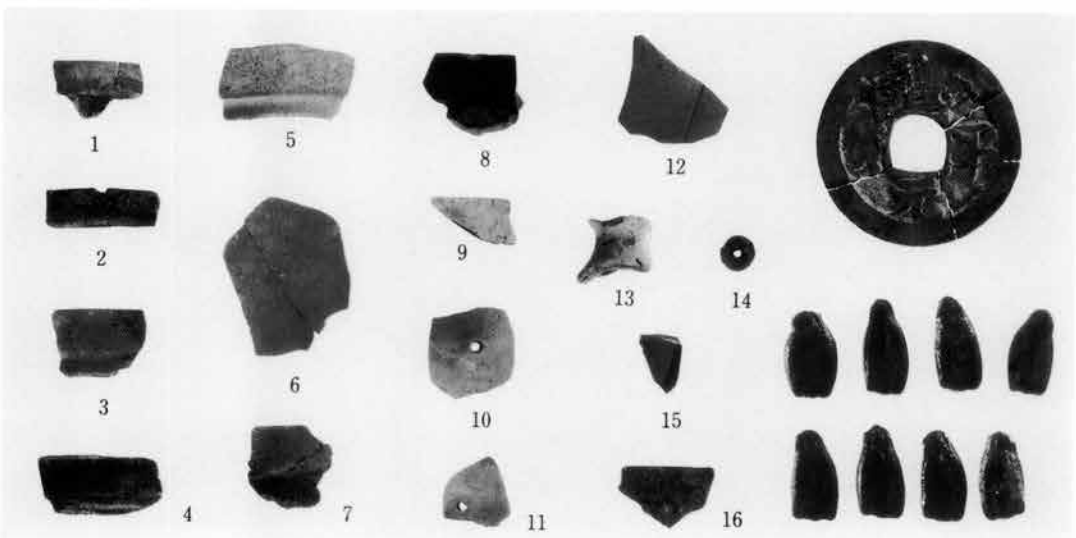
第1号竪穴住居跡（東から）

第3号溝（東から）

第1号堀立柱建物（南から）







N調査区出土遺物（上—第72図・中—第74図・下—第75図）

松任市竹松遺跡群

平 成 4 年 3 月 30 日　印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町４丁目133番地
〒921　電話（0762）43―7692番(代)

印　　刷　株式会社　橋 本 確 文 堂
石川県金沢市大手町２―35

©石川県立埋蔵文化財センター　1992